一「明六雜誌」の文學記事
一明治初期の虛無黨文學
一「鬼啾々」解題
一探偵小說としての「揚牙兒奇談」
一明治飜譯文學の概觀
一外拾三篇

明治文學展望

全

定價壹円八拾錢

木村　毅著

明治文學展望

改造社版

序

私は一昨年、明治文學諸斷面の研究と傍題した『文藝東西南北』なる一書を公けにした。この書はその姉妹卷と稱すべきもので、その後に諸雜誌や講座、講義錄などに掲載したものを集めたのである。

文學の社會的研究、中んづくそれが明治文學への適用は、何と言つてもプロレタリヤ文學進出以來で、殊に顯著になつたのはこの兩三年來のことである。私のこの小著が專門國文學者の乾燥な正統派的研究と違つて、若干新味の掬すべきものがあるとすれば、主としてそれは、視點を社會的に擴大した點から由來してゐるであらう。尤もこの中に精算されねばならぬ挾雜物の非常に多く混在せる事は確かだが、それはその挾雜物を私自身が抱藏してゐるための正直な反映だ。私は勇敢に、大膽に自分の精算に掛りたいと思つてゐる。今後もし又この姉妹卷を公刊する事があつたら、それが根本的に面目を革めたものである事を私かに自ら期してゐる次第である。たゞ、この小著の中には、多少でも視點を變えたがために、從來の明治文學史、日本社會主義史から全く無視されてゐた重要事實を發見し得て、その訂正乃至は補遺を要求してゐるものも多少ある。たとへば一八九一年(明治廿四年)酒井雄三郎氏がブリッセル開催のインタナショナルに出席せる事實及びその時の記念撮

影の發見などは聊か誇るに足ると思つてゐるし、マルクスの名と學説が明治十四五年から傳はつてゐる事を紹介したのは、その後諸家の著述や年表にも多く引用されて、ほゞ公説となりつゝあるやうだ。

なほ『越中富山藥賣り奇譚』を本書に收めたについては首をひねる人もあらうが、私はこれを『書かれざる文學』として捨てかねたのである。又末尾に大正文學に關する言及の一二篇あるは、明治文學が後繼者に何を遺產したかを明かにするためで、これを缺いでは決して彼女の全き姿は分るものではない。

挿畫の中ではやはりインタナショナルの記念撮影は最も珍とせらるゝであらう。これは酒井氏未亡人の手に殘つてゐたのを拜借したのである。ついては肥前島原江東寺（明治十五年東洋社會黨結黨の場所）が注目をひくと思ふがこれは去年の夏九州へ旅した序に私がわざ〳〵寄つて寫させておいたものである。表紙は大體『明六雜誌』の感じを出すやうにと思つて作つてみた。朱印も同誌に用ゐられたまゝである。

なほ本書を世に送るに當つて、私は第一に吉野作造、尾佐竹猛、廢姓外骨氏などの催さるる明治文化研究會に深甚の感謝を捧げる。その會末に列するやうになつてから、この方面に關する私の知見は著しい進境を見せた。第二は柳田泉君と齋藤昌三君、前者はこの一二年この方面の仕事を互に

扶け合つて來た共働者なるが故に。後者はその豐富なる材料を常に自由に使用をゆるして呉れたが故に。第三は改造社員なる濱本浩、廣田義夫の兩君、この書のかく纏まるに到つたのは一に兩君の厚き斡旋による。思へばかゝる徵少の一著も、此等先輩友人の援助なくしては決して日の目を見るには到らなかつたのだ。只、私は、この舊稿を全部書き更めたい意志をもつてゐたが、外遊を目の前に控えて、それを果たし得なかつたのが返す〴〵も遺憾である。この書の市場に出づる時、私は未だ恐らく渡航の途上にゐるであらう。いや、或は旣にロンドンの街區を步いてゐるかも知れぬ。

一九二八年・五月・十九日

木村毅

目次

挿畫目次

明治文學展望

『明六雜誌』の文學記事

一　刊行の經路

明治の雜誌の初めを『明六雜誌』となすことには何人も大體異議はあるまい。尤も明治四年の創刊に係る『新聞雜誌』があるが、之は記事の性質から言つて、ニュースを集めたのだから、やはり新聞と見るべきであらう。體裁は雜誌らしいが、明治初年の新聞は大抵此の體裁だつたので、そのために此れを雜誌と見なす理由にはならない。（廢姓外骨氏著『文明開化』新聞篇參照）

されば『愛書趣味』の『文藝雜誌年表』（齋藤昌三氏執筆）を見ても『明六雜誌』を頭首に揭げて居る。

『明六雜誌』は言ふまでもなく明六社から發行された。然らばその明六社とは――？　それはその制規を見た方が理解が早い。

第一條　主　旨

社ヲ設立スルノ主旨ハ我國ノ教育ヲ進メンカ爲ニ有志ノ徒會同シテ其手段ヲ商議スルニ在リ。又同志集會シテ異見ヲ交換シ知ヲ廣メ識ヲ明ニスルニ在リ。

第二條　社　名

社名ヲ呼ンテ明六社トス。（明治六年設立ノ緣ニ由ル）

次に、何が主因になつて斯る學術結社が出來たかは、雜誌發行後滿一ケ年目に、森有禮のした演說で明かである。

『明治六年七月、余亞米利加ヨリ歸テ、立社會同ノ事ヲ謀ル。諸君皆嘉シテ速ニ之ニ應シ、會談三四回ヲ經テ社則設立ノ議興レリ。而テ其議遷延七年二月ニ及ヒ、始テ一定ス。其以前福澤諭吉君ヲ社長ニ選フノ議アリテ、社西村茂樹君ト余トニ委ネ、其旨ヲ同君ヘ致シテ之ヲ請ハシム。君固辭シテ許サス。此ニ於テ社之ヲ余ニ命ス。余敢テ辭セス、謹テ之ヲ承ケタリ。』（明治八年二月發行、同誌三十號一丁句點は新たに附加す。以下同じ）

之に依て明六社設立は新歸朝の森有禮が主唱し、事實に於て彼が又その統率者であつた事が分る。社員として名を連ねたものは西村茂樹、津田眞道、西周、中村正直、加藤弘之、箕作秋坪、福澤諭吉、杉亨二、箕作麟祥、森有禮の十人である。（多くの明治文學史にこの人數がまちまちになつてゐるが、私は社の中心の森の演說から引用してゐるのであるから、これが最も正確であらう。たゞ箕作麟祥のみは病を以て中途退社した。）

この明六社が雜誌を出すに到つた因由は、これ亦每號の表紙裏に付けた宣言で明かである。

『頃日吾等盍簪シ、或ハ事由ヲ論シ、或ハ異聞ヲ談シ、一ハ以テ學業ヲ研磨シ、一ハ以テ精神ヲ爽快ニス。其談論筆記スル所積テ册ヲ成スニ及ヒ、之ヲ鏤行シ、以テ同好ノ志ニ頒ツ。鎖々タル小册ナリト雖モ、邦人ノ爲ニ知識ヲ開クノ一助ト爲ラハ幸甚。』

社員の顔振れを見ると大體に於て洋學者である。洋學者を換言するなら、當時の最も急進的な思想家である。幕末に於ては彼等は、世人から指彈され、刺客には付け狙はれ、いづれかと言ふと日蔭者たるを免れなかつた。それが一朝桑滄の變に際會して、一にも西洋、二にも西洋、西洋と言へばまるで極樂以上の有難い不思議世界、萬事整備した開化鄕と妄想する明治の御代になると共に、羽翼を伸ばすべき最も得意な時期が來た。随つて彼等は、私達が學生時代に壯語したものと餘り變らぬ得手勝手な議論を所嫌はず吐き散らした。洋人と結婚して人種を改善せよと叫んだのも彼等の仲間なら、洋字を以て國語を書せよと提議したのもさうだ。而も後者の議論は明六雜誌第一號の冒頭を飾つた論文である。以て同誌の主張傾向の全斑を推すべきであらう。

それは舊傳統の打破に内心痛快を叫んでゐる書生論だ。が、時代が幼稚だつたから世は驚嘆して之を迎へ、一世の指針とも木鐸とも仰ぎ見た。

評家は言ふ。（竹越三叉氏著『新日本史』中卷六三頁）『明六社は、日本に於ける倶樂部の最先なるものにして、恰もジョンソン、バーク等の學者によりて、倶樂部なる者の初めて英國に起りたるが如

し。其類似せること獨り此に止らず、福澤は恰もジョンソンの如くにして倶樂部の首長なり。森はまたバークの如く之に參し――』ここまでは私達にもたやすくうなづける。所がその次に『共に與に急進なる社會改良論を唱へしかば、天下の論を擧げて福澤、森の專有物の如くなしたり』とあるのを讀むに到つては、あの書生論が……と今日からは多少の驚きを抑へるわけに行かない。時勢の推移を無視して臨むなら、明六雜誌の議論の如きは實に幼稚笑ふに堪えたるものなのだ。

但し螢火も暗夜には鮮やかな光を放つて、燭に代つて道を照らす。私は勿論、維新後のどさくさの際に彼等が時代を開導した効を認むるに吝なるものではない。殊に驚嘆すべきは此の雜誌が凡ゆる文化の搖籃となり、凡ゆるものゝ萠芽を有する事である。『明六社の中心人物にはあらゆる方面の學者を網羅してゐたから、「明六雜誌」の內容も、政治、道德、宗教、風俗、制度、法律等、頗る多方面に亘つてゐた。』(三浦藤作氏稿『明六社の組織と「明六雜誌」の刊行』明治教育史料雜考第一冊四一頁)とある通りである。その他哲學も、經濟もある。たゞ、その中に討議されてないものを只一つ求めるならそれは文藝方面のことでなければならない。

此の雜誌は四十三號まで續いた。每冊、少き時は二篇、多き時は七篇の論文を揭げてある。全體を合せて百篇よりは遙かに多數に上るであらう。而も文藝に關する題目は只の一篇もない。この雜誌を未だ披見した事の無い者が漫然、文學論も誌中にあるやうに記してゐるのに比すれば、三浦氏

が上記列擧の項目に文藝の文字を加へてゐない用意は非常に正しい。

該誌に文學論なきは一應不思議なやうで、再考するとさうでない。明治七八年と言へば、新政府の施設がやつと緒につきかけた許りの時だ。その際言はば贅澤とも考へられる文學論などを獨立にしたり、聽いたりする暇はなかつたであらう。

だから繰返して曰ふ、論題として文學に關したものは一つもない。それは前項に說いた通りだ。然らば、文學に關する言及は絕對に毫末もないのかと反問されると、その際には私は『否』と明答する。

話は少しく外れるが石川三四郎氏が日刊平民新聞に日本社會主義史を連載された際には、該思想移入の起原に溯つて、明六雜誌第二號に加藤弘之がコムニストの語を用ゐてゐる事まで指摘の上記述せられた。まさしく揚子の尖で重箱の隅々まで突つゝく程の要意の細かさである。

石川氏のやうにして穿鑿するなら、文藝への言及は、恐らく社會主義的思想に關するものよりは豐富にありさうだ。(尤も後ればせながら石川氏に告げる。明六雜誌に於て今一ケ所だけ共產黨に關する語を發見した。三十四號杉亨二の『想像鎖國說』(四丁)の末尾に『佛國ニテ唱フルコムミニュスムスノ說ヲ初テ我ガ日本國ニ行ハルルカ』の語がある)

私は閑人でないから、自分の思想の培養にも役立たなければ、又面白くもない古雜誌など通讀し

てゐる程なディレッタントではない。隨つて明六雜誌は外骨老人より惠贈のものを揃へて所持はしてゐても、讀まないものの方が多いのだが、今迄眼に觸れた範圍で言ふと社會主義的思想に關するものは右のたつた二つだが、文藝に關する事はもつと多く見當る。

二　日本最初の英文學紹介

卽ち第三十三號にはブラウニングの名が見える。『詩人ブラウニングノ名言ヲ引カン。曰ク眞正ノ愛ハ智識ヲ卑フト。』（傍線原文のまゝ。三十三號二丁）

又同じ號の同じ論文にバーンズの名も見える。曰く、

『英國の詩人ボルンス嘗テ良妻ノ事ヲ論ジテソノ性質ヲ分テ十トナス。好性情卽チ親愛四分、善キ意見二分、巧智一分、美麗（顏色眉目美好容貌嫻雅等）一分、以上十分ノ八ナリ。引キ殘リテ十分ノ二アリ。ソノ中ニ其妻ノ產業及ビソノ交遊及ビ尋常ヨリ善キ敎育才藝等ナリ。コレハ人々各其意ニ隨ガヒ、之ヲ分ツベシ。但シココニ注意スベキモノアリ。コノ諸ノ小部分ハ零數ヲ以テ分ツベシ、コノ中何ノ一ツニテモ全數ヲ取ルニ足ルモノアラズト』（同上三丁）

この二人の英國詩人の名と言を引用した論文は中村正直の『善良ナル母ヲ造ル說』で、明治八年三月十六日に演說し、同じ三月發行の誌上にその筆記が載つてゐる。

元來明治初年の改革論の多くは、福澤によりて最も鮮明に代表されてゐるやうに、甚しく物質的に傾いてゐたが、中にあづて只ひとり精神的方面に着目した人があつた。中村正直、卽ち敬宇先生である。故に史家は云ふ。

『斯くの如くして道德的の新教育は中村敬宇によりて初められ、物質的の新教育は福澤によりて初めらる。』(竹越氏『新日本史』中卷七六頁)

この敬宇先生が、善良なる母を說く、內容は絮說せずとも、推して知るべきである。一言にして約せば、子の嗜好癖習は母に似るから、人民をよき風俗情態に變じ、開明の域に進ましむるには善き母を得なければならない、よき母を得るには女子を敎ふるに如かず、それも修身及び敬神の敎(Moral and religious education)を受けしむべきであると言ふのである。

今日から見ると、これは餘りにあたりまへ過ぎる陳腐な說だが、封建の餘習の强かつた明治初年に於ては、かなり清新な說であつたらう事はほゞ想像がつく。なぜなれば德川時代から引きつゞいて、『母の腹は借り物だ』との考へがかなり有力にゆき渡つてゐたからだ。

これは封建の世に於ける少くとも代表的なイデオロギイの一つである。封建時代には秩序格式家名が重んぜられる。隨つて大名や武士の結婚はその家名に適はしき名家の間に取り行はれなければならなかつたが、それでは戀愛的享樂が伴はず、夫婦間がお義理一片の形式と化し終る事がしばし

ばある。之を救ふためには正室以外側妾が設けられなければならない。殊に血統が大切がられて正室に嗣子なき場合は、側妾の腹に生れたものを以て之を補ふ場合がある。所がその側妾は謂はゆる家格の低劣な生れの賤しい女が多いから、母の血が子に遺傳すると云ふことになると、その賤しい側妾の腹に出來た子を名家の嗣子とするには憚ある事になる。だからこれは子と母親とは全く切りはなして考へた方が便宜だ。かうして『女の腹は借り物』の思想が生れたに違ひない。

敬宇先生の善良なる母の說はその封建的謬說を打破した點で、當時を驚かしたらうと思はれる。この立說の根據に、遺傳の法則を踏まへ、母の血の生兒に傳はる事が明說してあつたら、もつと實際的な、科學的なものとなつたらうが、學界の幼稚だつた明治初期には、殊に精神的立場を取つた敬宇先生にはそれは望めなかつた。

それはブラウニング、バーンズを援引して感情的に、文藝的に述べられた。そして文學の方から言ふと、全然目的意識を缺如したものながら、或は偶然ながらこれが彼等二人の詩人の名、廣くは英文學の斷片が日本に紹介せられた最初であるかも知れない。

さて明治八年と言ふと西曆は一八七五年で、ブラウニングが畢生の大作『指輪と書卷』が完結して市場に出でてから六年目に當るから、長い間不遇な彼ではあつたが、既に一部具眼の士からは英詩壇の第一人者として認められてはゐた。併し死に先立つ十四年であるから、一般にはまだ彼の眞

價が解されず、隨つてその名聲も充分には定まつてはゐない頃であつた。その際、やつと鎖國の眼をさました許りの極東日本に、只一句ながら彼の詩とそれから名とが傳はつてゐる事は、兎も角も一應の興味はある。

ところで『眞正ノ愛ハ知識ヲ卑フ』の一句だが、私は、これにぴつたりと該當する原句がブラウニングにあるかどうかを知らない。私の不完全な知識と、乏しい參考書とでは、まだ見當らない。併しこれに似た意味なら彼の詩の隨所に述べられてゐる。隨つて事によると、原詩ではも少し長いのを、簡短な一句に要約して譯したのかとも思はれる。

元來ブラウニングは『愛』の詩人だと謂はれてゐる。彼の如く愛を最高題目として且つしば〳〵歌つた者はあるまい。

尤も『愛』は大抵の詩人の愛好題目となつて、古來歌ひ古されてはゐるが、ブラウニングの取扱ひ方は他の凡てと非常に變つてゐた。玆に實は彼の天才の特殊性がある。評家は曰ふ。

『愛を取扱ふ場合に於けるが如く明白に、ブラウニングがその本來の力量を示した場合は他にない。併し愛は陳腐なテーマで、殆んどいづれの詩人もが、その最上の樣式を用ひて取扱つてゐるが、ブラウニングは天才の生れながらの獨創性ある者にして初めて可能なる清新さと直觀を以て之に接觸した。』(Henry Jones. Browning as a philosophical and religious teacher P. 150)

外の詩人だと言葉をつくして、戀の美しさ、優しさ、その魅力、その蠱惑を述べる。所がブラウニングはそれらとは全く變つて、戀愛に道德的精神的意義を附與してゐる。戀愛を以て、人生生存の權威、その權威の偉大さを保持してゐる重要なる要素と見た。愛する事は人間生活の、唯一最高の目標だと、繰返し彼は言つてゐる。併し初めには、たとへば『パラセルサス』などに於ては、愛と知識とが同等の位置に並列して置かれてゐるが、後に『フェリスタの空想』『ラサイシアッヅ』などになると、最早愛には知識などと比較にならない高い地位が與へられてゐる。人の愛は亦神の愛である。神の圓光の一閃火である。が人の知識はたゞ人のものである。知識は感覺に縛られて有限、既定のものである――これが愛と知識とに對する、ブラウニングの後年の考へであつた。(同上一五一、五二、五三頁に散見するところを要約す)

惟ふに敬宇先生は、原文ではブラウニングを讀まれなかつたであらう。『眞正ノ愛ハ知識ヲ卑フ』との一句も何かに引用されてゐたのを孫引きされたのであらう。

實を言ふと、前引ヘンリ・ジョーンズの『哲學及び宗教的教師としてのブラウニング』なる著書の第六章『ブラウニングが愛の原理の取扱方』には、先づ彼が、善人は常にモラルで且つレリヂョスであると考へてゐた事を說き、更に愛は知識より遙かに高いと考へてゐた事を說いてあつて、敬宇先生の所論と吻合する所が多い。但しこれは一八九一年の出版、敬宇先生の論の現はれてから十六年

後に、世に出てゐる上に母についての所說を缺くから、私が如何な盲斷家でも、これが先生の論の粉本になつたのだとの說は立てかねる。

日本でブラウニングの妙味の眞に鑑賞され初めたのは上田敏博士あたりからで、『海潮音』所載の四五の名譯は多く斷片でありながら、併しブラウニングを傳へた事に於て、從來の邦文の譯凡てにまさると、門末の人達は言ふ。或はさうであらう。或は又さうでないであらう。敬宇先生は恐らくブラウニングについては何事も知つてゐられなかつたのだと思ふが、兎も角彼を紹介した最初の人たるの功は先生が荷はれてよいであらう。

三　不明な良妻論

私は詩に鈍感だから外國の作品の聲調を味ふたぞと云ふ大それた望みを起した事はかつてない。難解だと言はるゝブラウニングを外の詩人に比すれば比較的多少でも多く手がけてゐるのは、彼には聲調の美を全く無視しても、別に私の心を充たしてくれる豐富な内容があるからである。

でブラウニングの事なら、大凡の見當はつくのだが、バーンズに就いては何の知る所もない。隨つて敬宇先生の紹介せられた良妻論が如何なる書に載つてゐるか、皆目分らないのは自ら大いに恥しく感ずる次第である。博雅に原據の示教を俟つ。序に言つておくが、敬宇先生のバーンズ引用中

に見える零數なる語は今日の小數點以下の數の事かと思はれる。

以上の外、明六雜誌の第三十一號にはトーマス・ブラウンの名が見える。卽ち西村茂樹の『修身治國非二途論』（明治八年三月一日演說）に左の一節がある。

『英國ノ博士トーマス・ブロウン曰ク、敵ニ勝ツテ以テ勇ト爲スコト勿レ、己ガ情欲ニ克チ得テ始メテ眞ノ勇者ト稱スベシト』

この原典も私は知らない。或は『レリギオ・メディチ』の中でゞもあらうか。まさか漱石の三四郞が廣田先生から借りたといふ『ハイドリオタフィア』の中ではあるまい。

四　文學概論の縮圖

明六雜誌全四十三號をざつと眼を通して、私の拾ひ得た文學者の名と、その言とは以上に盡きる。謂はゞ妙文集的斷片に過ぎない。所が玆にたつた一つ、それらとは變つて、文學概論の縮圖とも言ふべきものを、極めて粗笨ながら紹介したのがある。第廿五號（明治七年十二月刊行）所載、西周の『知說』（五）である。初は文法、修辭學の事に筆を起し、次いで言ふ。

『散文（プロス）ハ別チテ二體トシ、敍事體ハ專ラ悟性（アンドル・ステンヂング）ヲ攪動シ、議論體ハ理性（リーゾン）ニ根據シ、文學ノ潤色ヲ假ルト雖モ其實ロジック（致知學）ニ淵源スル者ナリ。

而テ詩學（ポエトリー）ハ特ニ情ヲ興起シ、想像力ヲ發達スル者トス。中別チテ數種トナス。皆ヲルス（句）ヨリシテ成ル。ライム（韻法）アリ、メートル（句法）アリ、スタンザ（章法）アリ、ストローフォ（轉法）アリ。エピック（賦體）ハ古人ノ勇烈等ヲ賦スル者（平家ノ類ナルベシ）ナリ。リリック（興體）ハ自己ノ情感ヲ詠スル者（琴歌ノ類ナルヘシ）ナリ、バルラット（俚曲）ハ田畯紅女ノ情ヲ吟スル者（端唄ノ類ナルヘシ）ナリ。ソング（讃歌）ハ神明ノ德ヲ稱スル者（和讃ノ類ナルベシ）ナリ。ダラマ（套語）ハ事ヲ叙セズ、直チニ交互ノ言語ニ因テ其情實ヲ知ラシムル者（淨瑠璃ノ類ナルベシ）ナリ。而テ此套語ハ卽チ演劇ノ粉本ニシテ、コメヂー（所作事謔語交リ）ト、タラジジー（愁歎場）トヲ兼ネタル者ナリ。蓋シ詩學ハ人心ヲ高雅ニシテ風化ヲ美ニスルノ具ニシテ其效亦鮮カラサルナリ。此詩文韻語ニ通スル之ヲリテラチユ、ル（文章科）ト名ク。其世用ニ供スル上ニ學術政律ノ事ヨリ、下モ民間日用ノ事ニ至ルマデ斯ニ資セサルハ莫シ。而テ其詞鋒ヲ鬪ハシメ、雄ヲ文壇ニ競フニ至テハロマンス（稗史）フェーブル（戲乘）亦備ハサル莫シ。』（第二十二號一――二丁）

今なら抒情詩と譯すべきリリックが興體、悲劇と譯すべきトラジテイが愁歎場などと譯されてゐる珍らしさは玆には問題としない。私には實は、坪内博士の『小說神髓』を借り來つて玆に若干の言つて見たい事がある。

『小說神髓』はその名の示す如く、小說の創新改革を中心題目としたのではあつたが、その前提と

して簡單ながら、文藝に關する全面的知識、言ひ換えれば文藝概論的な知識を示してくれた。私達、後世にして之を讀む者は、實は、かゝる文藝的知識は『小說神髓』に到つて卒然と示されたものゝやうに思ひ勝である。が、よく搜つてみると神髓の、或は尖兵として、或は前哨、乃至は斥候として、ささやかながら、その紹介のあるのを見る。

たとへば野崎左文氏の著にもかうある。

『私が十二年の夏山田風外氏と共に發起人になつて、木挽町の眞陽亭（後の萬安）に投書家親睦會（會費三十錢にて茶菓辨當を呈し入浴隨意）を開いた時は來會者六十餘名、席上書畫の揮毫や狂歌川柳の卽吟等もあつたが、其時從兄の馬場辰猪氏は今の子爵金子堅太郎氏同伴で出席し、辰猪氏は英佛に於ける小說の沿革、「ローマンス」と「ノヴェル」との組織に就て演說して呉れられた事もある。』（『私の見た明治文壇』四六――四七頁）

これなどはその一例。而して『小說神髓』の刊行に先立つ實に六年前。

又私の引いた西周の文の世に出でたのは實にその十一年前。

だから此れに依つて明治七八年頃から、極めて些少ながら西洋の文學論に耳を傾けやうとする要求が知識階級の間に生じ初め、最初は他の論議の間にそれを挿入する程度に止まつたものが、明治十一二年からは獨立さして文學を論じても他を傾聽させるに足るまでに進步し、その上で『小說神

髓』が世に出でゝ、百年の迷謬を打破し、一世の開導を務めたのである徑路が、不完全ながらうなづかれる。

五　雜誌と資本主義

それ〴〵の文學が發達するにはそれ〴〵の媒助機關を要する。私は詳しく知らないが古代の歌謠の發達は、歌の贈答といふ社交（或は享樂）に俟つ所が多からう。中世の語り物は恐らく樂器（たとへば平家琵琶の如き）によつて大いに促進せられたに違ひない。近世の讀み物は木版印刷の進步、讀み本草双紙の出現と離しては考へられまい。

然らば明治文學發達の媒助機關には何がなつたか。活版印刷の移入、新聞雜誌の隆昌が此れだ。明治文學の主要作品中、初めから書冊の形を取つたものも無いではない。だが十中七八部までは先づ新聞か雜誌かに掲げられた。

明治文學の代表的形式を只一つ選ぶとすれば小說が拾はれねばならない。小說に資本主義と共に發達した文學形式であるから、これが當然である。その小說のうち長篇は多く新聞に現はれ、短篇は多く雜誌に現はれた。

ところで、資本主義の爛熟はその短篇にいよ〳〵幸ひして、今の所謂文壇なるものはこの短篇に

よつて形成され、支配されてゐると言つても不當ではない。日本は殊にそれが著しいのだが、西洋にだつてこの傾向は見える。

そしてその短篇は雜誌に倚存する文藝形式であるから、約言すれば、今の文壇は雜誌によつて支持せられてゐると言つてもよい。

かうした因果を究めて、さて明六雜誌を顧るとき、この日本諸雜誌の元祖の中に、今は雜誌を屋臺骨にして生存してゐる文藝の事が少しも見えなかつたら、私はひどく失望するのであつたらうが、斷片ながら以上の如く拾ひ出せたのは、自分としては滿足であつた。

事はいさゝか明六雜誌と放れるが、日本の雜誌の中、最初に最も敏感に最も鮮明に新興資本主義と呼應したものは、やはり德富蘇峰氏の『國民の友』ではなかつたらうか。それまでの有名な雜誌は明六は勿論、民間雜誌でも、政理叢談でも、學者の片手間仕事の觀がある。『國民の友』に到つて初めて商品の感が著しく濃厚である。勿論一世を開導する主義抱負がないといふのではない。が、その一枚看板であつた平民主義こそは、近世ブルジョア擡頭の際の旗幟であつたことを忘れてはならない。

既に述べた通り短篇小說は近代資本主義の趨向と、最も緊密に形影相添ふ文藝形式である。又『國民の友』はわが國資本主義と最初に敏感に呼應して起つた雜誌である。然らばこの短篇小說と『國

民の友』とは如何なる關係にあるか。これも興味ある問題たるを失ふまい。

さきに結論を言ふなら、私は『國民の友』こそ日本短篇小說の最初の有力な搖籃であり、苗床であると勇敢に論斷する者である。この意味に於て彼は資本主義へ奉仕の使命を、文藝方面に於ても遺漏なく果した。

尤もそれが發行以前、短篇らしきものが美妙などによつて試みられてゐなくはない。が、それは謂はゞ無名の私生兒で、名稱さへもなかつた。所が明治二十一年二葉亭四迷が『國民の友』にツルゲェネフの『あひびき』を譯載した時、はしがきに於て、恐らくスケッチの文字から思ひ付いたのであらう『端物』と呼んだ。翌二十二年には春期附錄として逍遙の『細君』美妙の『胡蝶』などが載つた。逍遙博士自らはこれを『端物小說』と呼ばれた。スケッチと短篇小說とは聊か違ふので、それで二葉亭の用語に小說なる二文字を添加されたのであらう。恐らくはこれが日本に於ては短篇小說が獨立の名稱を得た初めではあるまいか。

所が鷗外博士は常に學的精嚴に執して、端物小說と云ふが如き俗稱を嫌ひ『短篇小說』の名稱を用ゐた。この語の用ゐらるる或は鷗外博士に初まるであらう。

ポウは自ら短篇小說を創成し、その新様式を『Tale』と呼んだが、ブランダ・マシューズはその紛れ易きを厭ふて Short-Story と改めた。今はマシューズの語が專ら用ゐられる。逍遙博士の用語廢れ

鷗外博士の用語の行はるゝ、或はポウとマシューズの如き關係にあると言つてよいであらう。

私は明治最初の雜誌が明六雜誌であり、それに若干の文藝記事あるを主として述べ、更に明治最初の資本主義的色彩の鮮明な雜誌が『國民の友』であり、それが資本主義的文藝樣式の精粹なる短篇小說の搖籃であつたことを副として述べ、明治文藝展開と雜誌との相關々係の一端を窺つたのである。もしそれ明治短篇小說の發達については別に準備がある。他日の發表を期するであらう。

昭和二年十月

明治初期の虛無黨文學

一　瀕出せる虛無黨文學

茲に謂ふ虛無黨文學とは、虛無黨を題材に取扱つた文學なる意味を、縮約した急造不熟の言葉である。歷史小說とか家庭文學とか云ふ類ひの由來ある成語でなきは斷るまでもない。

さて明治十五年と云ふ出版書籍の數もさう多くなかつた時代に、虛無黨に關する著書が三種も出てゐると言つたら、讀者は多少の驚きを禁じ得ないであらう。假りにその年政治小說が幾篇出てゐるかを調べると、自由民權論の沸騰期であつたに拘らず、木田淸三郎の『民權膝栗毛』一冊しかなく（新舊時代自由民權號所載吉野博士調査の『政治小說年表』による）、外の飜譯小說の方面は、『花柳春話』『寄想春史』以來、一部讀書界の嗜好がその方面に向いてゐたのに、桑野鋭の『蝶舞奇緣』（原書不明）と、大久保勘三郎の『群芳綺話』（ボッカス原著）の二冊しかない。（愛書趣味飜譯號所載、齋藤昌三氏の調査による）

然るに虛無黨の文獻は左記の三種がある。

（１）杣田策太郎譯『魯國奇聞烈女の疑獄』（明治十五年四月發行）

（２）西川通徹譯『露國虛無黨事情』（同上九月發行）

（3）川島忠之助譯『虛無黨退治奇談』（同上九月發行）

そして、一ケ年の中に、三册も續出してゐるのは十五年だけだが、併しその前にも後にも虛無黨に關する書がちよい〳〵譯されたり、刊行されたりしてゐる。右表の（1）『烈女の疑獄』はウエラ・サシュリッチ（Vera Zasulitch）の大官狙擊事件を記叙したものだが、同じ彼女の事を書いたものがその前年なる十四年にも一種出てゐる。

田島象二譯『婦女立志歐洲美談』（第三章は全部ウエラ・サシュリッチの傳なり）

がそれである。その後二十年までに或は刊行され、或は書目に見えるものに左の二書がある。

宮崎夢柳譯『鬼啾々』（十六年發行）

冷々亭杏雨（實は二葉亭四迷）『通俗虛無黨形氣』（十九年譯、不刊）

黑岩淚香譯『片手美人』（二十年發行）

二十年以後虛無黨は日本の讀書界の關心と游離し去つたか、暫く文獻がなく（少くとも私の手に入らず）、そして日露戰爭前後になつて又二三種見當るのである。

田口掬汀作『魯國奇聞虛無黨』（三十六年十二月文藝倶樂部所載）

松居松葉譯『虛無黨奇談』（單行、三十七年九月發行）

塚原澁柿園作『虛無黨』（單行、三十七年十二月發行）

日露戰爭前後の刊行物はこの際除外しておく。明治十年代に私の謂はゆる虚無黨文學がなぜ斯く瀕出したのであらうか。この謎の一半は世界年鑑が說いて吳れる。

見よ、一八七八年（明治十一年）の項には『露國の虚無黨、顯官を暗殺し、又暗殺を企つ』とあり、翌七九年（明治十二年）の項には『虚無黨、モスコウ行きの皇帝の列車を要擊せんとす』とあり、更にその翌八〇年（明治十三年）には『二月露國冬宮殿内の變、虚無黨撲殺の嚴命出づ』とあり、又その翌八一年（明治十四年）には『三月露帝アレクサンドル二世暗殺さる』とある。

そして謎の殘る一半は、明治元年に生れ、當時を丁度物に感じ易い十四五才の少年として經過せられた內田魯庵氏の回憶が、最も明白に解いてくれる。

『八十一年の三月一日の亞歷山第二世の暗殺は暗殺その物が當時まだ珍らしかつた爆彈で行はれた爲に殊に著しく世界を震撼したが日本も亦少からず動搖し虚無黨の名は洽く一般の人心に根強く刻みつけられた。日本は國情が相違してをるから露西亞に行はれたやうな大逆を想像だもするものは一人もないが刺客は決して珍らしくなかつた。當時の自由黨の志士の中には刺客を理想とするものさへあるらしかつた。それ故に君主に危害を加へる虚無黨を恐れ憎み呪ひつゝも其壯烈なる勇氣に共鳴を感ずるものは無いでもないらしかつた。且つ屢々新聞紙等に由つて報道される虚無黨の神出鬼沒の陰謀は丁度昔の傳奇小說を讀むと同じ感があつて、當時の青年の好奇的空想を唆つたのは、恰

もジゴマの活動寫眞に等しいものがあつた。明治十七八年の頃、川島忠之助氏の『虛無黨奇譚』(?)が好奇を以て迎へられたのは、明に當時の青年の心理を語つてゐる。かういふ意味で虛無黨の實行は恐れ或は憎んでゐても虛無思想には興味を持つものがあつてステプニヤックの著書の如きは早くから讀まれてゐた。』(トルストイの思想の移入及び傳播)

これ以上一言を贅するの餘地もないが、假りに蛇足の附加が許されるならば、かの北歐の强國は瀕りにわが北海を脅かしたヲロシヤの昔から、プーチャン來航の當時(この時ロシヤの小說家ゴンチャロフと、今の詩人川路柳虹君の曾祖父に當らるゝ左衞門尉聖謨と會見した記錄が殘つてゐることは新村博士の「南蠻更紗」に徵せよ)、千島、樺太の交換から『魯國』が『露國』に換字さるゝまで、わが國に取つては恐ろしい夢魔であつたので、單に暗殺に好奇心を感ずる以外、それがロシヤに起つた事件といふので特別の關心を持つたであらう、當時の愛國志士の中には、敵愾心から、自分達の憎んでゐる魯國の皇帝や爲政家を彼等虛無黨の志士が威嚇して呉れたといふ點で、それを味方の如く考へた者もないとは限らない。

二　立志社の社會黨小說

明治初期に虛無黨文學の濒出せる事に就いて、當時の文書に記錄を徵し得べきものは只一つ竹越

三叉氏の『新日本史』(明治二十四年刊行)がある。曰く、

『土佐に三政社出現せり。一を立志社と云ひ、一を靜儉者と云ひ、一を中立社と云ふ。立志社は明治七年板垣等が征韓の議論に敗れて歸りし時、共に歸りし陸海軍士官兵卒の設立せるものにして、社員一千餘人あり、洋學所を開き、法學部を設け、日々夜々、自由民權の說を講じ、或は佛國革命を童謠に作つて市街に歌謠せしめ、或は魯國社會黨の非運を小說に作つて傳唱せしめ、以て自由民權の說を平民に知らしめんと勉めたり。』(上卷一九一)

この傍點を打つた一項が事實とすれば、それはわが國に於ける最も早き虛無黨文學(と同視してよからう)の出現でなければならないが、立志社からさうした小說が出たか否かを私は疑つてゐる。その時の童謠漢詩は私の手許にも一二蒐集し得たが、小說は未だ一つも手に入らない。或は竹越氏は立志社以外から明治十四五年に出た前記の諸書のことを混同して記憶違ひをして居られるのではあるまいか。

尤もさうした小說が刊行されたにしても、それが散逸して了ふと言ふことも有り得ないことではない。實は私が前掲した諸書の多くも、どの明治文學史にも記載せられて居らず、危く逸書となり掛つてゐたのであつた。少くとも十四五兩年に刊行せられた諸書に就いては、吾々はその標題だも知らなかつたのを、たま〳〵前引內田魯庵氏の回憶が出でゝ(大正八年刊行トルストイ全集附錄)

吾々の探索的興味を刺戟するに到り、その餘の諸書はこの一二年の明治文學研究勃興と共に、自ら浮び出て來たのである。但しそれらの諸書を解題するには恐らくロシヤで起きた事件の年代順に隨ふ方が、記述の整理に便宜であらう。

三　烈女ウエラ・サシュリッチに關する二書

世界年鑑一八七八年（明治十一年）の項に『露國の虛無黨顯官を暗殺し、又暗殺を企つ』とある事は前に引用したが、少くとも後者の『暗殺を企つ』の方は、ウエラ・サシュリッチの事を言つたものでなくてはならない。なぜならば彼女が時の警視總監トレポフ中將を狙擊したのは、そして負傷はせしめ得たが擊殺する迄に到らなかつたのは、更に最後にその犯行者が妙齡の佳人なるの故を以て世界を異常に衝擊したのは、實に一八七八年二月一日の事であつた。

ウエラ・サシュリッチ！――それはたとへ此の事件は別にしても、決して讀者の耳に全然不熟の名ではあるまい。諸君は恐らくクロポトキンの『自叙傳』に依つて彼女の名を知つてゐるであらう。長いけれども茲に拔いておかう。

『それと同時に、セント・ペテルスブルグ警視總監トレポフ將軍は、其の未決監臨檢の際に、政治犯人の一人ボゴルウボフが此の萬能の暴君に對して帽子を脫がなかつたのを見て、それに飛びかゝつ

て一撃を加へ、其の囚人の抵抗に遭つて更にそれに笞刑を加へるやうに命じた。ほかの囚人等は、其の監房中で此の事を聞いて盛んに激昂の聲をあげて、其の結果看守や警官等に手ひどく打たれた。ロシヤの政治犯人はシベリアの追放や或は懲役の間に蒙つた一切の艱難を默つて忍んでゐた。が彼等は體罰だけはどうしても容さないと堅く決心してゐたのだつた。一少女のヴエラ・ザスウリッチは、ボゴルウボフとは個人的には少しも知らなかつたが、ピストルを握つて警視總監を訪ふて、そのピストルを放つた。トレポフは僅かに傷ついたゞけだつた。アレキサンダー二世は此の勇敢なる少女を見に行つた。彼れは確かに彼女の非常な美貌とその内氣なのに打たれたに違ひない。トレポフはセント・ペテルスブルグに多くの反對者を持つてゐたので、其の反對者等はいろ〳〵と運動してボゴルウボフの事件を普通刑法の審判にかけることにした。そしてヴエラ・ザスウリッチは法廷で宣言した。彼女はたゞ、此の事件を世間に知らせて多少の改善を施さしめる一切の方法がなくなつたので、已むを得ず兇器に訴へたのだ。ロンドンタイムスのセント・ペテルブルグ通信員ですらも、此の事件を新聞に載せるやうに賴まれながら、そんなことはあり得べからざる事と思つて遂に載せなかつた。で、彼女は誰にも話さずに、トレポフを撃ちに行つたのだ。そして彼女は、今其の事件が公けになつて、トレポフがほんの少々傷ついたに過ぎない事を知つて、非常に喜んでゐた。陪審員等は滿場一致で彼女を無罪にした。そして彼女が裁判所を出ようとした時、警官等は再び彼

を女拘引しやうとしたが、門前の群集の中にゐたセント・ペテルブルグの一青年が彼女を此の毒手から救ひ出した。彼女は國外に出て、やがてスヰッツルの私達の中に來た。

『此の事件は全ヨオロッパに非常な感激を起させた。彼女が放免されると云ふ通知の來た時、私はパリにゐて、其の日あちこちの新聞社へ訪ねて行つた。新聞記者等は皆熱心になつて此のロシヤ少女の爲めに激烈な論文を書いてゐた。「兩世界評論」ですらも、一八七八年の其の評論の中に、其の年の間に、ヨオロッパの輿論を最も感動させたのはベルリン會議のゴルチャコフ公爵とヴェラ・ザスウリッチの二人だとまで云つた。此の二人の肖像はいろ／＼な畫に相並んで載せられた。斯くしてヴェラ・ザスウリッチの此の献身的行爲は西ヨオロッパの勞働者に非常に深い印象を殘したのであつた。』（大杉榮氏譯、革命家の思出、五一〇―五一二頁）

又或は讀者は彼女の名を『共産黨宣言』英譯についてゐるエンゲルスの序に依つて記憶してゐるであらう。

『第一の露譯はバクニンの手に成り、一八六三年の頃、ジュネヴアなるヘルツェン氏のコロコル社より出版せられ、第二は彼の女丈夫ヴェラ・ツァスリッチの手になり、一八八二年同じくジュネヴアに於て出版せられたり』（幸德秋水、堺利彦氏共譯）

以上に依つて事件の輪廓、及び彼女の業績はほゞ分ると思ふが、たゞ何故に彼女が虚無黨と關係あるかに就いては一言の説明を要するであらう。

彼女は陸軍大尉の遺兒で、そんな運動とは一切關係のない女であつたが、革命黨の女傑ネッチエーフトと多少の知己あり、たま〱ネッチエーフトはスパイの嫌疑ある同志を射殺してスヰッツルに脱走した。憲兵がその遺品を檢査した所、中からサシュリッチの手紙が發見され、たゞそのためにのみ彼女は一味と見られて投獄追放され、その間に具さに官憲が虚無黨員を虐遇する實狀を目睹した。その後數年、彼女の寃罪なる事が分明し出獄して見ると、母はその間に餓死してゐるのであつた。その間の怨恨が彼女を驅つて此の擧に出でしめたのである。

さて右のサシュリッチの事を記した田島象二の『婦女立志歐洲美談』と柚田策太郎の『烈女の疑獄』とは、恐らく共に、當時移入せられた雜誌などに據つて譯したものらしく、兩書或は同一の原文を用ゐたのではなからうかと思はれる節もあるが、かなり違つた文章として表現せられてゐる。田島象二は今日から言へば一種のヨタな賣文家で『哲學問答』『小説文語錦繡』アーネスト・サトウの序翰ある『日本佛教小史』などの著もあれば、醉多道士の別號を用ゐて狂詩の書も編述してゐる。降出降止霖雨濃。居續籠レ房雌與レ雄。朋輩女郎時出レ顏。嬲言呀大層好中などいふ遊蕩の愚詩を詠んでゐるのも彼だから、筆路は烈女を傳へるに不適當である。文章の一例を示せば左のやうである。

『薄命なるサシュリッチは勇齢僅に二十才を超へざる一少女の身を以て思ひも寄らぬ寃罪に陷ゐり、無期遠謫の刑に遭ひて、永く此の世の月日に訣れ、其老衰の母に別れ、遠く異域に托して胡笳に骨を穿ち、悲馬に心驚き、月黑く草白き配處の人とはなりにけり。』（三〇頁）

『烈女の疑獄』の方は文も摯實の氣を帶び、讀んで遙かに面白い。元來サシュリッチが無罪の判決を受けたのは、彼女と一面識もなき少年紳士アレキサンドロフが挺身して雄辯を揮ひ、彼女を庇護した効によるのだが、その大雄辯の概要がこの書の大部分を占めてゐるので、一讀肉鳴り、骨動くの感動を與へずにはゐない。（但しこの雄辯者は當時、トレポフの勢力を憎む一部の貴族がさし向けた者であることが、別の書には見える。）譯者杣田氏については、奥附に福島縣士族とある以外、私は何の知る所がない。

四 『虛無黨退治奇談』

世界年鑑一八七九年（明治十二年）の項に『虛無黨、モスコウ行きの皇帝の列車を要撃せんとす』とある事も前に引用した通りだが、川島忠之助氏譯の『虛無黨退治奇談』は、實に此の壯擧を材料として構想した萬波重疊のかなり面白い小說である。『烈女の疑獄』『歐洲美談』次に說く『露國虛無黨事情』などが凡て百頁以内の片々たる小冊子なのに、これは三百頁近くの、當時にあつては大

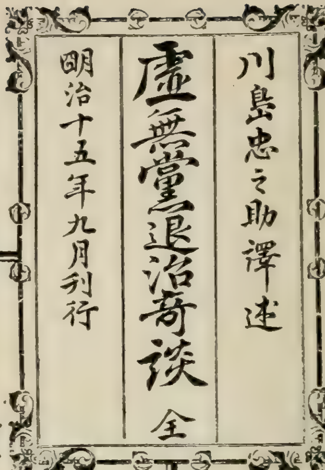
冊である。

原作者はフランスの Paul Vernier だが、これはラ・ルースの中にもその名の見當らない程の無名作家である。隨つて布置や、統一を缺ぎ、多少の混雜は免れないが、何しろ事件が事件だから讀者を魅了するには充分である。

序は漢文で依田學海が書いて居り、別に梅園小史が題詩五篇を寄せてゐる。その第一に、

夢暖溫泉場裏春。魂寒鐵道客車宿、要知外佛內魔證。須見書中一美人

とあるがこの美人の名はアンナで、虛無黨の一重鎭である。ロシヤ參政官の息ボリスは外遊中であつたが、フランスでアルベル青年と知己になり、相携へてロシヤに歸朝した。その汽車の中で大切な密書を盜まれて了つた。そこで二人が虛無黨討滅を企畫する事から事件が生じて、アンナが溫泉場に於ける戀人との邂逅、大官毒殺の謀計、ボリスとアルベルが術策を用ゐてのアンナ誘引、皇帝の列車轉覆のために設けた地雷火、密偵の苦肉の策、同志間の反感等いろ／＼な經過もあるが、遂にアンナの戀人ステパンはアンナを救ふためにボリス等の前に一切の謀計を告白し、アンナに最後の接吻を許された上で自刃する。アンナは自分を救ふがために戀人が同志を裏切り且つ眼前に自刃したのを見て發狂する。ボリス等は告白により皇帝謀殺の計あるを知つて二人には構つて居られず、各驛に打電するが、その時は既に皇帝の列車はモスコウに向け發車した後である。ボリスの一電よ



（上）「虚無黨退治奇談」表紙



（下）
「婦女立志欧州美談」にある
ウェラ・サシュリッチ法廷に立てる圖

くそれを救ひ得るや否や？　これが一篇のクライマックスである。譯文の一例を示さう。

『君等余ヲシテ一生ノ思ヒ出ニ猶一回アンナト接吻シ其傍ニ斃レシムルヲ拒絶セザルベシ……余君等ニ約スニ實事ヲ語ルヲ以テセリ……君等ノ至尊ト仰グ亞歷山第二世ヲ載セシ列車ハ今頃莫斯哥ノ邊ニテ粉虀トナツテ飛ビ散ルゾ噫專制主義倒レテ自由ノ新世界ヲ啓クハ今日ニ在リ我身死ストモ何ゾ憾マン哉ト（ステパンは）絶叫シツツ少婦（アンナ）ノ胡床ヘ馳セ寄リケリ』

併し地雷火は爆發が數分おくれて皇帝の列車は無事なるを得た。ボリスを助けて、虛無黨一網打盡の効を擧げしめたアルベル青年はフランスへ歸つたが、幾程もなくトランプ札を貫付してある懷劍で心臟を刺し通された彼の屍體がセイヌ河に浮き上つたのを、夕刊記事として結んだ所など、今では常套のテクニックだけれど、多少の餘情はある。

譯者川島翁が八十に垂んとする高齢でありながら今なほ健在で居られるのは最近に到つて知つたことだが慶賀の他ない。當時虛無黨に興味をもち、ロシヤからの新歸朝者曲木如長からこの原本を獲て譯述された經過は自序にもあるし、吾等の親しく翁を訪ねて伺ひ得た所でもあつた。翁がジュール・ベルヌの『八十日間世界一週』（明治十一年出版）の譯者としての効績は多くの文學史に見えるが、もし內田魯庵氏の回憶にでも上らなかつたら、この書の如きは危く逸書となり終る所であつた。尤も內田氏の文で書名は知つたものゝ、數年搜したのに手に入らないので、私は一時、魯庵氏の何

かの思ひ違ひではないかと疑つた事さへあつた。然るに此の春吉野（作造）博士の書架にこの書を發見して内田氏の言の誤りなきを確かめると共に、大いに垂涎したのであつたが、旬日後、博士は別に一本を得て私に寄贈せられた。その前後巖松堂の古圖書目錄にも見えて、それは齋藤昌三氏の手に落ちた。川島家にも依田學海が漢文で批評を詳密に朱書した一本が藏されてゐる。吉野博士、川島家、及び私のものは模樣の輪廓の中に書名を書きこんだボール表紙だが、齋藤氏のは全面に髑髏を白抜きにした紙表裝である。但し本文には差異はない。

五　マルクス最初の紹介者

西川通徹譯の『露國虛無黨事情』は末廣重恭の序文のついた七十餘頁の册子、『余頃者譯㆚英文雜誌記㆓魯國虛無黨之事情㆒者一編㆛以揭㆓自由新聞㆒㆙』また『如㆓新聞追次著㆒不㆑便㆓觀覽㆒、偏以爲㆓一小册子㆒』の自序に依つて編述の次第は明かである。この書は發賣禁止になつた。內容については別に言ふ程の事もないが、ヒーゲル（Hegel）スコペンホウエル（Schopenhauer）などの奇讀の固有名詞の見えることゝ、それから一個所マルクスの名も見える事などが多少眼を惹く點である。このマルクス全盛の世に於て、日本に彼の名が傳はつた最初はいつ頃であるかを究めるのも多少の好事心を滿足させる事であらう。私は別に注意して調べたわけではないが、この書及び宍戸義一の譯し

た『古今社會黨沿革說』にその名が發見せらるゝ事と、兩書とも明治十五年の出版である事とを言つておく。

宮崎夢柳の『鬼啾々』は未だ寓目の機を得ない。

涙香譯の『片手美人』はフランスの探偵小說家ボアゴベの作である。英譯は "The Cold Hand" と言ふのだが、フランスの原題は知らない。これは『鐵假面』などと並べて涙香物の中で私の最も好きな作である。私は『鐵假面』によつてフランス革命直前のルイ王宮に興味を持ち、『片手美人』によつて虛無黨の興味を刺戟せられたことを白狀しておく。

六　二葉亭の『虛無黨形氣』

以上の諸書はウエラ・サシュリッチに同情した以外、多くは虛無黨を敵視し、憎惡してゐる。元より虛無黨の神出鬼沒の活躍、勇猛果敢の動作、周到緻密の畫策を、或は壯とし、或は痛快とし、或はいたく共鳴を感じてゐる事は掩はれ難いが、虛無黨を他面、陰謀、毒殺、奸計、暗殺、刺客、爆彈などの概念と結びつけて惡物視し、憎惡してゐるのである。それが當時の日本人一般の考へであつた事は、古い新聞雜誌に散見する記事に依つても窺はれる。

所がここに唯一人、虛無黨を彼等とは全然別に（卽ち今日から言へば比較的正當に）解してゐた

人があつた。二葉亭四迷こそ實にその人であつた。

明治十九年二葉亭はツルゲェネフの『父と子』の初めの方を「通俗　虛無黨形氣』と題して飜譯した。その事は二葉亭の自談にも、坪內逍遙博士の回憶にも見える。

『浮雲以前にも飜譯などはある。今もいつたツルゲェネフのファーザース・アンド・チルドレンの冒頭を、少々ばかり譯したことなどもあるが、坪內さんに見せたばかりで物にはならなかつた』（二葉亭全集第四卷七二四頁）

『二葉亭は例の「父と子」の幾ページかを其の式で譯して來て（虛無黨氣質と題して）見せたことがあつた。それを私が大阪の日野商店へ世話したことがあつた。舊日記抄を見ると、其の前金三十圓を二葉亭に渡したといふ事が書いてある。それは十九年四月四日の記事だ、あの原稿を日野商店はどうしたか知らん。無論、殘稿を催促しても來ず、其の第一稿とても、遂に世に出でずに埋もれてしまつた。』（坪內博士回憶漫談）

日野商店がこれを出版する積りでゐた事は確かである。なぜなれば十九年四月加藤瓢乎がオーネエの小說を譯した『鍛鐵場主』が日野商店から出てゐるが、その奧付廣告を見ると「春酒家朧助譯冷々亭杏雨譯、通俗虛無黨形氣（近刊）」とあり、その廣告文は杏雨即ち二葉亭が署名して書いてゐる。それは單に虛無黨に對する二葉亭の見解の一端を窺はしめる許りか、稀世の珍篇であるから全

文を引用して此の稿を結ばう。

『素人了簡には虚無黨とさへ申せば何うやら煙薬臭い様に思はれますが、全くは匆々左様な淺はかなものではないさうで御座います。魯西亞で虚無主義の芽を出しましたは今を距る四十年以前の事ですが、最初の程は誰一人其と心付くものはありません。所を先年佛蘭西で物故なられた杜ルゲーネフ翁が、流石名家といはれる人だけあつて、達つたもので御座います。疾くも其と心付かれて之を一部の小説に編み、世に公に致した所から、遂に世人の悪しみを受けて危險な眼にも出逢つたゆゑ益々有名に成つた、と申すは卽ち此虚無黨形氣のことで御座います。一篇の本尊と申すは虚無主義を主張する一箇の豪傑で、之をさる架空主義の紳士に憎まれて、激論の末遂に一場の騒動を醸すといふ事が全編の骨子で、其他本尊の豪傑が思を懸ました女丈夫を以て彩色を致し、男女數名の梟の端の虚無黨論者を御景物に添へて、お慰ながら御覽に成ります中に、自然とかの虚無恬淡の主義又は之を奉ずる人々の言行風采から、硝薬臭いのは此主義の眞面目でないことまで逐一お解りに成りませうから、御見聞を博く遊ばす一助にも相成らうかと存じます。加之言文一致一途の主義に基いて、紳士社會に行はれまする上品な東京語を以て飜譯して御座いますから、至極面白く出來てをりまして、悪く申せば圓朝子の猿眞似ですが、賞めて申せば此の小説などが日本新文章の嚆矢に相成りませうか。とはいふもの丶是とても手前一箇の私見で、下世話に申す味噌を上げる類かも測ら

れませんゆゑ、好邪は御覽の上、御勝手次第に御評判を願上ます。（冷々亭主人述）

附記――ウェラ・サシュリッチは今日の西歐の書には大抵 Vera Zasuliç 又は Zasulitch と綴つてあつてザスリッチと讀むのが普通になつてゐる。併し古い英書には Sasulitch と綴つてあつて、明治十四五年まではみな（私の眼に觸れた限り）サシュリッチと讀んであるから、今、私は便宜上それに隨つた。

大正十五年十二月

『鬼啾々』解題

『鬼啾々』は吾等同好者の間にかつて閲覧した者なく、隨つて私も前章に於て未見と斷つておいた。然るに昭和二年一月銀座松屋樓上に「愛書趣味社」主催「改造社」後援の明治文學研究資料展覽會が開かれた時、はからずも右の一書が、本職のダンサーとして、藝者としてよりも、寧ろ藏書家として有名な花園歌子君によつて出陳され、吾等を驚喜せしめた。後に「明治文化全集」が刊行さるるに及んで、その飜譯篇へ收載複刻さるる事となつた。右の一篇は私がその依囑を受けて書いた解題である。

一　迷宮に入れる原書

『鬼啾々』の篇首には夢柳居士著とある。この著とある書物を飜譯篇に編入する事は、或は讀者の疑惑を招く怖れがあるから最初にその點を一應辯じておかねばなるまい。

成程、居士は著と記してゐるが、世間ではこれを飜譯と見なし、大抵の明治文學史もその項下に分類してゐる。惟ふに著と記すにも飜譯と見るのにも、それ〴〵理由があるであらう。

本書は明治初期の凡ての譯書がさうであるやうに元より嚴密な逐字譯でない。緒言にも見ゆる通り、勝手に「拔萃、敷衍し、」他から材料を追補しても居れば、自分でかなりな出たらめを書き加へても居る。これ自ら譯と署せずして、著となした所以であらう。

併し著とは言つても大體は據つた原典がある。或る部分は正しく飜譯と稱して差支へない程忠實に原意を追ふてある。かつて英語世界の記者は「明治初期の豪傑譯」なる評語を用ゐたが、本書もまさしくその豪傑譯の一つで、日淸戰爭頃までは、この程度のものも譯として通つた。明治文化全集の飜譯篇收錄の諸篇も一二を除く外はこの種類である。故に私も此れを譯の部に加へた次第だが、それには多くの明治文學史の記述が有力な支援となつて此の私の取計ひの責任を輕くしてくれてゐる。さて、譯とあらばその原典は何か。

これも夢柳居士が緖言で明かにしてゐる。卽ち原題は『地底の祕密』と云ふので、一八八二年(明治十五年)三月ロンドン出版、魯人ピ・レウロッフの手記であると。

居士のこの言がそのまゝに信憑すべきなら何も問題はないのだが、實は此れが大いに疑はしいのである。そこで私の解題は先づその詮議から初まるであらう。

ピ・レウロッフとは言ふまでもなく Peter Lavrovitch Lavrov の事でなければなるまい。所が彼には『地底の祕密』などと言ふ著書はないのである。

元來彼はロシア社會運動の極めて光輝ある一先覺だが、所說は槪して溫和で、道德的な社會主義者である。然るに飜つて『鬼啾々』を一讀すると、極めて激しい革命的口吻が全卷を貫いてゐる。たとへそれがどれだけ夢柳居士によつて革命的潤色を受けてゐるにせよ、かゝる書の原典が果して

ラヴロフの筆になつたかどうかは、私ならずとも一應疑ひを抱かずには居られまい。

そこで私は書誌を漁つたり、ロシア文學専攻の友人に質したりした上で、前言の如くラヴロフに夢柳居士の言つたやうな『地底の祕密』なる著書の無いことを確かめ得た。

だからそれで一應これが原典の探究は迷宮に入つた形だが、併し夢柳居士もまんざら根も葉もないことを書いたわけではないから、その記述は充分に、その原據詮議の手がかりとはなり得るのである。

と言ふは外でもない。それはステプニアックの著に『地底のロシア』(Stepniak; Under-ground Russia)と云ふ一卷がある。初めはイタリ語で書かれて一八八一年に初版が出てゐる。翌一八八二年には英譯が出來て、それには三月四日附のピータア・ラヴロフの序文が卷頭に載つてゐるのである。

謎はこれにて全部解ける。夢柳居士の謂ふ『地底の祕密』とは此の『地底のロシア』の事であつたのだ。そしてそれはステプニアックの著書なのだが、たまたまラヴロフの序文あるがために、居士は彼を謬まつて著者と信じたのだ。現に『地底のロシア』と『鬼啾々』とを對比して讀むなら、前者が後者の原據となつた事は一目にして明かである。

ついては玆に外人の記述を假り『地底のロシア』の簡單なる解說を載せておかう。

『著者はもとの「土地と自由」編輯者で、ステプニアック（平原の子の意）の假名のものに多年本名を隱してゐた（本名はセルゲイ・ミハイロヰッチ・ノラウチェンスキイ。）それが自分も參加して重要な役割を演じた革命的な、虛無主義運動をイタリ語で數聯のスケッチにしたのが本書である。書の初めには個人的宣傳の經過が簡單に叙してある。これはロシアでは或る程度まで婦人解放の機運を醸成した。多大の彈壓を受け、多くの青年の命が犧牲にはなつたが、これは自由主義の酵母をツア治下の廣大なる帝國一ぱいに傳播した。ステプニアックは本書で一八七一年前後から、專政主義攻擊のために起つた多くの事件を、順序を追ふて辿り、最高權力者に向つて武器を擧げたテロリズムの辯護さへしてゐる。自由の敵を滅除すべき事を使命と自ら心得てゐた彼は、政治的手段として、刺客をも亦回護してゐるのである。更に「革命側面觀」の章に於ては、虛無黨員の中、自分の面交ある者數名の肖像畫を描いてゐる。ステパノヰッチ、ドミトリイ・クレメンス、ワレリアン・オシンスキイ、クロポトキン侯爵、ドミトリー・リソグーブ、ジッシイ・ヘルフマン、ヴェラ・サシュリッチ、ソフィア・ペロウスカヤの八人である。此の書の後半は、暗殺、又は牢獄やシベリアからの脫走の企てが叙してある。祖國を壓政々府の許から解放しやうと企つる革命家のプロパガンダ又は方法を描いたものとして、且つその目的や意圖の宣明として、本書は、散漫であり、非藝術的であると言ふものゝ、將來の史家に取つては貴重この上もない書であらう。それは少なくともロシア貴族の子女のもつ絕

望的な熱心さと、自己犧牲の精神を明かにしてゐる。』(Reader's Digest Books P. 869-870)

二 『地底のロシア』との對比

『地底の秘密』を拔萃敷衍したと稱する『鬼啾々』はどの程度まで原典に據つてゐるであらうか。それを究めるには『鬼啾々』の內容を少しのぞかねばならない。

『鬼啾々』の第一回には虛無黨員がロシア皇帝の寵臣メセンチェフ中將を暗殺する事が敍してある。これは『地底のロシア』のオシンスキイの項下に同一記述があるから、それを素材にしたものと思はれるが、文は勝手に潤色してあつて、似もつかぬものとなつてゐるから確言はしかねる。

第五回と六回にはウェラ・サシュリッチの事が書いてある。いまこれを『地底のロシア』と對比してみるに、前者は遙かに詳しいから、これはいづれ他書に依據して書いたものであらう。

第八、九の兩回はクロポトキンの事が書いてある。今、これを原典に對比してみるに、殆んどそのまゝだから、これは飜譯と稱してよい。

十回にはソフィア・ペロウスカヤのことが書いてある。對比の結果、これも飜譯と稱するに値する程原典に據つてある事が分つた。母への遺書などもそのまゝである。

卽ち『鬼啾々』の半ばより少し多くの分量が、『地底のロシア』の譯、乃至はそれに據れるもので

ある事が分る。

が、本書には『地底のロシア』を全然離れた記述も亦少くない。著者は之を『近日西字新聞に傳ふるところを湊合し……』と斷つてゐる。併し私の見る所を以てすれば、新聞以外に、小說その他の著書から補足した點も少なからずあるやうだし、全然據り所の所ない夢柳居士の出たらめも相當に多い。

では、それまでに、虛無黨に關する著書は日本に大凡どれ程出てゐたであらうか。私の眼に入つたものに左の數種がある。

田島象二譯　婦女立志歐洲美談　明治十四年發行（第三章全部ウエラ・サシユリッチの傳である）

杣田策太郎譯　魯國奇聞烈女の疑獄　明治十五年四月發行（これも全部ウエラの傳）

西川通徹譯　魯國虛無黨事情　同上九月發行

川島忠之助譯　虛無黨退治奇談　同年同月發行（フランスのパウル・ヴェルニェなる無名作家の小說である）。

夢柳居士はこれを全部讀んでゐたやうである。中の一二は邦譯でなく、恐らくその原書を自分でのぞくか、或は助手に下譯さしたらしい。そして隨所にそれらの諸書の記述を撰取して、自分の譯著を補綴してゐる。

たとへばさきにウエラ・サシユリッチの記述が、『地底のロシア』と『鬼啾々』とでは内容が全然異つてゐる事を述べたが前記『烈女の疑獄』や『婦女立志美談』と『鬼啾々』とを讀み較べてみると、內容は愚か、事件の配列や、記述の順序まで同一である事を發見する、但し固有名詞の發音に若干の差異がある所から推して、恐らくこれは同じ原書に據つたものではあつても、上記二冊の邦文書から取つたものではあるまいと云ふ事が想像される。實はあの當時、ウエラの事件は全世界を衝動し、日本にも彼女に關する著述は舶載されてゐたのであつた。

又、『鬼啾々』の第二回、三回にロシア政府の壓政史、大飢饉、それから虛無黨の發生するに到つた經路が述べてあるが、この事實記叙の順序が頗るよく前記『魯國虛無黨事情』と似てゐる。一例を擧げて見よう。

『トルストイ侯が一と度文部卿の職に就き社會敎育の全權を握るに及んでや其の目的とするところのものは成るべく人民を卑屈柔順に保ちて其の政を便ならしめんとするにあり。』

『鬼啾々』にかうある所を、『虛無黨事情』にはどうあるかと搜してみると

『此時に當り社會敎育の全權はトレストイ侯の一手に存したり。魯國新聞紙の記載する所に依ると、侯は最も卑劣なる小人にして其敎育上に主義とせし所の如きも可成人民を愚昧に保ち以て壓抑の主義を幇助せんとするにあり』(一八九頁)とある。

兩者を對比すると、『鬼啾々』の記述は、『魯國虚無黨事情』のそれを盜んで、少しく措辭を更えたに過ぎないのではあるまいかとさへ一應は疑はれる。が、たとへば一方にトレストイ侯とあるのを、『鬼啾々』にトルストイ侯と正してあるのから推して、私は、これも決して、邦文書から盜んだり借りたりしたのでなく、原書だけ同一のものに據つた結果だといふ結論に達した。例へば一方に「人民を卑屈柔順に保ちて」とあるに對し他方には『愚昧に保ち』とある。かうした當時の日本文としては不熟な語が同じやうな個所に見出さるゝのも、恐らく私の推定を有力にするであらう。そして『虚無黨事情』の著者の序に『余頃者譯乙英文雜誌記二魯國虚無黨之事情一者一編甲以揭二自由新聞一』とあるに信がおけるなら、夢柳居士の材料も同じ雜誌から出たに違ひない。但し私はそれが何雜誌であるかは知らない。

さうかと思ふと、所によれば、邦譯になつた西洋小説の趣好をそつくり其儘借り來つた所もある。例へば前記川島忠之助氏譯の『虚無黨退治奇談』の冒頭に、美人が列車で密書をすりぬく所がある。密書を奪はるゝ者は昏睡中に、美人が懷劍を拔いて迫るを夢幻の裡に見る。美人は彼がもし眼ざめたら、一思ひに刺殺して後では自分を凌辱しようとしたからだと言ひぬけやうと決心してゐる。

此の趣向を夢柳居士はそつくりそのまゝソフィアの項に借り來つて用ゐてゐる。川島氏譯書の原典は當時曲木如長がロシアから持ち歸つたもので、元來、ラ・ルースにも見えない程な無名作家の作

であるから、日本に二冊とあるべき書ではない。たとへ二冊あつたとしても夢柳居士はフランス語を解しなかつた。(中には居士は英語をも解しなかつたと云ふ人がある) 随つてこれは邦譯書から丸ぬきにして來たものと斷じて差支へあるまい。

一體夢柳居士はよほどソフィアが氣に入つたと見えて、『鬼啾々』の劈頭、メセンチェフ將軍暗殺の項下から活躍させてゐる。但し史書を繙いてみると、彼女は此の時はたゞ陰謀幕後の女主人として采配を振つてゐるだけで、街頭にピストルを放ち、直接將軍の一命を奪ふことには携つてゐない。この類の、全然據り所のない滅茶苦茶の空想も四五ケ所に見える。

餘り煩雜になるから、『鬼啾々』の材料の出所はこの位で詮議を止めやう。諸君はこの書が大體ステプニアックの『地底のロシア』によるものであること、據るとは言つても以上に私が指摘した程度であること、著者は序に『近日西字新聞に見ゆる所を湊合し』と書いてゐるが、それが必ずしも新聞記事のみでなく、雜誌と著書に依る分量もかなり多いこと、いな、それのみでなく小說の一節を附加した部分もあること、最後に以上の典據以外は居士の小說的空想になる事。それは非常なヨタであるからロシア社會運動史を一應心得てゐる者には、必ずしも指摘の困難ならぬことを記憶しておかるれば足る。

三　自由民權運動との關係

この譯書著作の動機が、自由民權運動の鼓吹にあつた事は、譯者の序に依つて明かである。この運動を刺戟した事件の兩翼は實にフランス革命とロシアの虛無黨運動であつた。されば國會開設建言書の中にも『つらく英佛革命の景況、魯國現時の狀態を回顧すれば……』などの語が見える（岡山縣代表、小林樟雄、加藤平四郎が岩倉右府への建白書）

そこで夢柳居士は緒言にも見ゆる通り『自由凱歌』（アレクサンドル・デュマ著「バスチユ奪取」の譯）などに於てフランス革命を取扱ひ、この書に於てロシア虛無黨運動を取扱つたのである。

前章『明治初期の虛無黨文學』に引用しておいた內田魯庵氏の少年時代の回顧は、當時のロシア虛無黨と、わが國の政治青年の考へとが、如何なる關係にあつたかを語る最も代表的なものであると思ふから、もう一度繰返して熟讀されるやうに希望する。

四　祕密出版入獄

この『鬼啾々』はもと『繪入自由新聞』なる日刊新聞に連載せられ、後に纏めて單行本とされた。祕密出版であるらしく、扉も奧付も付いてゐない。隨つて發行の月日が確かでないが、緒言に『乙

酉初秋とある。乙酉は明治十八年である。

齋藤昌三君の示教によると、この書はその後三冊見たが、三冊とも奥付がない。製本に就いて調べても、別に切取つた跡など見當らなかつた。それに夢柳居士は本書のため秘密出版の廉で入獄したとの文献がある。してみれば本書は初めから奥付がなかつたゝめに罪に問はれたので、奥付のないのが本當であるらしいとの事だ。

夢柳居士については殘念ながら私は何の知る所もない。諸先輩にも質したが、別に書き立てる程の結果が得られなかつた。

書冊としては野崎左文氏の『私の見た明治文壇』に居士に關して左のやうな記事が見える。

『東京の新聞小説も明治十六七年頃から追々新氣運に向ひ、繪入自由の宮崎夢柳氏や、自由黨の小室案外堂氏などの筆に成る、自由民權思想鼓吹の目的で、佛國革命史などを骨子とした過激な歴史的小説が紙上に連載せられ、又阪崎紫瀾氏の「汗血千里駒」などいふ傳記小説が行はれるやうになつた。』(八〇―八一頁)

五　本書の現代的意義

私は古書を翻刻するのはそのことだけでも必ずしも無意味とは思つてゐないが、福田徳三博士か

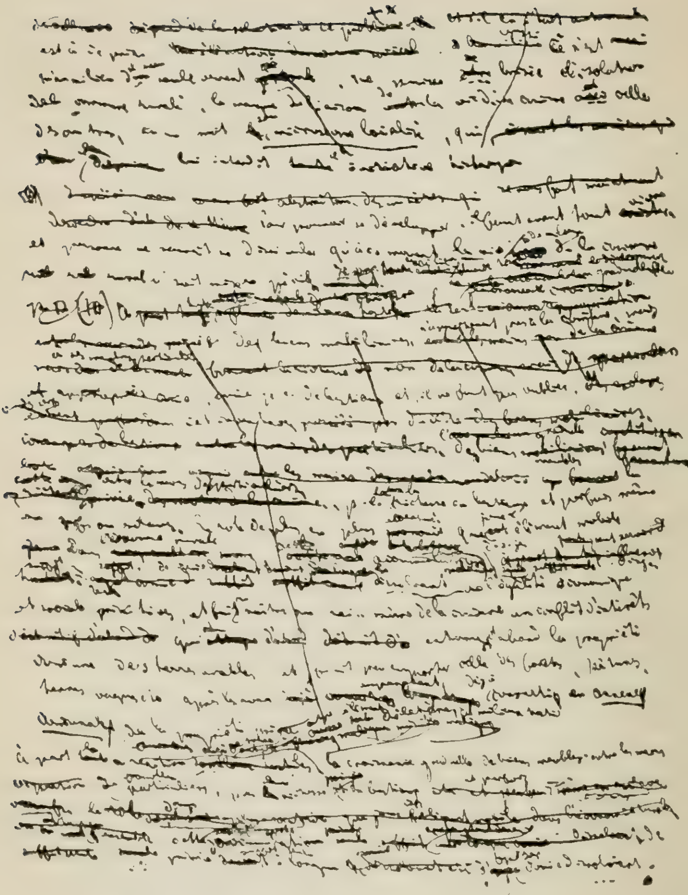
ら明治文化全集の全部の解說者に向つて、一々の書が現代に交渉してもつ意義を充分に考察明示せよとの御注文が出たから、不充分ながらその點に觸れて見やう。

實は私はかつて『鬼啾々』についてかう書いた事がある。

『ともあれ「鬼啾々」は自由民權運動の宣傳のために頒布せられた禁止本で、奧付もない秘密出版なる點が先づ相當の注目をひく、次いでは明治文學史（乃至飜譯史）の上から一顧を要する書として若干の敬重は拂はねばならない。そして最近はマルクス研究の進步と共にウエラ・サシュリッチが若き學徒の關心に觸れて來たが、彼女が重要た題材の一つとして明治十八年出版のこの書に出て來ることは、此の書に對する好奇心を深めるであらう。內容に若干のヨタの混在することは前に指摘した通りであるけれども、讀んでは今でも相當に面白い。』（太陽、昭和二年四月號『ウエラ・サシュリッチに關する一文獻』）

この、ウエラ・サシュリッチが若き學徒の關心に觸れて來たとは、何をさすか。

實は一九二一年ロシアのマルクス・エンゲルス・インスチチウトで發行せられた『マルクス・エンゲルス・アルヒイヴ』の中に、ウエラとマルクスとの往復した手紙が揭出してある。彼女はロシアの農村共產體の將來が如何になりゆくものであるかに就いて、マルクスの所見を叩くべく手紙を送つた。それは一八八一年二月十六日付、ゼネヴア・ロオザンス街、ポーランド印刷所から發せられてゐる。



―― マルクスよりヴェラ・ザスーリッチに與へた返翰の下書き ――

それに對するマルクスの返事の草稿が四通、一九一一年リアザノフにより、ラファルグの許で見出された。いづれも『抹殺と追加的補遺と又その大部分の抹殺とでごた〳〵してゐる』が、ウェラに對する返書の基礎になつたと認め得る最後の草稿には一八八一年三月四日の日附があつた。

これは村落共有制の發達に關するマルクス及びエンゲルスの見解を研究するに非常に興味ある資料であり、又マルクスの研究方法を窺ふに價値ある資料として、リアザノフは非常な苦心のもとにそれを判讀整理して、アルヒーヴに揭げたのである。

果然、これは日本に於ても多くのマルクス研究家の注目を惹いて、一昨年（大正十五年）の後半期には二個の邦譯が現はれた。一は十月の『社會思想』所載、山村喬氏の筆になるもの、一は十一月の『我等』所載、淺野晃氏の筆になるもの、右の外河上肇博士監修の『マルキシズム叢書』にはその全譯の出づる豫告が見え、最後に福田博士の『唯物史觀經濟史出立點の再吟味』には『更らに、ロシアの共有制に進んで、マルクスのザスリッチに與へた書簡から吟味を初めて……』云々（改造、昭和二年九月號）とある。

このウェラに關し山村喬氏は『……もとはナロドニキに屬してゐたが、後に、マルキシストとなり、レーニンやマルトフ等と共に、イスクラ團を作つた人であることは、改めていふ迄もなからう』と附記してゐるが、そのウェラが明治の十年代には、この『鬼啾々』の中に見えるやうな面影を以

て日本に傳へられてゐるといふ事は、單なる懷古的興味以外のものを、吾等に誘發するであらう。

彼女が二十歳にも充たない妙齡の少女の身で、短身ピストルを携へて、當時のロシア政界に異常な勢力を張つてゐた警視總監トレポフ中將を狙撃して全世界を震駭させ「兩世界評論」の記者をして、ベルリン會議のゴルチャコフ公爵と並び、その年ヨウロッパの輿論を最も感動させた二大事件だと叫ばしめたのは、實に一八七八年（明治十一年）の事であつた。そして彼女はわが國の自由民權運動の志士を間接ながら厭が上にも鼓舞し、前にも記した如く早くから其の事件は一二の書冊となつてわが國に傳へられてゐる。そして『鬼啾々』の記述は、自由民權運動と聯關して彼女を傳へた最後のものであり、且つ最も詳しいものである。

『鬼啾々』の今一つの興味の焦點は、クロポトキンに關する記述である。彼が平民社時代からわが國社會運動家の最も有力な尊崇の對象となつてゐた事、大正に入つてから森戸辰男氏の筆禍で、その名が全國の津々浦々まで擴がつてゐる事など改めて說くを須ゐまい。その自叙傳『革命家の思出』を初め、彼の著述の譯書や評傳は夥しく刊行せられてゐる。けれども此れは此れとして、讀者の翫讀を要求する別趣の興味があると思ふ。

昭和三年二月

探偵小說としての『楊牙兒奇談』

一　日本最初の探偵小說

『楊牙兒奇談』の事は吉野博士、千葉龜雄氏、柳田泉君などにより、微細に紹介されてゐるが、實は恐らく此れが邦文になつた探偵小說の最古のものであらうと信ずるので、その方面から今一應考察し直してみたい。

西洋では普通探偵小說はアメリカの小說家ポウ（一八〇九――一八四九）の創始に係るものとされてゐる。併し日の下に新らしき物なしの例に洩れず、之が先蹤を究める段になると、直接的には先づ英のリットン、獨のホフマンに溯り、それから漸次に『ザディック』を書いたヴォルテールから、イタリルネッサンスの諸物語、ローマではプリニを經て、ギリシャのヘロドタスや、アポクリファの中の或る物語にまで到達する。

恐らく日本でもそのやうにして搜して行つたら、近い例では大岡政談あたりから、遠くは平安朝の諸物語にまで及びはしないかと思ふ。が、今日云ふ通りの嚴密な約束を具へた近代的探偵小說になると、此れはどうしても外國より移入されたものでなければならない。さうなると今日文書に於て辿り得る限りでは『楊牙兒奇談』が最古のものであるらしい。

これは殘念ながら原著者も原書名も分らない。只譯者神田孝平が「和蘭文にて種々なる訟獄の奇案を輯錄せる」書の中から「抄出」したと斷つてゐるのに依つて元のテキストがオランダのものであることを知り、吉野博士所藏の寫本に「文久元年六月十四日成、謄寫於手塚氏北窓下」とあるさうだから、それに依つてその頃飜譯されたものである事が分る。

さてポウの作品中では『モルグ街の殺人』『マリイ・ロオジェの秘密』『盜まれた手紙』の三篇が、例の名探偵デュ・パンの活躍する標本的探偵小說だが、その『モルグ街の殺人』の發表せられたのが一八四〇年、卽ちわが天保十二年である。その頃初めて創始せられた文藝上の新興味であり、新ジャンルである探偵小說の一つ二つが僅かに二十年を隔てた文久元年に日本に渡來して、飜譯された事は、決して興味の乏しい事ではあるまい。

尤も譯者神田孝平はそれがポウに創始せられて全歐を風靡しかかつてゐる文藝上の新樣式とは知る由もない。吉野博士の推測によると、和蘭美政錄なる割題が付いてゐるのから推しても「警察の斯く行屆き、探し難き犯罪も忽ち明にさるるといふ所に感服し……單に小說として之を解したと云ふよりも、學ぶべき美政の一例として之を役人に讀ませようとの動機から譯出したものではなからうか、自ら『爲ニスル事アリテ爲シタル業』と號してゐる意味は恐らくそこにあらう」との事である。

神田孝平の『和蘭美政録』は「楊牙兒奇談」と「青騎兵並に右家族、共吟味一件」との二つから成つてゐた。それを成島柳北が借覽した所非常に面白かつたので昭德公に見せた。所がその譯稿は柳營の變災で行方が知れなくなつて了つた。

あたりまへなら之で湮滅する所であつたのだが、この書は面白いので、柳北の見る前に少くとも數四の人は借覽して謄寫してゐたらしい。柳北の友人安田次郎吉は柳原の書舖で前半楊牙兒の方のみの寫本を手に入れて珍藏してゐたが、死ぬる前藏書數卷と共に形見として柳北に贈つた。そこで柳北は明治十年九月――十一年二月の間の『花月雜誌』に之を連載した。「原書のまゝにては其文頗る長くして新誌に收むるに不便なれば今僣妄を顧みず之を簡約す」と書いてゐるから、それは孝平の譯文そのまゝでなく大いに柳北の手の加はつたものである事が分る。後に之は明治廿年單行本となつて薰志堂から發兌せられた。

然るに神田孝平はこの柳北の恣な改刪を喜ばなかつたらしい。後に明治廿四年博文館の『日本法律』で之を掲載したいと申込んで來た時、譯語の不妥當なもの三四を改めただけで原文のまゝ『青騎兵家族共吟味』も合せて二篇とも採擇してくれるならとの條件を付けて承諾した。原稿は柳營では紛失しても、神田孝平には謄寫させたもの一通が殘つてゐたのである。この『日本法律』に掲載せられたものは單行本になつたかどうかを私は知らない。もし讀者の中に當時の『日本法律』所持

の人があるなら一覽をゆるされたいものだと思つてゐる。

柳北が孝平の譯稿を借覽して昭德公に見せた事、その寫本が少くとも數種あつたこと、これは探偵小說が幕末に於て如何に一部の人に熱心に興味をもたれたかと云ふ事の、何より有力な證左となららう。

この寫本の前半は吉野博士も所藏されてゐるらしい。この書を詳しく紹介して（大正十四年十一月號中央公論『漫讀漫談』）、吾等明治の飜譯に若干の關心を有する者の好奇心を刺戟したのは實に博士の一文であつた。以上の文獻的考證も主として博士の文に負ふ所が多い。

二　その梗概

然らばこの『楊牙兒奇談』は探偵小說として如何なる位置を占めるであらうか。それには作の梗概を簡單に述べておく必要がある。

その書の話者は「余」なる第一人稱で、譯者が「余とは原書の作者」と註してゐる。

さてその「余」の學友にヨンゲル。ファン。ロデレイキなる學生があつた。年度代りの休暇前、學校に祝祭が催され泣狂言、笑狂言（悲劇喜劇の譯語であらう）など催されたが、ヨンゲルの作の上演は殊に大好評を博した。

神田孝平譯
成島柳北編

和蘭美政錄
楊牙兒奇談（よんげるきだん）
全

東京書肆　薫志堂發兌

——「楊牙兒奇談」の表紙——

祝祭がはて、學生は各々休暇を鄕里で送るべく寄宿舍を去つたが、彼は學課の都合上、他の生徒よりも數日遲れて歸省の途についた。その前夜、諸友會して別盃を酌んだ時、彼の作中の文句の覺え違ひより友人間に議論が起り、遂に原稿を取出して點檢までするに到つた。「余」が稿本を見たのに、「初めの一枚の表には外題のみを書き其裏は全く白く一卷皆楊牙兒の自筆」にて紙數は凡そ五十枚もある。この引用の所には譯文に特に圏點が附してある（近代の作者ならさしづめイタリックで印刷してゐる所であらう）。その上「看官傍圏を下だせし處を注意して看給へ後段に於て大關係有り」と譯者の注意書きが附いてゐる。

ヨンゲルは翌日風雨を冒して鄕里へ向け出發したが、その儘行方不明になつた。父は新聞廣告など出して搜索したけれども見當らず、數日後深淵の氷が解けた時、薦包みになつたのを船夫が引き上げた。他殺の證跡歷然である。

犯人は初め附近の貧民窟の者だらうと目星を付けられ、ついで或者の密告に依つて二人の船頭が有力な嫌疑者として拘引された。而もその何れでもなく、事件は全く迷宮に入つて一年半の歲月が經過した。

所がたま〳〵「余」にも學友、ヨンゲルにも學友の某が、卒業後役人となり、附近の村を通行の途次、一旅亭に憩うて、物を書くため机の抽斗をさがすと、紙片が出て來た。それはヨンゲルが學

校の祝祭に演ぜし笑狂言脚本の草稿の表紙で、その裏には自分がこの旗亭の主人に殺害さるるに至る迄の始末を書き留めてあつた。たゞそれがラテン語であつたために主人などの眼に今迄觸れたとしても格別注意せられないで過ぎたのである。

かうして此の殺人事件の謎は解けた譯である。實は原譯文はこの梗概で讀者の想像するよりも、もつと枝葉の事件が擴がつてゐて面白いのだけれど、探偵小説としてのテクニックの考察の必要からすればこれで足りるであらう。

三　テクニックの解剖

ポウ以前にも實質は探偵小説と見ていい物語が數多くありながら、それらにはその名稱が冠せられず、ポウの『モルグ街の殺人』以下に至つて初めてこの名稱が冠せられるのは何故か。

それはポウがテクニックの上に於て、從來とは全然異る創新の一樣式を完成したがためである。

然らばその新樣式とはどんなものであらう。何人も知る如くポウの三作品を通じて活躍する名探偵はデュパンである。併しポウの異常な天才は、決して此れを三人稱の立場において客觀的に表現して居ない。「私」なる主人公がデュパンなる知人の事を、一人稱樣式で表現してゐる。卽ち筆を取る當人は「私」だが、書く題材として選ぶのはデュパンの事である。“Residing in Paris during the

spring and part of the summer of 18——, I there became aquainted with a Monsieur C. Auguste Dupin" 此れが作品の基調である。

すばらしい名探偵の事を、その知人なる「私」が記述する。一見これは何でもない事のやうであるが、存外にも之は探偵小説の最も主要な、最も根幹的な形式であると見える。そして此處が探偵小説を他の文藝様式から獨立分離せしめた秘密の存する所である。

その最も見易い一例は、その後に現はれる傑れた探偵小説が、悉くと言つてもいい程此の様式を踏襲してゐるので十分明かであらう。

私は今、ガボリオのルコック探偵は如何なる話者の立場から記述してあつたかを確かに記憶しないが、やはり此の様式ではなかつたかと思ふのである。コナンドイルがシャアロック・ホームズを活躍させたのもこの様式である。ルブランがアルセーヌ・リュパンを活躍させたのも此の様式である。岡本綺堂氏が半七老人を活躍させたのも此の様式である。なほ讀者が注意して探偵小説を讀まるるなら、此の形式を踏襲した作品の如何に多いかに氣付くであらう。

併しこの様式は必ずしも模倣心理からのみ、無意味に襲用せられてゐるのではない。作家の方から言へば此の形式を最も便利とし、讀者の方から言へば此の形式を最も歡ぶ必然性がある。今その點を分析して見よう。

人間は珍らしい話になると、その直接の當事者から聞くことを最も喜ぶものである。又聞き、傳聞のたぐいだと、珍らしさに水が割られたやうな感じを抱く。だから冒險譚や怪談など、事件の珍奇を主とするものは「私」なる第一人稱で語つたのが効果が多い。探偵小說に於て、「私」で書き出した作品が殊に多いのは此の心理の秘密に基づく。

但しその怪奇な事件の主動者が、自ら書くとなるとそこに非常な不便も伴ふ。表現上の約束から、肝腎な主動者の自分がぼやけて來るのである。他人が彼を見るやうに具體的に、客觀的に、彼自身の事が語れない。殊に同時に異所で重大事件の起る場合、甲には彼自身が出場し得て直接說法で語れるが、乙には「これ等の事はその場に居合はせなかつたから私は直接に知らなかつた。併し後から判つたので話の順序から言へば丁度ここへ屬すべき事項なのだから取敢ず挿入しておく」といふやうな間接說法でなければ語れない。この間接說法は大いに物語の生動性を薄弱にする。

之を救ふ道は一つしかあり得ない。卽ち主動人物の側に副人物を配し、形に影の添ふ如く兩者を連れ添はせる。「私」として物語に筆を取る話者には、この影の副人物が當る事にすると、主動者が自分で語ればいい氣な自己自慢となる事も、さうでなく他から受取られるやうに圓滑に書ける。つまり主動者が異常な人物で、その超凡の能力才幹は、藝術的愼ましさを守つてゐたのでは到底表現しつくせない場合、彼をよく知り、且つ嘆美してゐる知己友人を配して、その口から語らせれば、

物語は一人稱の生動性と三人稱の客觀性とを同時に持つことになる。同時に異所に起る事件も、甲には主動者が臨場し、乙には副人物が臨場して、後で直接說法を以て双方が作中で互に語り合ふやうにすれば、何の不便も困難もない。(この手法のいかなるものか、及びその得失は、拙著『小說研究十六講』二九七――三〇五頁に詳しい。)

この便法を見ぬき、且つ小說のテクニックとして確立した所にポウの天才の異常さがある。コナンドイルやルブランのやうな卓出した才能も、この點では遂にポウの歩んだ以外に踏み出す事が出來なかつた。

ポウの創造したデュパン探偵は、この故に今では實在以上とさへなつた。その後の英佛の探偵小說には如何に度々彼の活躍せしことよ。黑岩涙香が『捨小舟』(ブラッドン女史原作)の末尾に「この重髮先生は餘程の名探偵と見え、探偵小說飜讀の際しば〳〵彼が名に邂逅した」との旨を附註してゐるが、その重髮のデュパンなる事は、元よりあの譯書を一讀した者の悉く氣付いた所であらう。

四　本書の効蹟

記述は問題の『楊牙兒奇談』に返る。

この物語は「余」なる人物の第一人稱的說法で終始してゐる。この意味で怪奇な小說は第一人稱

手法が效果が多いと云ふテクニック論に外れてゐない。

併し、その「余」は影の人物である。副的人物である。除いても一向物語に支障を來さない人物である。この奇談の中心は殺されたヨンゲルと、その殺害者を探偵した友人とであるが、それを記述するに双方の學友である「余」を配したのは、正しくポウがデュパン探偵に於て創始した手法を踏襲したものである。

たゞ私が神田孝平の譯書に於て何より喜ぶのは、彼がその直接的に何の關係もない「余」を削除しないで、そのまゝに譯出した事である。この故に譯者自身は少しも意識してゐなかつた事に違ひないけれど、近代探偵小説の手法が、嚴密に、文久元年に於て日本に傳へられたと言へる。

ロビンソン•クルソオは安政三年横山由淸に依つて譯出刊行せられた。元來あの原作は單なる漂流談と云ふ以外に、物語が、封建的荒唐から近代的現實へ、叙事詩から小說へ、集團題材から個人題材への、その推移を示す最も重要な橋梁である。そして第一人稱で語られてゐる事は、文藝の文化史的攻究の上からは看過してならない重要事である。然るに譯者の據つたオランダ原本がさうなつてゐたのか、或は譯者が恣にさう換へたのか分らないが、横山譯は第三人稱說法になつてゐる。この故にあの作は今日から見ると安政頃の漂流奇談の喜ばれた時代的好尙を窺はす以外に、西歐の個人主義の勃興が文藝形式に及ぼした影響などはさぐる由もない。だから近代小說の理論を築いた坪

内逍遙の『小說神髓』などと關聯して考察すべき何の連鎖も見出されぬ。
けれども『楊牙兒奇談』は譯文が忠實であつたお蔭で、幕末に於て近代探偵小說の骨法を完全に傳へてゐるのだから、最近の如き探偵小說流行の際に、特に研究家の一顧を望む次第である。

昭和二年五月

明治飜譯文學の概觀

一　前期總說

わが國に於ける西洋文學の飜譯は決して明治に初まらぬ。文祿慶長の昔に『イソップ物語』やトマス・ア・ケンピスの『基督の模倣』が出でてゐる事はアーネスト・サトウの"Jesuit Mission Press in Japan"を初め南蠻研究の學者好事家によりて屢次語られ、德川時代にはイソップの別譯が少くも三四種はある。德川初期以前の海外文献の舶載者は主としてスペイン、ポルトガル人で、邦譯された書のテキストはラテン語であり、譯者は耶蘇會の信者であり、譯書刊行の目的は教旨の傳播のために非れば卽ちその前提なる言語敎習のためであつた。

所が島原の亂後の嚴しい鎖國のため、文藝飜譯の事は大頓挫を來たして幕末に及んだ。それが黑船の渡來前後から識者の間に漸く開國の必要が認めらるるに到り、そしてその頃から文藝飜譯に筆を執る者がぼつ〳〵生じて來た。

嘉永初年には黑田行元がロビンソンを譯した『漂流記事』があり（明治五年齋藤了庵譯として第一卷刊行、大正十年文明源流叢書に於て全部刊行）、安政年間には橫山由清が同じ書を『魯敏遜漂流紀略』と題し、安政四年に刊行した。ロビンソンの原作は文藝の封建的荒唐から近代的現實へ、叙

事詩より小說へ、集團的題材から個人的題材への推移の中間に係る一大紀念標である。ブルジョア階級の創始した新文藝樣式なる『小說』の先驅であり、封建時代に大成した文藝樣式なる『敍事詩』の面影を微かながら最後まで留めたものである。それが幕府の屋臺骨が漸くぐらつき出した嘉永安政の頃譯出せられてゐる事に意義なしとは言へまい。

文久元年には神田孝平が『和蘭美政錄』を譯した。（前半『揚牙兒奇獄』は成島柳北の改刪を經て明治十年花月新誌に連載、廿年單行本として刊行、神田の譯文は後半『靑騎兵並に右家族共吟味一件』と合せて明治廿四年『日本法律』に揭載、單行本としては發行の有無を知らず）。神田孝平は『經濟小學』に於て英國流の經濟學を最も早くわが國に紹介し、且つ『和蘭政典』の譯書も出してゐる。そしてこの書も『和蘭美政錄』の名の示す通り、彼國の警察制度のよく行き屆いてゐる事を、役人に知らせやうとて筆を執つたのであつた。が、いづくんぞ知らん、それは探偵小說で、ポウに創始せられた近代探偵小說の骨法を嚴密に明確に遺憾なく踏襲した物語である。今日流行の探偵小說の由來は、かうして見るとなか〳〵古い。ただ原作者も原書名も分らないのは殘念である。

右の外、勝海舟が“Loefden Heer”なる詩を『思ひやつれし君』と題して譯してゐる。海舟の靑年時とのみで飜譯の年月が定かでない。（後に田邊蓮舟、戶川殘花などの發行せし『舊幕府』に發表さる）原作者も不明。

幕末の海外文藝の飜譯で、今日までに世に知られてゐるものは以上で大體盡きるであらう。悉くオランダ文から譯され、譯者も總て蘭學者であるのは、それが當時習得を許された唯一の外國語であるから、元よりその所であらうが、又、さきの南蠻渡來時代及び後の明治時代といたく異る所以である。

二　佛、英、蘭の先頭

明治の初期に於て最も多く行はれた外國語はフランス語と英語であつた。英佛の東洋に於ける勢力扶植の鬪爭は、フランスをより多く舊勢力なる幕府に接近せしめ、イギリスをより多く新興勢力なる薩摩に接近せしめたので、自然この二國語が多く習得せられた。

但し明治初年から十年までは純粹の文藝書の譯と見るべきものはない。之が現はれ初めたのは明治十一年で、卽ち左記の三譯書を最初に數へる事が出來る。

ジュール・ヴェルヌ（佛）著、川島忠之助譯『新說八十日間世界一週』

ヴルワア・リットン（英）著、丹羽純一郎譯『歐洲奇事花柳春話』

ジオス・コリデス（蘭）著、近藤眞琴譯『新未來記』

英、佛、オランダから各一冊宛譯されてゐる配合が面白い。そしてオランダ語からの譯書は恐ら

く之が最後になつてゐて、外に明治年間この語から譯された著明な文藝書といふものはあるまい。ドイツからの譯書は明治十七年にならなければ現はれてゐない。ゲーテ原作井上勤譯『禽獸世界、狐の裁判』が先頭をきる。なぜドイツ文學の移入は斯くおくれ、そして十七年頃になつて急に着手され初めたか。その理由は見易い。

幕末明初の頃は爲政者がナポレオン三世の山師的な勢力扶植に眩惑されて、その影に擡頭しつつある新興國に氣付かなかつたのであるが、普佛戰役と共に陸軍が先づ範をドイツに取るやうになり、それから明治十四五年憲法制定の事が喧しく論議せられ初めると共に、伊藤博文を初め廟堂の諸公が悉くドイツの心醉病に掛つた。伊藤が明治天皇から海外憲法の取調べを命ぜられ、鐵腕政策に得意滿々たるビスマルクの直譯的弟子となるべく渡航の途についたのは實に明治十五年の事である。

ドイツに比して比較的早く傳はつたのはロシヤの文學である。これは嘉永六年プーチャンが長崎來航の時セキレタ－リスの役であつた艮茶呂（ゴンチャロフ）と川路柳虹君の曾祖父左衞門尉聖謨とが會見してゐる遠い因緣もある。又幕末に於てオロシヤの名稱はダーク・フォースとしてわが國の人心を畏怖させてゐた。そして比較的早くから國人の關心裡に入つてゐた上、明治十二三年から數ケ年最も花々しく繼續した虛無黨の神出鬼沒の活動が當時の自由民權の政治青年を刺戟したのにも依らう。

プーシキン著、高須治助譯『花心蝶思錄』。ステプニヤック著、宮崎夢柳譯『鬼啾々』。右の二著ともに明治十六年の出版。

イタリではボッカチオが早く傳はつた。大久保勘三郎譯『群芳綺話』は『デカメロン』の佛譯から七話だけ拔いて譯輯したものだが、明治十五年の出版、これは人情の眞質は古今東西同一轍だから時勢の好尙には依らず移入せられたのだらうと言はれた新村博士の說が最も當つてゐるであらう。

三　種別の考察

さて明治初年の譯書の年代順的解說は友人柳田泉君の異常な熱心の硏究になるほぼ完璧に近いものが『日本文學講座』に連載された。今の私はあれ以上に出で得る自信を持たぬから、玆にはその間に窺はるる二三の特點を抽出して考察して見るであらう。

明治二十一年までに刊行せられた譯書を、原作者の個人別にしてみるとシェークスピアが最も多い。明治文藝資料展覽會目錄（以下凡てこれを標準とす）によると十二種位はある。井上勤の『人肉質入裁判』（ヴェニスの商人）坪內逍遙の『自由太刀餘波鋭鋒』（ジュリアス・シーザー）河島敬藏の『春情浮世の夢』（ロメオとジュリエット）などの珍らしい題名は今日もよく人口に膾炙してゐる。

後の日刊時代の平民新聞の出資者であつた竹内余所次郎が西洋歌舞伎種本と題してリア王を紹介してゐるのも今日からすれば珍らしい。

ついではジュール・ヴェルヌの十種、スコット、デュマ、ボッカチオの各五六種宛が目に立つ。同一書にして異譯の多いのはロビンソン・クルウソオとアラビアン・ナイツを第一とする。そして最も多くの譯書を提供したのは井上勤、服部誠一、坪内雄藏の諸氏であつた。

物語の種類としては冐險譚と政治小說とが多い。冐險譚は文藝鑑賞の幼稚な時代、卽ち文化の草創期にはどこの國でも迎へられるので、明治初期の讀書界も、亦この例外であり能はなかつた。政治小說は澎湃として一世を風靡した自由民權運動の自らなる反映であらう。只我等が今日最も奇とするは『ジュリアス・シーザー』でも、『アイヴァンホウ』でも主要興味を政治的意味に於て譯された事である。

同じく自由民權運動の青年志士を刺戟したために、ロシヤの虛無黨に關する書物の著譯の比較的に多いのにも驚かされる。明治十四年から六年までの僅かな間に數種出で、今日流行のマルクスの名前なども却つて虛無黨紹介の徑路から偶然日本文字になつたのが、或は吾が國に傳はつた最初ではないかと思はれる。

虛無黨に關する諸著のうち最も注目すべきものは私が三月號の本誌(太陽)で紹介した『鬼啾々』で

ある。この書は譯者が序文に『ロシヤのラウロフの地底の秘密と題する書を譯したものだ』と斷つてゐるのだが、私はそれに若干の疑ひを挾んでおいた。果然、ステプニヤックの『地底のロシヤ』を開いて彼此對照して見ると『鬼啾々』の根幹だけは少くともこれが種本になつてゐた事が分る。そしてステプニヤックの此書にラウロフが序文を書いてゐる。宮崎夢柳居士はこれを著者と思ひ誤つたものらしい。

四　譯壇の諸大家

二三の例外はあるが、廿年以前の飜譯の多くは大意を傳へたに留る自由譯が多い。某氏のアラビヤンナイトの譯中に、數頁に渉つて八犬傳の文章が丸抜きにして挿入してあるのは有名な話である。それが廿年頃から一轉化の兆を見せ、逐語譯の傾向が段々に著しくなつた。それと共に特に注意しなければならない事は『飜譯家』といふ職掌がほぼ專門的に定つて來た事である。

それまでの飜譯は新聞記者や政治家の片手間仕事たる觀があつたのが、それ以後は文界の一分野に特定せられた職掌となつた。この期の飜譯家に就いては坪内逍遙が斯く言つた。

『美文を飜譯して、髣髴原著の現はれ來たれるかと思はしむる譯者は、吾人之をたゝえて如來と名づくべし。明治文壇幸ひにして三如來を得たり。英文如來を森田思軒氏とし、獨文如來を森鷗外氏

とし、魯文如來を長谷川四迷氏とす。輓近内田不知庵、原抱一庵の諸氏、また大に飜譯に力を盡くせり。』

わけても明治二十一年『國民の友』に現れた二葉亭の『あひびき』は、逐語譯として劃期的なものであるのみならず、よく原作の風趣、陰影などをも精刻に傳へ得た點に於て、明治大正を通ずる最も立派な飜譯の一つであらう。それに一短篇の譯文で、かくも豐かにわが創作壇の培ひとなつたものも外にあるまい。その上この作が日本に譯された時には、ツルゲーネフの英譯書さへ出來てゐなかつたので、この譯文の驚異的出現をいよ〳〵多く價値づけてゐる。

森鷗外の博大な知識になる大陸文學の飜譯が文壇を益した事は言ふまでもない。それは『あひびき』の如く雜誌に載るとすぐ文壇の培ひとなると云ふ譯には行かなかつたが、『水沫集』として纒められた時には、當時の文に志す者の寳典として敬重せられた。

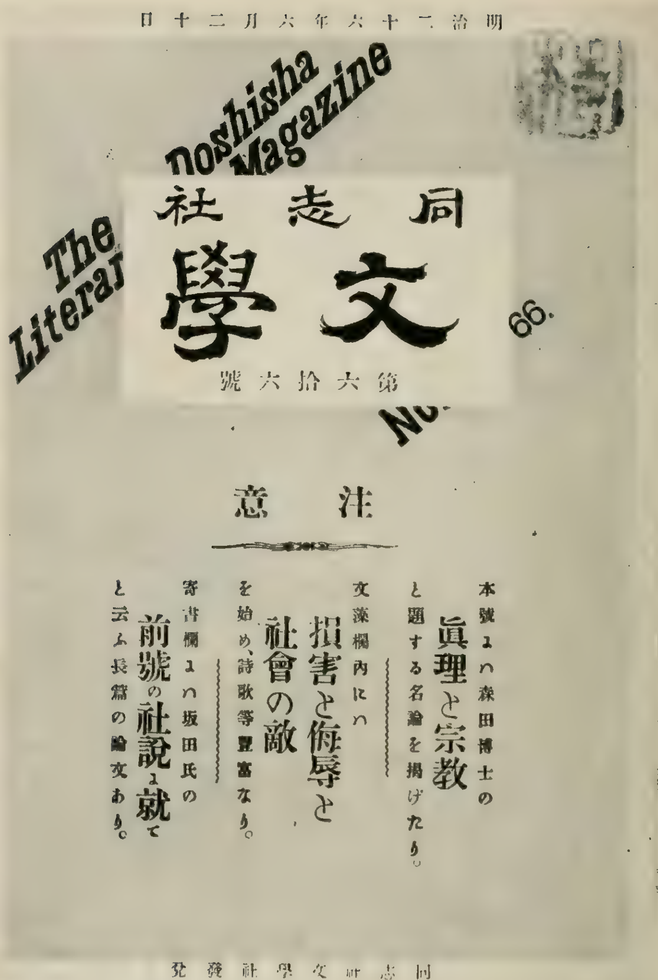
森田思軒の飜譯の價値は今日から公平に査定して二葉亭や鷗外に劣ること數等である、その選んだ原作にも隨分と價値の如何はしいものがある。併し譯壇の傾向をリットンやビーコンスフィールド中心から、ユーゴーやポウやホウソォンにまで向け換へた舵手としての功績は長く沒却する事は出來まい。語學力の不足に起因する若干の誤譯は目ざわりだが、一時は『飜譯王』とまで折紙を付けられた。

坪内逍遙は飜譯家と言つては了へない。その業績は飜譯が重きをなしてゐるとさへも言へない。併し彼が執拗にして堅實な性質は、明治十六七年以來今日に到るまでシェークスピアをひねくり廻して之を放たず、遂に世界屈指のシェークスピリアンとなるに到つた。彼より語學に博く深き者、飜譯の才能の華々しき者は或はあらう。併し彼のシェークスピアに於けるが如く、同一古典を愼密に研究して、その專門的研究家たる名に値ひし得た者は、明治大正、譯壇に人多しと雖も外にはない。後に『全集物』流行の時代が到來して、外國文豪の全集の相次ぐ刊行を見たが、海外文人の全集の刊行は彼の『シェークスピア全集』に初まり、そして一人にしてその事業を完成せし者も、今迄の所では彼に終る。

不思議に直覺力の鋭い讀書家は關西の高安月郊で、『同志社文學』に連載せし『人民の敵』はイブセン移植の第一人者たる名譽を彼に負はしめ、おなじく同誌に譯載した『虐げられし人々』は、ほぼ同時に『國民の友』に之を紹介した内田魯庵と功を頒つのである。

五　詩壇の名譯

詩の方の飜譯は、明治十五年刊行の『新體詩抄』が出發點となつた。シェークスピア、テニソン、グレイなどが、井上巽軒、外山ゝ山、矢部良吉などによりて譯された。第二の標石は森鷗外を盟主


明治二十六年六月二十日

The Doshisha Literary Magazine No. 66.

同志社

文學

第六拾六號

注意

本號には森田博士の
眞理と宗教
と題する名論を掲げたり。

文藻欄内には
損害と侮辱と
社會の敵
を始め、詩歌等豊富なり。

寄書欄には坂田氏の
前號の社説に就て
と云ふ長篇の論文あり。

同志社文學社發兌

イブセンとドストイフエスキの作を譯載
せる「同志社文學」の表紙

の如くにした新聲社の『おも影』である。ギョーテ、バイロン、ハイネ、ケルネル、ホフマン、レウナなどがこれに依つて傳へられた。

併し詩の譯の巧緻精妙は上田柳村に於いて極まると言つてよからう。初めは主として『明星』に連載され、後に『海潮音』に收められた諸譯篇は、わが國新詩運動の源泉をなし、今日では詩壇の古典とも珍什ともして尊重せられてゐる。わが國にボードレェル、ヹルレーヌなどの象徴詩を傳へたのは實に柳村が最初で、而もその時はまだ英譯も出來て居なかつた事は、恰もよく二葉亭の場合と似てゐる。

その後の事は人の記憶に新ただから詳説の要もあるまい。只著しく眼についた傾向を言へばロシヤ文學の吸收に甚だしく熱心で、英米文學がひどく疎んぜられた事である。但しそれも一時的で、今では偏頗なき正しい規道にほゞ歸つたと云ふ事が出來るであらう。大正初期までは重譯も一向意とせられなかつたものが、今では原語譯でないと信用が薄いのも飜譯を要求する讀書界の一進歩と言へる。

昭和二年六月

『小說神髓』小論

一　別樣の見地から

『小說神髓』は坪内逍遙博士青年時の著作で明治十八年に初めて世に出でた。これが明治文運開拓の基礎をなした劃時代的名著である事は今更らしく言ふまでもない。

明治三十年雜誌太陽の增刊に高山樗牛が書いた『明治の小說』なる長篇の論文に於ては、この書の功績を數へて、舊式の勸善懲惡を打破した點と、寫實小說の基礎を建設した點とを擧げ、缺陷としてはノヴェルに對するロマンスの對立を認めないこと、隨つて後來傳奇小說の出現を阻止したことにあると言つた。

これが殆んど鐵案の如くになつて、後に明治文藝史を著作した諸家が殆んど悉くこの批判を踏襲してゐるやうであるから、私はわざとその點には觸れないで、聊か別樣の見地から私見を述べて、大方の批判を仰ぐであらう。

西洋の近代小說が十八世紀になつて、ブルジョアが貴族に反抗して起ると共に、創始せられた文藝上の新形式である事は、餘りに屢々私は述べ過ぎた。

かうした見解は專門の小說研究書に於ては一つも見當らなかつたが、文學史にはちよいちよい散見

する。古くはテェヌの英文學史にその暗示があり、近くはロングやハドソンの英文學史には明記してある。ロングの書には左の如き一節がある。

「彼等(ブルジョア)は、上流階級の興味をもつ、到底あり得ないやうな英雄の誇大なるロマンス、密通や惡事からなる惡漢物語には、明かに些少の興味も惹かれなかつた。彼等は新樣式の文學を翹望した。この新樣式は十八世紀の新らしい理想を表現したものでなければならなかつた。そして近代小說が發生したのである。それは樣式こそ違へ、後にアメリカの獨立、フランスの大革命に宣示せられた平民生活の個人格及び權威に關する同じ理想をまさしく表現したものであつた。」

然らば十八世紀の平民の理想とは何か。それはフランスの三色旗に象徵せられてゐる自由、平等博愛で、一貫して之を貫くものは個人主義である。ブルジョアはこの理想を學問の上に結晶させて、經濟學なる新科學を獨立させ得た。嚴密な意味で言ふ最初の經濟學書なるアダム・スミスの『富國論』が自由主義、個人主義の經濟學と言はるゝ事は、何人も知る所である。スミスの『富國論』は一七七六年、合衆國獨立の宣言せられた年に世に出た。がそれより三十六年の昔なる一七四〇年には、そのブルジョアの同じ理想を文藝に結晶さした小說なる一新樣式の、最初の作なるリチャードソンの『パメラ』が世に出てゐる。

敍事詩や劇と違つて形式の自由なる點、又敍事詩の題材の集團的なるに對し小說の題材の個人的

なる點——さうした外形的な點にさへ經濟學上の自由主義、個人主義と相通ずるものを、小說は持つてゐる。

産業革命は英國に於て最初に、且つ最もめざましく行はれたので、千八百三十年頃から急轉の兆が明かになつた。（上田貞次郎博士『英國産業革命史論』參照）新らしき生産關係は必然に上部構造の交替を促がす。隨つてブルジョアの理想が文藝に結晶した小說と、科學に結晶した經濟學とが、三十數年の間隔をおいて共に最もめざましく産業革命の行はれた英國の土の上に培育せられたのは頗る意味が深い。

二　經濟學と小說

所でブルジョアの擡頭が小說を創始したと言ふ公理が、日本に於ける坪內博士の『小說神髓』の出現の上にもあてはまるか何うか。これは頗る興味ある問題でなくてはならない。私はその公理が美事にあてはまると斷ずるものである。

たゞ英國に於ては小說が先づ生れ、經濟學がおくれたが、言ふまでもなく社會科學上のことだから、自然科學の實驗の如く、毫厘の差違もない程的確には、英國の事が日本の土の上では繰返されない。日本では英國の例が逆になつて、ブルジョアの經濟學が先づ生れ（正しくは飜譯紹介され）

小說の創成はずつと後れた。

幕末、小栗上野介が造船所を作つたり、島津齋彬が英國から紡績機械を船載したりして、幼稚ながら日本も產業革命に第一步を踏み入れた。慶應四年には神田孝平が『西洋經濟小學』を飜譯刊行し、明治元年上野の彰義隊の戰爭の最中に、福澤諭吉が慶應義塾でウェーランドの經濟學書を講義してゐたのは有名な話である。（福翁自傳三四〇頁參照）明治九年からは片手にバイブル、片手に經濟學の意氣込みで米國からラーネッドが渡來し、京都の同志社で講義を初めて天下の輿望を集め、明治十年には福澤諭吉の『民間經濟錄』、西村茂樹譯の『經濟要旨』及びフオセットの經濟學を永田健助の譯した『寶氏經濟學』などが出た。そして西洋の文明の外觀に眩惑した徒の絕叫する『產業立國』の聲は汎ぬく都鄙に充ちた。

この中で最も多く吾等が研究の興味を唆るのはラーネッドと福澤諭吉だが、前者に就いては暫く言はない。後者、乃ち福澤が明治の文化に致したる貢獻は、いろ／＼あるが中んづく目立つのは封建道德の破壞、新市民道德（ブルジョア道德）の建設である。如何に彼が舊來の封建的階級の上長者に反抗して自由を說いてゐる事か。そして又、無產者から有產者に對する道德（たとへば貧乏人が金持に迷惑を掛けてはならないとか、借りたものは必ず返すとか言ふやうな）は如何に嚴しく說述してゐる事か。

私は『小說神髓』と離れて、餘りに多くの贅辯を費し過ぎたかも知れない。併し明治小說の勃興もつと狹く劃れば坪內博士の論と作とも亦、新興階級なるブルジョアのイデオロギイの所產なる事を立證するためには、これだけの前提でも未だ足りない位である。

そして兎も角も結論的に言ふならば、福澤諭吉の封建道德の打破も、坪內博士の勸善懲惡主義の否定も、實は舊日本から新日本への更生の過程に、重要な役目を以て擡頭して來たブルジョアの同じイデオロギイから生ひ出でた二葉の草花だと、私は斷定したいのである。それは恰かも十八世紀の英國で同じブルジョアの理想が文藝に發しては小說を產み、科學に發しては經濟學を創成したのと、丁度よく符合するものではあるまいか。

三　著者の性格

福澤諭吉が打破したのは要するに封建道德の範圍で、彼は決して無道德のアナアキズムに堪え得る頭腦ではない。彼は畢竟するに絕好のブルジョアの代辯者だつたのだから、プロレタリヤに向つては、ブルジョアに應待する際の嚴しい道德を要求して止まない。

坪內博士が『小說神髓』で打破せられたのも、わが德川の封建的雰圍氣が涵養した淺薄な道德性、卑俗なエロチシズムの隱蔽に役立つてゐる勸善懲惡主義だけであつて、博士も決して、全然の無道

德を肯定し得る人ではない。

元來、博士は本質的には常人以上に極めて道德的な人なのである。藝術をも道德的效用を離れては考へ難しとせらるゝ所があるのは、後の論文『教化の具としての演劇』などにも充分窺はれるが、勸懲主義打破の巨砲たる『小說神髓』が、實は決してその勸懲主義——と言つて語弊があれば、藝術の道德的效用を認める主旨を、完全に脫却し切つては居ない。その點は元より聰明な博士の夙に自ら氣付いて、屢次言明せられてゐる所である。

然らばその道德性の强い博士が、何故に、勸懲主義打破を提唱さるゝやうな、一見すれば矛盾と見える現象が起つたのであらうか。玆にも考察の興味をそゝる問題がある。

それは外的に言へば時代の影響で、明治の產業革命が漸く緖につき、ブルジョアが非常な勢ひで擡頭したのが、博士の口を借つて、あの提唱を文藝になさしめたのであつた。當時の學生と言へば元より最高の智識階級であつて、少し氣慨のある者なら大抵閥族に抗し、氣持の上ではみな新興階級なるブルジョアの加擔者であつたのだ。(序だから斷つておくが、今でこそプロレタリアに對抗して、ブルジョアは憎惡すべき敵であり、崩壞を運命とする階級であるが、英國で十八世紀、日本で明治十年代のブルジョアは貴族に反抗して立つ新興階級であつたのだ。だからブルジョアの加擔者と言ふのは、今でなら幇間的意義を帶びるが、その時にあつては反逆的意義を含蓄してゐるのであ

る。ブルジョアが人類の解放に貢献した歴史的意義まで無視してはならない。」

外的に言へばさうだが、内的に、個人的に觀るならば、吾等は坪内博士と勸懲打破との間に、又極めて微妙な、興味ある關係を發見する。

博士の追憶の中に左のやうな一節がある。

『シェークスピアのハムレットの試驗に、王妃ガーツルードのキャラクタアの解剖を命ぜられて、初め、その時には其意味が解りかね「性格を評せよ」といふのだからと、主として道義評をして、わるい點を附けられ、それに懲りて圖書館を漁り、はじめて西洋小說の評論を讀み出した。』（東京堂出版、小說神髓附錄百六十六頁）

此の僅かな引用にも坪内博士本來の道義癖は窺はれる。そして想像を逞しうするならば、その時初めて披見せられた西洋の新しいリヤリズムの文藝論は、德川時代の勸善懲惡的文藝觀しか頭中になかつた博士に一つの驚異であつたに違ひない。そして恐らくは實質以上に、自分の古い文藝觀を見くびり、何とかして此れを脫却したいと焦慮し、苦悶せられた事であらう。古き自我の脫却、新らしき自我への甦生——博士のその個人的努力が『小說神髓』となつたのであらう。

人間には、自己の本性に合適するものを肯定し主張する場合も勿論あるが、その本性に愛想をつかして、反對なものを求める氣持もしば〳〵あり得る。繰返して言ふ通り、博士は本來道義觀念の

强い人で、根本的には道德的效用と分離させて藝術を考へる事の出來難い人だが、この際はたまたま試驗などの事から、自分のこの癖を慊らず思つてゐられた時だつたので、それで、自分の本性とは反對なものを求める氣持が、此の『小說神髓』を生むやうに作用したものと私には考へられる。

適當な機會に言ふのを忘れたから、こゝで補足しておくが『小說の裨益』（東京堂版五十三頁）の全章を讀めば、博士の本質の道義的なことも、隨つて博士が『小說神髓』を目して勸懲の幽靈を充分に脫却し切つてゐないと述懷せられた氣持もよく分る。

四　歷史的位地

便宜上上來の論を玆で要約すると左の二命題に還元し得る。

第一、外的に、時代的に言へば『小說神髓』は明治の產業革命が文藝なる上部構造に及ぼした當然の變化で、あそこに宣明せられた勸懲打破は、福澤諭吉の封建道德打破と暗默の間に相呼應するものであること。

第二、內的に、個人的に言へば『小說神髓』は、本來道義的意識の强固な著者が、自分とは反對なものを求める氣持から發しられた提唱であること。

そして此の上に私の究めたいことは、博士がこれを著作せられるのに、どれだけの直接的刺戟が

あつたか、――平たく言へば何が參考書となつてあれ丈けの議論が纒められたかと言ふことである。

『小說神髓』述作にどれだけの參考書があつたかは、既に古く高山樗牛が問題としてゐる。一體日本人の纒まつた著作と言へば、外國に種本のある事が通例になつてゐるから、ギゾオを焼直して『世界文明史』を書き、ボザンケを焼直して『近世美學』を書いた樗牛が、『小說神髓』の種本を疝氣に病んだのは左もあるべき事である。

結局、明治十七年代に、さう多くの參考書があらう筈はなく、樗牛も大學に於けるフェノロサの講義と、菊地大麓の譯した『修辭及華文』以外に、纒まつたものは無かつたらうと斷じ、それ丈であれ丈けの書を纒め上げた坪內博士の組織力には、相當の敬意を拂つてゐるやうである。

あの書の著作せられた明治十七年と言へば丁度西曆の一八八四年に當る。近代小說の第一作と言はるゝリチャードソンの『パメラ』が世に出てから正に一世紀半に近い歲月が經過してゐる。

だから普通ならば、小說の學的研究も大いに進步して、數々の名著も出て居りさうなものだが、實際はさうでない。これには理由のある事で、初めにも言つた通り、小說は成り上りのブルジョア階級の生んだ文藝であるから、フランスのアカデミイあたりでは侮蔑し切つて、研究題目としなかつた。これは却つて小說が自由に發達する上には非常に好都合だつたので、もしフランスアカデミ

イで早くから此れを取上げて、詩や劇に於けるやうな煩瑣な方則を工夫し、賦課したら、小説は萎縮して今日の發達を見なかつたらうとは、後世批評家の言である。

フランスのアカデミイで小説を蔑視する風は、イギリスにも感染した。英國の文藝批評家は、近代小説は完全に英國の土が培育し、創成した新文藝形式だと誇揚してゐる癖に、ルイ十四世時代から傳統をひくフランス尊重に煩らひせられて、やつぱり小説論の構成を怠つた。

私は纏まつた小説論として何が最も古いかを知らない。斷片的なものならリチヤードソンの『パメラ』の序文もあれば、チヤールズ・ホーンの『小説の技巧發達史』に述ぶるが如くもつと前にまで溯る事も出來やう。（その場合はリチヤードソンの作を近代小説の第一作とする斷定を無視した上での事である。）

併し體系を調への研究の發表されるに到つたのはさう古い事ではない。今、諸書を調査した上で、最も古いと思はれるものの三四を左に列記しやう。

Friedrich Spielhagen. Beiträge zur Theorie und Technik des Roman. (1879—80)

Sis Water Besant. The Art of Fiction. (1884)

Henry James. The Art of Fiction. (1888)

D. G. Thompson, philosophy of Fiction of in Literature. (1890)

F. M. Crawford. The Novel. (1893)

これで見ても小説論の構成はドイツが最も早く、このシュピイルハーゲン以前にも一二見える。但しそれがどんな程度の研究書か今究める餘地がないので、玆ではシュピイルハーゲン丈けを掲げておいた。

フランスには殆んど見當らない。ブールジエに Reflexions sur l'Art du Roman があるがどの程度のものが何年に出たのか今、私に分らぬが、恐らくさう古いものではあるまい。

英米に於てはベザントとクラウフォードとジェームズとが小説論の草分けの如くに言はれて、最も初期に屬する權威的研究とされてゐるが、坪内博士の『小説神髓』は實にベザントと同年に述作され、ジェームズに先立つこと四年、クラウフォードに先立つ事九年なるは寧ろ一個の驚異ではないか。八十年代初期に、これだけまで小説論が纏められたとしたら、たとへ此れが歐米で出たとしても、私は相當な反響を呼んだらうと思ふ。そして恐らくはベザント等と同じ古典として後世の研究家に尊重せられたであらう。

ベザントと同年に出來た『小説神髓』の著作の際に、纏まつた參考書のあつた筈はない。併し私は念のためにこれを博士に尋ねてみた。左に掲ぐるのが博士の御返事である。

『參考書は主として英國文學史（著者の名はよく記憶せざれど）一二三種、雜誌は Contemporary

Review, Nineteenth Century, The Forum のたぐひ、他は Bain 其他の修辭書二三種、美學の書は一冊も知らず、哲學史はフェノロサに學びつゝありしが、ほんの概略に過ぎず、文學論らしき講義は聞きし事なく候ひき……』

五　小說論としての諸條件

併しいくら『小說神髓』が、英米小說論の草分けとも言ふべきベザントの書と同年に著作され、その纏まつた參考書が無かつたとしても、その本質がつまらないものであつたら、單に著作年代が早いと言ふ以外の價値はない。で私はこれから其の內容を吟味するであらう。

殘念ながら私はドイツの本が讀めないので、その方面の小說論は知らないが、英米のは多少讀み漁つた。

小說論がぽつ〳〵現はれ出た一八八〇年代から今日までを假りに三期に分けると、第一期の名著としてはベザントなどが擧げられ、第二期（一九〇〇年代に入つて以後）の名著としては Bliss Perry の "A Study of Prose Fiction" などが擧げられるであらう。ペリのこの書は初版が一九〇二年に出で、訂正版が一九二〇年に出てゐて、これは專門の小說攻究者ならぬものゝ耳にも著名はよく熟してゐる。第三期（かりに一九二〇年前後）の名著としては、私は Clayton Hamilton

た『小説作法講話』は殆んど全部之れに據り、そしてこれが名著なる旨を言明して居られた。當時『小説研究十六講』著作中であつた私も主として之に據つてゐたので、森田氏との暗合を頗る奇とし、これを良著と思ふの念が一層强く且つ明確になつた。

私はベザントの書はまだ手に入れてゐないから何とも言へないが、上記ペリとハミルトンの二著と、坪内博士の『小説神髓』とはかなり詳細に讀み較べてみた。且つ或る必要から『小説神髓』が近代小説論の諸條件をどの程度迄具備し、どの程度迄缺いてゐるかを見るため、三著の内容項目の表まで作つてみた事がある。

もしそれを茲に轉載するなら『小説神髓』の價値は一目瞭然だが、餘りに煩瑣に渡るから避けて、結論のみを端的に述べるとあの書は近代小説論の諸條件を殆んど完全に具備してゐる。

之に據つて思ふ事は、坪内博士が非常に組織的な才能に富んでゐられる事である。まだ大學の圖書館にも碌な參考書のない時代、英米にも纏まつた小説論の出てゐない時代に於て、あの零細な材料からあれだけの組織を作り上げ、說いて充分でない點や、幼稚な點はあるとしても、兎も角も眼も耳も鼻も口も揃つてゐる點は、一面和漢の小說に對する豐富な素養が當然あそこへ論を歸結させたのであると共に、他面、博士の物をオルガナイズする力の逞ましさを語るものである。

この組織力の逞ましさは、後の倫理論や、歴史論にも充分に窺はれる。只、ドイツの學問をした人のやうに組織的才能が際立たない。鷗外博士の組織力が堅炭の火なら、坪内博士の組織力は炭團の火である。或は父の愛と母の愛とに比較してもよからう。坪内博士の組織力は柔かいが強く、且つ逞ましい。

併し『小說神髓』の中には勿論、缺けてゐるものも二三ある。たとへば『視點の研究』（The Point of View）などに顧慮が拂つてない。視點とは、一人稱、二人稱、三人稱、三人稱の一元描寫、書翰體（二人稱）純客觀體（the story with an exercise of omniscience）など、話者の態度の細別を言ふのが、最近の小說論には、みなこの研究に獨立の一章を設けてある。所が一九二〇年に出たブリス・ペリの研究は、あれ程組織立つたものであり乍ら、やはり此の章がない位だから、ペリのよりも十八年前に而もその頃未開だつた日本に現はれた小說論に、之なきも當然であらう。

元來、視點の詳密な細別は、個人の發見、個人性への内的浸徹とも呼ぶべき一部の時代思想の文藝に及ぼした影響であると思ふが、それが少くとも一九二〇年のブリス・ペリの論究にはまだ現はれてゐないことは、一寸興味のある事ではないか。

次に『小說神髓』に『短篇小說の研究』に宛てられた章のない事が又注目に値する。

短篇小說の創始者は普通にポウであると言はれてゐる。少くとも明確に他の文藝形式から獨立し

た意味の短篇の價値と使命とを、充分に自覺したものはポウでなくてはならない。

ポウが一八四二年のグレーヤム・マガジンに寄稿した『ホウソォンの物語』なる有名な論文の中に、短篇小說の理論は最も早く窺はれると言ふが、獨立して之を論じ、眞に短篇の價値と權威を一般に認識させたのは、一八八五年にリピンコッツ・マガジンに出て、一九〇一年に書冊に纒められたブランダア・マシューヅの『短篇小說の哲學』が最初であると言はれる。とすればマシューヅのその論文が雜誌に出たのと同じ年なる一八八五年（明治十八年）に世に出て、實際はその前年なる八四年に著作せられた『小說神髓』に、之を論じた章の無いのも亦深く怪しむに足りない。

日本に短篇小說なる語の出來たのは何年の事か知らないが、明治二十六年發行の『小羊漫言』の中には端物小說と呼んであり、博士自ら『細君』をも『胡蝶』をもさう呼んでゐられるのである。

それから推しても『小說神髓』に短篇（端物）の考究なきは博士の手落ちと言ふよりも寧ろ時勢がそこにまで熟さなかつたのだと言ふべきである。一八八五年と言へばポウの死後三十五年で、フランスではモウパツサンが盛んに短篇を書いてゐた當時だから、その理論が、未開の日本に於ける一大學生の、視野に入らなかつたからとて何の不思議もない。私はまだ見ないから分らないけれど恐らくはベザントの小說論にだつて、短篇小說に關する一章は缺げて居りはすまいか。

大正十四年四月

森田思軒とその飜譯

本書（明治名著全集第六卷）は森田思軒がユーゴーの飜譯三篇（クロード、死刑前六時間、探偵ユーベル）を收めたのである。隨つて解題は必然、思軒を主とし、ユーゴーを從として、二つに分れなければならない。私は先づ思軒について語るであらう。

一　略歴

思軒の略歴は森鷗外が源高湛の名を以て書いた左の一文が最も要を得てゐるかと思ふ。

『思軒居士は森田氏。文藏と稱す。萬延元年備中國小田群笠岡町に生れぬ。父を佐平と曰ふ。母は森田氏。慶應三年年甫て八歳にして、啓蒙社に入りぬ。社は五十川左武郎が立つる所なり。明治五年十三歳にして大阪に遊び、慶應支塾に入りぬ。六年十四歳にして支塾と共に阿波に徙り、次で又支塾と倶に東京に徙りぬ。八年十六歳にして郷に還り、興讓館に入りぬ。館主を阪田丈平とす。十四五年の交、館を退きぬ。十五年二十三歳にして再び東京に遊び、報知新聞社に入りぬ。十八年二十六歳にして歐洲及び支那に遊びぬ。十九年二十七歳にして東京に歸りぬ。二十四年三十二歳にし

て報知新聞社を退きぬ。二十六年三十四歳にして國會新聞社に入りぬ。二十七年三十五歳にして國會新聞社を退きぬ。二十八年三十六歳にして萬朝報社に入りぬ。二十九年十一月十四日、腸窒扶斯を病みてみまかりぬ。享年三十七。是を居士が閲歴の梗概とす。居士漢學の素養あり。こは啓蒙社、興讓館に學びて得つるなり。居士善く英書を讀む。こは慶應支塾に學びて得つるなり。』(「思軒全集」第一卷序一――二頁)

二　思軒に對する批評

思軒に對する批評は德富蘇峰氏が『明治二十八年初冬の交、予嘗て居士に就て、左の言を倣したることあり』と言つて稿せるものが、最も當つてゐるかと思ふから、左に引用するであらう。

『余は文壇の批評家として、最も思軒居士に推服す、思軒言はず、言へば往々にして中る。

思軒の頭腦は、鋭にして斂、精にして明。

思軒は大體に通ず、時勢に通ず、故に其の言、文人迂腐の酸味なし。

思軒の文章は、及ぶ可し。其の會話は及ぶ可らず。

思軒の眼孔は、直ちに事物の根底を射る。

思軒は一種の直覺力あり。

思軒は到底創作家にあらず、到底數でこなす的の作家にあらず。
思軒の飜譯は、餘りに念入り過ぎて、却つて粘皮の痕あり。
思軒の文章は、字烹、句鑄、恰も磨き竹を以て、建仁寺垣を結びたるが如し。
批評家として、一の缺點は、思軒の博覽浩聞ならざるにあり。
思軒は林西仲派の批評家にあらず、金聖嘆派の批評家なり。唯だ彼が如く、毫も牽强附會ならざるのみ。
思軒若し漢學の素養に匹敵す可き、歐文の素養を以てせば、其の進境如何ぞや。
思軒は識に於て、近世思想を解得す、學に於ては未だし。
思軒の學は漢七歐三、若し之を顚倒せば、恐らくは今日の思軒にあらじ。
思軒の小說は、御姬樣が味噌越提げて、豆腐買に赴く風情あり。
思軒の文は、淡中腴味あり。鍛練の文、一字、一精神。故に思軒多く作らず。
余は思軒少時の文を愛讀したりき。氣焔あり、高興あり。其の北京紀行の如き、歐洲通信の如き、殆んど寓目せざるものなし。「埃及原頭夕照崩」の句を記憶したり、今や其の前後を忘れぬ。』(「思軒全集」第一卷序文六——七頁)

三　飜譯家としての思軒

思軒が明治文壇への貢獻は著作目錄を見ても明かなる如く、決して一樣ではないが、その功績の最も輝やかしきは飜譯の方面に致したるものでなくてはならない。

明治三十年前後までのわが飜譯壇の大勢及びその間に於ける思軒の位置は坪内逍遙博士の左記の文でほゞ推察がつく。

『美文を飜譯して、髣髴原著の現れ來たれるかと思はしむる譯者は、吾人之をたゝへて如來と名づくべし。明治文壇幸ひにして已に三如來を得たり。英文如來を森田思軒氏とし、獨文如來を森鷗外氏とし、魯文如來を長谷川四迷氏とす。晩近内田不知庵、原抱一庵の諸氏、また大に飜譯に力を盡くせり。文界遠からずして二三の新如來を加ふべし。』(「文學その折々」二八頁「外國美文學如來」)

外國語は專ら英語をおさめた思軒は、ポウ、ホウソオン、エッヂオース等英米文學の移植にも努めたが、併しその名の最も顯はれたのはユーゴーの飜譯者としてであつた。されば思軒の訃を弔ふた『帝國文學』(第三卷第十二號)所載の文にも『ユーゴーの飜譯を以て有名なる思軒居士』『居士がユーゴーの輸入者としての効績は今更喋々を要せず』『唯居士が文章に於けるユーゴーは選擇能く其當を得たるものなり』等の語が見える。

併し英文を通してユーゴーを紹介するのだから、そこに原語直接譯ならざる非難は當然あるべきで既に生前に於てもその聲は聞かれた。

『森田思軒は外國文學の飜譯家として知らる。「探偵ユーベル」、「瞽使者」、「月珠」、「哀史」等は英文によりてユーゴー、ヴルェヌ、コリンス等の作を譯せるもの、文體は和漢折衷體なり。粗大の文字を以て能く精緻の意を傳ふるの才ありと稱す。其の門末の輩はユーゴーの輸入者として子を崇拜すと雖も、ロセッチにして初めてダンテを註解することを得たりきと聞き傳ふる吾等は、佛文を解せざるもの如何にしてユーゴーの眞趣を傳へ得たるべきかを驚くのみ。』(樗牛全集第二卷四二七―八。「明治の小說」)

又明治四十二年雜誌『太陽』の增刊として出た『明治文藝史』に於ては、『思軒はたゞ舊派文學の殿將たるに留まつた。』と斷じてゐる。筆者は恐らく長谷川天溪氏であらう。

元より飜譯は直接原語譯たるに越した事はないが、併し名譯であれば必ずしも原語譯たるを要しないと言ふのが私の持論である。原語譯でないからとて葬つて了ふには、思軒のユーゴーの譯は餘りに尊き名珠である。その後佛文によく熟達する人で、ユーゴーを移植した人も二三無いではない。併し英文でありながらユーゴーを博く涉獵し、日夕之が文卷を放たず、敬虔とも評すべき態度で一字一句も忽せにせず之を移植した思軒と、佛文はよく解するがユーゴーなどは殆んど讀まず、只書

肆の求めによつて譯しながら初めてそれを讀んだやうな佛文學者と、いづれが果してよりよきユーゴーの紹介者であるかは、なか〳〵解けない疑問であらう。

樗牛は必らずしも終始して思軒への酷薄な批評家ではなかつた。たとへば斯る文章を書いてゐる事もある。

『此頃經濟雜誌社より出版せる人名字書を取りて試に森田思軒を索めしに、見當らず……森田思軒氏が明治文壇の一文豪として後世に傳へらるべき人なることは、吾人の堅く認むる所なり、苟も氏の文字を讀みたることある人は、吾人と共に爾か認むることを躊躇せざるべし。ツマラヌ近年の役者三味線引きの末派までも、可成りに網羅した人名字書が、是の一文豪の爲に一行半行をだも割愛する能はざりし事情は那邊に存せりや。訝かしき次第なり。』（樗牛全集第一卷七七六「人名字書中の文學者」）

同じく樗牛は又、ある小論文の末尾に『思軒の譯せしユーベルの語を引きて言はむ。嗚呼、彼は飢えたる也』と言ふ意味の事を書いた事もあつた。（今、その項目が見當らないので、論題と頁を指示する事が出來ない。）

その樗牛をしてさへも、上記の罵殺を敢へてなさしめた所以は、一つは、思軒が飜譯家として、時の文壇に餘りに偉大なる名聲を馳せ過ぎた反感、もしくは反動からではなかつたかと思はれる。

『小公子は滿場の喝采の裡に出で來る。其譯文の得失については旣に飜譯王思軒居士の滿口採揚する所なれば、余亦何をか言はん。』（明治廿四年十一月廿六日國民新聞）

これは宮崎湖處子が若松賤子の譯せる『小公子』批評の冒頭であるが、これで分る通り思軒は批評家の間に『飜譯王』の名を擅にしてゐたことがあつたやうだ。

併し過度の賞揚は、極端なる貶斥と共に、兎角正鵠を失ひ易い。私は樗牛や天溪と湖處子との丁度中間を取つた位な所に、思軒の受くるにふさはしい評價が生れて來はすまいかと思ふ者である。その意味で田山花袋氏の左の批評を比較的公平なるものとして引用せざるを得ない。

『ビーコンスフィルドやリットンの飜譯から更に一轉化を試みさせたのは、思軒の功と謂はねばならぬ。それから、其時まで譯語譯法などの非常に亂雜であつたのを一新したのも此人の功だ。かれは漢學に通じてゐて、比較的譯字譯法に詳しかつた。』（小說作法）

四　思軒調

新文學勃興初期の明治文壇は、當時の大家の文致によりてそれ〴〵紅葉調、露伴調、逍遙調、鷗外調、篁村調、思軒調などの言葉が出來、後の文に志す者は各自好む所に從つて、それを學んだ事は、苟くも明治文學史を一讀した者の等しく知る所であらう。その得失については齋藤綠雨がかく

言つてゐる。

『逍遙生が文は大丸の舖に仕へて客あしらひに心を疲らしたる形あり。二葉亭が文は觀音の境内にて嘗て眞鍮の迷子札を彫りゐたる姿あり、紅葉は理髮床の椅子に不行儀に凭れて頤髯剃らせる人の如く、美妙は押繪の羽子板の色さめたるを袂にくるんで立つ人の如し。露伴は經一卷を懷にして味噌摺口を捜すのみ。思軒は煎豆を噛んで獨り一心に講義するのみ。學海は何處迄も平仄を詮議し、鷗外は何處迄も診斷書を認む。南翠は手を膝に載せて壁と睨みくらし、篁村は墨斗の筆を舐つて名作やと首をひねる。嵯峨の舍には金物打つた帽子を買つてやるべし。思案には熊手の簪をさゝすべし。漣にはでん／＼太鼓あてがひ置くべし。忍月には仕込杖もたせてぶらつかすべし。』(綠雨全集三九頁「初學小説心得」)

これで、當時の大家のスタイルの特癖はほゞ想察されるが、更に口の惡い綠雨は『文學一からげ』なる題下に『其一把思軒居士』と題し、淸元の『浦里時次郎』を題材に思軒調をもぢつた絶好のパロディを書いてゐる。思軒調を一目にして領せしめるもの、恐らくはこの篇を讀むに如くはあるまい。左に全文を引用する。

其一把　思軒居士

浦里時次郎(淸元)

『雪は朝より降續けり。』浦里は已れの居室に在りて、雲の如く黑く濃やかなる髮を撫でつゝ獨言せり。「何故に余はシカク始めより渠を愛するや、余はシミ〴〵と惚れぬきたり。」

時次郎は登り來れり。「浦里、何等か余が面を合すに不都合の事なきや。」浦里は起ちて忙しく迎へり。渠が顏には瑠璃のごとく輝ける二個の眼を有するなり。「見世は出せり、今は何人も此の閾を踰えくることあらず。」「嗟、斯の如く建築の宏大なる二階に、余が六尺の體軀を措くべき所さへあらず、是れ余が何等かの因果ならざるべからず。」「然り時次郎、御身は極めて窮屈なるべし、余は信ず、御身が余を愛する太だ深きにあらざれば、容易に斯の屈辱に堪えざるべしと。余は實に御身が厚意に謝せざるを得ず。」浦里は時次郎の膝に倒れかゝりて、其溫かき唇を渠が手に加へたり。

時次郎は悄然として言へり。「如かず余は去らむ、余が此處に一分時を送らば、一分時御身を苦むるなり。三分時送らば、三分時御身を苦むるなり。若し百年、百年余が此處に送らば、百年御身の壽を縮むるなり。御身の壽より百年を減ぜば如何、是れ余の忍びて爲し能ふ所なる乎。余が曾て御身に語りたる希望は今日全く畫餠に屬したり。余は竟に據り所を失へり、余は唯死すべきなり、御身賴ひに一遍の回向を懈るなかれ。」突然起ちて行かむとす、浦里は慌てゝ渠が袂に縋り着けり。「時次郎、御身は狂せしにあらざるなき乎、余は未だ死したる人の消息に接し

たることあらず、誓紙は將に仇にならむとす、果して御身、御身死せむと欲せば先づ余を殺せ。」身を震はして泣沈めり、既にして廊下の方より進み來る足音あり。「來れ綠」。例の尖りたる聲は遣手の萱なり。此聲は兩人をして甚しく畏懼の念を生ぜしめたり。浦里は半身を現はし「お萱」、綠は下に行けり、御身は何等か綠に求むる所ある歟。」萱は口を圓くして囁つく如く言へり。「然り華魁、昨夜より流連せる御身の客は何の地に籍を有する人ぞ」。「余はこれを詳かにせず、何れかの子息なりと聞けり」。「華魁、御身は余が、御身より幾干の年月をより多く經過せるを知るか、虛僞は一時を掩ふも永久を保つ能はず、余は早く渠が時次郞なるを知れり、華魁、樓主は最前より御身を呼んで止まず。」浦里は愕けり。今は單に謝するの外なきなり。「饒せ、お萱」。されど萱は頭を振りて肯かず。

浦里は引かれ行けり。時次郞は屛風の裡より引出され、激しく擊ち据られたる後、クヾリ戶の外に突出されたり。雪は夜に入れども歇まず、起上らむとする時次郞の面を撲て散亂せり。』

（綠雨全集七八――八〇）

五　思軒の逸話

思軒の門人原抱一庵が『吾の昔』と題して稿した懷舊談は頗る思軒の風貌をよく髣髴せしむるに

足る者があるから、序を以て數項を左に拔くであらう。次の一節は初對面の印象である。

○待つ間程なく主人思軒、微醺を帶び、面に笑を湛へて、上ぼつて來られ、吾の正面に坐られ

『僕森田文藏、君抱一庵君、始めて！』

○斯て居士は快辯の口を切つたが、吾はその朗々玉を轉ばす如き聲音に耳を澄ますと同時に恐る恐る眼を放つて居士の狀貌を諦觀した。

○老人なる歟、青年なる歟、四十を既に超したる歟、二十八九に未だ達せざる歟、吾ばかりでなく一見の下に居士の齡を判じ得るものは鮮いのである、肢體は備具恰好してゐるが狀貌が如何にも奇にして異なのである、眼球深く凹み、齒は悉く腐蝕し、語るとき紅舌微に露る、肌目は濃かにして皓く且つ澤あり、此の皮膚の美が、凹める眼、蝕りたる齒、と反映して却りてますます面貌を異ならしむるのである、前額は廣く滑かにしてソコに隱々として一種の威儼棚引き、人をして殆んど仰ぎ看るを得ざらしむ、要するに居士の容貌は一見忘るゝ能はざる所のものであつて、居士は錦城學校で英語の教師をして居たことがあるが、一日米國人が參觀に來て居士を見て深く怪み、彼はどこの外國人であるぞと幹事に尋ねたことのあるを見ても、居士の形品の如何に邦人普通の者と選を異にして居るかゞ解る、決して陋で無い、醜で無い、唯だ奇であり、變であるのだ。

○居士の音聲、これ前にも記した通り盤上球を轉ばす如き朗々たるものであつた、幸田露伴君は、これ才人の聲なりと稱して、常に感嘆して居た、此の朗々の聲を使つて縱橫の奇思を吐き來る、諧語、險語、奇語、警語、而かも辭令を失はず、聽者に惡感を懷かしめず、趣味あり、含蓄あり、教訓あり、諷刺あり、居士は實に當代罕なる快辯家であつた。（明治三十六年八月發行『文藝界』第二卷第二號）

更に又左の如き一節がある。これは殊に思軒の几帳面な一面をよく窺はしめて遺憾がない。

○辭し歸るとき、客窓無聊、何か面白き西洋小說でもあらば拜借したしと云へば、書籍は階下にと云はれて自から燭を擎げて、茶の間より直に通ずる庫に吾をば案內せられた。庫中には幅一間六尺高さの書棚三ツありて、英書ばかりギツシリと詰めてゐる、居士云ふ『これは大抵倫敦で買つた本ばかりです、』吾は彼か是かと七八冊抽き出して、中で二冊、『これを拜借』と云へば居士『イヤ二冊は不可ません、二冊一しよに讀むことは出來ません、一冊丈になさい、讀み了つたら返して又た別のを持つて行き給へ、僕が不在でも書筐を自由に搜して宜しい』吾は初對面に於て居士から一本參らされた。（同上）

更に左の一節、卽ち思軒が『報知叢話』に初めて村上浪六の『三日月次郎吉』を紹介するの一項に關する抱一庵の追憶は、思軒の面目を愈々躍如たらしめてゐる。

〇それから五日ばかり經つて發兌日の二日前、村上（浪六）氏は七八枚の原稿を思軒居士の前に提出した。
〇居士は叮嚀に繰返し、繰返し、繙閲し了つて、拟て案を拍つて『頗る妙！』と叫ばれた。
〇吾も『報知叢話』には責任を有つてゐる。登載の原稿を檢閲する權利なきにあらずだから、居士に乞ふて村上氏の文を披見した。
〇ところが措辭の中に厭味がある『此のところは訂正されたらどうであります』吾は思はず、斯う口走つた。所が思軒居士はヂロリ吾が方を見られて『君の學殖では未だ他人の文に嘴を容るゝ權利はありますまいよ。』
〇吾はブル〳〵顫ひ上つた。思軒居士は、稠坐の中でも何でも構はず、斯る冷罵を人に加ふるを意としない人であつた。居士が俗人に厭はれた重なる原因はこれ。（明治三十六年發行『文藝界』第二卷第七號）
これらに依りて推想するに思軒は頗る嚴厲な、いらひどい氣質のある人であつたらしいが、『文は人なり』の語吾等を欺かず、思軒調なる特有のスタイルに自然それが反映してゐるのは面白い。

六　無產階級の立場から批判したユーゴー

思軒の名聲を譯壇に高からしめた諸作の原著者なるヴィクトル・ユーゴーについては、餘りに多くの事が紹介された上、邦譯の全集まで出た位であるから、恐らく詳説の必要はあるまい。たゞ、一時彼は、西歐に於ても、そしてそれを受賣りする日本の文學者間に於ては尚更、謂はゆる『細かな味はひ』を求める人々の間に非常に不評判になつた。が、トルストイが『藝術とは何ぞや』及び『モウパッサン論』で口を極めてユーゴーを激稱してゐるのを知つてからその價値が再び見直された傾きがある。

兎もあれ革命文學、乃至は社會主義小說が大いに勃興しやうとする際に於て、彼は最初に顧みられなければならない偉大なる指導者である。なぜなれば彼こそ、浪漫派の代表者であると共に、又最も古く且つ又最も傑れたる社會主義的藝術の創始者なのだから。

玆に、無產階級的立場を以て、一貫して從來の文學史を批判し直したアプトン・シンクレェアの『マモン・アート』からユーゴーに關する章を全譯して揭げるであらう。

ユーゴーは一八〇二年、バルザックよりも三年後れて生れた。彼はバルザックと同じき社會相の中に成育したが、その病弊を靜觀した丈けでは滿足しなかつた。彼はその救濟策を求めて、革命的理想の信奉者となつた。それがため凡ての批評家は一致して、彼の著作がプロパガンダのために藝術

的完成の上に毀損を受けてゐると斷じてゐる。彼は八十三歳の長壽を保ち、最後まで著作しつづけたので彼が生涯は實に全十九世紀を縱貫してゐるものと言へる。

ユーゴーの父はナポレオン軍の將官にまで經上つた革命派の一員であつた。でユーゴーは少年の時から父の統御する軍に隨つて、スキッツル、イタリ、スペインなどに赴いた。併し彼の母は王黨であつた。で、少年の時の彼には家庭教師としてカトリックの老僧が迎へられ、舊教條と共に宗教、政治、並びに文學がその僧侶から彼に授けられた。この根深い影響もあつてであらう、彼は四十六歳の遲きに到るまで、完全に革命家となり切る事は出來なかつた。併し日々の社會的事件との接觸によつて培はれながら、遂に轉機を潛つて革命家となつた彼の考へは當時の歐洲思想に甚大なる感化を與へた。

彼は天才的少年で、その才が異常なる開發を初めたのも極めて早くからであつた。吾等は彼が十四歳に於て悲劇を創作し、十七歳にして『保守文學』なる雜誌を發行してゐるのを見る。かく最初は保守的であつたから、カトリック的反動保持のため王位に就けられたルイ十八世は一千フランの獎勵金を彼に與へた。彼はそれを費用として結婚した。ついで王位を繼承したシャルル十世は、ユーゴーが二十三歳の時、レジオン・ド・ノオルの騎士に列せしめた。併しこの青年詩人の保守性は漸次に獨立的思想の方へと傾き初めた。彼はリシュリユウが王を操縱してゐる劇を發表した所、當時の

やうな擽つたき時代に於ては、不穩當なものと認められ、檢閲官は發行禁止を命じた。この青年詩人は直ちに個人的に王に抗議したがそれは無効であつた。

當時は、何人も知る如くフランス藝術はまだ、ヴォルテイルやラシイヌの謂はゆる『古典的理想』の勢力下にあつて、悲劇作者は嚴密に『三一致』の法則を準守しなければならなかつた。でなければ彼等は劇作家となる事が出來なかつた。併し一八三〇年頃からフランス人民は反動に飽きを生じて、再び革命の備へをし初めた。この變革の一部分として、藝術上にロマンチシズムの激浪が捲き起つたのである。パリでは初めてシェークスピヤが上演され、ユーゴーはクロムウエルを主題として劇作を發表した。彼はその序文でラシイヌは『劇作家に非ず』と宣言するの冒瀆を敢へてした。新革命の眞只中に於て彼はロマンチック劇『エルナニ』を上演した。これは、舞臺の上に絶叫して悲壯な死を遂げるバイロン型のスペイン革命家を取扱つたものである。

この劇の上演されつゞけた四十五夜は、騷擾の連續であつた。主役を務むる女優が苦情を言ひ、搔き集められた Claque は騷ぎ立てた。そこでユーゴーも亦若き藝術家達に向つて、書齋を出でて彼を應援せんことを乞ふた。彼等はモンマルトルをあふれ出で、劇場の一角を占領した。その時の此のロマンチックな青年達の第一の目的は、奇異な容裝を以て、『ブルジョアの膽を奪ふ』ことであつた。テオフィル・ゴオチエもその中の一人で、當時まだ十九歲の少年であつた。長き捲髮を肩ま

で垂れ、緋の繻珍の胴着をつけ、黒で縫合せた薄い海綠色のズボンを履き、綠繻珍で緣取つた鼠色の外套を着て出掛けた。每夜、互に敵視せる古典、浪漫の兩黨は、荒れ狂ひ、叫喚して、劇の終る夜まで止めなかつた。

ユーゴーは又小說も散文も書いた。そして何れの分野に於てもフランスの新しき太陽となつた。併し彼は文藝上の月桂冠を得ただけでは滿足しなかつた。彼はブルジョアの病弊に對する救濟策を求めた。彼は、囚人として牢獄に虐遇され、遂にその看守を殺害した貧しい勞働者に、自分の懷抱を托乘せしめた創作を發表した。換言すればこの青年詩人は、小說を以て救濟策を講じやうとし、全フランスに聖書をあまねからしむべしと結論した。『此の如くして以て經典を有らゆる村々に布き家として經典を備へざるはなきに到らしめよ』（森田思軒譯）アメリカに於てもギデオナイトの一派は各ホテルの室に聖書を備へるやうにと宣揚した事がある。

一八三〇年の革命はルイ・フィリップを新帝として卽位せしめた。理想的なブルジョア王で、愛想のいゝ紳士で、自分は妻と家に停まり、銀行家や實業家に勝手なことをさせてゐた。この王はユーゴーをフランスの貴族に列せしめた。併しその時又新しい革命の勃發は準備せられてゐた。一八四八年この市民王（ブルジョアキング）は沒落した、ユーゴーは新議會の議員に選擧せられ、自ら『穩和共和黨』員と號した。當時のフランス人は現時のアメリカ人と同じく、言はれる事をそのまゝに信じたので、政治

家と號して出現すれば、笛できら〳〵する衣裝をつけただけの馬子でも歡迎するを辭しなかつたのである。さればたま〳〵ナポレオン・ボナパルトの甥であり、昔日の大フランスの榮譽を再び回すことを約束した一個のみじめな存在を、その大統領として選擧した。

ユーゴーは一年ならずして、進歩の希望は急進黨のプログラムを實現するにある事を悟つた。彼の二人の子供は新聞紙を發行して、ルイ・ナポレオンの政策を攻擊して、獄に投ぜられた。そして父なるユーゴーは舊革命の理想であつた『人の權利』と言ふことを宣揚した。ルイ・ナポレオンは資本家達が自分を畏怖してゐるのに增長して、議會を解散し、自ら帝王となつた。ユーゴーは之に抗爭して人民を奮起せしめやうとした。市街戰は隨所に起り、數百の人命は砲丸に依つて喪はれた。彼は非常な苦辛を以て漸くブリュッセルに遁れ、そこで此の王位の簒奪者に彼の與へた名稱なる『小ナポレオン』の一著を公刊した。その結果、ベルジュウムのカトリック政府は彼を追放する法律を通過させた。

彼はジエルシイ島に遁れ、詩集『刑罰』を公刊した。世界の文學中、恐らく斯くの如き猛烈なる罵詈は他に見られないであらう。英國のブルジョア政府は佛國のブルジョア政府と結んで、クリミヤからロシヤを驅逐しやうと企てた結果、大戰爭を惹起した。さればジエルシイの人民はユーゴーがフランス皇帝を攻擊するのを好まないので、彼の居宅に亂暴を加へたりした。そこで彼は隣島ガ

ーネシイに遁走せざるを得なかつた。此の大藝術家が來るべき時代の諸理想を變化せしめ、世界を改造する眞の使命の定まつたのは、實に此の島に於てである。『小ナポレオン』の著に依り大陸を遁走して以來十九年間を彼は流竄の中に送つた。その間にユーゴーは傑れた數卷の詩集を公けにし、最後に小說の傑作『レ•ミゼラブル』を完成した。それは同時に世界の八大都市で賣出され、著者は四十萬フランの印税を得た。

この小說に於てユーゴーは、自由と、平等と、博愛とに、情熱的讃仰の念を灑ぎ、同時に暴政と殘虐とには焰のやうな憎惡を向けた。彼の語つたのは、一人の脫獄囚が警吏に逐はれたり、再び牢獄に投ぜられたりしながら、遂に自らを改めて生活革命に成功する物語である。附屬的に作者はその當時のフランスの驚くべく廣汎な生活諸相、プロレタリヤの生活や惡鬪まで活寫して見せてゐる。ジャン•バルジャンこそは人間の空想の最大成功の一つであり、その物語は近代各國の革命運動の寶玉である。

小ナポレオンはドイツに戰を挑んで、徹底的に叩き潰された。ユーゴーは此の危機に祖國に歸り、パリ擁護のために奮起した。その後へ例のパリ•コンミューンなる、飢餓と痛苦の民衆の爭亂があつた。この時ブルジョアと呼ばるゝ野蠻人は機關銃を以つてゐた。そのため無產者の理想も信仰も瞬く間に掃蕩せられて了つた。男、女、子供——五千人に餘る勞働者がパリの城壁に押しよせたが、

みな射殺せられて徒らに街路を血で彩つたに留まつた。ユーゴーはこのコンミューンに加擔した故を以て又もや國土を遁げ出さざるを得なかつた。

ドイツと平和締結後、フランスは共和國となつた。彼女の偉大なる詩人、勞働階級のために勞苦しその社會理想のために雄辯を揮つた藝術家（ユーゴーの事）は、孫達と共に殘生を送るべくパリへ還つて來た。新らしい運動が起つた。舊人達はユーゴーが、餘りに舞臺的で、誇大で、非眞實である點を責め初めた。これは或る點まで當つてゐる。なぜなればユーゴーはシエリも同じく、その傑れた資質の中に幾多の缺陷を以つてゐた。インスピレーションが來てゐないのに、彼はそれが來てゐるやうに裝ふ術を心得てゐる。彼はマンネリズムを獲得し、ポーズに巧みである。自分の生涯が直ちに藝術となつてゐるミルトンの暗示に倣ふて、彼は自ら革命思想の化身として立ち、自らを傳說にし、生きた記念像にし、文藝的拜殿にした。或は文藝大殿堂にしたと言つてもいゝであらう。壯美と滑稽とは相距る僅かに一步である。吾々はユーゴーがしば〳〵その一步を滑稽の方へ踏込んでゐると思ふ。が大多數の民衆は、彼の存在の核心が自由と正義との熱愛にあつた事を知つてゐる。それ故心からユーゴーを愛し、ユーゴーと革命フランスとは同一の意義を持つた二つの Phrase であると思つてゐる位にまで、彼の生活と彼等の生活とは混合し合つてゐる。（Upton Sinclair's Mammonart p. 325)

七　思軒譯出の三篇

前記の文中『囚人として牢獄に虐遇され、遂にその看守を殺害した貧しい勞働者に、自分の懷抱を托乘せしめた』云々とあるのは、本書に收められてゐる『クラウド』の事である。原名は Claude Gueux。一八三四年の作（思軒の譯したのは明治二十三年即ち一八九〇年である）。今試みに山路愛山著『社會主義管見』（明治三十九年發行）の卷末附錄の年表、及び淺野研眞氏の『勞働年表』（大正十四年版）などを見ても、社會主義小說としてユーゴーのこの作は擧げられてゐないが、たゞ人見市太郎著の『ユーゴー』の中には左の一句が見える。

『千八百三十四年「クロードギユー」と名付くる社會的小說を「巴里雜誌」に公にす、其大意は左の如し（略す）。是れ「死刑者の最後の日」と共に、彼れが胸中に鬱積せる社會主義の火山脈が破裂せんとして未だ破裂する能はず、只罅隙を更めて、時に煙を吹きたるものにして、與に是れ社會主義のエトナ山たる「レ•ミゼラブル」に通ずる伏脈といふ可き也。』

この作が初期社會主義小說の一典型なる事、及びそれが後に『レ•ミゼラブル』を產む胚種となつた事は、共に泰西のユーゴー批評家の定論である。（前記人見市太郎氏の「ユーゴー」も Great Writer Series の中の Marzials の Life of Victor Hugo に據つたものである事は當時の帝國文

學記者の指摘に依つて明かにせられてゐる。この指摘者は無名だが恐らく上田敏であらう）
ユーゴー自らはこれを『實際の事實をありのまゝに書いた物語である』と言つてゐる。實際當時の裁判記錄を調査してみるならば、クラウド・ギュウなる罪囚がゐて、死刑にせられた記錄は確かに發見せられるさうである。だが『ありのまゝに書いた』と言ふのは頗る疑はしく、實在してゐたクラウドと、ユーゴーの描いたそれとの間には可なりな懸隔があつたらしい。斯る點にシンクレェアの謂はゆる bombastic and unreal な一面が窺はれる。併し作としては可なりに成功したものと言つてよからう。『死刑前の六時間』は原名 Le Dernier Jour d'un Condamné で、字義通りに譯すれば『死刑囚最後の日』と言ふ方が正しい。一八二八年十二月廿一日、ユーゴーがサン・バルリイに送つた手紙にかゝる一節がある。
『友よ。君は僕が手紙を上げないのを不精のためと思ふかも知れないが、實はそれは餘りの精勵のためなのだ。僕は晝夜兼行で働いてゐる。來月になつたら手紙の代りに散文一卷、詩一卷の書冊を君に送るであらう。』
この散文一卷と言ふのが『死刑囚最後の日』で一八二九年一月に刊行せられた。『クラウド・ギュウ』に先立つこと正に五年である。初めは無名で出版したが、彼が生涯の主張であつた死刑廢止の事が書いてあるので、直ちにユーゴーの作である事が一般世間に分つた。但しこれは一讀直ちに明

瞭である如く、死刑を宣告せられた知識階級の罪囚が、最後二十四時間内に於ける思想感情を、最も繪畫的に痛切に描いたもので、第一目標は藝術的な點にあつて、道德的もしくは宣傳的目的を主とした作ではない。併し三年後、フランスに於ても死刑廢止の論が急に一般に盛んになつたので、第五版（一八三二年出版）に彼は新たに序文を付けて、この作を『現在も未來も凡ての死刑囚のための、永久な抗議書』としたいと書いた。思軒の譯の發表せられたのは明治三十年である。

作としては『クラウド・ギユウ』より劣るとは批評家の間の定評である。併し文藝史上に於て可なり有名なもので、今、一々思出せないが、死刑の事を書いたり論じたりする場合には、よくこの作が引會ひに出されることは、ドストエフスキの『白痴』の中のエピソード以上である。

『探偵ユーベル』は“Choses Vues”の中の最も有名な一節で、凡ゆるユーゴーの傳記家が彼のジエルシイ流刑中の生活を描くに、これを引照してゐないのは無い位である。思軒の譯に『クラウド』や『死刑前の六時間』あるを知らない者も『探偵ユーベル』あるは心得てゐる位に日本に於ても有名であるが、此れは明治二十二年三月『國民の友』の第一春期附錄に美妙の『胡蝶』、逍遙の『細君』と並んで載つたからであらう。

八　思軒とユーゴー

思軒は以上三篇の外、『隨見錄』（Choses Vues の節譯）『懷舊』（Bug-Jargal の全譯）などにより、ユーゴーの紹介に努めたが、併し原作者に心醉するの餘り、往々變な感想も述べてゐる。たとへばユーベルの初めに『本篇に殆ど小說の如し。然れども斷じて是れ事實一句の虛構なし。何となればユーゴー氏は肯て自ら欺かざるの人なればなり。』とあるが如きは、たま／＼思軒がユーゴーの傳記を詳しく調べなかつた餘りに犯した大なる誤謬である。ユーゴー程自分の傳記を美化し、誇大化し、天才化し、傳說化するために、噓を流布した文學者は外にあるまい。ユーゴーがどの程度迄の誇大家噓つきであつたかは A. F. Davidson の "Victor Hugo; his life and work" を讀むとよく分る。英國人の書いた評傳だから、ユーゴーに不利な資料をも詳密に集めて、彼の虛僞を遠慮なく摘發してゐる。

尤もユーベルの一件を虛僞だと言つてゐるわけではない。私はただ思軒がユーゴーを『自ら欺かざるの人』と言つたその思ひ違ひを本書の讀者が繼承せられざる事を望むために一言したのである。

大正十五年二月

第一メーデイの報道者

――酒井雄三郎のこと――

一　堺利彦氏の言葉

この正月（昭和二年）松屋の樓上で明治文藝研究資料展覽會が開かれた時、私は他の參考品と一緒に酒井雄三郎氏の寫眞を出陳した。たま〳〵堺利彦氏が來觀されて『この人はメーデイの事を最初に日本に通信した人だね。』と語られた。

酒井氏生前の仕事にはいろ〳〵なものがある。隨つて氏の記憶は極めて多樣な形態を取つて、今もかなり廣い範圍の人の胸に殘つてゐるであらうと思ふが、少くとも日本の社會主義史に興味を抱く吾等には、世界的に擧行された最初のメーデイの極めて精細なる通信者として記憶するのが、氏に對する概念構成が手取り早くてよいであらう。特に今月（昭和二年五月）氏のことを回憶するのはそのためである。

先づ氏の經歷を語らねばならないが幸ひいま手元に藏する『名家の遺影』（明治三十四年發行）なる一書に伊藤祐侃、德富蘇峰、島田三郎三氏の弔文が載つてゐて、その中伊藤氏は氏と竹馬の友で

あつたのだから、その一節を玆に轉載するであらう。その前言つておくが酒井氏は肥前小城の士族だつたのである。(三十三年大阪朝日新聞所載の記事による)伊藤氏の弔文に言ふ。

『己に長じ君は笈を負ふて東京に遊び中江篤介氏に就き、佛蘭西學を修め、業成るに及んで中江氏を助けて、政理叢談の發行に從事し、民權自由の理論を唱道し、聲名始めて顯はれ、爾後新聞雜誌に著作飜譯に從事し、遂に政論家佛文學家の巨擘を以て稱せらるゝに到りしは、蓋し遍く世の知る所なるべし。君は再度歐洲に遊びたりき。其初度は明治二十三年、佛蘭西萬國博覽會の際、節を折りて農商務省の小吏となり、以て巴里に遊を試みたり。吏務は固より其屑しとする所にあらざりければ、雜務の停滯復顧る所なく、專ら心を歐洲列國政治消長の觀察に致し、傍ら筆硯に從事し、諸餘所謂社會學の講究に專心し、大に悟る所あり。識見を長ずる彌々高きを加ふ。』

右の記事に多少の補註を試みると、フランス學を修めたと言ふのは中江兆民居士經營の佛學塾に於ける修業をさすので、酒井氏はその第一期卒業の俊才として、後には幹事、塾監、講師なども務めた。『政理叢談』は菊半截の小雜誌、明治十五年發行で、何號まで續いたのか充分に分らない。兆民居士の筆になる漢文譯民譯論が連載され自由民權論の理論的指導をしたので有名な雜誌である。確か第二號あたりから歐洲社會黨の沿革なる記事が連載されてゐるが、後の傾向から言つて此れが或は酒井氏の筆になるものではあるまいかと私は見當を付けてゐる。自由民權家として活躍した明治

十七年には、『朝鮮の變に際して大いに征韓論を唱へし事あり』(大朝)と他の弔文に見えるが、金玉均、朴泳孝等の變に於ける朝鮮政府のやり口に憤慨し、征韓論を盛んに主張したのであつた。

メーディの通信を送つたのは明治二十三年フランスに於ける萬國博覽會開催の際、農商務省の囑託となつて渡佛した際の事で、それは明治二十三年五月十三日及び二十三日發行の『國民の友』に載せられた。

二 『國民の友』への通信

『國民の友』には、酒井氏は渡佛以前から寄稿してゐた。蘇峰氏へ酒井氏を紹介した者は勿論兆民居士で『中江先生の明治十五年、漫遊して熊本に到るや、予も亦其隨行者の一人にてありき、君や余を大江の草舍に訪ひ、與に倶に天下の事を談論したりき』と蘇峰氏の弔文に見える。同じ文中に兆民居士が酒井氏に就いて蘇峰氏に宛てた手紙の全文が引用されてゐるが、中に『文學家と申すよりは寧ろ哲學家にて、哲學家としては同人の氣象は殆ど希臘哲學者の如き性行を具へ居りたる樣被察申候。しかし玄妙幽微の哲理を談ずるよりは、政治の方嗜好いたし居たる樣被察申候』とある。

酒井氏が文の人としての特色は之を蘇峰氏の同じ吊文に聞かう。

『君は所謂能文家にあらざりき。其の筆端暢達したりと雖も、其の筆を把るや、頗る精苦の狀あり

き。然も論理明晰、事情周到、間々筆鋒繚繞古藤の老松を纏ふが如き態ありき。……明治二十一年保安條例の擧あるや、君は茫々學人の名を以て國民の友に「クーデタ」の一篇を草し、奈破翁第三世の暴擧を以て、之を我が當局者と對照し、痛罵を極めたりき。蓋し君が文字の最も精彩光焔ありし一なる可き歟。若しそれ明治二十二年より二十三年に渉りたる君が巴里通信の如き、亦た見るべきもの少なからざりし……』

酒井氏がメーデイの報道はこの當時の巴里よりの通信の一つに屬する。

それより前『社會問題』と題し、『國民の友』數號に渉つて連載せられた寄稿が先づ當時の讀書界の異常な注目を惹いた。この篇は實にわが初期に於ける社會問題の文献中、劃期的なものとして特筆大書に値する。それ迄にも社會主義や社會問題に關する言議が新聞雜誌に多少見えてゐなくはないが、精細に歐洲の實狀を捜つて論じたのは、此の外にはない。それに加へられた酒井氏の批判感想は今日から見ると頗る甘い常識論だが、それに盛られた事實の報道は今日でも大いに敬重すべき價値がある。この方面に於ける討究が全く幼稚だつたあの當時に於いて、よくもこれまでに目をつけ得たものだと推服させるだけの內容はある。そして酒井氏はその論文の末尾にやがて世界的にメーデイの開催さるゝに到るべき事を豫報した。

そもそもメーデイは何人も心得てゐる通り、少くともアメリカだけでは一八八六年の五月一日に

第一回の示威運動が行はれた。それが一八八九年パリに開かれた第二インターナショナルに於て初めて萬國勞働者の國際的團結と階級的一致とを表示するための總動員の日とする事に決定を見たのである。

そして翌一八九〇年五月一日にその規約に基づく最初の世界的メーデイが行はれて、歐米ブルジョアの心膽を寒からしめたが、酒井氏は實にその劃期的時機にパリにあつて眼のあたりに之を見、その當時の日本としてはこの方面に於ける最高の知識と理解とを以てこれを通信したのである。『國民の友』明治二十三年七月十三日發行の八十八號所載『社會黨の運動』と、同月二十三日發行の八十九號所載『五月一日の社會黨運動會に就いて』とがこれだが、私はその文献史的價値を可なり高く評價せずには居られない。

前者の内容は三部に分れて先づパリ社會黨の現狀から國際的メーデイの開催されるに到つた因由を論じ、ついでこの日の實狀をパリに實見せる有樣を述べ、最後に新聞に依つて集め得た、全世界のメーデイの狀況を報じてゐる。後者の内容は第一メーデイの旗標であつた八時間の勞働、八時間の睡眠、八時間の遊戲の『三八法』の得失を論究してゐるのである。

私は世界の無産階級運動史上に永久に記念すべき第一回の萬國的メーデイの事が、たま〳〵酒井氏のやうな卓越した人の筆に上つて、上記の二文となつて殘つてゐる許りに、これが單なる歴史的

事實と言ふ以上の懷しみを以て吾々日本人にも思出される事を喜ぶ。

石川三四郎氏は以上の三篇を通じて『最もよく、最も詳細に歐洲社會黨の運動を報告したる人なり』（日本社會主義史）と言ひ、堺利彥氏は『當時にあつては實に獨特の文字であつた』（社會運動小史）と言つてゐる。語は簡單だが、當時の新進の讀書靑年が、いかに酒井氏の通信を駭目して迎へたかゞ之に依つて想見せられるではないか。

三　インターナショナル最初の列席者

伊藤氏の弔文には又次のやうな一節がある。

『……余亦偶英國に在り、君は（フランスよりの）歸國に際し、迂路余を倫敦の客寓に訪ひ、寒喧を叙し終るや、君その齎らす所の行李を披き、余に示すに一大版の撮影を以てして曰く、此れ余が頃日白耳義「ブラッセル」府に開設したる歐洲社會黨大會に臨み、日本帝國を代表して列國の會員と共に倶に撮影したる所のものなりと。就て之を視れば、會員數十百人を下らず、婦人あり、壯夫あり、勞働者あり、面貌何れも壯快、而して君亦破帽弊衣、鬖髮蓬鬢其の間に立てり、余莽然として驚き、其由來を聞けば、君則ち意氣昂然として歐洲列國の建國の大體を語り時勢變遷の緣由を陳じ、貧富の不平均の積弊宿習を摘發して遺さず……社會主義を擴張し社會の宿弊を掃蕩し、以て新天地

酒井雄三郎氏の出席した一八九一年のインタナショナル
前列中央よりやゝ右山高帽を冠れるが酒井氏





パリ郊外にある酒井雄三郎氏の墓

を創始するの慨を以てせり。』

このブラッセルの社會黨大會とは一八九一年(明治二十四年)に開催されたものを指すのであらう。これへの酒井氏の出席は、一九〇四年アムステルダムに開かれた大會に於ける片山潜氏の場合のやうに有名ではない。片山氏の場合には丁度日露の交戰中ではありながら、吾々勞働者には敵國なるものなしとてロシアのプレハーノフと握手したり、副議長に推されたりして、劇的光景の主人公となつたため、非常に廣く知れ渡つてゐるが、酒井氏の場合は、日本の從來の社會主義の史家でさへも亦全く之に氣づかないでゐる有樣である。併しながらインターナショナルに臨んだ恐らくは最初の日本人として、今少しは注意を拂つてもよからうと思はれる。

この時の寫眞は今も未亡人の手に保存せられてゐる事と思ふ。

歸朝してからの氏は『社會問題研究會』を設けてその評議員となつた。これ恐らくは、この名を冠した會の最初のものであらう。(後に同名の會は二度も三度も起された)この時の幹事は明治十五年の例の東洋社會黨の中心人物なる樽井藤吉氏、西村玄道氏、それから今も健在で居らるゝ中村太八郎氏、評議員は稻垣示、三宅雪嶺、片山潜、シー・ガルスト、鈴木重遠、福本日南、陸羯南、佐久間貞一氏などであつた。創立の時期は諸書の記述がまち〳〵だが、明治二十五年と云ふのが正しいらしい。この會については酒井氏の記草された一文を『國民の友』で見た記憶がある。

歸朝後の文章で最も世論を沸騰させたのは『國民の友』に連載せられた『都築文學士の民政論を駁し、併せて世の曲學阿世の徒の惑を解く』であらう。當時山縣有朋輩下の四天王の一人として羽振をきかしてゐた都築馨六の新著『民政論』を散々にこきおろしたもので、今日一讀するも痛快淋漓の感がある。明治二十五年七月『排曲學論』と改題して一冊に纏められた。

氏を弔ふた諸新聞の記事が悉くこの一篇に言及せるに見ても、いかに世の注目をひいたかゞ分る。氏の著書には外に『今世歐洲外交史』『十九世紀歐洲政治史論』などがある。九皐と號し、茫々學人、窮巷隱士、八紘生などの變名も用ゐた。

四　劇的な變死

明治三十三年パリに開催せられた大博覽會のため、氏は再び農商務省の囑託となつて渡佛した。この時は朝日新聞の特別通信員も兼ねてゐたので、八紘生の名になる通信は紙上の異彩とせられた。それまで誨淫の書の作者として士君子の名を舌頭に上すだも汚らはしとしたゾラが、一躍人道の戰士として喝采されるに到つた例のドレイフュス事件直後の事とて、それが時のフランス政界に與へた波動の報道なども見えるのは、極めて吾々の興味をひく。

所がその三十三年も押しつまつた十二月になつて突如として氏の訃報が傳はつた。それも旅舍の

三階の窓から下の敷石道へ墜落して死したと言ふ異常な報知である。
この死は少くとも氏を知る者の間に於て、今も一つの謎となつてゐるさうである。
氏はそれより前からかなり激しい不眠性に苦しめられてゐた上、多くの人の中に伍する事を嫌ひ、殊にその長官であつた林忠政と意見が合はなかつたので、博覽會日本人事務所には起臥しないで、リュクサンブルの下宿にゐた。
時は朝の八時頃で、冬の事だからまだ人通りも少なかつた。二人のフランス人が敷石道で敷物の埃をはたいてゐると、上からドサリと音がして人が墜落して來た、それが酒井氏だつたのである。フランス人が駈けよつて抱き起すと『醫者、醫者』と二度言つて、暫くの後息が絶えたさうである。
ある人はこれを自殺であらうと云ふ。併し自殺にしては遺書が一通もない。それから落ちた時後で室を調べてみると、窓際へ椅子を寄せてその上にスリッパが片方だけ載つてゐた。
『醫者、醫者』と連呼する筈もない。殊にその少し前から日本への歸朝を樂しみにしてトランクなど詰めてゐられたさうだから、その點から推しても自殺ではなささうに考へられる。と自殺說を駁する人もある。
ある人はこれを他殺だと言ふ。H氏と意見が合はず屢々抗論したので、Hが兇漢を雇つて階上から投げ落さしたのだとの憶測である。私はまだ讀んでゐないが、何でもこの事は『やまと新聞』に

書き立ててゐるさうだ。

ある人は過ちの死だと言ふ。氏の舊友なりし伊藤大八氏は私に、酒も飮まない眞面目な男だつたのだから、或は神經衰弱でも昂じて一時的に氣が狂つたのではないかと語られた事があつた。未亡人などは堅く過ちによる死と信じてゐられるやうである。

私は兆民居士の最初期の門下に酒井雄三郎氏があり、最末期の門下に幸德秋水氏があつた事を、常に不思議な因緣だと思つて眺めてゐるものである。

そしてこの社會主義の先覺は、同じくフランス思想に浴澤した關係から早くから西園寺公に親しく、日清戰爭の後で公が朝鮮に使臣として赴いた時隨行した事もある。酒井氏が最も早い譯書なる『政理新論』(原名 philosophie de la Science Politic) には『亞哥剌士著、同氏門人西園寺公望序』とある。

この序の草稿は今もなほ酒井家に殘つてゐるので一覽を許された事があつたが正楷で認めた漢文で、所々朱字の訂正が入つてゐた。

昭和二年五月

社會小說研究

一　緒言

社會小說とは明治三十年代の前半期に、論としては內田不知庵、高山樗牛などが主として之を唱へ、作としては同じ不知庵を筆頭に後藤宙外、小栗風葉などの提供した若干篇を指す——これ明治文學史を一讀した事のあるものゝ、等しく思ふ所であらう。

勿論それが中心的焦點であるには違ひない。併し少し精密に調べてみると、その前にも後にも、社會小說の歷史はかなり永く根を引いてゐることに氣付く。卽ち後にしては日露戰爭終結の翌年に於てなほ、德田秋聲が『眞の社會小說』なる自らの抱負を發表して居り(『文章世界』三十九年十一月號)、前にしては明治二十年に早く明白に社會小說と銘打つて、藤澤蟠松、牛山鶴堂合著の『日本の未來』が刊行せられてゐる。

もしそれ此の原語が Social novel, Social fiction であるとすれば、社會小說の譯語こそ附してないけれど、旣に坪內逍遙の『小說神髓』に見當るのである。卽ち『小說の種類』の項にかうある。

『さてまた小說を其篇中に記載せる事件の性質によつて區別すれば、更に二種の小說となるなり。

曰く往昔《むかし》(時代《ヒストリカル》)、曰く現在《いま》(世話《ソシアル》)、即ちこれなり。』(東京堂版五〇頁、ルビはもとのまゝ)

それから、今その所在が見あたらぬが社交小說と書いてソシアル・ノベルのルビを振つたのを見た記憶もある。

そんな次第だから社會小說の語に依つて意味する所が又、人に依つてまち／＼である。殊に英語の Social fiction ドイツ語の Sozialen Roman フランス語の Le Roman Social 必ずしも同一意義でないことが、いよ／＼この紛亂を繁くした觀がある。

社會小說のことは或は明治文學史上の極めて小さき一斷面に過ぎぬと思ふものがあるかも知れぬ。併し以上の如く觀じ來る時は、その說明と硏究とは必ずしも容易ではないのである。私は先づ便宜上、『日本の未來』を最初にひきはなして單獨に吟味しておかう。

二　『日本の未來』

(藤澤蟠松、牛山鶴堂合著、明治二十年刊行なるは前述の通りである。春陽堂發兌)

これは上下二卷、堂々五百頁に近い大册で、社會小說の名を冠した恐らくは最初の作である上に、序文に社會小說の意義を規定してあるのが注目に値する。

この著者は社會小說をどんなものに考へてゐたか、換言すれば、何故に自作に社會小說の特稱を

冠したか。それはその數節を左に引く凡例が明かにするであらう。

「一、本書ハ代議政體ノ得失地方自治ノ是非多數政黨ノ弊害議員選擧ノ惡弊女子參政權ノ可否國會政黨ノ狀況等其他社會ニ顯出スル未來ノ現象ヲ故ラニ筆ヲ二百年ノ後ニ假リ試ミニ二三ノ人物ヲ設ケテ之レヲ論出シタルナリ。

一、年紀ハ今ヨリ二百年後ノ事トシタレドモ強チ拘泥スベカラズ唯我國々會開設後或ル時代ノ事ト見做スベシ。

一、書中往々今日ノ風習ヲ脱セザル所アリ之レ恐ラクハ未來依然トシテ猶今日ノ遺習アルヲ示セシナリ。

一、時刻ハ近ク子午線ノ改正ト共ニ新制度行ハルヽト雖モ讀者ノ知了シ易キヲ以テ舊來ノ規定ニ從ヘリ。

一、英語ハ將來我國ノ普通語トナルベシ故ニ書中ノ人物ニハ餘儀無キ場合ニアラズンバ多ク之レヲ用ヒズ而シテ學生ニ獨逸語ヲ用ヒサセ女子ニ佛語ヲ遣ハセタルハ聊カ見ル所アリテナリ。

一、或者曰ク藝娼妓ノ如キハ未來女權ノ擴張スルニ從ヒ全ク消滅ニ歸セント余ハ決シテ之レニ服セズ今ヨリ數世紀ヲ經過シタランニハ卒知ラズ未ダ一二百年間ニハ恐ラク其跡ヲ絶タザルベシ之レ今日歐米文化ノ度ニ徵シテ知ラルヽナリ故ニ余ハ之レヲ揭グ。

一、書中ニ歌アリ之レ今日ノ流行ニシテ既ニ陳腐ニ屬シ未來必ラズ廢滅ニ至ラント信ズレドモ今人口ニ膾炙シ人能ク之レヲ知ルヲ以テ假ニ之レヲ擧グ又三絃トアルハ必ズシモ今日ノ三味線ヲ云フニアラズ未來

ニ流行スル樂器ノ一ニシテ恰モ今日ノ三味線ニ代ハルモノナレドモ其ノ名ノ知レ易キヲ以テ假リニ之レヲ三絃ト稱セシナリ。

一、前編ハ冒頭ノ主義ヲ述ベンガ爲メ必用ノ人物ヲ顯ハセシノミ未ダ目的ノ論旨ニ説キ及ボサズ故ニ著者ガ深意ノアル所ヲ知ラント欲セバ請フ後編ヲ待ッテ之レヲ知レ。」（以下略）

この凡例だけからでも容易に推知せらるゝやうに、これは著者が理想とする代議政體の運用を二百年後の日本に假託して描いた一種の政治小説であり、ユートーピア物語である。政治を中心に『社會に……顯出する現象』を描き、後編に『著者の深意（即ち政治思想――木村註）』を含蓄せしめた點が、從來の馬琴流の勸善懲惡の稗史とも違へば、そのアンチテーゼとして現はれた春廼家の寫實小説とも違つてゐる。そこで社會小説と呼んだのではあらうが、これは後に樗牛、不知庵の意味した所とはいたく異るは勿論である。

私は今、この長い小説の梗概を詳しく述べてゐる暇をもたぬ。たゞ改進黨の主領弓野憲雄が生活行路に幾多の波瀾曲折を經た後、選擧に大勝を得て「君主ハ國會議員多數ノ信任ヲ得タル者ヲ擧ゲテ大臣トシ」の憲法の明文に隨ひ内閣を組織して、九州自治案と女子被選擧權案とを議會で通過さすことを經とし、お多分に洩れず幾多の佳人を配して戀愛の展開するを緯としたものであると言へ

ば、大體の想像は付くであらう。

たゞ聊か論題の中心を外れるが、明治十八年頃から憲法發布前までに、この類のユトーピアの數が夥しく出版界を賑はしてゐることに、讀者の注意を促しておきたい。元來ユトーピアの生れる社會條件と言ふものはほゞ一定してゐる。たとへ根據に乏しい架空譚だとは言へ、鼓腹して庶民が太平を謳歌してゐる時代などには決して出現するものでない。古き社會制度が決潰しながら、まだ新制度は建設されず、庶民が不安と渾沌の中に堪へ難い思ひをしてゐる時代、もしくはその決潰の中にあつて新制度建設の曙光の漸く見えかゝつて來た時代に、發生しがちなのである。この故にたとへば人類が生んだ最大のユトーピアなるプラトウの『理想國』(Plato, Republic) はペロポネソス戰爭後の社會的混亂から發芽し、ユトーピアの語の發源なるトモス・モーアの作 (Thomas Moore, Utopia) は中世紀なる古き制度と、ルネッサンスなる新組織新興味との間に生じた間隔を繋ぐ橋梁として生じた (Lews Mumford, The Story of Utopias p. 11—12)

顧つて『日本の未來』を考察するに、これの現はれたのも亦、わが邦がほゞ同一の社會狀態にあつた時だつたのである。卽ち幕府の滅亡と共に封建制度の足場が崩れ、西南戰役でその留めは完全に刺されたが、新らしき自由時代を象徵する代議政體は數年の先に約束されたゞけで、實體はまだ海のものとも山のものとも分らぬ。その中間期であつたればこそ、かゝるユトーピアの發生を見たの

である。明治十五年にモーアのユトーピアが『良政府談』（井上勤譯）と題して譯刊せられたのを皮切りに、『二十三年未來記』『女子參政蜃中樓』などこの種の著書は隨分と澤山現はれた。但しそれらの中で社會小說と冠したのはこの作だけのやうである。が、後の社會小說論とは何等の聯絡もないばかりではない。かゝる書の存在が全く忘れ去られるか、又は見落すかされてゐた。

三　民友社の『社會小說』

その後約十年も經過して、社會小說の題目は急に文壇に鋒火を擧げ、一時は全くその中心焦點なる觀をさへ呈するに到つた。その起因は民友社にある。卽ち『國民の友』第三百卅號（明治二十九年十月發行）は『社會小說出版豫告』として左の如き宣言を發表した。

『明治二十二三年頃は我が文壇に新進作家の輩出尤も多かりし時とす、從來の御家騷動、復讐談の陳套を壓倒して新たに作家が新見を開拓したるの時期なりとす、此の時に方て我が社は努めて新作家の創作を促がし旣に其の名什巨觀を世に紹介したるもの尠からず、亦以て明治文壇に一の功なしとせず、爾來星霜幾變、國運伸張して社會の現象益々多色、多端。是れが裏面の消息を傳ふるを以て任とするの小說作家たるもの又以て花鳥風月に安眠するの時に非らず、宜な

り曩日の奇矯作家も亦念頭を實在の社會に置き、月雲風流、白粉紅膩、唯嬌、唯艶是れ喜ぶの文士も亦、社會、人間、生活、時勢といへる題目に着眼して以て數年錬磨筆硯を致さんとす、此際に當つて我社「社會小説」出版の擧あらんとし、明治文壇の新進作家、夙成家をして各々其の執る處の筆鋒を一所に集注せしめんとす、期する處は文壇の革進にあり、斯の如くしてよく名篇大作出て、明治文學界の生産をしてよく不朽に傳ふるを得ば、吾人の冀望亦空しからずといふべし、

「社會小説」は毎月一回若しくは隔月一回左に列記する作家の脫稿を待つて順次に出版す（毎冊菊版二百頁内外）

第一齋藤綠雨（本年十二月下旬）第二廣津柳浪（三十年一月下旬）第三幸田露伴（同三月上旬）第四後藤宙外（同四月下旬）第五嵯峨のや主人、第六尾崎紅葉其他』

民友社がかくの如き計畫を發表するまでには、その玆に歸着せざるを得なかつた社獨特の歴史乃至は傾向があり、そして此の渺たる宣言が文壇に一大旋風を捲き起すに到つたに就いては當時の社會的情勢がある。但しその社會的情勢には後の機會で觸れるとして、玆には先づ『國民の友』同人の思想傾向に就いて聊か說く所がなくてはならない。

多くの社會主義史攻究家が異口同音に言つてゐるやうにあの雜誌は社會問題を一般に傳播した最も有力な功績者である。中江兆民門下の逸才酒井雄三郎がパリの客舍から三回に涉つて寄稿した『社會問題』は、恐らくこれを論じた吾邦最初の文獻の一つであつた。又德富蘇峰の執筆に係る『勞働者の聲』は、勞働者の團結、勞働組合の創設を叫んだ第一聲だつたのである。外に魯國虛無黨の事情も詳報すればヘンリ・ジョージの思想も紹介した。約言して繰返す。『國民の友』は社會問題乃至社會主義の傳播に、多くの貢獻をした最初の有力な機關だつたのである。

次いで彼等が對文學觀を窺ふと、彼等は藝術の獨立性を認むる藝術至上主義者ではなかつた。藝術をも何等か社會的な實際効用の具、卽ち經世の方便たらしめようとしてゐた。

その一例は山路愛山對北村透谷の論爭の中に窺はれる。愛山は透谷を高踏派と呼んだ。透谷の態度が藝術至上主義的だつたからである。透谷は愛山を地平線下と罵つた。愛山が、文章は事業なりと冒頭して、これ第一は、文章が爲す所あるが爲なり。第二は世を益するが故なり、第三は人世に相涉るが故なりと論じた、からである。（文武堂版『透谷全集』七二頁『人生に相涉るとは何の謂ぞ』參照）

吾等は茲に愛山透谷の論爭の行司をしてゐる暇はない。只以上の言によつて民友社の最も有力な論客だつた愛山の文學觀がかくの如くに實際的であつた事を讀者が諒知されゝば足るのである。

第二例としてはたとへば德富蘇峯の左の如き論文の一節を見よ。

『今や國運一轉の大機に際し、世界の風雲正に急に國民をして讀ましむべく、歌はしむべき好題目天下に滿つ。小說を國民讀本として社會を敎育するの要は、大勢を叱咤して一國を指揮するの要と共に切也。徒に彫蟲の末技を弄し、目的なき小文學に齷齪たるは男子の恥づべき所也。一國の政治は常に一國民を統率するの大精神なかるべからず。一國の文學は亦常に一國の文學を統率するの大精神なかるべからず。吾人は世界の傾向が漸く將に小說を以て社會敎育の一要具となさんと欲するを見、我が文學界の廣からざる所あり、健全ならざる所あり、統一せざる所あり、時勢と相涉らざる所ありて、未だ以て國民を敎ふるに足らざるを見、深く我が文學者の爲に其經世安民の大抱負なきことを惜まざるを得ざる也。』(明治廿八年十一月三日號『國民の友』)

これ『國民讀本としての小說』と題する論文の末尾である。

斯くの如く社會問題の傳播に熱心なる者が、斯くの如き實際的効用を主とする文學觀を抱いてゐるとすれば、歸結の社會小說提唱となつて現はれることは不思議でない。そこで社會小說叢書出版の宣言となつたのである。

四　反對論——帝國文學と樗牛

民友社の宣言は、宣言と言つても實の所、新叢書刊行の豫告であり、もつと平俗に言へば廣告文に過ぎない。併しこれが水面に投ぜられた一石となつて、賛否兩樣の一大反響が起つた。先づ反對の聲を上げたのは『帝國文學』記者で時評欄に『社會小說』の一題目を揭げ、左の如く論じてゐる。

『「社會の凡ての罪惡、凡ての不幸は、その之を犯し、之に遭へる個人が、獨り責を負ふべきものにあらずして、社會全體が連帶して、その責に當らざる可らず。されば、詩人たる者は、貧しくて盜し、窮して身を賣る世にも不幸なる者の爲めに、一掬同情の涙を濺ぎ、無辜の人をして此の悲慘の極に至らしめたる無情なる社會の組織を改善するの天職を有するものなり。」とは、獨逸の自然派の詩人が、大聲疾呼して、唱道したる警語にして、社會小說の淵源は實に玆に存せり。然れども、此等詩人の述作の跡に就きて見れば、その餘りに貧者の爲めに氣焰を吐きたるが爲めに却りて富者の反抗を强め、貧富兩者を輯睦せしめんとの折角の企は兩者をして愈々隔絕反目せしむるに終らしめたるの觀あり。社會小說が社會問題解釋上取るに足らざるは、實に

斯の如きものあり。若し夫その詩歌としての價値を問はゞ、その取るに足らざる事の猶甚しきものあらん。抑も詩想はその獨立不羈毫も他の拑制を蒙らざるの時に於てのみ獨り能くその美を發揮するを得るものにして、時人の狂奔する政治、社會の問題の奴隷となり、その驅使に供せらるゝに至りては、その製作に係る詩歌は、人の精神を自由高潔ならしむると謂ふ詩歌の第一要諦を失ふなる可し。假令、社會の狀態の窮屈を描き、政治上の倒行を曝白して、一黨一派階級の爲めに氣焰を吐きて一派讀者の同情を博するも、そは、讀者が當時の境遇に不滿なるより起る同情にして、詩歌の巧妙なるより起るものにあらず、之を要するに政治、宗教、社會小說の如きは其內容は如何に眞面目なるも到底小說の最高最美のものを成す能はざるなり。』(明治二十九年十二月號)

この論文で特に注意すべきは、社會小說を社會問題解釋の上からは取るに足らぬものであり、藝術品としては到底最高最美のものでないと言つて、即ち實用的にも鑑賞的にも排斥してゐる點である。その翌三十年には、社會小說に對する同じやうな解釋、同じやうな非難が高山樗牛によつて放たれた。

『吾等の觀る所にして大に謬らずむば、今の社會小說と謂ふ所のものは、作者が一種の私心に式して、僅に社會生活の偏頗なる一面を描き得たるものに非ざるか。換言すれば、殊に社會の不幸なる階級に同情し、是の如き不幸の因緣を以て外圍の境遇に歸せむとしたるものにあらざるか。是の如くにして社會の組織體制に免れざる幾多の缺陷は、個人的罪惡の辯解として描寫せられ、随て社會的勢力の過重なる分配を制し得たる一半の階級は、殆ど社會的罪惡の根蒂として觀察せられたるに非ざるか。是の如きは小說として價値無きは素より論を待たず、吾等は社會道德の不健全なる暗潮を代表するの文學として大に之を排斥せざるを得ず。』

又、

『今の所謂社會小說は、貧弱者に訓ふるに服從を以てせずして、反抗を以てし、犯罪者に訓ふるに、悔悟を以てせずして、遂非を以てし、不幸者を導くに救濟の法を以てせずして、破壞の道を以てす。之れ啻に社會道德に稗益するところなきのみならず、又彼等の爲に眞摯なる作侶と稱するを得ざるなり。之を要するに吾等は今日の所謂社會小說を歡迎する所以を知らざるなり。』(縮刷樗牛全集舊版第二卷四三二頁)

後に樗牛は社會小說の熱心な支援者になつたが、初めは斯く反對の狼火を擧げたのである、但し

彼が初めに反對し、後に支援したのは決して態度を轉換して說を二にしたためではなく、實は社會小說に對する彼自身の解釋が一變して來たのである。

五　贊　成　論

以上が社會小說に對する反對論の主なる者である、次に贊成論を拾つて行くと『每日新聞』の記者は斯く論じた。

『今の小說界は戀愛談の壟斷する所、而して小說家は社會風潮の兒たるに止まり、未だ一世を指導し、社會の風潮を率ふるの大抱負あるもののなきを看ては、竊かに小說家なるものの品位如何を疑ふ。ベラミーのルッキング・バックワードの如き、無名氏のシーザルス・クラムの如き、社會百年の後を先見し、社會に示すに將來の希望を以てし、一代の指鍼車、一代の豫言者となるに足る深邃遠大の眼、剴切痛快の筆を以て、此の大思潮の先導者たるの大抱負を有する者、今安くにかある。吾輩は政治小說、社會小說、科學小說、義俠小說、冒險小說等の如き、戀愛以外の小說第三十年の新文壇に陸續出でゝ、社會の思潮に一振盪を加へむを望む。』

ペラミイの『ルッキング・バックワード』を一つの指標としてゐる點が、この論文中、就中注目すべきであらう。次に竹越三叉の主宰した『世界の日本』に左の如き論を見る。

『紅葉の粹、柳浪の深刻、論じ來れば尺幅の小景に過ぎず、此小景を以てして、能く喝采せらるるものは其寫實の筆に、心理觀を加味すれば也。試みに「河内屋」「多情多恨」「今戸心中」などの諸篇を繙け、其の場面の局小なるは驚くべき程にして、心内の波瀾を描寫するに反て精緻なるの傾向あるに非ずや、此體の小說は寫實小說と曰はんより、寧ろ心理小說に近きものに非ずや。

今の所謂寫實小說は、小なる範圍に於て迂曲屈折の筆法を取る。大なる範圍に於て大なる社會を寫見する能はざる也、則ち個人の寫實と言ふを得べきも社會の寫實と云ふ能はざる也」（中略）社會小說とは何ぞや、抽象的に言へば、人と人との團隊を描寫する也。精細に論ずれば政治小說も社會小說なるべく、勞働小說、貧民小說、貴族小說など何れも社會小說たるを失はざるべし。要するに社會小說の本領は、個人または個人の關係を主とせずして、個人と社會の間に存する消息を捉えて描き出すにあり。故に個人を說明せんがために社會を假ることあるべく、社會を描くが爲に個人を客とすることもあるべし。兎に角にその根據を何れに置くに係らず、個

人を社會の關係に包括的に描寫するものは社會小說と名け得べき也。（中略）余輩が今の作家に希望するものは、今少しく論文的ならんこと也。です、であるの口調を離れて、奔放自在に溢るるの意氣あらんこと也。小說は素より論文に非ず、別に主張あるに相違なかるべしと雖も、苟も人生に相涉らざるものに非る以上は、氣內に溢れ、感外に迸るの大精神ありて欲しきものに非ずや。』

同じく社會小說に贊するに、さきに揭げた『帝國文學』の時評を駁擊したものも一二ある。卽ち『八紘』に左の如き論を見る。

『大詩人の作の紙背を叩けば、必らす人生を觀じ、世界を觀じ、宗敎の觀念を含み、哲學の思想を帶びざるはなく、最高の美自ら其間に存するを知らずや。帝國文學の一記者、其の二卷十二號に「社會小說」と題して「之を要するに、政治、宗敎、社會小說の如きは、其の內容は如何に眞面目なるも、到底小說の最高最美のものと成す能はざる也」と。是れ恐らくは淺薄なる政治、宗敎、社會小說に對して發せる過激の言なるべし。小說は人間を描くもの也。人間はひとり戀愛歌舞の動物にあらず、人間は社會をなす。豈に政治、宗敎なからんや。元より小說は

此等の奴隷にあらずと雖も、社會を寫して切實沈痛に、宗教政治を說きて委曲精到なるを厭はず、唯美、如何を顧るのみ。』

又『太陽』にも趣意の大要左の如き論が載つてゐる。

『帝國文學の論は獨逸にのみ目を注ぎて、我が國情を知らざるの謬見也。社會小說といふも共産黨、虚無黨などの主義を鼓吹するものにあらず、斯く解するは社會問題の重要なる意義、即社會の發達に必要なる社會的道德問題たるを知らざる故也。文壇に社會的傾向増長するとて、必ずしも文士が富豪を罵て共産論の奇焔を吐くに非ず、風葉が「世話女房」に天理教の迷信蔓延を對象とせる、早稻田文學所載「袖乞」の乞食の病みて、子を捨つるまでの景情を歌へる、二作者共に共産黨にもあらず、富者を仇敵視するものにもあらず、而もよく社會問題に觸れたるもの也。文學は自由藝術たれば、之を一種の目的、例せば贅澤娛樂、若くは政治、若くは說法の方便と見る者を、極力排斥せんと欲す。されど自由藝術は飽迄自由圓融なり、題目其物の爲に製作を是非すべからず、小說詩歌が社會的題目に傾くとて、傾くこと自身を非議するは大早計也。帝國文學記者が「政治、宗教、社會小說の如きは其内容は如何に眞面目なるも、到底

小說の最高最美のものを成す能はざる也」と云ふ如きは、近頃文壇に萠芽し始めたる喜ばしき現象を呪咀する者にして、洵に稽へざるの甚しき者也。』

六　鷗外の紹介

別に贊成したのでもなく、又反對したのでもないが、森鷗外に『ホルレンデルの社會小說』なる一篇がある。（『月草』所收、執筆年月不明）極めて零細なる斷章で、內容は外國作品の紹介に過ぎないが、只、筆者が當時の論壇で羅馬法王の如き地位にゐた人だけに、此の際見遁がすべきではあるまい。

『獨逸人ホルレンデルが小說「エズスとユダスと」は近ごろめづらしきものなり。小說の主人公は伯林大學の一學生なり。もと保守主義を懷ける小吏の子なるが、社會主義に心を傾けて、自らもこれを履行し、遂に社會黨員となりぬ。この學生の僦居する家は、風儀壞滅したる工人を主人とせり。此泥中にも蓮花生ひいでて、その名をレエネといふ。レエネは家の長女なるが、操行端正にて、彼學生を愛するに純潔なる情を以てせり、學生は父親に容れられずして、家眷と交を絕ち、いよいよ社會黨のために力を竭さんとしたれど、黨人は猶嫌疑を其間に置き、あ

る時殺人罪に關係ありと誣ひて、彼をプリヨツチエンの湖上の獄舍に入らしめき。厄釋けて後學生とレエネとは共に家を成ししが、貧に迫りて反間の謀を行ひ、懺悔して止まず。その頃レエネもただならぬ身となりければ、この儘にてあらんこと、産れん子のためにもよろしからざるべしと思定めて、スプレエ河に身を投げつ。恰も是れヰルヘルム第二世が社會黨に關する大詔を發する時なりき。學生は當初理想の爲に耶蘇となり、後には境遇の爲にユダスとなりしなり。ホルレンデルはゾラが敍俗の自然派よりは、スカンデナヰヤ詩人の、境遇によりて變ずる心の分析を事とする自然派に近し。其等は詩趣少なからず。學生とレエネとはいふもさらなり、墺太利うまれの少女グズテルが上を敍したる處處に、えもいはれぬ面白味あり。この小說は社會主義のために作りたる傾向小說にあらず。學生は後にみづから悟りて、眞の改革は非常の才あるものの能く爲すところにあらず、中人の實力に待つことありといへり。矧や學生の口を藉りて、所謂新技術は革命家若くは急進家の技術以外に力を用ゐること能はずして、僅に技術によりて志を言ふに過ぎずといへるをや。さらば作家が特に其學生を書き出したるは何故ぞ。讀者は其主人公に對して、多少の憐をなすべしと雖も、これが爲に怒り、これがために泣くこと能はず。いかにといふに、その病める如く、狂せる如きところに、末路一躓の原因明に見ゆるをもて讀者は唯果せるかなといふのみなればなり。』

(ロ)　七　早稻田文學の精算論

以上の諸說を審査して先づ何人も氣付くのは、『社會小說』なるものの語義が極めて曖昧なるため紛爭の一部は少くとも各自が此れに勝手な解釋を與へてゐるに起因する點である。そこで常に文壇諸問題の行司役の如き地位にあつた『早稻田文學』の彙報は一應諸家の說を列記しそれを次の如く五樣に分類した。

(一)社會小說とは、貧民又は勞働社會の爲に氣を吐かんとする一種の傾向小說也（『帝國文學』記者の解これに近し）

(二)社會小說とは、敢へて貧民又は勞働社會の爲に、特に辯護するものにあらずと雖も、在來の作家が見落せる社會下層の眞相を主題とするものを云ふ（『太陽』記者の說これに近し）

(三)社會小說とは、從來の作が戀愛小說の一隅にのみ偏せるに對し、社會の全體即ち政治、宗教、その他あらゆる部面に、廣く材を取るものを言ふ也。（『八紘』記者の說これに近し、『太陽』記者のも或る所にては此の說に似たる趣見ゆ）

(四)社會小說とは、人間の心裏の波瀾を精寫する在來の心理小說、個人を描くに偏せる在來の

寫實主義に對し、社會を主として個人を客とし、心的狀態よりも外界の現象に重を置くものたらざるべからず（『世界の日本』記者の論これに近し）

（五）社會小說とは、一代の風潮を指導し、社會の豫言者たる任務を盡くすに堪ふるものたらざるべからず（『每日』記者の論これに近し）

なほ玆に所屬の言ひ洩らされた說を試みに分類し附言するならば、民友社の說は（三）に近く、樗牛の論は（一）と差異なく、鷗外の解は稍々（二）と吻合するであらう。『早稻田文學』は分類したに止まらず、その一々の說を左の如く批評した。

『苟くも美學の大體に通ずる者は、誰れか傾向小說が、詩美を樂む脫我淨光の境より、吾人をして厚生利用の俗界に墮落せしむる恐あるを知らざらんや、隨ふて小說の本領より見て此の點を貶すべきは萬人の異議なき所ならん。されば第一解の社會小說の獎勵すべきものならぬは無論也。第二解の社會小說は此れ單に從來狹隘なる選材の區域を、下層の方面に向つて擴張せよと云ふに過ぎず、吾人の目よりすれば、特に之れがために小說に異目を樹つるの要を見ず、第三解は今日まで幾回も繰返されたる、作家の眼界を大にし、主題を廣く社會の八面に探ぐれと

云ふと、毫もその意異なる所なし。特に社會小說の旗幟を之れが爲に飜すの必要ある所以を知らず、第四解に至りては其の言美にして其の實行はるべからざるの說にはあらぬか、試みに思へ、社會を主とし個人を客とせる小說は奈何なるものぞと。若し斯る小說成立つことあらば、そは主人公なく、隨ふて性格の見るに足るものなく、恰も一篇の通俗沿革史、又は風俗史の類と選む所なきものを得るに到らん……第五解は大詩人の手に成る傑作が、往々生ずるの結果を、今日の文壇に要求せるもの、希望としては至當なれども、之を强ひて主張すれば、小說をして一種の空想談もしくは冷硬なる論策の書とならしむるの虞なしとせず。（『早稻田文學』明治三十年二月）

右の早稻田文學彙報記者の論を、それまでに現はれた實在の議論の精算とするならば、それに對して、社會小說の將にあるべき當爲の分類とも言ふべきものが金子筑水に依りて揭げられた。『所謂社會小說』（早稻田文學明治卅一年二月號）がそれである。彼は社會小說の主なる範圍として、

（一）近世の社會主義（ソシアリズム）に關する事想を描けるもの
（二）社會の個人に對する關係を描けるもの
（三）漠然謂ふ小社會に關する事想を描けるもの

（四）全體としての社會の行動を描けるもの

の四種類に分類し、更にその一つ〳〵を詳說した。その第一に就いて彼は言ふ。

『近世の社會主義は現在の社會問題中、主要なるものゝ一なり。下は勞働社會對資本家の問題より、上は平民對貴族の關係、被治者對治者の關係、幼者對長者の關係、弱者對強者の關係、無教育界對有教育界の關係等一々枚擧に遑あらず。フェルヂナント・ラサール、ヘンリー・ジョルジを產み、マルクス、エンゲルス等を出だしゝ社會主義は、諸壇のラサール、ジョルジ、マルクスを出だすに足らずとせんや。勞働社會對資本家の境遇を描くも可なり。無教育界對有教育界の事態を寫すも可なり。要は廣く社會の歷史上、社會主義の現はるゝ原因、勞働社會と資本家と鬪爭するに至る所以の動機、有教育者と無教育者と分かるゝ所以の人生觀等に着眼するにあり。作家必ずしも豫め想を構へて事を作するを要せざれど、讀み行くうちに、社會主義の起る動機を讀者に感得せしむるを、此の種の小說の上乘なるものとすべし。』

社會小說に社會主義小說の意を含蓄させ、ラサール、ヘンリ・ジョージ、マルクス、エンゲルスの名を指示して論を立てた所は、當時の文藝批評家中にあつては一異彩を放つてゐる。

更に彼は第二を詳說して『そも〳〵個人と社會との間には何等の約束あるか、個人は實際社會のために一身を犧牲に供するか、社會は實際個人の犧牲を先天の約束とするか、此等諸問題の現はる複雜なる世相を觀ぜば、其の裡に人生の祕密を發見し得ざるべきか』と言つてゐるが、此れは正しくイブセンを初め近代劇の諸作家の主要題材となつたものである。第三は全分としての社會に對する一分々々の社會の謂ひで、たとへば政治社會、實業社會、宗教社會、職工社會、花柳社會などを言ふ。第四の全體としての社會とはそれに反して、卽ち一分々々の社會ならぬ全分の大社會の謂ひなのである。さすがに筑水は當時年少氣銳の學者であつたゞけに、彼の言說に依つて社會小說の對境が非常に明瞭に輪廓づけられた事は爭ひ難い。

八　作品の缺如

さて社會小說の呼び聲が一度傳はると共に、議論は上述の如く非常に賑やかに諸方に應酬せられたけれど、作品はと言へば此れは一向に現はれなかつた。卽ち肝腎の民友社企畫の叢書からして完成はおろか着手だにせられた樣子はなく、或は豫定を變更して柳浪の作を第一編、露伴の作を第二編として刊行するのだと云ふ風聞なども傳はつたが、それもどうやら煙の如く消え失せた。

然らば民友社がその遂行に不熱心だつたかと云ふに決してさうではない。それは彼等が外國作品

の紹介移植に頗る努めてゐる事によつても明證される。彼等は、彼等が解釋する意味に於ての最大最高の社會小說家をヰクトル・ユーゴー（Victor Hugo）に見出した。蘇峰の舊文を閲讀したものは、彼が如何にユーゴーの讃嘆者であつて『九十三年』を推稱してゐるかを知つてゐるであらう。又人見市太郎は『ユーゴー』の評傳を刊行してゐる。これ題材をマアジアルス（Marzials）の傳に仰いだものであるとは言へ、著者に傾倒の熱意がなかつたら、あの感動に充ちた文字とはならなかつたに違ひない。森田思軒が數々のユーゴーの小品を譯載したのは『國民の友』であり、その門下原抱一庵が『レ・ミゼラブル』を譯載し初めたのは『國民新聞』であつた。

さう云ふ事情にあつたに拘はらず、創作の絕無だつたのは、蓋し文學は寧ろ酒を醸造する如く、自在に作製し得るものでないから、提唱した議論の主旨に副ふ名作が直ちに出來る場合もあれば、又結局議論倒れになつて出來ない場合もある。民友社の社會小說叢書の噂が煙と消えたのはその後の場合だつたのであらう。いや、もつと赤裸々に言へば、實は民友社の依囑した作家の中に、社會小說を創作し得る程、明白に社會意識を把持してゐた者が無かつたので、僅かに此の任に堪え得る者は、從來の傾向から推して廣津柳浪が只一人であらう。而もその六家は當時文壇の最も目星しい大立物であつたのだから、今日の言葉で言ふならば『既成文壇の諸作家』は、この新風潮に乘り得る資格が無かつた譯になる。

顧みれば民友社の叢書の豫告の出たのが二十九年十月、そして諸議論の一應の精算とも見るべき金子筑水の論文の發表されたのが三十一年二月、その間僅かに一年半にして、今の言葉で言へば『作品行動なきために』社會小說は早くも文壇中心の焦點より忘失し去られやうとさへした。此の燒木杭に火を點じて社會小說論を再燃させると共に、自ら作品を提供して、兎も角も此れを實行なき議論倒れにさせなかつた功績者は內田不知庵である。そして此の時は議論としては高山樗牛が直に之を支持し、作品としては後藤宙外、小栗風葉などが不知庵に追隨した。吾等は先づ不知庵の言說に耳を傾けやう。

九　內田不知庵の主張

それまでの內田不知庵は視野の濶大で、筆鋒の苛辣な批評家、又は海外文藝移植のすぐれた先覺者だつたと言ふ以外に、民友社に客員として加はつてゐて、蘇峰などとも親しかつた事を、勘定の外に置いてはならない。

但しさすがに不知庵は民友社一團の如く文學を經世の效用に殉ぜしめるのみが能だとは考へて居らぬ。が彼が洽博なる泰西文學の素養は彼に、文學を、當時漸く文壇の覇權を掌握して來た硯友社の如く、通人趣味な、戯作氣質のものでよいとして、滿足してゐることを許さなかつた。彼がこの

不滿は、生來の苛辣な諷刺皮肉に長じた性癖と交つて、しば〳〵慷慨の言說となつて現はれた。

明治二十八年の五月には『戰後の文學（國民をして機運に乘ぜしめよ）』が國民の友に出で、日淸戰爭に大捷した日本が、戰爭にのみ勝つて平和の事業に怯たらば、たとへ世界を屠戮征服しても畢竟士蠻の行爲のみと喝破した。併し此の論文は戰後の文學と題してあつても、特に文學と限るより、文化一般に向つて或る方向を指示したものと言ふべきである。

明治三十一年九月の同誌には『政治小說を作るべき好時機』が出た。彼は小說家に呼びかけて言つてゐる。卿等が戀愛世界に注ぐ觀察を一轉して政治界近日の大變革を見よ。十數年前流行した所謂政治小說の蜃氣樓的架空譚が今や悉く實現せられて、下宿屋の侘住居から直ちに大臣官邸に移轉する者、無位無官から一足飛びに內閣の椅子に坐するもの、或は賃馬車を傭うて顯榮を衒ふもの、或は大禮服の算段に魂膽を凝らす者、或は恭々しく官位を肩書した名刺を調達するもの、或に俄かに尊大倨傲を盡して勅任を矜式するもの、若くは新裁のフロックと金鍍の時計鎖とを力に威儀堂々勅任として用ふべきを大臣の面前に示す政黨游泳者、若くは自由民權の爲に家產を蕩盡し又は鐵窓の苦楚を甞めた履歷を楯に大官を貪らうとする獵官餓鬼、ステッキ仕込杖を揮廻して鐵腕健脚選擧場裡を蹂躪した功勞を廉にせめて多少の月給に有つかうとする渡り壯士、凡てこれ滑稽劇の材料ではないかと。

尤も決して眞つ直ぐに物を言はぬが不知庵の癖である。この論文は形式こそ文壇に呼び掛けてゐるが實は當時の政界の事情を痛罵するのが主目的であつたので、年表を繰つてみると、この年六月二十六日伊藤博文は大隈重信、板垣退助と會して内閣引渡しを議し、二十七日組閣の大命大隈、板垣二人に下るとある。卽ち明治十年代初期から謂はゆる自由民權運動の志士が、流血下獄の彈壓をも意とせず、一意只蒐けて來た最初の政黨内閣が曲りなりにも出來たので、不知庵の列擧したやうな滑稽は隨所に演ぜられたに違ひない。(因みに言つておく。明治年間、政治界の現象の文學に影響を及ぼしたことは、自由民權時代が第一で、夥しき政治小說の濫刊を見——日本文學講座、第十卷齋藤昌三氏執筆政治小說研究參照——ついではこの隈板内閣出現後で社會小說の呼聲が高くなつた。外には政治の文學に目立つ程影響したことが絕無だと言つていゝ。)

たゞ、論の中心がいづれにあらうと、不知庵の視野が、他の文人に擢んでて政治の方面にも及び、それと文學との交涉について考へてゐたことを、讀者に銘記しておいて貰ひたい。これは或は後に極めて興味ある結論を引出す因子となるであらう。

翌三十二年五月の『新小說』において彼は又かく論じた。

『今の小說家は、身常に社會を離るゝが故に、全く時代の精神を理解せず。政治、宗教、學術の

社會は、彼等にとりて風馬牛のみ。されば其の作は新聞紙の三面雜報を延長したるに過ぎず。見よや我邦の今日は、政治、宗教、倫理の上に於て新舊思想の乖離は將に來らむとする大衝突、大破裂を豫告するに非ずや。日々の新聞紙を讀むも、感與百出、慨くべきもの、恐るべきもの、宛然維新前後の歷史を讀むと同一の感あるに非ずや。翻て文藝俱樂部、新小說を繙けば、天下は太平無事に泥み、戀愛に狂し、放蕩に勞れたること宛として隔世の如し。』

これ彼が當時の文壇に對する不滿の表白で、謂はゞ社會小說提唱の消極面である。更に同年出版せられた『文藝小品』中の『嚼氷冷語』を讀むと左の如き一節がある。彼が社會小說論としてなしたる多くの言辭中、積極面の代表的なものと言へよう。

『……若し婦女子の翫讀以外の目的を以て述作するものは今少しく社會と密接して實際活動の事情を審かにせざれば協はじと信ず。而して活動社會の實情を知るには出來得るだけは公生涯に身を投じて親しく觀察するのが第一の方便である。明窓淨机の下に瞑目して考察するものが時として其局に當る者よりは深く透徹する事があるが畢竟大體の觀察に過ぎないのは云ふを待たない。且つ今の作家の如く社會の大問題を見るに茶番の相談よりも無頓着なるは是等問題を

解釋する能力なきに由る歟然らざれば故さらに世間を冷視する風流病に憑付かれてゐるかで何れにもせよ事情の大體をすら窺ふ事は出來ないのである。夫故社會の實情を觀察する方便としても傍ら公生涯を送るが却て便宜である。且つ作家も社會の一人なら古は知らず今の人權發達したる世の中に好んで社會上の權利を放擲する事があらうや。社會の利害休戚は文士の頭上にも落つれば苟くも山林に隱るゝにあらざる限りは須らく進んで權利を主張するが卽ち操觚者の社會に於ける位置を高むる所以である。今の作家の如く世間を煩さがりて隱君子を氣取り却て社會の食客扱ひをされて一つには其實情に疎くなり一つには當然享有する權利を放擲して文士の位置を高むる事を爲さゞるは余の與せざる處である。さりとて强ち世間の瑣事に奔走せよといふのではないが機會の投ずべきあらば傍ら活動社會に加はりて其實情を審かにし其材料を饒かにし以て今の單調なる戀愛小說を複雜なる社會小說たらしむるは卽ち文壇の革新である。(爰に社會小說といふは別に此種の小說あるを意味するにあらず。普通人事を描くと同時に社會一般の實情を髣髴せしむるをいふ。)』(五六四――五六六頁)

卽ち見る、不知庵の言ふ社會小說は、最早社會問題乃至社會主義を題目とする傾向小說とは分離し去つて、もつと漠然とした意味の社會である事を。廣く言へば凡そ人間の生活にして社會的でな

い斷面はない。が、幽室の默想、茶の間の戀愛、庭園の逍遙などは、普通には社會と言はない。通俗には社會とは、もつと動的な、ダイナミックな、生活的脉搏の旺盛な、人事の交渉の頻繁な斷面を指す。不知庵の社會小說論は一口に言へば、之を捉へよと言ふのであらうと思はれる。傾向藝術と言ふと、直ぐに藝術の神聖が冒瀆せられたやうに早飮みこみをして毛嫌ひする批評家達も、かく傾向的分子を抽出し去つて提供されゝば、決して躊躇するものではない。不知庵の議論は筑水等によりて折角明確な規定を得かけた社會小說の語義を、再び捕捉に難い漠然たるものになし去つた難はあるが、その代り、どの文壇人の胃の腑にもつかへずして嚥下されるやうに調味した効があつた。

一〇　高山樗牛の贊成論

この不知庵の社會小說論に最も多くの贊意を表した批評家は高山樗牛である。彼は明治三十二年六月の太陽に『評家及び作家としての內田不知庵』なる論文を寄せ『文壇寂寞の折柄、內田不知庵の卓拔なる小說論に接するを得たるは、恰も空谷に跫音を聞くの思あり』と言ひ『今の詩文人が小成に安じて邁往の氣慨に乏しきは、吾人が不知庵と共に認めて病弊とする所なり』と言ひ『不知庵の所謂若隱居氣質は亦今の文士の通弊なり、俳諧の嗜み無きを恥辱の如く思ふ文士、深く自ら顧みて可也』と言ひ『不知庵が時代精神と小說家との關係に就て論ぜるところ、亦全く吾人の意を得た

り』と言ひ、更に『不知庵は紅葉及び其一派の似而非寫實を論破し、紅葉自身の作に現はるゝ人物すら、今の時勢粧をなすと雖も、全く明治思想を呼吸したる者と認め難き箇所頗る多きを難じ、其近業多情多恨及び金色夜叉中の人物は、今の時勢と密接するものなるに拘はらず、現代の思想精神と頗る遠ざかれるを指摘し、是れ氏が時勢粧の實を寫すに長じて而して遂に明治思想を解せざるに非ざる乎と疑へり。紅葉及び其の門下は須らく無意義の慢心を去りて是の忠言に聽かざるべからず』と言つてゐる。

曩に社會小說を難じた樗牛が、かく不知庵の社會小說論に全的同感を惜しまなかつた所以は、不知庵の議論に樗牛の嫌惡し輕蔑してゐた社會主義的分子を毫末も含んでゐない許りでない、當時樗牛の提唱してゐた時代精神論と非常によく吻合する所あつたればである。

こゝで樗牛の思想系統を考査すると、彼はこれよりさき井上哲次郎、木村鷹太郎等と共に、日本主義なるものを主張した。それは從來、亂暴に唱へられて來た歐化主義思想と、國粹保存思想とを整理調和したもので、要は日本の歷史を基礎として、世界の長所を攝取し、以て世界的活動に出でよと言ふのがその主旨であつたが、樗牛一人は更にそれを文藝の方へ導入展開し、此の國民的精神を體現するの如何に依つて藝術の評價は定まると言つた。

明治三十二年二月、彼は太陽誌上に『時代の精神と大文學』と題して又次の如く言つた。

『古今東西の文藝史上動かすべからざる一個の事實は「大なる文學は大なる人物と等しく最も好く時代の精神を代表せる者なり」と云ふこと是也。所謂時代の精神を代表する事を飜して、直に世俗の好尙を迎合するの意に解せば、恐らくは語弊あらむ。唯能く當代國民の感情及び欲求に最も明瞭なる發聲を與へ、其の惝怳する所の前途に最も具象の體形を附し「見よ爾等の理想玆に在り」と告ぐるものあらば如何。云々』

翌三十三年には更に從來唱へ來つた所を要約して左の如くに言つた。

『時代精神論の主旨とするところは、今の作家に對ひて時代を解釋せよ、時代の精神に接觸せよと勸むるにあり。今の日本の時代精神は何ぞと云ふ問題は暫く措き、是の如き時代精神に接觸して、其人物事件を解釋することを須要とする點に於ては、恐らくは何人も異存無かるべし。所謂寫實派の作家が描ける人物は、名は則ち寫實と謂ふと雖も、喩へば根の無き草木なり。是の人物の生活せる社會、是の社會に弘通なる精神に就ては、多くの解釋も觀察もなく、單に外に現はれたる言語、衣服、風習などの末節に就て寫實逼眞を衒ふに過ぎず。形似はあるべし、生命は未だ

し。斯の如くにして、爭でか社會民衆の胸裏に活ける反響を聞くを得べき。』（『樗牛全集』舊縮刷版七五四―五）

樗牛が社會小說に贊成し、支援するまでには之れだけの曲折があつた。而して私が特に讀者の忘失せられざらんことを望むは、不知庵の社會小說論の政治小說論に流れを引いてゐる一事と對比して、樗牛のそれの時代精神論に胚胎せることである。

二　英獨兩系統

特に何故に之を言ふ乎。實は社會小說なる歐洲語の本來の意義を調べてゐて私は面白い一事を發見した。

英語の Social fiction の項下には大體に於て左記の諸作などが分類してある。

Social Fiction—Tales (Harriet Martineau); Alton Locke, Yeast (Kingsley) Hard Times (Dickens); Hard Cash (Reade); No. 5, John Street (Whiteing); Sybil (Disraeli) Strife (Galsworthy)――(Buckley" How and what to Read" P, 109)

これらはみんな社會問題乃至は社會主義を取扱つたものである。（もし、此等の小說の大體的傾向

を知らんとする人があるなら Thorndike の "Literature in a Changing Age" の中 "Progress and poverty" の章など一應役立つであらう。同書には又 Cazamian 教授の "Le Roman Social" をこの題目の研究の絶好參考書として擧げてゐるが、私は未だ見ない。)

だから、帝國文學記者、その他のやうな解釋は間違つてゐない。さればとて不知庵の解釋があながち據り所のないわけでもなく、Dickens, Thackeray などの作に Social Picture の名稱を冠しその意義としてはほゞ不知庵の論と大差ないことの述べられてゐる例がある。そして英國の文學史家はしばしば Political novel（政治小說）と Social novel とを同一項目下に取扱つてゐるが、主として英文學の敎養の上に立つ不知庵が、最初政治小說論に出發して遂に社會小說におちついた徑路は、故意か偶然か一應の興味があるであらう。

次にドイツ語の方を見ると社會小說にあてはまるべき Sozialen Roman の語がある。但しこれは必ずしも社會問題や社會主義思想の含蓄を必要とせず、Zeit Roman と同一義に見てある。たとへば Heinrich Keiter と Tony Kellen の合著 "Der Roman" の『小說の分類』第二項目の下に(p.84)" den Zeitroman oder sozialen Roman, der Kulturzustände und Kulturfragen der Gegenwart behandelt—" とある。

さて、樗牛の時代精神論がドイツの Zeit Geist の直譯ではないにしても、その影響暗示を幾分

借りてゐることは申すまでもあるまい。實にこれはドイツ特有の含蓄と音響とをもつた語だとさへ言はれてゐる。だから樗牛がドイツ流に Zeit Geist=Zaitroman=Sozialen Roman（時代精神論時代小說論、——この時代とは日本流の歴史の意味に非ず——、社會小說論）と推移して行つたのを、不知庵がイギリス流に Political novel=Social novel（政治小說論、社會小說論）と過程して行つたのと對比するなら、恐らく彼等自身では意識してゐないであらうが、英獨教養の基礎のどんなに後々まであとあとその人の思想の展開を操つて行くかゞ窺へて、興更に深きものがあるではないか。

一二　諸作品の解題と批評

『論』の研究は以上で打切つて、以下『作』の吟味に移らう。

由來、批評家必ずしも作家でなく、熱心なる主張者に傑れた作が出來るとは限つてをらぬ。或は却てその背馳する場合の方が多いのだが、社會小說だけは最も熱心な論者不知庵に、作の數も最も多く、そして傑れたものがある。實を言ふと不知庵の作はその悉くが社會小說と言つてもよい特質を具へてゐるが、數十篇に渉るものを全部解題するわけには行かぬ。多くの文學史に擧げてあるのは『落紅』『霜くづれ』『片うづら』『血櫻』『電影』の五篇である。別に『暮の二十八日』の一篇がある。これは不知庵自身としては社會小說論を提唱するより以前の作に係るが、勿論十分にその資

格を具備してゐる上、たゞに不知庵の傑作なるのみならず、明治文學としても屈指の名篇の一つなので、これを見落すわけに行かない。他の作家のものでは後藤宙外の『腐肉團』と、小栗風葉の『政黨』が數へられる。順次に解題しよう。

『暮の二十八日』（內田不知庵作。明治三十一年『新著月刊』所載）

これは年末二十八日たつた一日に於ける三人の人物の行動を叙したもので、當時としては珍らしく筋も山もない小說であるが、そこが又傑れた所以でもある。

人物の第一は純之助。教養豐かに氣宇豁達で、常にメキシコに渡航して事業を初め、「コルデスは戰つて奪ひ、我は耕して濟ふ」ことを胸裡に描いてゐる夢想家である。その第二は妻のお吉。物わかりの惡い、ヒステリイの女である。その第三は靜江。基督教の信者で學校の教師で、頗る聰明で、純潔で、そして當時としては考への進步した可憐な少女、純之助の最も親しかつた亡友の妹で、二人の仲は古くから兄妹のやうに濃かつた。純之助は養子で、メキシコ渡航を條件として結婚したのだが、媒妁人が實はそれをお吉の一家に取りついでゐなかつた。玆に事件の錯綜する一因子がある。夫人お吉は良人と靜江の間に何か關係があるものと疑つてゐる。玆に錯綜の第二因子がある。靜江の心の隱約の間に純之助を戀へるは窺はれるが、彼女はそれを悲しく諦めてゐる。かゝる事情のも

とに、この三者を暮れの二十八日と言ふ一楔機に會せしめただけで、何等他奇ないが、さすがに作者の社會的視野が闊大で、世間常識が豐富なために、末期自然主義のトリビアリズムに墮さず、遙かに大きな人生を感得せしめる。

それにそれまで明治小說に於ては絕えて有効に用ゐられた事の無かつたと言つてよい基督教の、大いに作に光彩を添へてゐる事も注目するに足りよう。或る意味から言へばこれは二葉亭四迷の名作『其面影』のデッサンとも見られ、木下尙江の『良人の自白』第一卷を聯想させる節もある。私は中村春雨の『無花果』を初めて讀んだ時、その巧みに基督教を作に生かしたのを春雨の大いなる手柄としたのであつたが、あの前に『暮の二十八日』が出てゐたのだから、今ではさして推稱する理由を發見し得なくなつた位だ。

主人公純之助が燈下に空しくプレスコットの『征略史』を繙いて、自ら遂げられざる壯圖を傷む一節が結末にある、この作者が Prescott の兩征略史を頗る愛讀されたことは、私はその口づから聞いてゐる。だから主人公のメキシコ渡航の夢想の作中に頗る生彩を放つてゐるのは、この讀書的背景にもよるであらう。因みに祕露征略史の方の第一部は燦爛たるインカ古文明を記述してあつて、近代社會主義の信奉者の中には、その理論の實行し得べく、且つ成功すべき確證を玆に見るとさへ言つてゐる者がある位だから、それだけでもこれらの書は作者の氣に入つたであらう。之を要する

に當時の文人としては社會的常識の最も豐かに、讀書的水準の最も高い作者が、たとへば硯友社一輩が通人趣味を一つの有力な創作武器としたのと同じやうに、それを活用した點に異色もあり、淸新味もある。

さてこの作に加へられた批評を數へると、發表の翌月帝國文學の時評欄には珍らしく長い讃辭が見え、『曩に柳浪が「羽ぬけ鳥」に於て人生の光明方面を描破せしより、余輩は之に光明小說なる稱呼を與へていささかの推奬をなしたりしに……爾後二ケ月にして不知庵い「暮の二十八日」を紹介し得るを喜ぶ。これ疑ひもなく光明小說の第二驅として「羽ぬけ鳥」に比し更に一層深遠なる意義を包藏すれば也』と言つてゐる。但し宗敎小說、家庭小說として認めたので、社會的價値については一向盲目なやうである。

その後十年を經て正宗白鳥は言つた。『數年前までの硯友社諸氏の作の今日となりて多く讀むに堪へざるに反し、「浮雲」なほ讀むに足るべく、瑳琅の屋の「流轉」、不知庵の「暮の二十八日」等明治四十年の文壇に出すとも一佳作たるを失はず』(『文章世界』四十年一月號)。その同じ年田山花袋も亦曰つた。『戲作氣質を極力排した當年の勇者だけあつて、少くとも此の一篇は明治文壇の傑作たるを失はない。』

これは暮れの二十八日に脫稿したから、それをそのまゝ題にしたのださうである。なほ作者自ら

がかう語つてゐる。『發行後二週間ばかりして長谷川二葉亭を訪ふと、座に就くや否、「到頭生捕られたね」といふ。何の事か解らぬので問返すと「寡の二十八日」は長谷川の家庭を書いたのだと獨りぎめしてゐて、「イヽサ、小說に生捕られたのは關はんがね、あれじやあ書足りてゐない、も一度後談を書き給へ、材料は今度は生捕られるつもりで提供しよう」と獨りで呑込んで了つて、「さうじやない」と辯明しても、「いゝさ、そんな事を怒りやしない」と丸で耳を傾けやうともしなかつた。』（『早稻田文學』大正十五年一月號）だが作者が明白に否定してゐるのでなかつたら、私達も必ずこれは二葉亭をモデルにしたものだと思つたに違ひない。

『落紅』（內田不知庵作。明治三十二年三月作、『太陽』所載、單行本『文藝小品』所收）

新聞社を首になつた土師は、失職中を小學校敎師をしてゐる細君の收入によつて辛うじて生活してゐる。そこで細君の奉職してゐる小學校の校長が職業の心配をしてくれるが、土師は自恃の感じからその好意をきつぱりと謝絕して了ふ。それに或る友人から、細君が校長と待合へ入る所を見つけたと聞かされて、細君の節操を疑つてゐるので、細君はそれを憤慨して一旦家出をするけれど、又舞戾つてくると言ふやうな筋である。

非常に中心の散漫な作で、讀後の感銘が纏まらない。樗牛はこの作を目して『小學校長の失行を抉摘せる三面雜報の類に過ぎざるのみ』（『樗牛全集』舊縮刷版二卷七六〇頁）と言つてゐる。

二、『かた鶉』（内田不知庵作。『文藝俱樂部』三十二年四月號所載）

鎌倉に隱栖してゐる青年詩人が陸軍中將鶴牧男爵の愛孃登美子と昵懇になる。兩者は文藝上に於て趣味を共にし、且つ同じく基督教を奉じ、同じ某牧師を尊信してゐるので一層氣心の合致を見た。然るに登美子の父の男爵は賭博に耽り、政商を近づけ、獸慾を逞うして、彼女の生母を逐ひ、如何はしき女を後添として入れてゐるやうな男なので、娘が基督教を奉ずる事を許さない。その中男爵は賭博に失敗した經濟的大破綻を或る政商に救つて貰ふ必要上、その息子の懇望に應じて交換條件として娘を嫁せしめる約束をする。登美子の心進まざるは言ふ迄もない。さて愈々嫁期の迫つた或る日、彼女は詩人を招いてそれとなく、友人の事に假託しながら自分には三年前に別れて外遊してゐる意中の人のある事をうちあける。所がそれは詩人の親友で而も同じ信者だつたから、非常に深い感動を以て聞いた。彼女は嫁するの前、詩人宛に二葉の寫眞を送つて來た。一葉は詩人自身に贈り、一葉はその友なる意中の人へ傳達を乞うてゞある。彼女は盛大な儀式を擧げて嫁するには嫁したが、三日目にその死亡の報知が世を驚かした。

再び樗牛の批評を借りよう。『一個の戀愛小說として見れば、失戀の悲運を描けるところに多少の精彩あらむ。されど時代の精神によりて其の人物事件を解釋せるものとしては寧ろ拙劣陳套の誚を免れず。信仰の衝突、軍吏の醜行に描かれたり、されどこは皮相の擬似のみ。』（同上）吾等が見る所

もこれと大して變らないが、『落紅』に比すれば多少勝つてゐるであらう。

『血櫻』（內田不知庵作。春陽堂發行單行本、もと何雜誌に出でしやを知らず）

昔、母子主從三人の落人がその根元で殺されて以來、不思議とその下で人がよく死ぬるので、土地の者の血櫻と呼んでゐる名木があつた。その下で德望の高い村の小學校長も自殺した。外には決して原因が無いのだから息子の港金重郎も、德守、市原の兩友も、これは必ず山棲と言ふ富豪に關係ある事に違ひないと睨んでゐる。彼れ山棲は强慾非道の高利貸で、さまぐ\の惡辣な手段を用ゐては人の財貨を橫奪してゐたが、校長には、前に、自邸で使つてゐた小女を夫人として媒介した事もあり、學校の敷地その他のことで數々の交涉を以てゐた。山棲は血櫻を不祥の木として伐ることを言出した事があるが、その跡の公有地を橫奪する企らみである事を見ぬいて、校長はこれに反對した。さうした後であるからその自殺が惡富豪と關聯して考へられるのは當然であつた。その中に惡富豪には實子がない所から港金重郎を嗣子とすると公然言ひ出したので、彼は死しても仇敵の家をつぐものかと覺悟しながら、よくく\搜つてみると、自分は山棲と母とが密通の結果の子である事が分つたので、血櫻の下で母を殺し、同じ彈丸に自分も倒れる。

これはセンセーショナルな、多少下級小說に近い匂ひがするが、それだけに幾分讀む興味は多い。

樗牛は不知庵の社會小說をおしなべて『一種の陰慘なるホーソルン的小說と見れば何れも多少の成

功なりと云ひ得べけむ』と言つてゐるが、そのホーソオン（N. Hawthorne）流の陰慘性はこの篇が最も甚しい。題材は多少、モウパッサンの『ピェルとジャン』（Maupassant. Pierre et Jean）に似通ふと言へよう。

『電影』（内田不知庵作。明治三十二年九月『太陽』所載、單行本『社會百面相』所收）

島根と云ふ進歩思想を有する代議士が、朝鮮王宮を中心に大事を企んで中途に倒れ落魄して歸國中の壯士豐崎と、路で出會つて自邸に引取つて來る。その留守に豐崎夫人は豫備少將貴族院議員なる里方の父の訪問を受け、島根の組織してゐる獨立倶樂部は社會黨だとの風聞があると聞かされてゐる。さて豐崎は島根家の居候をしてゐる中、自分の初戀人が、自分の仇敵にも等しい奸商眞葛の妻となつて隣家に住つてゐるのを見出し、今迄の大きな夢想を一擲してぢみちな月給取りか何かになり、彼女を自分の方へ取戻さうと考へるが女が應じないので、再び南清地方に流浪して行つた。

この作も島根家のことゝ、豐崎のことゝ話が二つに別れてゐて、渾然たる有機的連絡を保つてゐないやうに思ふ。併し作の出來榮え如何を放れて、この材料を當時の政界の事情にあてはめてみると油然として興味の湧き來るを覺える。と云ふのは豫備少將の貴族院議員は、どうも作者が谷干城將軍を念頭において書いてゐるらしい跡が見えるからである。その豫備少將が島根夫人に『地租增徴の時を見なさい。島根が多年の情實を離れ堂々と增徴說を主張したのは天晴な見識ぢやと俺に非

増徴派であるが感服しおつた』と語る條りがある。私はその方面の事には全然暗いのであるが、たまたま『我等』の田口鼎軒號に大内兵衞教授が『地租の増否を中心とする當時の貴族院の驍將豫算委員長子爵谷干城將軍と當時の衆議院の闘將東京市選出代議士法學博士田口卯吉氏との論戰の如き、今日に至つてもたほ吾々に示唆する所甚だ大なるものがある。この論戰は明治三十一年六月谷將軍が「日本」新聞に地租増徴を否定する論を掲げたのに對し同年七月九日田口博士がその主宰する「東京經濟雜誌」第九三五號にその批評を掲げたのに始まつたのであるが、爾後谷將軍答へれば田口博士駁し田口博士主張すれば谷將軍之をしりぞけ筆戰數合、明治三十二年二月に及んでゐる。この論戰は、伊藤内閣より山縣内閣へかけて地租増徴計畫が議會に懸案となつてゐた時であるから特に世人の注目を惹いたのであらうが、兩者の博學と兩者の能文と兩者の熱意とがまた當時の論壇を壓する理由となつたものであらう。』と言つてをられたのを記憶してゐたので、不知庵のこの作を讀むとはたと膝を打つたのであつた。試みに議會史を繙いてみると田口鼎軒、島田沼南などは、財政の現狀、到底増租に據るの外なきを認めた結果、所屬の憲政本黨と相容れず、新たに脫黨して議場に抗爭したとある。

『霜くづれ』（内田不知庵作。明治三十二年四月『新小說』）

これについては高山樗牛が『不知庵の「霜くづれ」讀むべし。「片鶉」と等しく基督教の光明を現

はしたる一種の社會小說也。唯々祕密の默契を叙する所、意餘りありて筆足らざるを惜む。」と言つてゐるが、私は未だ流讀の機會を得ない。讀者諸君の中この雜誌所持の人あれば一度借覽したいものである。

『腐肉團』（後藤宙外作。明治三十三年七月單行本）

藍川一雄と云ふ千葉縣の富豪の一靑年、友には學問に精勵する秋月正あり、妻は才色双絕の近鄕のほめ者で、幸福な生活を送つてゐたが、たま〳〵議會では地租の增徵が決議されさうな氣配なので、地方の代表として選ばれて、增徵反對派の議員を歷訪し、その盡力を賴むのである。さうして暫く滯京してゐる中に議員の多くが金に依つてどうにも動くのを見て政治界の醜惡なのに愛想をつかし、やがては自分も待合政治に捲き込まれて、昨日の謹直な好靑年が今日は一廉の放蕩者となりはて、藝妓を落籍させて家庭を顧みなくなる。友の秋月は忠告をしたが聞き入れず、兩者は遂に絕交した。妻のお町は夫の亂行に一度家出をするが懷妊してゐるので又戻つて來る。

腐肉團とは此一群の政治家に下した名辭であらう。流暢であるが、不知庵の諸作に比し、非常に多くの紙筆が費してあり乍ら盛られた內容は却て尠い。社會的視野も狹く、そのタッチが又稀薄である。宙外のものとしても決して傑作ではない。

『政黨』（小栗風葉作。明治三十二年九月『新小說』）

に
日本で最初の政黨内閣と言はれた隈板内閣の出來た時、猛烈な獵官運動が起つて、それがために内閣の壽命を縮めたとさへ言はれてゐる。又あの時には文部大臣であつた尾崎行雄が某所で『日本が共和國となつたらその大統領となるものは三井岩崎であらう』との演說をして、物議を釀し、ために自分だけは引責辭職をした。作者風葉はこの二事を念頭において構想してゐるやうである。

淸廉を以て中外に聲望のある自由黨の老志士眞柄弘規は、自黨の内閣が出來たからとて獵官に浮身をやつしてゐる多くの政友の態度を苦々しい事に思ひ、自分は故山に起臥したが、官位金權なきため鄕黨には疎んぜられ、妻子はみす〳〵苦しめねばならないので、急に二十年の淸節を棒に振つて、自分も猛烈な獵官運動を始め、海軍大臣の椅子をかち得た。そして妻と娘は急に東京へ出て觀劇などの榮華に耽つてゐる中、娘の乙江は輕薄な父の屬僚と通じて遂に身重になる。たま〳〵眞柄は兵學校で日本の國體に相反する不敬演說をしたのが元で、引責辭職すると、その矢先總選擧は開始され、多年の淸節を汚した自分は既に選擧民に信望なく、その區は後進の靑年政論記者加古某に蠶食せられて了つてゐる。乙江は腹の子を祕かに墮胎せうとしてしくぢり、瀕死の病床にゐて加古靑年を呼ぶ。彼は今こそ父の政敵だが、もとの自分の戀人だつたのである。乙江の死は仇同志の父と元の戀人とを握手させる緣となる。眞柄は浮世の事に一切の望みを絕ち、老後を百姓として故山に養ふてゐたが、四五年の後大飢饉があつて、百姓一揆の起つた時、その主謀となつたものは實に

彼眞柄であつた。

高山樗牛は之を『何人も拙作と貶するの外なかるべし』と言つてゐる。私も別に異論はない。但し拙作と言つても他の社會小説の諸作よりさう劣つてゐるとは思はない。一體に社會小説は新聞の雜報の引き伸しのやうなものが多いのだが、この作もその仲間たるに過ぎない。

普通の明治文學史に記する社會小説は以上に盡きてゐるが、太陽の增刊のそれは別に秋聲の『惰けもの』、柳浪の『非國民』、思案の『五濁惡世』、小波の『從五位』などは同じく實社會との接觸を努めたものであると言つてゐる。(『太陽』十五卷三號七八頁)

一三　結　語

以上で社會小説に直接關係のある事はほゞ語り終つた積りである。玆には二三の遺漏を補つておかう。

私はこの研究の初めの方で『この渺たる宣言(民友社の社會小説叢書刊行の)が文壇に一大旋風を捲き起すに到つたに就いては當時の社會的情勢がある。但しその社會的情勢には後の機會で觸れる』と約束しておいた。先づ第一にそれを果すべき責任がある。

從來の文藝史家は、これを讀書界が、狹隘淺慮單調な硯友社式小説に不滿を感じて來た結果だと

言つてゐる。それも一つの見方であらう。なぜなれば社會小說に先行して『片輪者小說、狹斜小說、變調の戀を主題とせる小說（當時の早稻田文學の用語、恐らくは柳浪、鏡花などの作を指すのであらう）などが出てゐるに徵しても、その言が首肯出來る。併し只それだけの說明では、何故に『社會小說』の叫が急に喧しくなつたかの充分の解答とはなり得まい。

私はこれを、あの頃の新興日本が初めて本當に社會を發見し、意識し、把持する端緖に就いたのが文藝に反映して來たのであると解する。學者は社會發見の過程をかく說明する。『この世の中には日々生きんがために汗水たらして働く人々が物質世界を目あてに一大集團を形作つてゐる。かやうに考へたればこそ、はじめて人間の社會の根柢には階級集團といふものが橫はつてゐるその事が、はつきりとして來だした。今まで考へられてゐたやうな個人對國家といふ關係の外に、いはゞ個人對社會の關係がわかつて來たばかりでなく、階級づけられた社會といふものがよくわかつてきた。』又『……產業革命といふものが、時代の社會組織を一變するやうになつた。……いはゞ社會の發見は產業革命の產物である。』（永井享博士著、『社會讀本』一五——六頁）

そこで此の產業革命の立場から明治史を按ずるに幕末西洋の機械工業の移入せられた時が第一期、明治十年代政府が諸企業を民間に拂下げて繼承せしめたのが第二期とならうが、これらは啻に前史をなすに過ぎない。產業革命の本史は日淸戰爭が起つて軍需品の生產その他から產業界が異常

の飛躍を遂げたのを第一頁と見るべきであらう。これは直ちに引いて社會に諸種の反應を呼んだ。即ち明治二十九年には工業團體同盟會が生れ、三十年には諸種の勞働組合の結成を見、三十一年には鐵業從業員のストライキが起つてゐる。而して金井延、桑田熊藏等帝大系の諸學者によりて社會政策學會の生れたのは明治三十三年、安部磯雄、片山潜、幸徳秋水等により社會主義研究會の生れたのは明治三十一年、これが社會主義協會と變つたのは三十三年、そしてその協議員を中心に嚴密な意味の日本最初の無產政黨なる社會民主黨の創立せられ即日解散の厄に會つたのは實に明治三十四年。而してこの間に於て谷將軍が田口鼎軒博士と地租增徵で論戰したのは、將軍が滅びゆく農業日本を代表し、鼎軒博士が新たに興る商工日本を代表したもので、遂に三十二年增稅案が通過したのは、大內敎授の言を借りれば『わが國の歷史が當時の大勢に乘じて資本主義一大發展への軌條の上に乘せられたのである。』（『我等』昭和二年七月號）

かゝる時代であつたればこそ不知庵、宙外の諸作がこの地租增徵案の幾分を反映し、又かゝる時代であつたればこそ、作品は槪して非常に拙きにも拘らず、社會小說の提唱は非常な反響を文壇に呼び起し得たのである。何事も時代の產物ならざるはないが、かく觀じ來れば社會小說などは中んづく濃厚に時代の產物であつた。

第二には、その取扱はれた題材を吟味すると、私の眼に觸れた範圍では、諸作が大抵政治を取扱

つてゐる。たゞ不知庵が一人、或は基督教を點じて信仰問題に觸れ、或は教師を點出して教育問題にも觸れ（不知庵の全作を通じていかに基督教と教師の多く出て來るかを思へ）ようと努めてゐるが、その彼の作でさへ主題となるものは大抵政治である。この點英國の社會小說と著しく品質を異にしてゐる。然らばなぜこれが社會小說と呼ばれて、政治小說とは呼ばれないか、換言すればわが國の自由民權時代の多くの政治小說とは區別して考へられるか。玆にも讀者の疑問が湧く筈である。併しその解答は簡單である。政治小說といふものは同じ傾向的小說の中でも宣傳小說であつた。即ち自由民權を謳歌し、鼓吹してゐた。社會小說は同じく傾向小說でも宣傳小說ではなく、批判があり、解剖がある。むしろ當時の政治に多くの反感をさへ持てゐる傾きが見える。そして政治小說は取材の中心範圍が政治に限られ、他の戀愛などは附屬品たるに過ぎないけれど、社會小說は必ずしも政治に劃る意はない。たま〳〵言ひ合せたやうに政治に筆を染めたのは、作家の眼界がそれ以外に屆かないか、或は社會の意義に全的理解を缺いて、政治とこれとを幾分混同してゐたかに起因するのである。

第三に、社會小說は三十三年まであれ程喧しく唱へられながら、その年後半期からは火の消えたやうに忘れられて了つた。然らば忘れられたまゝ、後來の文壇に何の影響をも與へてゐないかと言ふに、私はさうは思はない。議論の止んだのは社會の觀念が一般に浸潤飽和したからその必要がな

くなつたのである。が、作品には暗默の中にこの用意がます／＼洗煉して含蓄されて來たと言へる。或る意味からすれば小栗風葉の『青春』、島崎藤村の『破戒』なども、レッテルを貼らざる一箇の社會小說である。

社會小說――それは、賑やかだつたけれど併し議論された間は極めて短かつた。それに筆を付けた作家の數も少なく、出來上つた作品も不知庵の『暮の二十八日』一篇を除いては今日からわざわざ讀んでみる必要あるものは無い。その不知庵の作でさへが、嚴密には社會小說論提唱以前に作られたものである。

から數へ立てゝみると、如何にも映えなかつたものゝやうだが、それが文壇に寄與した意義はなかなかに大きい。坪内逍遙の『小說神髓』以後全盛を極めた寫實主義に對して、傾向小說の大旆を最初に掲げたものは實にこの社會小說である。（ドイツでは Sozialen Roman を Tendenzroman の一部と考へること、前掲 Der Roman の八五頁に詳說さる）そして直接的には德富蘆花の『黑潮』、木下尙江の『良人の自白』などゝ繫がり、隔世遺傳としては今日のプロレタリア文學とも決して關係の絕無な次第ではない。たゞ私の講說の蕪雜なるがために、私の認知してゐる社會小說の意義が、讀者諸君の耳に徹せざるなきかを恐れるのみである。

明治文學に現はれたる自然美

一　自然文人の區分

明治以降の文學を通じて、表現せられた自然美は、精密に言ふなら各人各樣で、系統を立てて記叙のしやうはないが、特色の著しきものを擧ぐれば、左の數派に區分出來はすまいか。

第一は民友社派で、こゝには『自然と人生』その他の著者なる德富蘆花、『武藏野』その他の著者なる國木田獨步、『歸省』の著者なる宮崎湖處子などがゐる。淸新な基督敎的自然觀を懷抱する事が彼等共通の特色である。北村透谷島崎藤村の據つた文學界の一派も亦、甚だしく之に近い。

第二はホトトギス派で正岡子規、夏目漱石、高濱虛子などが之に屬し、『土』の作者の長塚節も亦半ばは之に據る所がある。民友社派が淸新な西歐的なのに比して、彼等は蕪村などの俳句に傳統を有する特殊な寫實美を提示して見せた。

第三は紀行文派とも名づくべきもので、大町桂月、遲塚麗水、久保天隨、田山花袋などを數へる事が出來る。麗水天隨の漢文脈、桂月の自在な和漢折衷、花袋の絢爛な美文脈と云ふやうに、彼等の文の系統はそれ〳〵に異なるが、旅次探勝の興を叙して、特殊な文を創成した點で似通ふてゐる所がある。

第四は科學派とも名づくべきもので『日本風景論』の著者なる志賀矧川、『山水無盡藏』その他の著者なる小島烏水などがこれに入る。尤も人に依つては烏水を紀行文派に入れたり、花袋の或るものをこの中に加へたりする向きもないではない。

第五は强いて名づくれば田園派、又は牧歌派とも言つてよいもので私は明治卅年代の初期又上田敏退去論を唱へた後藤宙外などを此の中に加へたいと思ふのである。佐藤春夫の『田園の憂欝』はまだ讀まないが、あの作の發表當時、田園文學論を盛んに呼び起した結果から言つて、實は差支へなくばこの系統に加へたいと思ふのである。

この外、『あららぎ』『響』の著者なる水野葉舟、下つては室生犀星、或は佐藤春夫をも加へて感覺派なる一區分を作つてもよいであらう。以上の中には二三、私の讀みのこしてゐる人もあるが、多くは前に一度は讀んでゐるので、以下少しく思出に殘る感想を述べて見よう。

二　民友社派の基督敎的自然觀

何と言つても私の愛讀措くを知らなかつたのは德富蘆花である。蘆花の作中でも殊に『自然と人生』が好きである。『靑山白雲』『靑蘆集』も亦捨て難い。後に出た『みゝずのたわごと』『死の蔭に』あたりまではまだよい。『新春』あたりから漸く私は彼に厭氣を感じ初めて來た。

蘆花はかなり廣く深く漢詩を耽讀し、唐詩選などに用ゐられてゐる詩句を、自在に自己の文章中に驅使してゐるが、彼の顯示する自然味の魅力は單にそれだけのものではない。又『富士』第二卷を見ると一時彼が繪畫に凝つた事が分るが、併し彼の自然描寫は決して繪畫的に平面な、ヴィジュアリゼーションに生命があるのではない。

彼の自然描寫の美は、彼が青年時代に信奉し、死に到るまで人格にその薰染を受けてゐた基督教を根基として生じたものである。詩篇や聖書に見える原始人的驚異を文中に披瀝して憚からないのはそのためで、又時にウォーヅヲースやロングフェロオの詩のやうな觀方をするのも根本は基督教に繋がる。併し十九世紀初頭の英詩人の群がパンセイスチックな自然觀をしたのが轉移したやうな觀方もあり、その意味で人格神を特色とする基督教の埒外に逸出してゐる事は勿論珍らしくないが、併し彼がパンセイスチックな思想に共鳴するに到つたのも、もとはと訊ねれば、やはり彼の基督教的素養に還元し得る。

『家は十坪に過ぎず、庭は唯三坪、誰か云ふ、狹くして且つ陋なりと。家陋なりと雖も膝を容る可く、庭狹きも碧空を仰ぐ可く、歩して永遠を思ふに足る。』（「吾家の富」）

隨所に見えるかうした表現法は、初めて接した頃の私達を驚かしたものだが、その背後には基督教の匂ひがある。

蘆花と同じ民友社から出でて、單に自然美の展開の上から見れば、彼れに酷似するは國木田獨歩である。彼も亦漢詩の影響を受け、且つ基督教的自然の見方をする點で蘆花と變らない。併し獨歩の著しく感化を蒙つたのは、ウォーヅオースとツルゲェネフとであつた。あの湖畔詩人の淡雅な哲學的な味はひと、北歐の作家の細緻にして甘美な觀察とは、日本の文字となりて獨歩の遺作の到る所に復活してゐる。

蘆花の簡朴に比して獨歩の精細——强ひて言ふならそれが兩者の最大差異であらう。『武藏野』の一篇は、西洋とは違つて昔から自然の觀察には豐富であつた日本の文學に、なほ前古未曾有の一新境を附加した劃時代的の名篇と言ふべきであらう。『武藏野』へひいてある彼の日記の一節に『午後林を訪ふ。林の奧に坐して四顧し、傾聽し、睇視し、默想す。』の一句は、二葉亭の譯した『あひびき』の感化の顯著なものとして、且つ獨歩の對自然の態度を象徵するものとして、誰れ知らぬ者もない程有名である。

湖處子の『歸省』は出版の當時、或はアーヂングの『スケッチ・ブック』に比せられ、或はゴールド・スミスの『荒村行』に比せられた。殊に德富蘇峯は『國民の友』の卷頭論文（第八十八號）に『鶺鴒の聲は老鶴の聲よりも淸し』と稱して激賞したので、一時讀書界に喧傳せられたが時代の推移はこの書の藏した淸新味を錆びさせて了つた。

蘆花の『富士』第二卷を見ると、主人公に向つて彼れ湖處子が獨步を評し、同じく外國文學に眼を開いてゐても、自分達は森田思軒よりは新らしく、而して獨步は自分達よりも新らしいと言つてゐる事が書いてあるが、之は湖處子がよく己れを知つたものと言ふべきである。そして彼は終始變らぬ獨步の知己で、『武藏野』の出版を『隱れたる大作』なる論文で激賞したのも亦彼であつた。

終りに民友社派の提示した自然美を語るに於て、德富蘇峯の名を逸してはならない。ラスキンの自然論を、『英文學史』からの受賣りでなく眞に味讀して紹介したのは恐らく彼が最初であらう。なほ古くは銀杏の美を描いたものに忘れ難い名文があつたし、近くは國民新聞の夕刊に連載した萩に闢する文章の如きも捨て難き趣きに富んでゐた。殊にコスモスを全國到る所に見るを叙して、最も民衆的な花と評したるが如き、蘇峯未だ老いずと思はしむるに充分であつた。

三　ホトトギス派の寫實精神

正岡子規の業績は、或は明治俳壇の興隆者として、或は和歌革新の暗示者として、又或は寫生文の創始者として、廣い方面に涉つてゐる。彼の俳句、和歌、文の三者を通じて、『寫生』の一字で彼の態度は一括して說明する事が出來る。彼は古俳人の中でも最も繪畫的な句の作者なる蕪村を殊に仰慕した。彼は俳句に即きながらその古き傳統には決して捉へられない。彼の背後には基督敎的信

仰も、哲學も含まれて居らね。彼は精刻に、as it is に自然を寫して見せた。

くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春の雨ふる

枯蘆に春風吹けば日高かな

平凡だが子規の寫して見せた自然美は、かゝる所に最もよくその特色が窺はれる。

虛子の寫生文は、リヤリストとしての鋭さに於て、精刻さに於て子規に劣ること數等である。だが彼は器用に纏めることに於て大和繪のやうな味はひを出し、信仰も思想もなくてもある魅力は具はつてゐる。彼の筆は殊に京都や奈良のやうな古い歷史と交つた自然美を寫すに適してゐる。『風流懺法』『斑鳩物語』などの、今に到るも讀者を絕たぬ所以である。『朝鮮』の中の叙景も、簡單だが忘れられない味はひがある。

漱石の自然觀察の根基をなしてゐるものは、やはり支那文學の感化と俳句から來た飄逸味が大部分である。併し彼はそれら東洋文學の弊である粗大さから脫して、之を補ふに西洋文學の叙景の筆の細かさを以てした。後年の作『行人』『彼岸すぎ迄』などに所々見ゆる自然觀察も捨て難いが『虞美人草』『草枕』などの絢爛なのもよい。『滿韓ところ〳〵』なども決して彼の凡手ならぬを明證してゐる。

所が漱石の『滿韓ところ〳〵』を、不眞面目である、讀者を愚弄してゐると攻擊し『自分達のは

文章も下手であり、書いたものもつまらない、併し眞劍になつて書くといふ事に誇りを持つてよい』と言つたものは長塚節である。子規のひたむきな、堅固な寫實的精神は、正統には虚子にも漱石にも傳はらず、彼が最も晩年の弟子なる長塚節に本當の實りを結んだと言へるであらう。

實際を言ふと『土』に描かれたやうなものが自然美の名に價するか否かは一寸疑はしい。彼は克明に自然をスタディしてゐる。博物學者の態度を以て自然を精密に觀察し研究した。自然を自己の心境の裡に收め取つて、原型の崩れるのを意とせず靜かに觀想する中からならば安々と美も生れて來るが、スタディの中からは、謂はゆる美は生れにくい。節の提示したものをも自然美と呼び得るならば、それは科學者的スタディの中から生じたもので、從來の美學の範疇以外にあるものである。彼が野茨の實をつける實際を知るために一年の歳月を費して觀察した事や、わざ〳〵經驗深い伯樂を呼んで馬子唄を歌はせてきいた事など今は誰れ知らぬ者もない有名な話となつたやうだ。

四 紀行文の隆興と衰頽

明治に、眞に文藝的價値ある紀行文を創造したのは、恐らく遅塚麗水の『不二の高嶺』を以て最初とするであらう。彼は瑰麗な漢字を自在に驅使する特殊の手腕を以てはゐるが、それ以外の特色がないので弊も亦そこに生じた。高山樗牛が夙に『(彼の描く)山は犖微に非ざれば則ち瑰琦、水は

清冽に非ざれば則ち縹緲。曰く松翠瀾紫、曰く暮雲晴雪、凡そ自然の景物、詩中の料に非ざるはなし』と言ひ『求むる所は文の工なるにあり、其の眞を顧るの遑あらざる也』と難じてゐる。

麗水と同じく漢文的誇張に捉はれて、そして彼れよりも文品の下ること二三等なるは久保天隨の紀行文である。かつて古く天弦（片上伸）孤雁（吉江喬松）薬舟（水野）木城（前田晁）四家が明治時代の紀行文家を合評した時その中の誰れであつたか天隨を評して、血氣の書生が杖を揮り廻して日に何里歩いたと言つては、誇つてゐるやうな所があると言つてゐたが、六ヶ敷い字を羅列して得意でゐる所を穿つて言つたのだとすれば、正に適評と言ふの外はない。

花袋の紀行文には他の諸家に比して纎細な味はひが豐かに現はれてゐるのと、詩趣の掬すべきものがあるのとが取柄である。さすがに天下の旅仙と言はれただけあつて、又、精密なものなら地圖を一目見ただけで未踏の地でも何處から何處まで何里あると、卽座に言ひあてると言はれてゐる旅行通だけあつて、「足跡の洽ねきこと文人中第一である。そして文の工を以て天下の青年を魅した『南船北馬』などは今之を語る人がなく、却つて『何々めぐり』と言つた類ひの氏の旅行案內書が喜んで迎へられてゐるのは、世好の推移と言ふの外はない。

桂月の文は和漢兩脈の妙所を折衷して、漢文の堅さから脫し、と言つて和文の詭弱に落ちてゐない所が特色である。歐文の新らしみも、特殊の思想も信仰も感覺もないが、あの氣を以て勝つた作

し飄逸な性格を、何物にも凝滯せられず、自由に出した所に得も言はれぬ味はひがある。初期の『黃菊白菊』『花紅葉』時代のは絢爛華麗であるが、中期『一簑一笠』あたりになると初期の浮華を脫して來たものゝまだ頗る艶がある。『迎妻紀行』は當時の代表作として頗る世評を呼んだものであつた。後期のは『關東の山水』などに收められてゐるもので、完全に平淡の境に入り切つた。紀行文ではないが四十年頃の『太陽』に出た『田園雜興』の如きも讀書子の愛誦して措かなかつたものである。

桂月は自ら述懷した所によれば、麗水の『不二の高根』を一讀して興を催ほし、紀行文を書き初めたのださうである。そして大正に入らない前に麗水も天隨も花袋も筆を收めて了つたが、桂月のみは死ぬる前まで、思出したやうにしては紀行文を時々發表した。故に明治の紀行文は麗水に始まり、大正に入つて桂月に到つて止んだと言ふべきであらう。

紀行文が榮えたのは何に起因するか私は知らない。西歐ではルネッサンスの當時、イタリの海港都市の繁榮と共にサンナザロ等の牧歌文學が大いに起り、十八世紀の終りから十九世紀にかけ産業革命が始まつて英國の北半が鐵と石炭と煤煙とで黑化された時に、ウォーヅォース等の自然詩が生じてゐる。一部の自然美は常に、都市の繁榮、産業の發達と消長を共にする。これは繁華の生活に倦怠した都人士が反對のものを求める心理から自然に着目するのであるらしい。明治の紀行文も日清戰

爭で產業が空前の膨脹した前後から急に勃興したことを考へ合せれば、或は右の西歐の例を紀行文興起の原因に數へてもよいであらう。

もう一つは外人の內地雜居を許してから、彼等は海水浴に登山に、わが國の方々へ自然美發見の先例を作つた。葉山、鎌倉、大磯、などがかくして急に都人士の注目に登ると共に日本アルプスも亦前後して紹介せられた。

紀行文の隆與はさうした社會的背景を考慮において說明していいかどうか、私はまだ確斷しかねてゐるが、その衰頽の原因はそれに比して說明が容易だと思ふ。一言すれば人間的興味と隔絕させて、自然美のみを孤立させることに、讀書界が飽き足りなくなつたのである。自然主義の勃興は、人間と隔絕した何物にも價値を認めさせなくして了つた。

序に、紀行文家として最後迄大町桂月が餘喘を保つたのは、彼の紀行文が最も緊密に彼の個性に卽してゐたからで、これは間接に、私の上記の斷定の妥當を實證するであらう。

五　科學的研究と田園文學

志賀矧川の『日本風景論』のやうな劃時代的名著を讀んでゐない事については、私は自分の讀書的怠慢を恥づるの外はない。彼の著では私は僅かに『旅順攻圍軍』一卷を讀んだことがある丈けで

ある。これは自然美などと言ふものとは全く緣が遠いが、併しさすがに心を惹かれる描寫には富んでゐる。旅順攻擊の折柄、陣中を巡視すると、山蔭の流水で、手を負傷して戰鬪に加はらぬ兵士が釣絲を垂れてゐる。その數間と間をおかぬ所へ砲彈の落下するさまを叙したあたり、今も忘れられないものがある。戰陣の中に咲き盛る秋草の美しさを書いたのにもいゝ所があつた。

それらから推して矧川の對自然の態度を、かうもあらうかと揣摩することなら私にも出來る。彼も熱心に自然をスタディする點では長塚節と相似通ふが、節は既成觀念を何物も持つてゐないのに反し、矧川は科學者であり、地質學者である。隨つて同じくスタディするにしてもこの特殊知識の上に立脚してゐる。それから節はスタディの結果を表現するにしても、結果が自然美の提示にならうと自然醜の提示にならうと、何等介意せぬらしいところがあるが、矧川は、自然の美を先づ認めて、それを學術的に證明せんがために、特殊知識を以て熱心にスタディしてゐるのであるやうな氣がする。

烏水は日本の山岳美を科學的に攻究し、紹介したる功績者である。彼も趣味の廣い事は矧川と相如き、ひとり地質學的知識のみでなく神話傳說も究め、歴史も知り、文學にも和漢洋を通じてかなり素養を持つてゐる。今、私の手許には彼の著作と言へば『日本山水論』と『烏水文集』二卷しかない。試みに前者の目次を見るに『山水の意義』『日本山嶽美論』『登山論』『日本山系概論』等十四章に分れて居り、各章が細目に分れてゐて、たとへば『日本山嶽美論』は、山の繪畫的容貌、山の詩

的生殖、山の科學的結合、山の歴史的祕庫、山の時間並に空間的統計、山と人文の交渉などの區分から成つてゐる。これを見ただけでも烏水の顯示する事に努めた自然美が、尋常文人の細墨以外の特色を持つ事が分るであらう。

たゞ烏水の著作は驅使する支那流の文字の上のみでなく、性癖的に一種誇衒な分子のあるのを嫌ふ人が少くない。私もその弊は認めないではないが、その代りある場合には却つてそれが筆端に珪然たる響を發せしめてゐる事を見逭せぬ。

宙外の『文士田園退去論』は、文學者には田園の方が、思想上經濟上有利なことを說いたものであるが、實は之を以て、漸く封建都市から脫却し、近代的都市を形成しかゝつた新東京に對し、文人の受けたる最初の壓迫の聲と解するのが至當であらう。イギリスでも確かラスキンは汽車を呪ふて之を利用しなかつたと聞くが、兎角文人は、殊にわが國の文人は隱遁的な一面を好む風が傳統的にあるから、東京が着々として近代的都市を形成して行くのには非常な脅威を感じたに違ひない。今日から見ると宙外の論は決して無意味な叫びではなかつた。現在の文人はかゝる都市的壓迫には馴れ切つて來た。たゞ一人の永井荷風が執念く新文明を呪咀し、怨嗟し、諷刺し、痛罵しては反抗の叫びを擧げてゐるのを見る。

六　ローカル・カラア

明治以降の文學に現はれた自然美を論ずる以上、恐らくローカル・カラアの問題も言及し殘してはなるまい。

ローカル・カラアと言ふ言葉を日本で始めて用ゐた批評家は森鷗外であらうが、これが眞に文壇の問題となつたのは自然主義勃興時代からである。

Character と action と setting との物語藝術の三要素のうち、從來重要視せられた action の價値を、自然主義は比較的に輕視し、從來はほんの景物位にしか考へられてゐなかつた setting に急に深い意義を認め始めた。遺傳と環境に力點をおいたゾラ流の議論は、當然こゝに歸結せざるを得なかつたらう。

その setting の中、特にローカル・カラアと稱するに値する程のものを描き出したのは、先づ島崎藤村の『破戒』に指を屈すべきであらう。尤も小栗風葉が早くから三河地方を描いたのも問題にならないではないが、彼が近代文學の一重要素としてのローカルをどの點まで意識して重んじたかは疑はしい。之に比して藤村は信州滯在中の數年、常にスケッチ帳を懷にしては、自然の觀察を怠らなかつた。彼の賦性は元來詩的に最も豐かである。されば稍々もすればそれに搖蕩されさうにな

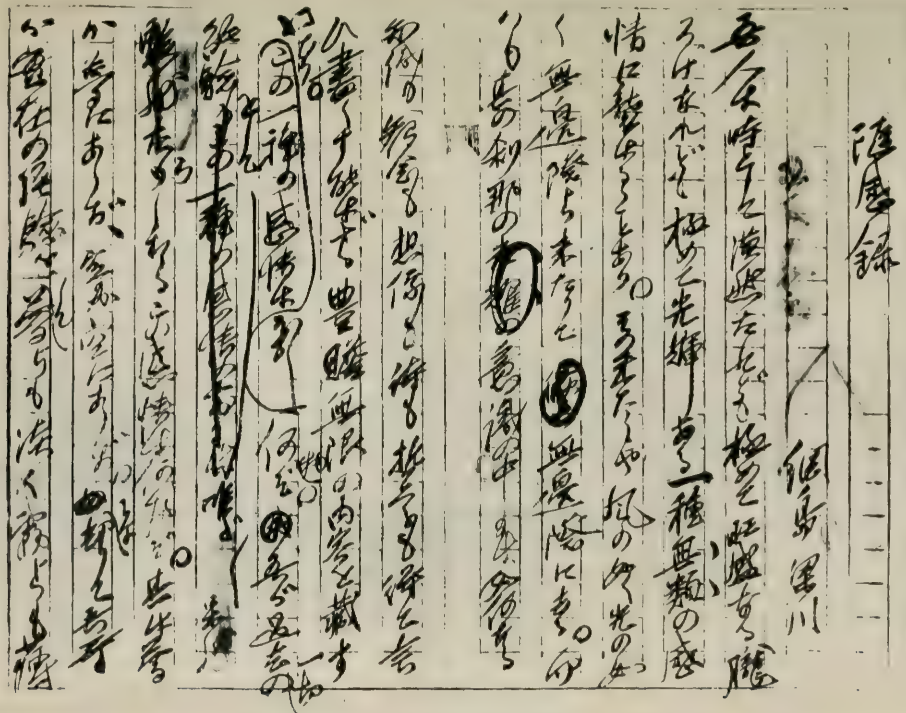
るのを努めて制して觀察をゆるめない。スタディの結果は決して長塚節のやうな精刻なものとはならなかつたが、しみ〴〵とした情趣を帶びたものとなつた。

藤村についでローカル・カラアを出したので有名なのは白鳥の『二家族』『五月幟』などで、これには瀬戸内海――の中でもさう美しくない備前沿海が描かれた。田山花袋の『田舍教師』は埼玉の利根河沿ひが舞臺に取つてある。私はあの書の出た當時、あの書を抱きながら、あの書に描かれた地方を踏査してみた事があるが、平面的ではあつてもかなり明細に描かれてゐた事を記憶する。外に眞山青果の『南小泉村』がある。ツルゲェネフの『獵人日記』からの暗示になるものだと言ふが到烈な筆で、東北地方の農村がギヂギッドに現出されてをる。

七、病床文人と外國人

なほ以上の記述に洩れた中で、幾分の系統を立て得る自然美の提示者があるとすれば、それは病床からの感想を表現した文人でなくてはならぬ。

嚴密に言へば正岡子規や長塚節もこの中に加へるべきであり、夏目漱石も『切拔帖より』などはさうした病床の產物である。だがそれは既に論じた。私の言はうとするのは『煙霞療養』の尾崎紅葉、『秋窓雜記』その他の北村透谷、『病間錄』の綱島梁川などである。



——「病間録」の原稿——

私は紅葉の表現して見せた自然美にはかつて興味を感じた事がない。なるほど『金色夜叉』の熱海の海岸や鹽原の叙景は明治年間有數の名文であらう。だがそれらは中學生の暗誦の材料として與へておけば足る。『煙霞療養』なども私は讀んだに違ひないのだが、今日ふしぎな程記憶に殘つてをらぬ。

私は透谷と梁川とに於て、哲人の觀想に入つた自然美を發見する。『萬有の聲と詩人』『富獄の詩神を思ふ』これは透谷の文である。『病鷄を傷みて』『苦痛と解脫』『默想記』これは梁川の文である。彼等の筆端に上つた自然が單なる繪畫的展開でなかつた事は、上記の題を見たゞけでもうなづけるであらう。

透谷は『秋窓雜記』に於て『春は俗を狂せしむるに宜けれど秋の士を高うするに如かず』と言つてゐるが、梁川も亦『秋の力』なる一文に於て『あれこれを集めて霞む春』を人生の夢と觀じ、秋に透谷と同じ高さ、淸さ、眞實を認めてゐる。傷める心には自らさう映じたのであらう。

併し又差異を求めて論ずるなら、兩者の懸隔は霄壤もたゞならない。『狂風逆捲き、激浪をどる。人生ひとり浪平かならんや』と絕叫した透谷は、情熱に蝕ばまれて自ら破れた。『あまたたびの嘆息を以て神を求めよ』と言つた梁川はどこまでも忍苦の修道者たる態度にをる。それが根據となつてゐるから透谷の觀じた自然には灼熱の炎のやうな動搖が感じられ、梁川の觀じた自然には霜に凍て

た冷鐵のおちつきを見る。

『わが袖の記』の高山樗牛は、情熱的な點が透谷と相似て居り、華麗は却つて彼に勝ること數等である。その代り浮誇に失して胸に訴へる力は幾分弱い。『月夜の美觀』は月夜に對して美學的考察を加へた日本には前例のないもの、或はサンタヤナの『星』の考察などからヒントを得たものではあるまいか。かうした美學的考察は後に島村抱月が『ルイ王家の夢の跡』に於て、建築及び造庭の上に試みた。たゞ抱月の『北英山水の概觀』や晩年の奈良京都のスケツチは、世評の高かつたものだが、凡て或るよき意味に固定した觀點に立脚してゐる所が、さすがに學者の文であると思はせる。

川上眉山の『ふところ日記』は瑰麗の文字を縱横に驅使して、湘南の旅興を叙したもの、單に名文と言ふ點から論ずるならば明治文壇隨一とするも過當であるまい。

篁村の紀行の輕妙、露伴の紀行の莊重、及び同じ露伴の『雲のいろ〳〵』などに見ゆる觀察の精細――などについても論ずべきことは多いであらう。

最後に又外人の眼に映じた日本の自然美も論及し殘してはなるまい。だが悲しい事に私はそれに無知識である。たゞラフカディオ・ヘルンの妙筆に魅せられた以外、他に寓目した書籍がない。

小島烏水の『日本山水論』の『日本の高山深谷を跋渉したる外國人及び共紀行』なる章にウォルタア・ウェストンの事が語つてある。横濱に在留した牧師で、"Mountaineering and Exploration in

the Japanese Alps" の著者である。この書はロンドンのジョン・マレイから出てゐるのだが、久しい間讀みたいと思ひながら私はまだ本の表紙も見た事がない。

だが自然美などといふことは、要するに生活の餘裕者にして初めて口にし得る言葉である。言ひ換へればプチ・ブルジョア的言辭である。吾々の興味對象から、それは日に〳〵遠ざかりつゝある。

登山の準備具だけにでも數百金を要するやうな、贅澤を根據に展開さるる自然美は、今後の文人の良心から言つても次第に跡を絶つであらう。

大正十五年七月

『文學界』を中心にしての斷想

一　『文學界』を繙く

明治文學の研究などと云ふものだから、つい言葉が窮屈になつて、事それ自身が非常に親しみにくくなる。

別に六ケ敷い手數はいらない。先づ古雜誌をなるべく澤山集めることだ。都會なら大道夜店でたやすく手に入る。田舍の家なら土藏を搜つても見付からう。

たゞ指が埃で汚れる事だけは厭つてはならない。そして必ずしも精讀するには及ばぬが、六號の雜錄から懸賞都々逸の末まで、兎も角も一通り文字の上に眼を通す必要がある。さうすれば一寸した敏感さを具へたものなら、專門史家が十年の疑團とした謎の二つや三つを解く鍵を發見するのも決して不可能でなく、勿論、その間に自づと當時の文學の雰圍氣に浸り得る。

——謬つて私達の所へなども、明治文學を知るにはどうしたらよからうかと尋ねて來る人があるから、私はいつも以上のやうに答へる。

さてその私は、この程ある婦人雜誌から、明治大正文學の紙上連講を依囑されたので、いい機會だから今迄書き捨てたものは一擲し、讀みたいと思ひながらつい眼を通さずにゐたものも數點繙い

て新たに史料を補足し、結構をも根本的に更める事を思立つた。
前に買つたまゝ書棚の隅に突つこんでおいた『文學界』の合本を、事新らしく取出したのは、かかる機縁のあつたればである。左の斷想はその間に私の胸に浮んだ事であつた。

二 處女の純潔

『文學界』は明治二十六年一月三十一日の創刊、女學雜誌と明白に表紙に掲げ、卷頭緒言にも『今や女流文學の氣運に向ふて其友たらざるを得ざるものあり』と言ひ、『書學ぶ女性の機關に備へんとす』と宣言してゐる。

然るに實はこれ程、婦人雜誌味が稀薄で、文藝味の際立つて著しい女の雜誌は、明治、大正、昭和三代を通じても他になか〳〵見當るまい。もつと詳しく言へば前者、即ち婦人雜誌らしくなさに於ては全く類を絕し、文藝味の豐かさに於ては現在ある『女性』が辛うじて之に拮抗し得る位なものだらう。

たゞ『女性』は名ある新進大家の顏振れを每號數多く列ねてゐるに反し、『文學界』は當時殆んど無名であつた書生が寄合つて同人となつて執筆したに過ぎなかつたのだから、この間に大きな差異がある。

併し私が兩誌の比較に於て何より興味を持つのは、共に共に、從來の日本人の對女性觀の中に全く無かつた二つの觀念を、新たに注入し、乃至は樹立した事だ。

『女性』は現今大流行のモダン・ガールの最初の搖籃となつた。一昨年五六月頃、某氏が英國の女性に就いて記述したのが、此の語の日本のジャーナリズムに出現した初めである事は新居格、久米正雄、早坂二郎氏などの共に語る所であり（『婦人の國』の合評會記事參照）、そんな女なら日本にだつてある筈だと力んで、搜索し、發見し、そして考察をすゝめた結果、新居氏がその御開山の銘を打たるる因由となつたのである。

然らば『文學界』は如何なる新らしい女性を提示してくれたであらうか。それは久遠の女性的な觀念である。歐洲中世のやうな處女の純潔への讃仰である。聖母マリヤにいみじくも象徵せられたやうな『處女にして母』なる矛盾した男性の憧憬對象の顯示である。

北村透谷が『蓬萊曲』の中の鹿を携へた仙姫はその一例である。平田禿木氏がランドアの一節を譯した『ベアトリチェ』（ダンテとの對話）はその二例である。戸川殘花の靜御前を描き、星野天知の袈裟を弔ふに於てもこれらと脈絡の一點通ずるものがある。

併し最も端的にこの消息を說破したものは透谷の『處女の純潔を論ず』の一文であらう。これは傍題にもある通り、八犬傳中の伏姫の考察で、犬の八房を煩惱の象徵と見、彼女がそれと感應して

女學雜誌

文學界

第壹號

明治廿六年一月三十一日

―「文學界」創刊號の表紙―

懷胎するを煩惱の浸犯と見、而も結局胎内より出たのは『物がはしき』ものでなく一朶の白氣だつたので、透谷は伏姫を『不穢不犯玲瓏たるチャスチイの處女』と讃じ、最後に、この大作を輝かすものは『伏姫の純潔』であると結論してゐる。

明治の女性史を究むる者、この點を看過してはなるまい。

三 『たけくらべ』のモデル

名作『たけくらべ』を初め、一葉女史の二三の作がこの『文學界』で發表せられた事も今更言ふ必要はない。

所で『明治小說文庫』を見ると、雜錄に三宅青軒の筆で『一葉のもでる』なる一項がある。全文を左に轉載しやう。

『綠雨氏故一葉女史の小說に就て語りていふ。一葉女史は、其著作の小說に於て、大抵は、否な寧ろ總てもでるを捉へて書きしなり。たけくらべに於ける多くの小兒は、それ〴〵に其小兒あり、みどりといへる少女もありしなり、其性格は、勿論自分を寫せしものに相違なかるべきも、模型に使ひし小兒は、皆今も健全なりと、又わかれ道に於ける傘屋の吉といへる一寸法師の暴れ者は、現に之れありしなり、主人公のお京は自分ならんも、妾に行くことは無論事實ならざれど、斯ることは

確かにありしことにて、今も其母御に何氣なく、あの傘屋の小僧はどうしましたなどと問ふときは、あれは其後どうしたとか斯うしたとか、必らず答ふ。總て活きたる人間をもでるとして書きたればこそ、一葉の小說には、何とやら生命のあるなれと。』

私が玆で問題にしたいのは、實に此の『もでる』の文字である。

繪畫彫刻にはモデルと言ふが、小說の題材となつた實在人物をモデルと呼ぶが果して正しい英語の使用法であらうか。私はこの點に疑問を持つたので或る米人に聞いてみると、そんな用法はないと明白に否定した。

さすれば小說のモデルと云ふのは和製英語になる譯だから、此れがいつ頃から文壇で使用され初めたものか多少詮索の興味が湧いて來る。或は畫家が混用したのに初まるので、事によると明治四十年丸山晩霞氏が島崎藤村氏に中央公論で抗議した『水彩畫家の主人公について』なる一文などが早い例ではあるまいかと、私は前に想像を述べておいた。（『文藝東西南北』モデル考參照）

併し此れはひどく見當が外れた。小說のモデルの語の使用はそれよりずつと古いので、現にこの靑軒の文の載つてゐる雜誌は明治三十年十二月の發兌である。

更に又もつと古い所では明治二十六年九月發行の文學界の時文欄に之を見る。卽ち幸田露伴の『枕頭山水』を評する中に『……山家に蝶と添寢するなど風流の程心にくく、木曾に見し憐れなる花漬

賣は風流佛のモデルにやあるべし』とある。

これより前私のモデル考を讀んだ一讀者はツルゲェネフの英譯の序文の中に、小說のモデルの語を數回發見した事を報じて來た。

吾等が生半可の詮議に誤謬多かるべきは元よりその所だが、これで見ると本場の英米人の言つた事もうつかりとは信じられない。妄斷の愼しむべきをつくぐ\と感じた。

四　無視せられた劇詩

ブランデスの『十九世紀文學主潮』の何卷かに、世から無視せられた不遇作家を論じた一章がある。眼界の廣濶にして同情の汎きを期する評家にこれあるは當然な事ながら、殊勝な試みと言つてよい。

それと此れとは事が變るが、私はこの筆法を必ずしも人と作品とに局限せず、或る種の文學形態の上にも適用したい。と言ふ意味は、或るグループで熱心に試作されながら、時所介期せずして遂に大成するに到らず、未完の儘に終つた文學上の諸形式がある。西洋の事は知らないが、明治ではホトトギス一派の俳體詩、文學界同人の劇詩などがこの一例であらう。その中でも俳體詩は必ずしも大成を期した譯でなく、道樂半分であつたらうから未だ言ふに足りないけれど、文學界同人の劇

詩は血みどろになつて全力をこめた試作だけに、未完のまゝに終つた事が今日から極めて痛ましく振返られる。

透谷に前記の『蓬萊曲』と『楚囚の詩』の二篇以外未完稿數篇のあつた事は島崎藤村氏が全集序に擧げた題目を見ても明かで、なほ『透谷子戲曲に志あり。書捨たる反古を見るに、戲曲の稿を成さんとして成らざりしもの頗る多きが如し』とも明記してある。

別に彼には『劇詩の前途如何』と題した一篇の論文がある。（文學界十二號所載、不思議な事にこの篇は從來の凡ての透谷全集に逸脫してゐるさうだし、今度の改造社の新版には多くの補遺がしてありながら、この篇はやつぱり見えないやうだ）これは日本劇の最大特長は音樂、動作、科白、舞踏などの整合的調和（シンメトリカルハーモニー）にあるから、これに通曉して後創作しなければ上演の見込はない。併しこれに通じて作を始めるなどと云ふ事は大詩人を呼起す道でなく、寧ろ大詩人を化して小詩人に墮さしめるものである。併し玆でもしかりに劇外の詩人と劇內の詩人と職を異にして分立せしめるやうにしたとて、相互の撞着を免れる事は出來ないと言つて、邦劇の前途の多難を結論したのである。そして彼自身は、たとへレーゼドラマに終つてもよい、なるべく傑出したものを……との勃々たる野心を以て從來の邦劇の諸約束を全く無視しながら、想を構へ、筆を驅つた。彼が斷篇の遺稿『マンフレッド及びフォースト』なる論文に依つて『蓬萊曲』の粉本とした所がほゞ窺はれる。この篇を又白

ら、『余が自責の兒』と呼んでゐるので内容に意圖した所もかなり明白である。
島崎藤村氏は當時古藤庵無聲と號して、長篇の劇詩三篇を寄せた。『悲曲琵琶法師』『茶のけふり』『朱門のうれひ』がこれである。琵琶法師は藝に秀でても世才を全く缺いだ天才的樂師と、藝は拙いが世才に長けて榮達を得た俗樂師とを對立せしめ、前者の妻が夫を捨てゝ後者に走るを點挿し、最後に大内の勅使が前者を迎へに來るが、その時は彼は乞食になつて野たれ死にしてゐたといふ筋。天才が世才を缺しきために不遇に苦しむ例は東西の藝術家がよく好んで描く。學者でも文人でも金を儲け、一身一家を修める世才がないやうではダメだといつも喝破してゐた三田の親爺には叱られる題目だが、露伴の『一口劍』『五重塔』もさうである。『琵琶法師』は一寸『一口劍』の作意を聯想させる。『朱門のうれひ』は平宗盛を聯想させる換え子のこと、ハムレットもどきの毒殺のこと、亡靈のことなどあつて、最後に落城の際に、その昔散り〲に別れ、敵味方になつてゐた夫婦親娘が對面して初めて名乘り合ふと云ふ筋である。『茶のけむり』は勤王佐幕に材を取つたものだが未完だ。
透谷も無聲もかうして劇詩の創作に全力を擧げたものの、遂に世に認められず、その中に透谷は世に破れて早死し、無聲はやがて藤村と改號して新らしい詩の建設に成功した。
なぜ劇詩は不成功に終つたらうか。それは日本語の音韻上の約束のためであらうか。日本人の嗜好がそこに向かなかつたためであらうか。

勿論それらも有力な原因であつたらう。が、別に、劇詩といふものが既に時勢後れとなりつゝあつた世界的潮勢が、遙かにさし響いて、それを不成功ならしめたやうな事はなかつたか。西洋でも劇詩はユーゴーあたりを打止めとして、その後は次第に散文劇が主勢力を占めて、劇詩は藝術の心臟たる地位から辷りかけて來てゐた。明治初期の自由論、十五年以後の國家論、さうしたものは西洋の流行が不思議にあの未開だつた日本に直接的な反響を呼んでゐる。文藝でも英米小說論の草分けと言はるるベザントの著作と坪內文學士の小說神髓とが、同年に著作され、出版にも一年の隔てがあつたのみだと言へば、東西共感の敏速さに讀者は驚くであらう。

この不思議な呼應力をわが國に劇詩を大成せしめなかつた一因に數へる事が無稽であらうか。

五　明治のトルバドール

玆でトルバドールの事を言へば、人は或は冷罵に類する微笑を以て迎へるであらう。併し人文的に見れば事によると文學界は明治の時代にこのトルバドールと幾分似通ふ役目を務めてはゐまいか。

彼等中世末期の行吟詩人の最も顯著な效績の一つは、そのセンチメンタルな、ロマンチックな戀愛歌に於て、女性の地位をどんなに高め、兩性關係をどんなに淨化したかと云ふ點にある。

ささやかながらも同じ事が文學界の效績に於て言はれる。

只、トルバドールは馬上に堅琴を彈じて、諸國を遍歷し、高樓の美姫達から『その歌、鶯よりもめでたし』など言つて迎へられたのだが、文學界の同人はさすがに時代が違ふから自ら歌つたり、彈じたりはしなかつた。併し樂器に寄せた彼等の憧れの如何に强い事よ。見よ、藤村の琵琶法師を。それから透谷の蓬萊曲に於ても主人公が富獄の麓に彈ずるものは琵琶であり、彈琴と題する小詩に謳はれたものも琵琶である。

當時最も情熱的な、ハイカラな青年だつた文學界同人が、今日のモダン・ボーイの中では見向く者もない琵琶を對象としてゐるのは面白い。

古藤庵無聲が當時西國に流浪した途上、近江の石山寺に詣でてハムレットを献納した事は『春』にも書いてあるが、その時の氏の心情などを想像してみるのに、餘程ロマンチックな又センチメンタルなものであつたらう。左に引くのが『石山寺へハムレットを納むるの辭』の全文である。

名にしをふ瀨戸の唐橋に立て湖上はるかに浮ぶ詩神を拜み、むかし紫式部が源氏の風情をうつせし石山寺に詣づ。予や旅に寢て風雅に狂する身のこゝに一の至友あり、今この友を笈中より取出し、ハムレット一冊と記して此寺に納む、紫女が靈のとゞまりたらんと覺ゆるかなたを見やりて、ひたすら今日の風雅を祈るに、雪風飄々孤身をうづめて寒山の一鴉この狂客のはらわ

たを斷つ。

湖(みづうみ)にうかぶ詩神よ心あらば

落ち行く鐘のこなたに聽けや、

千年の冬の夜毎に石山の

寺よりひゞく讀經の聲。

後に自然主義時代にも多くの漂泊青年が出現して、彼等は自らバカボンドと呼んでゐた。同じ若さから來るロマンチシズムでも、彼等のどこかには慘痛な生活苦と現世に對する絶望的な響きが交つてゐた。石山トルバドールと違ふ所以である。むしろ無聲のこのハムレット献納は、自身達が新刊の詩集『抒情詩』の校正刷を大自然の聲に比して何と云ふみじめなものであらうと言つて、華嚴の瀧壺に投げこんだ國木田獨步と田山花袋氏とを思ひ起させる。

六　『舞姫』の粉本

鷗外の『舞姫』を目して田山花袋氏は『パウル・ハイゼあたりの感化のもとに書いた形があるので……この作がドイツの近代小說の標本を示したといふことが出來ると思ふ。』と言つてゐる。（日本

文學講座第一卷）

然るに文學界の六號欄には別な觀方がある。

『ギョーテがマイステルより脫化したりといふリットンが「マルトラバース」のアリスと、鷗外が舞姬のエリスと可憐な風情何ぞそれ相似たるの甚しき、ともにこれセンティメンタルの獨逸想なればなり、鷗外は宛然獨逸想なり』（文學界第八號）

併し私が茲で言つて見たいのは『舞姬』の粉本ではない。實はリットンの『マルトラバース』に就いてである。

今日もしリットンを讀む者があるとしても、それは『ポンペイ最後の日』の一作に限られてゐるであらう。併し少くとも明治二十年頃まではわが國で最も廣く讀まれた海外作家の一人で、邦譯書の數も多く、『寄想春史』『慨世志傳』『繫思譚』など悉く彼の原作に係り、明治飜譯小說史の先頭を切る名譽を冠せられた『花柳春話』も亦彼の作で、そしてそれは實にいま問題にしてゐる『マルトラバース』とその續卷『アリス』とを縮譯したものなのである。

たゞ此れがゲーテのマイステルを粉本にした作だとは私には初耳だつたので、試みに二三の參考書を漁つてみると、原作の序文にその事が斷つてある由が見える。リットンの此の作などは今は日本に需要がないため、原書をたやすく手に入れる道がなく、隨つて私などは表紙を見たこともないも

のだから、つい古雜誌の六號記事でかく蒙を啓かれるやうな醜態を演ずる始末となつた。
そして此の作がゲーテと繋がり、『舞姫』とも幾分の因緣をもつと聞けばひまな時一通りざツと眼を通しておきたい位な興味はもてるだらう。『花柳春話』には、今なら、キッスをさせて下さいとでも譯すべき所を、乞ふ卿が朱脣を一嘗せしめよなどと譯してあるので、よく話柄に上るのだが、幾分でもゲーテの魂が間接にのり移つてゐるものだとすると、吾等の研究態度も多少變つて來ざるを得ない。
坪内春のやの長篇『妹と脊かゞみ』の第六回には主人公がマルトラバラースを讀むの一節が細かに叙してある。そしてあの全體の作意が、美しいけれど教養を缺く女を戀して、遂に娶るところから種々の紛れの生じ來るを描いた點が、多少リットンの作と似通ふてゐないとは言へない。とすればこの作もマイステルの又從妹位には數へらるべきであらう。
文學界の樂器は琵琶である事は前にのべたが、それより七八年時代の早い『妹と脊かゞみ』に出てくる樂器は月琴である。
もう一つ、この作に於ても新年のかるた會がプロットの展開に重要な楔子となつてゐる。この點では『金色夜叉』の先驅をなす。
西洋の小説を讀むと舞踏會で戀愛の成立するを描いたものが幾つあるか知れない。所が男女七歳

にして席を同じうせずの嚴格な封建制度が崩壞して、そして現在の如く放縱自由不檢束なモダン・ガールが出現するに到るまでの中間階程なる明治には――かるた會が最も恰當な戀愛醞釀所たらざるを得なかつた。換言すればそれが西洋の舞踏會の代用をつとめたと言へる。

些細ながらかう言ふことも明治風俗乃至は女性史の研究家の間に見遁がして貰ひたくない。

七 『エンディミオン』の序

文學界の合本は三冊に分れ明治廿六年一月號から廿七年八月號までが第一卷、廿七年九月號から廿九年四月號までが第二卷、廿九年五月號から三十一年一月號までが第三卷となつてゐる。

私はその第一卷の中から三四の事を拾ひ出してみたのだ。北村透谷は文學界同人の中でも殊に平田禿木氏に最も深く推服してゐたと云ふことが、いつか未亡人の談話筆記に見えたが、私も禿木氏のものが非常に好きである。殊にペエタアの遺韻を最も早くわが國へ傳へたと言はるる有名な『草堂書影』の一文などに就いては、是非何事か語つて見たいが、それはいづれ他の機會を待つてであらう。

最後に文學界の遺した事業を綜合して、結論を下すとすると、唐突かも知れないが私にはキイツのエンディミオンの序文を援引するのが、最も適當なやうな氣がする。

『少年の空想は健全である。大人の成熟した空想も亦健全である。併しその間に一つの生活空間が

介在する。そこでは魂が醱酵しかゝつてゐる。性格はまだ決定しない。生の道が不安だ。野心は重い溜息をする。隨つてそこからむかむかするものと、様々な憂苦とが生れてくる。私の語りかけやうとする人々は、つぎ〳〵の頁を繙いて、必らずそれを味ふに違ひない。』

追記――無聲の『朱門のうれひ』は當時氏がゲーテの『エルテルの悲しみ』の英譯を愛讀してゐたから、その影響のもとに書かれたものだとの記事を何かで讀んだ記憶があるが、成程さう言はれると題名だけは確かにさうかも知れない。私など少年の頃、本物を見ずして此の篇の題名だけで内容を想像した折には、藤村詩集などの聯想から、神社か何かの朱門に倚る若人の愁ひを歌つてゐるものだと思つてゐた位だ。然るに實際は朱門と言ふ老國士の愁ひを叙べた劇詩なのだから、從來の日本には全く類例を絶した題の付け方だと言へる、やはり外國に粉本がないと思付けない。但しその内容のシェークスピア張りなる事は平田禿木氏も明白に述べて居られる。（趣味第二卷第十二號平田禿木氏の「文學界時代」參照。なほ馬場氏の「孤蝶隨筆」一〇四頁にも參考になる記述がある。）

平田禿木氏の『草堂書影』がペェタアの餘韻を傳へた最初のものである事は、上田柳村の「文學論集」（二二一頁參照）に見へる。柳村の同じ文は禿木氏の「薄命記」（文學界十五號）が同じく初めて日本にキイツを紹介したものである事も述べてゐる。

昭和二年七月

德富蘆花

——數卷の著作の印象——

一　面白くなかつた『不如歸』

蘆花氏が亡くなつた。今、その全著作を新たに渉獵し直して、氏の文藝上の遺業を再評價するには、私は、その暇もないし、氣も向かない。評論を書いた人なら誰れでも經驗があるやうに、好きな作家となるとどうも俎上にのぼせにくい。好きでよく讀んだ作家の嫌ひになり掛けた時が一番書きいい。でなくば好きでも嫌ひでもない作家だと、すぐ課題を出されても、割合に手際よく纏まりが付く。が、好きな作家だと書く事が後から〳〵幾らでも思ひ浮んで非常に焦點の弱い者が出來上る。

年甲斐もないと言はれるか知らないが、蘆花氏は私の好きな作家で、私が少年の折小說を讀みそめた最初のものが蘆花氏の著作であり、そして『自然と人生』と『巡禮紀行』などは今日も案頭を放たず、時々は出して繙く。『愛讀正に二十年』と言ひたい所だ。その位だから物によつて精粗の區別こそあれ、その全著作の九割までは目を通してゐる。その追懷、評論を一々書いてゐたら、百枚

の紙筆を費してもなほ足りない氣がする。それを僅かな頁に收めるのだから、さきにも斷つた焦點の散漫な感想になるのは豫め御承知を乞ふ。

氏の著作中、一番最初に讀んだのは人並に『不如歸』であつた。小波のお伽噺、春浪の冒險小說思軒の『十五少年』など卒業して、初めてのぞいた別趣な世界だつたから感銘が深かるべきだのに今日作の印象として記憶する所は殆んどない。丁度十四の春で、高等小學校の四年になりたての時であつた（私はこの舊制度の最後の生徒であつた。）から、私によく分らなかつたのかも知れない。同級の友人が持つてゐたので、家へ借りて來て讀んでゐると、姉が取上げて『お前なぞそんな本を讀むには未だ早い』と言ひながら、自分は徹夜して讀んで泣いてゐた。で、私は學校へ行つてから時間の暇々に、一週間ばかりも掛つてやつと讀了したが些とも面白くなかつた。が、これは只に蘆花氏の著作のみと言はず小說といふもの全體の讀み初めだつたので、その意味から思出は深い。

その翌々年、私は兄から此の英譯を敎はつた。不思議にも亦これが私の英文小說を嚙つた最初である。それから軍隊に入つた時、敎官だつた年少の少尉が、この英譯を私に敎へてくれと言つたので、每晚敎練が濟んでから讀んでやつた。『俺がこんなものを讀んでゐると、誰れにも話しちやいかんぞ。』と、その少尉は耻づべき事でもしてゐるやうに口止めしたのが、私には隨分おかしかつた。

その後、兎も角も名作だから、一應は充分な價値査定をしておきたいと思つて半分ばかり讀んだが、やつぱり面白くなかつた。『不如歸』出でて、あゝした同情小說が一時に流行し、いろ〳〵な模作が出たが、その中の逸品と言はれた草村北星の『想思怨』『濱子』などさへ、『不如歸』の足許にも及ばない、彼此比較してみると、さすがに蘆花のよい所が分ると、十何年か前に頗る文學通である兄から敎はつた事があるが、私は未だにさうした比較の暇は得ない。

氏の自叙傳『富士』第二卷には、該作出來の事情、世評など詳叙してある、避暑に蘆花氏の逗子の家へ同宿して、あの話を氏にして聞かした勝氣な軍人の未亡人の挿話は、『不如歸』の本物より餘ッ程私には面白かつた。

二 好きな『自然と人生』

その一二年のうちに私は『自然と人生』『思出の記』『青蘆集』『巡禮紀行』の順に讀んで行つた。『青山白雲』は少しく後れて讀んだ。芥川龍之介氏は尋常小學校の三年生の時に『自然と人生』を愛讀したさうだが、少くとも慧敏無比な氏と、鈍根の吾等との間には少年時代からかうして知識向上の四五年の間隔が出來てゐたやうだ。

『自然と人生』は夏休みに東京から歸つた兄が土產に吳れた。既に一二年前から少年世界に投書す

る事位は覺えてゐた私は、多少文章のよし惡が分りかけてゐたので、無性にこの書を歡んだ。前から大町桂月の『黄菊白菊』などを愛讀した私は、滑らかな流麗な文章が好きだつたので、ゴツ〳〵した『自然と人生』の文章は決して肌ざはりのいゝものとは思はなかつた。然るにその鮫肌は、不思議にも私を魅して了つた。

『雨後、庭櫻落ちて雪の如し。擔溜にも點々として浮べり。擔溜を淺しと云ふことなかれ。その碧空を懷に抱けるを見ずや。』（九九頁、「擔溜」）

『家は十坪に過ぎず、庭は唯三坪、誰か云ふ、狹くして且つ陋なりと、家陋なりと雖も膝を容る可く、庭狹きも碧空仰ぐべく、歩して永遠を思ふに足る。』（一八二頁、「吾家の富」）

『晴れず、曇れど降らず、鬱陶しき年の暮なり。吾宿にも、山より松を伐り來りて、立てぬ。前川に泊する舟の上にも、松あり、注連繩あり、天下事なく、吾家事なく、客なく、債鬼なく、また餘財なく、淡々焉として年は靜かに暮れ行く。』（三八二頁、「歳除」）

これは一例だが、今日でもすぐ唇頭に上つて來る程愛誦したものだ。實際、此の『自然と人生』ほど靈活に自然を表現した文字は、明治年間他に比がない。山路愛山が同じ自然を描くにしても獨歩より蘆花の方がうまいと言つたのは（明治四十一年文章世界、現代作家とりどり評）必ずしも溢美の評語ではない。明治年間、謂はゆる洋文脈は、小說としては早く逍遙、二葉亭、鷗外などに現

はれた。論文としては蘇峯の率ゆる民友社に現はれ、『嗚呼、國民の友生れたり』とか、『歳月は三個と共に流れぬ』とか云ふ奇抜な表現が世を驚かした。美文隨筆などの上では——やはり蘆花氏などが先驅ではなからうか。

『自然と人生』の魅力なども、ごく大ざつぱに言つて了へば此の洋文脈に依據する事が非常に多い。併し洋文脈といふ事を單に文章の構成のみに局限して考へるなら、實は『自然と人生』は事程左樣に英語を堅に書いたものではない。寧ろ唐詩選などに系統を曳く漢詩脈が大部分を占めてゐるのだが、その內容がかなり洋式になり切つてゐるのである。

その洋式といふ中でも基督敎的で、それも內村鑑三氏の著作の光彩となつてゐるやうな正統派に近いものでなくて、英國の十八世紀から十九世紀初頭へ掛けての、あの汎神的思想で一神教の足許は大分危くなりかけた頃の基督敎的なのである。

古來佛敎が日本の隨筆文學を潤澤にした事は非常なものであらう。『徒然草』や『方丈記』の例を見ても分る。基督敎が同じやうな働きかけをした文學を、吾等は蘆花氏に於て初めて見る。前引の諸文のうち、『淡々焉として年は暮れゆく』の中には、吾々は從來の東洋的な隱士の風貌を依然としてみるのみであるが、『その懷に碧空を抱けるを見ずや』と言ひ、『步して永遠を思ふに足る』と言ふに到つて、吾等は從來の、行雲の末に西方淨土を思ひ、飛花落葉に無常を觀ずるのとは全く異つた

宇宙觀に蓬着する。吾等の祖先の穴居民族がアイヌの頃から踏襲したのとは全く異つた、遊牧民族がカルデアの曠原で萬里の長風に袖を拂はれながら涵養したやうな廣潤なものの織れこまれてゐるのに氣付く。

これも『富士』第二卷を繙くと、その一々の短文の出來た動機や環境が精刻に叙してあるので、一層の興味が湧く。この書卷頭の『灰燼』たる短篇小說は、西鄕戰爭を背景に剛腹な兄と可憐な弟との相剋を描いたもので、元から不思議な精彩に富んでゐる作品だと思つてゐたが、果然氏の腹には蘇峯氏との蟠りを全面に噴湧さすべき副目的があつたのらしい。それが新聞に出初めると、蘇峯氏の顏が次第に曇つて來たとある『富士』第二卷の一節を讀んで、成程さうかと、私には多年の疑問であつた『灰燼』の底力の謎が初めて解けたのであつた。

三　子供を題材にした小說

『思出の記』は年若い時に讀めば誰れにでも面白いであらう。一種の立志小說臭い稚氣があるが、それを掩ふて餘りある藝術的香氣もある。

これはトルストイの『幼年、少年、青年』から暗示を得たものであると言はれてゐる。さう言へば、いづれがさきに出てゐるか究めてみないが村井弦齋の『小猫』もやつぱりトルストイの同じ作

に刺戟されたものだと作者が語つたと言ふ。

トルストイのあの作は英國の小說家ディッキンズあたりに系統を曳く。十九世紀の前半英國の文壇には、二つの新興味が前後して新たに提示せられた。一つは自然の發見で、これは主に詩の方に現はれ、ウォーヅヲースなどが中心をなす。今一つは子供を藝術化することで、これは主として小說に現はれ、ディッキンズの『オリヴア•ツイスト』『ニコラス•ニクルベイ』などが先頭を切る。

幾何もなくこの後者の傾向は、全歐に遍滿した。ドストイエフスキの『虐げられた人々』のネルりなどにもディッキンズの傾向が顯著に認められると思ふが、トルストイの『幼年、少年、青年』も、この傾向の埒外の產物ではない。去年あたりある女流評論家が、子供を藝術化した文藝は英國のみに生じたと書いてゐたのを見たが、それは何かの間違ひであらう。英國に發生はしたが、他國にも續々とそれを追ふものが生じ、ロシアの諸作は本場の英國の作品に勝るとも劣りはしない。ディッキンズの孫、トルストイの落し種が、絕東の異邦に『小猫』となり『思出の記』となつて現はれたのは面白い。

さて蘆花氏は、初めの『巡禮紀行』の際、印度洋上で渡歐の一青年が甲板の上で『思出の記』に讀み耽つてゐるのを見、それを借りて水中に投げこんだら、このトルストイのこぼれ種が白沫を上げて海の底に沈んで行つた事を、たしか『みゝずのたわごと』の中に書いてゐる。

いくら自分の著作とは言へ、他人の所有權に屬するものを、無斷で海底に投下するなどは不都合千萬である。私は蘆花氏のあの我儘さは非常に嫌ひだ。但し『思出の記』は、著者自身が一度はむかついて水底に投下したくなる或る衒氣を持つてゐる。だがあの衒氣と云ふ奴は、存外、作に緊張味を添へるもので、一概に惡いとは言へない。

『青蘆集』にはかなりな長編『マリイ・バシュカートセフ日錄』がある。此の薄倖な天才の少女は、あの一文によつて長い間私の憧憬の對象であつた。今に英語が讀めるやうになつたら、第一にこの書の英譯を讀みたいものだとさへ思つた位だ。所がこの英譯は永い間絕版になつてゐて手に入らず、漸く內田魯庵翁の書架に發見して借讀するを得た。一二年前にその英譯は新刻されたが、今度は餘り不廉なので買はなかつた、

『夏の夜がたり』も、この書の中に收まつてゐたらう。これは夏休みに諸國へ散つた傳道師が、再び都へ集つて業蹟の報告をする時、ある乙女に戀して報告すべき何者も持たなかつた青年が入水する話であつた。蘆花氏の出世作で、元祿文學復興の當時の文壇には珍らしい題材であつた。

『漁師の娘』は『青山白雲』の方に入つてゐたかと思ふ。蘆花氏自身はこの作が氣に入つてゐたらしい。私の友人が諸家短篇選集を出した時、氏からはこの作を入れて吳れとの自筆の返事が來てゐたのを、見せられた事がある。

四　『黑潮』と『巡禮紀行』

日露戰爭前には、氏は平民社の社會主義運動に同情をもつた。そして『黑潮』を書いた。その序文は蘇峯氏へ叩きつけた絕交狀として有名だつた。その後篇の豫告と作者の言葉と、本文第一回だけは『新紀元』に出てゐる。が氏はいつとなく又運動を遠のいて、この稿は繼がなかつた。

日本フェビアン協會の創立委員會の席上で、×××氏を招くべきか否かが問題になつた時、石川三四郞氏が『文學者はあてにならないから』と言つて反對されたと言ふ噂を聞いた事がある。これが事實なら石川氏は屹度蘆花氏の『黑潮』後篇違約のことを念頭において居られたのではなからうか。これは私の想像だ。併し石川氏の『放浪八年記』を讀むと、日本を脫出する際德富兄より讓られた外套を着し云々とあつた。これは蘆花氏であらう。蘇峯氏ではあるまい。

最終桂內閣の時、國民新聞はその擁護をしたので民衆の怨府となり、遂に包圍破壞（少々だが）せられ、聲價一時に落ちた。その際國民の第一面には蘆花氏が小說を執筆連載するとの廣告が出で讀書界は國民新聞の商賣上手に感嘆したものである。『十年後』といふやうな題で確か二三回は連載され、『黑潮』續篇だとの評判はあつたが、さうかどうか充分の形態も窺はせないうちに中絕して了つた。

この二三年前、日露戰爭が濟むだ直後、氏はパレスチナに聖跡をめぐり、ロシアにトルストイを訪ふた。『巡禮紀行』はこの時の產物、ヤースナヤ・ポリャーナ夏の朝明けに、まだ人の家を叩くには餘りに早く、木蔭に旅の疲をまどろんでゐると、いつの間にかトルストイが來て『トキトミ君』と言つて呼び起す一節は、實に一篇中の絕誦であつた。

ここで氏の生活の前期は終つたと言へやう。粕谷村の半農生活はその後に於て初まつた。

五　粕谷の生活

粕谷隱栖後の蘆花氏は數年鳴かず、又飛ばなかつた。その間にたつた一度、獨步の病牀を慰藉する『二十八人集』が編纂せられた時、氏は舊作でなく、珍らしくも書き卸しの長編を寄せた。『哲夫兒に與へて予が近況を報ずるの書』がこれである。

往年民友社に對峙した二才人、一は聲望一世を專にしながら瀕死の病牀にあり、一は筆を收めて田園に起臥してゐる。兩者感慨無量だつたであらう。『二十八人集』は實にこの氏の一文のために異常の人氣が湧いたと言つてゐゝ。氏の近憐に住む梅毒の遺傳を受けた子、一人は盲兒、一人は啞兒であるのが、鈴蟲捕りに出て一人はその所在を鳴聲で聞き分け一人は灯をさしのぞけてそれを捕つて賣りに出ることを叙した一節は、殊に感銘が深かつた。『みゝづのたわごと』に甦生後の生活報告

をした時、これに改竄を加へた文が卷頭を飾つてゐたことは言ふまでもない。
蘆花氏の著作で閉口なのは日子日女が頻りに出初めた『新春』以後だ。私は蘆花氏が誇大妄想狂に掛つたのではないかと、疑つた位であつた。併し『富士』は又大いに讀むに足る。これは一面から見ると民友社中心の精細な明治文學史側面觀だと言へる、氏の手許に日記か記錄がなければかうは書けまい。
『黑い目と茶色の目』の中に「矢部さん」が「留め得たり洛陽幾片の花」と云ふ漢詩を書く一節があるので、そのモデルに違ひない安部磯雄氏にそんな事がありましたかと聞いたら、『いや、あの小說を讀んで私も驚きましたよ。自分ではすつかり忘れて了つてゐました。屹度德富君は日記か何か付けてゐるのでせう』と言つて、笑つてをられた事があつた。

昭和二年十月

擬㆘森鷗外與㆓永井荷風㆒書㆖

一　芥川君と會つて

永井君、暫く。

實は私は今年の六月下旬、ある霖雨の夜、ちらりと君の夢に現はれた事があるのだが、その時君は例の惡疾の不順な季候で再發した加減か、昔パリで馴染んだらしい歌妓の面影のうつつ攻めにあつてひどく魘されてゐるやうだつたので、何も言はないで歸つて來た。

ついではこの八月の初め、君がタイガアで女給を擁しながらコーヒーを啜つてゐる時、君の幻影（まぼろし）に現はれた。所が、君は私の軍服帶劍の姿を見て、ひどく興が醒めたやうな顏をしたので、遺憾ながらあの時も話が出來ないで引込んだ。

前者は或は君は氣付かなかつたかも知れない。後者は明確に君の記憶にある筈。

今日急に思ひ立つて一書を君に呈するは、外でもない、芥川龍之介君が Hades に居を移してから初めて訪ねて來て、いろ〳〵文壇の新らしい噂を聞かしてくれたので、急に娑婆が戀しくなつたのだ。と云つて上田敏君や夏目漱石君は私よりも先にこちらの客となつて了つたし、與謝野寛君は私の全集も完結させないでぐづ〳〵して居るから口をきくのも厭だし、さしあたり君以外に懷しい

人がないのである。或は多少、君の耳に痛いことを云はないにも限らないが、そこは辛抱してくれ給へ。

實はこちらへも婆婆の雜誌は來るので、君の近業も拜見して居る『成島柳北の日記につきて』（昭和二年四月號中央公論）『柳北仙史の柳橋新誌につきて』（同上五月號）『荷風隨筆』（同上六月號）『上野』『やどり蟹』（同上七月號）など。

それから改造社並に春陽堂の圓本の君の集も屆いたので、所收の作若干も亦眼を通し直した。そして君が新舊の作を相比して見て、幾分の感慨を禁じ得なかつた。その點を聞いて貰はう。

二　考證の杜撰

率直に云へば私は君の近作にはみんな感心しない。考證にも、創作にも、隨筆にも。强努の末とでも云ふか、精彩が著しく減じて居る。

たとへば君の諷刺的隨筆『小說作法』である。これは私の生前世に公にせられたものらしいが、つい讀みそくなつて今度初めて眼を通した。面白くないとは言はない。だが隨分調查の粗笨なことが書いてある。たとへば、

『小說と云ふ語はもと日本語にあらず、戲曲院本なぞいふも皆漢文より借り來れるもの。此れだけ

にても日本の小說家たるもの歐洲語の外に漢文も少しはのぞいて置く必要あるべし。小說の語は張衡が西京賦に「小說九百本自虞初」といふに初まり……』（改造社版四八三頁下段）

とある。これなど抑々間違ひだ。成程君の擧げた鷲津毅堂などはそんな事を書いて居るだらう。が、それは穿鑿の充分屆かなかつた幼稚な時代であつたればこそで、研究のもつと進んだ今日に呼吸してゐる君が、そんなものを典據としたのでは、折角年少に勸めて漢文を學べよと敎ふる君の言の楔が些ともきかないではないか。

たとへば魯迅の『中國小說略史』を見給へ、『小說之名、昔者見于莊周之云「飾小說以干縣令」(莊子外物)』とある。卽ちこの語は莊子に旣に早く出てゐる事が分る。

或は君は云ふであらう。それは決して今日の小說と同義であるまいと。それなら君の文も『小說の語は……張衡に……初まり』とあるのを『小說の實は』とか何とか改めて貰ひたい。

勿論莊子の中の小說の語は今日意味するものと同じでなく、その點は史略の著者魯迅も亦『然案其實際、……與後來所謂小說者固不同』と明記して居る。だがさう言ふなら虞初に初まる小說も亦、君が『小說作法』の隨筆に於て意味する小說と同義であるか否か頗る疑はしくなるであらう。日本の明治以降の小說なるものは、支那の傳來のものと、德川期に於ける草双紙その他日本固有のものと、それから西洋移入のものとの合成なので、その意味でこの語に新意義を附與したのは先づ坪內

君の『小説神髓』あたりを先頭と見てよからう。

だからつまりイタリのルネッサンス當時の Novella が今日の小説發達過程の一重要段階ではあつても、決して十八世紀になつてイギリスに起つた Novel と同じものではない如く、張衡の賦に出でた小說も、今日のと同語義のものではあり得ない。

それ故どの道から云つても君の小說の語の出典の穿鑿は頗る粗笨なるものたるを免れない。この一事だけでも、君が考證家としての資格は頗る疑ふべきである。

三　革命家とロマンチークとすね者と

然るに君は何を思ふてかその考證に類似したものを頻りに發表する。前記の中では成島柳北に關するものなどその一例でなければならない。

私は又何で君が成島柳北などを擔ぎ上げるのか訝しく思つて居た。あんなものは早稻田あたりの本間久雄とか木村毅とか云ふてあひの批評家に委せておけば足るので、わざ〳〵君を煩はすまでもあるまいと考へてゐた。

が今思ひ直すと、君が柳北に傾倒する、或は所以なき次第でもないやうである。第一は兩者とも折花攀柳の風流人たる點で、第二は世のすね者たる點に於て、頗る酷似し、君を目して二世柳北に

擬する必ずしも不當でないかも知れない。

私はその柄でないから茲に風流方面のことは默殺しておいて、この「すね者」について一言したい。實を云へば或る意味から私自身が幾分文壇のすね者であつたので、この氣持には一種の同感が持ち得られる。

Plechanof はロマンチークを目して、ブルジョア的趣味と習慣とに反逆しつつも、ブルジョア的社會構成には何等反對しなかつたものと言つて居るが、すね者必ずしもロマンチークではないけれど、この考察は少くとも「すね者」の定義にも若干の暗示になる。

「すね者」は自分の生息する社會に不滿を抱く者である。この意味で革命家はロマンチークと似る所がある。併し革命家が根本的に社會構成を否定して、之を崩壞轉覆しやうと意圖する勇氣あるに對し、「すね者」はその社會的構成は受容して、表面の趣味や習慣にのみ反逆する。この意味では彼は革命家と本質を異にし、むしろロマンチークの縁者である。併しロマンチークにはその趣味や習慣への反逆が陽性に外發するに反し、「すね者」にありては陰性に内訌する。ここで彼等は互に袂を分つのである。

柳北時代の革命運動であつた謂ふところの自由民權運動、及び日本では最初の文藝上のロマンチークであつた文學界などと對比すれば、彼が位置は多少明瞭になる。柳北が今二三十年若かつたな

らば、彼を柳村や禿木に伍せしめてみる必ずしも無稽な空想でない。それから彼は民權運動の左翼たる自由黨には何の關係ももたなかつたが、右翼たる改進黨には名を列した事があつた。たゞそれ名は列した、併し事跡に殘るやうなことは何もしないで墨堤に風流を追ふて日もこれ足らなかつた。これすね者と革命家とが或る程度に似通ひ實際は大いに異る何より有力な證左である。

荷風君。君が現代を罵り、丸ノ内の建物を以て英國殖民地式の殺風景なものと斷ずるは、柳北が柳橋花街の薩長無風流の士に蹂躙せられ行くのを慨したのと好一對である。民間不平の名士を拉するに努めて改進黨が柳北を招いたに反し、社會民衆黨が君を招かなかつたのは、時勢の差によるか、抑々又君が聲望柳北の如く廣く天下に布かざるに依るか、それは知らない。そして君も今二十年若かつたら、急行列車に途中の小驛を小石の如く默殺せしめて、新感覺派の小說を書かなかつたと誰れがよく保證し得やう。

以上の類似點をさぐつて推測するに、君は柳北に大部分の君自身を見出したであらう。そして私が澁江抽齋に多分の私を發見して新史傳に筆をそめたのと、或は同じ氣持であの柳北の文を草したのではないか。

それなら、君が坪內君の門末の輩に柳北の考證を委せずして、自ら立たうとしたことに意義がある。

私の自惚れでなければ、君は柳北を傳するに於て、ひそかに私の新史傳に倣はうとしたであらう。だが此れが抑々失敗の原因であつた。君の文はかゝるものを草すべく餘りに脂氣が多すぎる。大正五六年の候、米不足の威嚇が全國に襲ふた時、時の東京市長田尻稻次郎君は豆を以て代用食とすべきことを頻りに提議した。但し油氣をぬいた『脫脂豆』でなければ決して米の代りとならぬ如く、脂氣をぬかぬ筆は新史傳には適しない。而もその脫脂豆には遂に米の味なきが如く、君の文は決して鷗外の文ではない。煽てて言へば君の文は艶美で、新史傳には勿體なさ過ぎる位である。

筆にその缺陷がある上に君には鷗外程の根氣がない。詩的天分はより以上にあるが科學的教養が絕無である。隨つて考證的才能が非常に稀薄である。

『著者が史實討究の方法は、恰も樹間に帆影を望み竹陰に棹歌を聞いて河流のある處を知るや、道を求めて岸頭に至り流域を跋涉して支流に逢ふ每に細水小溝糸の如きものと雖猶これを閑却せず、本流と合せて悉く其源泉を究めずんば止まざるものに似たり。跋涉の勞や本より尋常ならず、然れども途上おのづから又意外の佳景よく杖を停むるに足るものあるべし。山房考證の文學を讀むの興は著者の後に隨つて共に探索の途を步むが如き思ひをなすに在り。而して著者の筆よく讀者をして此の感をなさしむるに妙を得たるは言ふを俟たず。』

君は私をかう云つて賞めてくれて居る。君に多少でも私に倣はふとする氣持があるのなら、君自

身も亦この位な勞は取つてくれてもよいと思ふ。柳北の日記のやうな貴重な材料を手に入れながら、雜誌の僅々數頁の中に、「未だ考へず」の文字が、鷗外全集全一卷の中にあるより多いのは醜態でなくて何であらう。殊に月券、喬氏など云ふ柳北の馴染んだ柳橋の藝者の名の考證位は君のお手のものではあり、それにあの方面の雜著も數多いことなり、さぐれば柳橋新誌の第一編にも約百二十ばかりの妓名があげてあるのだから、何とか手掛りを得て究められたらうと思ふ。

四　藝者小說よりカフェ小說へ

君の隨筆はもとは面白かつた。一寸した偶感を興の赴くまゝに筆に托すなら、實に流通無礙、水の木の葉をくゞり、岩を避け、而も遂に往く所に往きつくやうな趣があつて、『日和下駄』一卷の如き、頁の終るを忘れざらしめたものである。だが材料を集めて、その材料に多少でも口をきかさうとするものになると、第一その集めた材料が大したものでなく、筆端が妙に硬ばつてゐる。『上野』など君の崇拜家を失望させたことゝ思ふ。

君の小說はうまい。この點では、私のものなど遙かに及ばないことを自覺してゐる。全く小說に於ては君は大正以降の第一人者であらう。謂はゆる花柳小說の『新橋夜話』『腕くらべ』、それから『おかめ笹』など、君は多少ふざけたり、冷やかしたりするやうな氣持で書いてゐても、いつかは

凛乎として生活に浸徹して來る。それは針で急所を突いたやうに鋭利ではない。が上手な按摩が、肩をもみ腰をもみして、初めは一向に五體に徹へる所がないやうでありながら、じり〳〵と痛みを押へて、遂には「あツ」と叫を發せしめるやうな趣がある。

だがさう云ふ名作も『おかめ笹』が打留めであつた。

あの『やどり蟹』のひどさは何だ、君の作にはあり得べからざる程タツチが粗雜で、脉絡も充分な聯關を缺いでゐる。而もその缺けたる部分は君が原稿の紛失を斷り書きした終末の方でなくて、却つて始めの方である。又君が從來の作はどんなに作中でふざけても押えるべき所はよく押え、たとへば『腕くらべ』の駒代といふ藝者に養父が看板を讓らうといふあたりでさへ、よく一味の哀愁を漂はして、若干の人生的意義は必ず含蓄させ得てゐた。然るにこの作にはさうした長所が一ヶ所も見られず、あばずれて腕の惡達者な藝者がお座敷で素ツ裸で躍つてゐるやうな興ざめた思ひをさせる。

私は諸家の賞讃を博しつゝある岡鬼太郎君の花柳小説は不幸にして未だ流讀の機會に遭遇せぬが、平山蘆江といふ人の『今樣源氏抄』はかつて讀んで相當に感心したことがある。流麗、婉美で、單にうまいといふ點だから言ふなら恐らく君の作にも多く輸するものではないとさへ思つた。而も彼が高級の文學として齡されず、君が花柳小説のみよく評家や士君子の閲覽にも入つてゐるのは、た

ゞ上記の一脉のわざとならぬ哀愁、若干含蓄せられた人生的意義が彼此の間に霄壤の懸隔を作つて居ればこそであつた。

それ故に全くこれを缺如した『やどり蟹』は、わたくしは『今様源氏抄』以下だと斷言しても憚らない。

尤もこの『やどり蟹』は君の取扱つた題材としては、いささか異とするに足る。なぜなれば同じく脂粉に生きてゐる女であるにしても藝者でなく、月ぎめの妾渡世の女だからである。玆に君の花柳小說の題材は一轉化せんとする兆を見せた。

これが更に展開して、背景が銀座に代り、舞臺がタイガアに移り、然り而して藝者私娼の代りにカフェの女給が君の題材に上るに到れば、さすがに「すね者」の君も時代には遂に押し流されて、モガ、モボの餘塵を拜するに到つたなどと惡口をつく者もあらうが、或はその方面の小說開拓の任に當つた廣津和郞君や、久米正雄君とは違つたも少しコクのあるカフェ小說が出來るかと期待する。只、繰返して言ふやうに君は旣に舊時代の人だから、カフェはどことなく君が筆にそぐはず、明治初期の油繪のやうな新舊混交のものにならぬとも限らぬけれど、それは又それで趣味がある。

今私はダンテが空想の地獄と實際の地獄との比較考究に忙しくて、自分で筆を取る餘裕がないから、口述を筆記させた。いつもの文より蕪雜で、用字も嚴正を缺くのはそのためである。だが決し

て僞書ではない。だから新約に於けるパウロの書翰のやうに末尾に自分の書に違ひないことを確く保證しておく。

昭和二年十一月

柄にないではないかと冷やかすのだけは御免を蒙りたい。柄にない事は誰よりも本人の僕自身が一番よく心得てゐる。

キッス雜考

一　最初の思出

では何故こんなものを書くのだと反問も出て來やうが、これは因果な巡り合せと申すの外はない。實は去年の初秋、讀賣新聞の文藝欄に私がキッスの研究をしてゐるとのゴシップが出た。その後三四の友人が、非常に怪訝な顏をして、本當かいと確かめるやうに訊ねるし、本誌（婦人公論）の編輯子に取つ捉まつたのも又あのゴシップのお蔭だ。えゝ、面倒くさい、そんなら一つ私がキッスの研究などを全くやつてをらぬ反證を擧げておくのは、後來もう二度とこの種の迷惑を蒙らぬ防塞にならうかと、卽ちこの雜考を綴るのである。

日本でキッスと言ふ言葉が近頃のやうに誰の耳にも熟するやうになつたのは、多分さう古いことではあるまい。

日露戰爭第二年目（明治三十八年）の夏である。私の鄕里の田舍へ東京の大學生と、それから或る地方都市のミッションの女學生とが休暇で歸つてきて、話をしてゐた。繪葉書の大流行をし初めた

年で、二人の前には外國製の繪葉書の、妍々楚々たる少女が背を向けて片手を後ろへ差出してゐると、青年が前屈みになつてその指に唇を宛てがつてゐる所を、美しく描き出したのが、置いてあつた。

『ちよいと、キッスつてば、こんなにしてするんでせうか』と、その女學生が尋ねた。

大學生が何と答へたかは今の私の記憶にないが、これが私のキッスなる言葉を耳にした最初で（當時十一二だつた）これは一體何の事だらうと訝る念は隨分長い間頭にあつた。

私にそのキッスの謎が解けたのは、何時、如何なる機縁に於てであつたか些とも記憶はない。或はリーダアで說明されたやうにも思ふし、或は活動寫眞などで自づと會得したのであるやうな氣もする。

何に致せ日露戰爭頃までは、當時最もハイカラな婦人を代表したミッションの女學生だつて、キッスの言葉は耳にしてゐても、その具體的內容は充分には知つてゐなかつた程、まだその事が一般には珍らしかつたのだ。

二　珍譯いろ〳〵

然らば一體、今のやうに街頭に遊ぶ三ッ兒まで投げキッスをしてゐる程、それが流俗の間に傳播波

潤するに到つたのはいつ頃からであらうか。いや、それよりももつと前に、その觀念でもよい、實際行爲でもよい、或は言葉だけでもよい、日本にこれが傳はつた抑々は一體いつだらうか。

カトリック教徒で、古い南蠻文獻に興味を持つてゐる或る友人は言つた。『それはずつと古い事だ。おん口吸ひとか、おん手に口つけとか言ふ言葉は既に古い切支丹文獻に見える』と。

私はその後なまけてまだ原典に當つてみる機を得ぬが、マリア像や十字架に接吻することから考へ合せると、如何にもそんな記述はありさうに思はれる。

かつて太閤が陣中から淀君に送つた手紙を見た時（或は後人の僞書だつたかも知れぬが）『歸城の上にて口吸ふべく候。その間何人にも口吸はせなさるべからず候』と言ふやうなことが書いてあつたのに興を催した記憶がある。して見ると當時の人がマリア像への接吻を『おん口吸ひ』などと譯したに不思議はない。

西洋の研究家は、キッスは白人獨特のもので他には絕えて見られない、有色人種の間では、日本の母親が子供に對してするのが唯一の例外であると言つてゐるが、果してさうか知ら？　前の太閤の手紙など之を破る一つの資料であらう。

たゞ私は愛情の表示としての、自然な、キッスを說いてゐるのでなく、西洋流のそれの移入の跡を尋ねてゐるのだから、日本在來の自然發生的なものは拾ひ上げない。

その後、鎖國時代は海外との交渉のブランクなるに隨ひキッスの文献もあるまい。

私は去年の夏長崎へ遊んだ序に、その地の有名な圖書館を訪ひ、元、三田文學の同人であつた增田司書の好意でさまざまな祕卷を見せて貰つたが、或る棚の上下を占めて、恐らくは日本最古とも言ふべき蘭和辭書と英和辭書との並んでゐるのが目についた。これは外船の來航の次第に頻繁になるにつれて、奉行所（？）でも言語の習得の必要を感じ、通詞をして書き出させたものださうで厚い和紙に墨を用ひ大きな字で書いてあるのだから頗る大部なものとなつて、何冊にも分れて並んでゐた。

これを見ると持つて生れた病で、私は妙な好奇心を起し、先づ英和の方で Kiss に如何なる譯語が宛てられてゐるかを搜さうとした。が殘念なことには、それはＩだつたかＪだつたかで終つてゐて、肝腎のＫの部までは揃つてゐない。言ひ換へれば未完で中絕してゐるのであつた。

そこへ行くと和蘭の方はその交易の行はれた事が久しいだけに、終末まで完備してゐる。私は喜んでＫの部をひつぱり出し、それに宛てられた譯語を求めやうとしたが、やつぱり殘念なことにはKus といふ字が頭からてんで書いてないのである。

出町の和蘭屋敷に出入した丸山の遊女達には必要があつても、交易には大して用のない言葉だから、通詞達も知らなかつたか、知つても嚴めしい奉行所へ差出すには憚りありとしてわざと略いた

か、それは私の知る所でない。

その後、明治文化研究會で私は、この話を吉野博士にしたのであつた。或は玆で無遠慮にお名前を出しては、謹嚴な博士を累すること無きかを恐れるが――翌日、博士は座右にある幕末明初の古辭書を片つ端から檢索して、それにはキッスに如何なる譯語が付せられてゐるかを、丹念に書き寫して送られたのである。その儘を左に錄する

（一）英和對譯袖珍辭書（文久二年）接吻

之を殆んど其儘模した開拓使版（明治五年）には「せつぷん」と假名を附してある。

（二）ヘボンの字書。英和の部 Kiss の説明としては "No equivalent for the words in the Japanese とあり。

（三）英華字彙（柳澤信大校、明治二年）親嘴スル、啜乖スル

（四）英和掌中字典（有馬私學校版、明治六年）スフ、クチスウ

（五）薩摩辭書（明治二年）接吻

（六）英和字典（吉田賢輔、明治五年）接吻、親嘴、啜面眛

（七）サトウ石橋英和字書二版（明治十二年）クチヲスウ

（八）　長崎版佛和字書（明治四年）baiser に接吻スル
（九）　上海版英華字典、（明治十二年）親嘴、啜面

恐らくキッスの譯語は大體、右に盡きてゐると思ふが、外に只一つ萬延頃の書に『お刺身』なる譯語を用ひた書があるとの事を、エロトロジイの素人研究の兩大關梅原北明、齋藤昌三兩君から報知を得てゐる。

明治天皇の逸話を見てゐると、確か明治十三年イタリイから勳章を捧呈して來た。これには捧呈者から被授者の手に接吻することが儀式になつてゐたので、近侍の者は大いに頭痛に病んでゐたのに、天皇は少しもそれを意に介せず儀式に隨はれたと云ふ事が見える。

この時の宮廷記錄に、この語は一體何と譯して用ゐられてゐるであらう。從來の辭書、或は支那の辭書にある譯語でも襲用したか、それとも新譯語を創成したであらうか。

三　飜譯文藝の効績

さて以上に記した譯語のうち今日專ら行はれてゐるのは『接吻』で、他は悉く廢語同樣になつた。たゞ詩歌の方に於てのみは『ロづけ』の語が屢々併せ用ゐられる。

一が流行語となり、一が廢語となる。それには勿論いろ〳〵な理由があらう。嘴は餘り堅い感じがする上に、字の劃が多くて書くのにも面倒だから『親嘴』と云ふやうな字は行はれなかつたのかも知れない。『啜面』――或はこれに多少の變改を加へて『啜吻』などとすると最も實感的になつてくる、隨つて愛情表示には適切だが、儀禮の場合などには應用しにくからう。それに實感的なるが故に却つて流布を妨げられたのだと考へられないでもない。

『接吻』の譯語は、上記、諸辭書を見ても、初めから最も有勢だが、併しそれが一般的に流布したについては、文藝の力が大いにある。但し明治初期の文藝家は必ずしも最初から、この譯語を採用したのではなかつた。

たとへば從來、明治最初の外國文學の飜譯書だと言はれて來た丹羽純一郎の『花柳春話』(リットン原著『アーネスト・マルトラバース』及び『アリス』の譯にして明治十一年刊行)にはかうある。

『僕(マルトラバース)若シ幸ニ卿ガ朱唇ヲ一嘗スルヲ得バ、能ク安眠ニ就カンノミ。アリス袖ヲ以テ顏ヲ掩ヒ、言ハント欲シテ猶ホ語ナシ』(明治文化全集飜譯文藝篇六二頁參照)

又、明治十五年刊行、ボッカチオのデカメロンを大久保勘三郎の譯した『群芳綺話』の中には、『(女が)口ヲ以テ彼ノ瞼兒ヲ舐リ』(同上二九〇頁)とか『手ガ接シ唇ガ觸レ』(同上三〇〇頁)とか適當の譯語なきため樣々の工夫を凝らしてゐるのが窺はれる。その他一々玆には擧げぬが、讀

者もし明治初期の譯書を一讀さるゝならば、大同小異の此の類の譯語に邂逅すること、必ずしも珍らしくないであらう。

これが森鷗外、長谷川二葉亭時代の譯書になると、ほゞ「接吻」と云ふ字に一定して來てゐるのを見る。

飜譯でなく、創作の方で最初に接吻を描いたのは何人であつたか、實は私は知らない。坪内春のやの『當世書生氣質』などは、會話の中に英語が隨分と出て來る。それは今日の吾々の用ふるのよりも遥かに語數が多いが、恐らくは當時の大學の教師に外人が多かつたのと、又今日程譯語が一定してゐなかつたのとに依るであらう。が、キッスの語は、私のさがし方と記憶が惡いのかも知れないが見當らなかつたと思ふ。

森鷗外は早くから接吻を創作に取入れてゐる。私の非常に好きな『うたかたの記』(明治二十四年)にかうある。

『少女は卓越しに伸びあがると、俯きゐたる巨勢が頭を、ひら手にて抑へ、その額に接吻しつ』

(元版『水沫集』七頁)

『少女は、「さても禮儀知らずの纔子どもかな、汝等にはふさはしき接吻のしかたこそあれ」と叫び……(同上)

但しこの少女は日本人でなく、マリイと言ふ花賣りで、舞臺はドイツのミュンヘンである。當時日本の婦人の間には、それがどんなにハイカラであらうと、モダンであらうと、まだ接吻の習慣があつたとは思へないから、勢ひ鷗外の如く外國に材を求めた作の中でなければ之が投せないわけである。

日本婦人の接吻を描いたのが、どの作家に初まるか、此れは餘程調べてからでないと、輕々には斷じ難い。そして最近はたとへば『月夜の喫煙』の作者の如く、街頭に唇を觸れ合ふ痴態を演ずる男女を描いても、讀者が少しも怪しまぬまでになつた。尤も五十年間に泰西文明を鵜呑みにした日本だから、キッスの傳播にこの長足の進歩ある、蓋し異とするに足らぬであらう。

鷗外と並んで『接吻』の譯語を襲用した文人は二葉亭で、今、手元に本がないから頁數まで指示するわけにはゆかぬが、たとへばツルゲェネフの『ルーヂン』を譯した『浮草』などを見ると、その語を用ゐてあつた事が確かである。

そして有力な文藝が『接吻』の譯語を流布して、確定的なものとしたのに對し、これが實際を大衆に傳播さして、クリスマスやカフェと同じく、日本人の習慣としても拔き難い地歩を得しめたのは——恐らく映畫であらう。映畫が來るまでは、たとへ接吻の語は廣まつてゐても、それが如何なる様式を要求するものであるかは、洋行歸りと、外人に接觸してゐる者との少數者以外には知られな

かつたであらう。

私は、キッスの場面のみ寫した長尺のフィルムを珍藏してゐる。これは檢閲でカットされたのを丹念に拾ひ集めて繫ぎ合せたので、『「こんなにキッスの場面のみが澤山集まつたのは珍らしいから、他へ切つて與へたりしてはいけないよ」』と言つて、わざ〳〵友人が持つて來て吳れたのだ。

別の友人がこれを試寫するといふので貸し與へた所、四つか五つになるその家の子供が、人さへ見るとやたらに唇を持つて行つてくつ付けるので閉口したと云つて返して來た。子供は模倣性に富むものだから此れで全班を推すわけには行かぬが、映畫の感化力の一部の證明にはならう。

このフィルムは新舊混交で、中には寢室など寫したひどいのもあり、吾々が見てもカットの至當さをうなづくのも無いではないが、大體は平凡でつまらないのが多い。それも概して古いの程、何でもない所をカットしたのが多い。

檢閲の標準は時に依つて寬嚴いろ〳〵に變り、又同一人でも氣持一つで手加減が違ふであらうが、併しこのフィルムを見たゞけでも、大體の傾向としては次第に寬大になつて行きつゝある事がわかる。これは言ひ直せばキッスが日本人の生活の中に次第に根を張つて、簡單に唇を接觸したもの位では、『風紀が紊れなくなつた』何よりの證據だ。

亡くなつた內藤鳴雪翁は、座談に西洋人は禽獸だとの持論をよく吐いたさうだ。その理由とする

所は『男と女で手を握り合つたり、唇を甜め合つたりするからだ』と言ふのだ。――春秋の筆法を以てするなら、つまり日本人はそれだけ禽獸に近くなつたのだ。

西洋でも最近キッスは花柳病その他の惡疾を傳播するから禁止すべしとの議論が社會學者や醫者から出てゐる。かと思ふと、そんなにして自然の感情を抑塞しては、それが內訌して却つてよくないとの駁論も出てゐる。まるでキッス一つが、人類の滅亡に關するかと思ふやうな大詮議の題目となつてゐる。

日本でも、今は隱退か追立てかで引つこんでゐる或るダンスホールの女王から『上手にキッスをしてくれる男があつたらいつでも戀人にする』と、宣託があつたさうだ。かう言ふ時勢となつては、まさにキッスはモガ、モボの死活の鍵であらう。

さて、私の雜考の、文獻的考證の大いに足らざる點は他日博識の士によつて補はれることであらう。そして肝腎の實際問題として少しも觸るゝ點のなかつたのは――、それは私がその方面に無知識なためだと言ふよりも、クリスマスから新年近くなると、丸善にも教文館にも How to kiss などと題した本が澤山來ることを心得てゐるからだ。この稿に不滿を持つ人は、あんな本でも買つてお讀みなさい。

昭和三年一月

越中富山藥賣り奇譚

何事も便利な東京だ。舊弊に越中富山の藥賣りが出入してゐるのは私の家位なものだらうと思つてゐたのは大間違ひで、よく聞いて見ると、近所軒並、みんなそのお得意先きであるやうだ。

一體に三越（さんゑつ）には變つた商賣が多い。女郎と三助とは別にしても、越後のわかめ賣り、毒消し賣り、越前の叩き鰈賣り。そして越中富山の藥賣り。

何しろ半年は霙や雪に降り埋められて働けず、隨つて生産に乏しいあの地方の事だから、その間旅に出稼ぎして他國の富を移入して來ないでは、生活資料の補足が付かなかつたらう。だから過去に於て、あゝした商賣があの地方に發生した事はよく分る。併し開明な今日、それがまだ存續してゐる事が實は少々私の腑に落ちない。

たとへばわかめ賣りだ。あんな別に大してうまくもないものは、誰れだつてさう度々食膳にのぼす譯がない。それに食ひたくなつたら乾物屋へ行つても、海産物問屋へ行つてもたやすく得られる筈だ。交通は自由になり、貯藏法は完全になつた今日では、需要さへあればいくらでも汽車で輸送され、倉庫に貯藏されるのだ。江戸時代のやうに、玆で買ひはぐつたら、この次の時まで手に入ら

ぬなどと言ふ事があるものではない。

事實、私が初めて東京へ出てから廿年近くもなるが、その間たツた一度も、彼等から直接にそれを買つてゐる人のあるのを見掛けた事がない。だから商賣として到底成立すまいと思はれるのに、毎年その季節になると、着物も帶も、脚絆も甲掛も、みんな紺、乃至は紺飛白で堅めた女が、菅笠を被つて『わかめいりまへんか――』と、一種の特有のメロディを帶びた聲で街々を呼び歩く。いづれそれが存續して行くには、それだけの理由はあるだらう。私だとて別にその絶滅を願つてゐるわけではない。どころか、傳手と機會があれば、その生活狀態を調べてみたいと思つてゐる位だ。

根氣よく步き廻らねば商賣にならない彼等だから、健脚が第一の要件で、そのため老婆は絶無でないまでも稀で、大抵は三十五六以下の女が多い。彼等は旅に出稼ぎしてゐる三ケ月なり半ケ年なりの間は、或る特定の區劃に固まり、一種のコンミュニテイを作つてゐるやうだ。若い女だから多少のふしだらも過まちもあらうが、歸國の上では、その旅先きの出來事を、絶體にどこへも洩らさないのが仲間の嚴しい不文律になつてゐるといふ話は、誰れでも知つてゐる。そんな事を考へると多少のロマンチックな興味を唆られる。

越中富山の藥賣りになると、その存續が奇異の念を誘ふこと更に數倍だ。たとへ都市でなくても

一寸した町なら、怪しげな賣藥に對する尊信位は、疾うに驅逐してゐて然るべき醫師も藥舗もあるだらうのに、まだあんなイカ樣ものの需要があるのを、どうして訝らないで居られやう。

それは將軍樣の昔に、富山の藥賣りが全國に擴がつて、重寶がられた理由は、殊に私のやうに田舍に育つた者にはよく分る。

私の生國は北作州の山の中で、藥屋へ一里、醫者へ三里といふ程ではなかつたにしても、病氣に罹つた時は大抵、母の診斷と富山の藥で息災になつたもので、醫師の診療を乞ふたなどと云ふ事は稀であつた。腎涼炎、熱さまし、虫下し、あんま膏、千金丹などと、墨附の惡い木版で押した黄色い藥袋が、煤けた柱に掛つてゐた事を今も思ひ出す。

彼等藥賣りは毎年冬にさしかゝると（つまり農閑期になるので）古い藥の入換へ、消費した藥の補充、及びその代價の集收をかねて村に入つて來た。その時には單なる藥屋として以外に、祖母や母には彼等が經巡つて來た異國の珍奇な見聞の披露者として待たれ、又私達子供には色繪の施與者として待たれたものだ。

色繪といふのは恐らく江戶の錦繪を模して作られたものであらうと思ふが、兩者を比べると勿論江戶と富山の文化の差以上の差があつた。それは安インキで彩色した粗雜極まる武者繪、戰爭繪に過ぎなかつた。四方天但馬守、猪早太、或はそれが日清戰爭の影響を見せた大同江の河崎軍曹、玄

武門の原田重吉――さうした名前が今日も私の記憶に殘つてゐるのは、一に富山藥屋の教化に負ふものと言へる。

日露戰爭は色繪のテーマを、乃木大將とステッセルなどに變へたが、その頃は私も少年世界位は讀むやうになつてゐたので、もうそんなものは喜ばなくなつた。やがて東京へ遊學するやうになつてからは、風邪にも虫にもその恩澤を受くる事が絶無だつたので、富山の賣藥先生のことなどは、全く私の念頭から遠離し去つて了つた。

約十年間の間隔をおいて、彼等と私との間に交渉が再訂されたのは、家を持つて千葉縣市川へ移つてからである。市川は兩國から汽車で僅々廿五分間行程の距離に位置し、町の少くとも三分の一までは料理屋、待合、つれこみ宿から成立してゐる都人のための遊蕩郷らしく思はれるが、內實は全くの農村で、隨つて越中富山も相當に幅をきかしてゐる。私の妻も彼等の巧妙な辨舌に言ひくるめられて、ツイ藥を置くことになつたのである。

私達はその後又東京へ引越して來た。近所の手前もあるから、彼等とはもういゝ加減に緣切りしたいと思つてゐたが、追跡が執拗くして、容易には解放してくれない。それに別に消費しない分まで代價を請求するわけではなし、置いて邪魔にもならぬ事だから、今でも簞笥の小抽斗を開くと、そこに桐の藥函のしまはれてゐる事は、玆に正直に告白しておいてよい。

○

但し以上は、本稿の主目的とは何の關係もない、無用の贅辯だ。

實は去年の暮に、その藥賣りが來て、家の者に一寸凄い話をきかして呉れた。

雪のちらつく寒い日だつたので

『此のお天氣の惡いのに、方々歩くのは大變ですね。』と妻が愛想を言つたのが皮きりで

『いや、なあに、かうして都會を廻るのは平氣なものですが、田舍廻りを受持ちにしてゐる連中は時々、こはい目を見るさうですよ。』と言つて彼は話し初めた。

何でも炭燒を渡世とする者の住んでゐる山奥のことだ。ある午後、與作（とかりに呼んでおく）の家を富山の藥賣りが訪ねて來て、入換へを濟ました後、

『まだ、この奥にも人家がございませうか。』とたづねた。

『はい、半道程上つた所に、寅兵衞といふ仲間の家が一軒ありますよ。』

『日は傾いたが、半道ならば薄明りのあるうちに行き着くだらう。今夜はその家で宿をして貰ひませう。』

と言つて、藥賣りは山の端の空を染める夕燒を氣にしながら、岨道を上つて行つた。

それきり行方が分らなくなつて了つた。翌年の春、農繁期が近づくと共に全國に散ばつてゐた賣

子は、みんな富山へ引上げて來たが、彼のみ一人は遂に歸つて來なかつた。賣掛けの金を持つて逃亡したと言ふ事も考へられないではないが、どうもそんな樣子もないので、大元なる藥舖の主は直ちに失踪の屆をした。

これより先き、その冬その土地の者の焚いた炭には、異樣な惡臭を放つのがあつた。それを耳にしてゐた警察では、すぐ炭燒き仲間に眼をつけて、段々探索して行くとその藥賣りが與作の小屋まで來た事は明かになつた。

それより奧には人家と言へば只一軒しかない。たとへ犯人でないと言つたとてそれが聞かれる筈はなく寅兵衞はすぐ繩を打たれた。

後に寅兵衞が自白した所によると、その夜藥賣りは一夜の宿を乞ふて、寢る前に集めた金を計算してゐた。それを見ると、彼はついフラ〱と惡心が起きて、生木を割る斧の背を頭の鉢に食はせて、一思ひに息の根を止めたのであつた。

それから死體はすぐに炭かまどの中に投げこんで、上から土で塗り固めて熱火に蒸したのだから、骨も殘らず灰になつて了つたのだが、一緒に燒かれた炭に移つた脂の臭ひが、とう〱その秘密を裏切つた。

○

さて此の話では、事件の起つた場所がはつきりしない。當時私の家にゐた女中は石川縣生れの者だつたが、

『それは私の郷里にあつた事でございますよ。』と言つた。

又、農民運動をしてゐる日向生れの或る友人は、

『僕の郷里でもそんな話をきいた。』と言つた。

最後に、ある雜誌記者をしてゐる高知縣出身の友人は、

『をれの國でも、そんな話をしてゐるぜ。』と言ふ。

してみると今後もまだ『自身の郷里にもその話がある』と名乘り出る者が幾人あるか分つたものではない。知らなかつたのは私達ばかりだらう。で私は『越中、富山、なかなか味をやるな』と思つた次第である。

彼等を、異國の珍奇な見聞の移入者として、田舍の私の祖母や母が待つた事は既に書いた。中世の歐洲で、隊商の家は異域の珍貨異聞を船載して來るので、僧侶の次に尊崇せられた事は、史を讀んだ者の等しく知る所である。同じ心理を巧みに應用して、彼等藥賣りは事によると、前記のやうな奇譚を勝手に濫造しては、風の如くに全國にふりまき、單なる藥賣りとして以外の尊崇なり、愛敬なりを以て待たれる手段としたのではあるまいか。そしてそれを又間接に、商賣の地盤を强固に

する武器として應用したのではあるまいか。

近頃、農民文學としての土族傳說を少し調べてみたのに、北は奧羽から、南は九州まで、同一の話の傳はつてゐるのがあるやうだ。古い所は知らず、德川期以後の話で全國に傳播の普きは、存外越中富山あたりが震源地になつてゐるのがないとは限らない。

卽ち藥賣りと、或る種の文化の分布とについて、識者の一考を煩はす所以である。

昭和二年一月

大正文壇の精算

一　明治文化と大正文化

明治天皇崩御の際、多くの外國新聞は、天皇の治世の間の日本の進歩に向つて、一齊に筆を揃へて驚嘆の意を表した。爾來明治文化の異常なる發展は、世界文化史上に於ける特異な一例として、内外共に定評を獲てゐるやうに見える。

併しながらこの定評に對する反對說が當時既に現れてゐる。アメリカのイーヴニング・ポストは、その社說で明治天皇を弔うた記事の中で次のやうなことを述べてゐる。

『日本の五十年間の進步はそれ程驚くべきものであらうか。五十年といへば半世紀である。歷史が半世紀の間に成就した事業には、もつと大きな、重要なものが幾つもあつた。現にダーウインの進化論が現れて近々二十年間に歐洲の思想界が經て來た程の本質的改革を、果して、日本はあの五十年間になしたであらうか。』

今、明治大正の文化を比較論評するに當つて、先づ第一に私の頭に浮んで來たのはこの言葉である。明治文化と大正文化との間には本質的に異つた何物かゞある。果して大正は、汽車と電車と自動車を外國からではなくして明治から受け繼いだばかりで、それ以上に何等本質的な發展を遂げな

かつたであらうか。

明治の文化は、消化の文化であつて創造の文化ではない。胃袋の文化であつて頭腦の文化ではない。明治文化の異常なる發展は、主として鎖國日本と歐米先進諸國との間に、異常なる文化的壓力の差異があつたことに歸因すべきであつた。從つて極言すれば、明治文化は異常なる低氣壓の流れが齎した文化的颶風に過ぎない。

明治は確に驚嘆すべき天才兒であつた。併しながら天才には二つの種類がある。それは先天的天才と、環境が人工的に造り上げた早熟な畸形兒とである。天才兒明治は遺憾ながら後者に近かつたことは事實である。

これに反して大正文化の重大なる特徵は、善い意味にも惡い意味にも、著しく大人化したことである。日本の文化的年齡が二十代から三十代に移つたことである。青年時代の夢と焦燥から完全に脫却し、ありのまゝの現實の姿を認識してそこに自分の眞の實力と立場と進むべき方面とを、日本の民族はこの十五年間に悟つたのである。この悟りは、少年期から青年期に達する迄の華々しい外形的成長とは全く本質的に異つた、深刻な內面的進化である。

大正年間にはもはや、歐米人と結婚して日本の人種を改良せよと說くやうな極端な歐化主義や、その反對の反動的狂熱的國粹主義が影を沒し、日本の傳統に對しても、落着いて正當な價値判斷を

下すことが出來るやうになつた。今や日本の民族には、人類文化の最高位に立つて、各種の傳統を客觀的に評價するだけの餘裕が出來たのである。

これを文壇についていへば、明治年代には『小說神髓』によつて初めて純藝術の何たるかを敎へた坪内氏でさへ『春廼家おぼろ』といふ名と共に、まだ封建時代の臍の緖を斷ち切つてゐなかつた。紅葉は大學に學んでも西鶴の殼を被り、荷風はフランスに遊んでも戲作の衣を脫ぐことが出來なかつた。彼等は馬琴の素地でスコットを、近松の素地でシェークスピアを、西鶴の素地でモーパッサンを鑑賞してゐたのである。然るに今日の文壇人は、そのテンペラメントに應じて、戰敗後の獨逸人の歪んだ魂から發生した『表現』に共鳴したり、フランスの外交官が練りに練り、磨きに磨いた『新感覺』に溶け込んだりすることが出來るやうになつた。かくて大正十五年に於ける日本の國際的地位確立は、知識を國際化すると共に感情を國際化し文壇を國際化したのである。

二　明治から大正へ

試みに大正元年九月、卽ち明治天皇崩御の直後に出た中央公論及び太陽の創作欄を一瞥すれば次の如くである。

「中　央　公　論」

岩石の間……島崎藤村
凶兆……鈴木三重吉
青蛙……正宗白鳥
大津順吉……志賀直哉
馴染の家……德田秋聲
尼僧……長田幹彦

「太陽」

工場主……後藤宙外
海邊の町……長田幹彦
兄弟……近松秋江

更に翌大正二年正月の中央公論創作欄を見れば

心中未遂……正宗白鳥
阿部一族……森鷗外
惡魔……谷崎潤一郎
船客……長田幹彦

これが大體に於て大正が明治から受け繼いだ代表的な文壇的遺産である。その外同月の太陽には森田草平、岡本綺堂等、同年二月の中央公論には小川未明等の顏ぶれが見える、これらの目次を一瞥したゞけでも、その中には如何に多種多樣な要素が含まれてゐるかゞわかる、一方では自然主義の驍將たる藤村、花袋、白鳥、秋聲等が控へてゐるかと思へば、他方には三重吉、草平等のネオ・ロマンチシズムがあり、主要なる傍系としては鷗外の「あそび」の文學があり、別に漱石の低徊趣味がある。又幹彥、潤一郎、秋江等の享樂主義、惡魔主義、耽美主義の背後に後年のプロレタリア文學の先驅ともいふべき未明のヒューマニズムがある。直哉の「大津順吉」は彼が「白樺」以外に發表した最初の作品であり、後に「新しき村」の實現に邁進した武者小路實篤は大正元年に最初の著書「世間知らず」を出してゐる。

之を要するに明治末期から大正へかけての數年間は、日本人の生活に於て、一般に古い指導精神が倒れて、而も新しい指導精神を樹立するに至らず、「あそぶ」ものも「耽る」ものも、「享樂」するものも、心の底では淋しい否定と諦めの涙を湛えながら、切りに何物かを覓き求めてゐたのである。

併しながらその否定は、自然主義全盛期に於けるやうな「現實」といふ灰色一色から脫却して、これまで見られなかつた樣々な色彩と形態とを現してゐるのであつて、當時島村抱月はこの傾向を「現實主義の分化」といふ言葉で言ひ現はしてゐる。

次に思想界はどうかといふに、同じく大正元年九月の中央公論の論說欄には、中澤臨川がトルストイを、田川大吉郎が勞働者の生活賃銀を論じ、翌年二月の同誌には河上肇が高等寄生者について論じてゐるが、後年人道主義、民主々義又は社會主義が擡頭して來た時のやうな華々しさは見られない。從つて評論界の中心トピックといつたやうなものが殆ど見受けられない。唯當時の新聞雜誌を繙いて特に目立つことは、評論に、創作に、婦人が著しく擡頭して來たことである。

三　婦人運動の左右兩翼

明治四十四年九月、所謂「新しい女」の一團が雜誌「靑踏」によつて『原始女性は太陽であつた』と黃色い聲を張り上げた時、「お宮」と「浪子」より外の女を知らなかつた日本の民衆は、京人形がものを言ひ出したやうに驚いた。

ヨーロッパに於けるブリュー・ストッキングの運動が一七五〇年ロンドンに於ける藝術家の會合に靑い靴下を穿いて出席した一人のお洒落女に端を發したやうに、この我國最初の婦人團體も、經濟

問題とは極めて緣の遠い文藝運動乃至思想運動であつた。從つて彼等の主張や行動は、女工の夜業禁止その他のために男子と並んで勇敢な戰ひを續けてゐる今日の無産婦人に比べると、全く問題とするに足らないセルロイド人形の舞踏に過ぎなかつた。

併しながら彼等の——といふよりも寧ろ彼等の父なり夫なりの——社會的地位と、彼等の思ひ切つて奇矯な言動とは、珍奇な見世物的な興味を與へた。大正二年正月號の中央公論には、平塚らいてう、森律子、日向きむ子から花月女將に至るまで「閨秀十五名家」がずらりと顏を並べてゐる。更に同年夏の中央公論増刊は「婦人問題」と題し、創作欄は左の如く全部婦人で占領してゐる。

百日紅の蔭……尾島菊子
日　記……田村俊子
國の男……水野仙子
祇園會……但村はつ子
裏　面……國木田治子
ある一場……長谷川時雨
蝴　蝶……松井須磨子

論説欄はどうかといふに、島村抱月の「近代文藝と婦人問題」を卷頭論文とし、以下四百九十頁

の大雜誌の全紙面を婦人問題に捧げてゐる。その中で、今我々が讀んで一番興味を覺えるのは、平塚らいてうの率ゐる靑踏社と、これに對抗して、宮崎光子（豫言者宮崎虎之助夫人）木村駒子（千里眼の木村秀雄夫人）西川文子（社會主義者西川光二郎夫人）伊藤朝子（無我愛の伊藤證信夫人）等が組織した新眞婦人會との一騎討である。前者が、言動の奇矯過激な點からいつて、婦人運動の最左翼だとすれば、後者は　眞に自覺した女は、女性の本能を覺知して、男子から征服されることを望んで居ります。自分を征服し得る男でなければ、夫とすることは出來ないのであります』といつてゐる點からいつて、穩健であり『合法的』であり、右翼である。これに反して前者は、半獸主義者の岩野泡鳴を擔いだり、五色の酒をあふつたり、煙草を吹かしたり、吉原などへ押しかけたりして、警視廳から睨まれこのまゝに棄てゝおけば『婦人問題といふことが發賣禁止と同じ意味に解せられるやうな現象が起るかも知れない』と考へられたのである。といつて後者にしたところで『戀のためには、飢えても凍えてもかまはぬ程の熱烈と勇氣があつて欲しい』と絶叫してゐるあたりは、やはり有閑階級の遊戲たるを免れない。

いづれにしても我々は、かゝる運動を生じた當時の文壇と社會相を見渡して、先づ第一に氣づく事は、新しい何物かを求める熱烈な要求と、求めて獲られない絶望とが手を握り合つて滑稽な矛盾の輪舞を踊つてゐるといふことである。

四　自然主義の自己幻滅

『自然主義運動ほど其理論と創作とが步調をそろへて出發し、進展し、且成功したものはなかつた。それは僅に二三年にして天下を席捲するの概があつた。それは確實に文壇を征服したのみならず、文學に格別の關心を有たない一般世間人をしてすら、自然主義の名に或驚異を感ぜしめなければやまなかつた』と、ある批評家が自然主義勃興當時の華々しさを回想してゐるが、實際自然主義の運動は、その本質に於て單に文壇だけの運動ではなく、當時の世界に澎湃として漲つてゐた自由主義運動の一分派に過ぎなかつた。その頃の目覺ましい資本主義の進展は「自由」の名によつて封建的諸勢力を打破つて、政治經濟界の地ならしを行ふと共に、科學、教育、宗教等の各分野に於て、封建時代の偶像をどし／＼破壞しつゝあつたのであつて、その餘勢がたま／＼最後に文壇に及んだに過ぎないのである。

事實勃興期に於ける自然主義の運動は、消極的な「現實暴露」ではなくて、封建的イデオロギイに對する勇敢なる鬪爭であつた。あの甘い少女禮讃の小說をいくつも／＼書いてゐた田山花袋が、當時の人々を戰慄させた露骨な作品、「蒲團」を發表するに到るまでの內面的過程を考へる時、彼は恐らく心の奧底に於て、自已に對する幻滅よりは寧ろ破壞の快感と征服の喜びを味はつたことだら

う。

併しながら、舊い殼を突き破つて自由の天地に躍り出た喜びはやがて住むべき家のない悲しみと變つて行つた。玉葱の皮を剝ぐやうに一つ〳〵生活から幻影の殼を剝いで行つた時、最後に果して何が殘つたらうか。一切の偶像を破壞し盡した自然主義に殘された最後の仕事は、自然主義其物に對する幻滅であつた。

破壞の價値と興味は刹那的であり、一度限りである。自然主義の開拓した世界は間もなく何等の驚異でもなくなつた。『人生はそのすべての壯嚴と深遠と高大との趣を剝ぎ落されて、唯平凡な機械的な、盲目的な變化』に過ぎなくなり、作家は『たゞ眼を、耳を、鼻を、舌を、皮膚を、細かに確に働かすことによつて、現實の人生を味ふことが出來る』と信ずるやうになつたのである。

かくて大正初期の文壇は沈滯のどん底へ陷つた。これを自然主義が唱道せられた頃に比べるとまるで火が消えたやうであつた。往年の自然主義の鬪士は疲勞し、倦怠し、感激のない、平板單調な生活からこぼれ落ちる日常茶飯事を描くことに沒頭し、僅かにその中の二三の作家が、人生を離れて見るといふ所謂傍觀的態度から一歩進んで、人生を觀る角度を少し變へて皮肉な觀かたをしたり、人生の皮相を輕く巧に描いたやうな作品を出してゐるに過ぎなかつた。

この頃の文壇に於ける最も著しい現象は創作の方面ではなくて外國の文學及び思想の飜譯紹介が

夥しく現はれたことである。これによつて見ても、如何にその頃の文壇が新しい何物かを求めてゐたかゞわかる。當時片上伸はこの傾向を評して『自然主義的人生觀にいつまでも留まつてゐることは到底耐へ得る事ではない。赤裸々に暴露した現實――紛糾錯綜して統一することの出來ない雜多の物質的現實、經驗的の事實、それの前にいつまでも眼を見張つてゐることには堪へられない』といつてゐるが、今我々の頭で考へれば、文學に於ける自由主義である自然主義が、政治經濟的に於ける自由主義と等しく、固定性乃至永續性を缺いでゐることはいふまでもないのである。

五　自然主義の反動

自然主義の偶像破綻は、確に人生のあらゆる方面に新に眼を開かしめ新しい興味と刺戟とを與へたが、間もなくそれが常識化し、未知の世界の扉は盡く開き盡されるに及んで、（此點からいつて初期の自然主義は一種のロマンチシズムである）作家は專らその所謂現實の姿を、更に細かく更に巧に描くことにのみ苦心するやうになり、遂に淺薄なる技巧本位のトリヴィアリズムに墮してしまつた。その結果、これに對する反動がさま〴〵の形態をとつて現はれたが、主なるものゝ第一は鈴木三重吉の憧憬文學で、纖細な筆で時間的にも空間的にも遠く現實を離れた美はしい世界に對する憧れを描き、その第二は谷崎潤一郎の耽美主義で、病的官能の秘密な悅樂に耽つたり『平板單調な現

實生活を人爲的技巧的に變改し其價値を顚倒することによつて初めて倦怠を慰め異常な淸新な刺戟と興味を享樂』せんとするものである。これらは共にネオ・ロマンチシズムと稱せられ、時代の逃避的頽廢的傾向と合致して多くの追隨者を生んだが、間もなく漱石死し三重吉は童話に逃れ、潤一郎ひとり益々その享樂的唯美的惡魔的變態的傾向を助長して完全なデガダンになつてしまつた。

凡そロマンチシズムには陰性と陽性の二種類がある。共に自己の抱懷する理想と自己を取りまく環境との間に或るギャップが生じた場合に發生するものであり、何れも現實の奴隷たることを潔しとしない點に於て一致してゐるが、その本質に於て兩者は全く相反するものである。前者はそのギャップが餘りに甚だしく、現實的にそれを埋めること不可能であると觀ぜられた場合、若くは少しでもそれを埋めやうとする努力と熱意を缺いだ場合、手つとり早く人爲的に自分一個の趣味嗜向に應じて造り上げた空想の世界に逃避せんとするものである。これに反して後者は、そのギャップは自分若くは自分達の手によつていつかは埋めることの出來るものであるといふことを確信し、現實が如何にみじめであり、自己が如何に無力であり、如何に障碍が多くとも、決して未來に對する光明と最後の勝利に對する自信とを棄てないものである。それどころか、この種のロマンチシズムは敵のないところには存在しない。『戰ひ取らん』とする者には敵が強大なればなる程緊張の度が加はるのである。その代表的なものは獨のスツルム・ウント・ドラングの運動、英のディッケンス、佛のユ

ーゴー等のロマンチシズムであつて、彼等の背後には將に擡頭せんとするブルジョアの一大勢力が控へてゐるのである。最近のプロレタリア文學運動の如きも、內容は違つてゐるが、明かにその一例である。

然るに漱石、三重吉、潤一郎等のロマンチシズムは、背後にあつてこれを支持する何物もなく、唯わづかに現實を回避し僞造して、祕かに手淫的快樂を貪らうとするものであつた。それが遂に有力な歷史的運動とならず、單に自然主義に對する消極的な一反動若くは一傍系に過ぎなかつた所以は卽ちこゝに存するのである。

六「藝術資料としての遊蕩生活」

自然主義の理論に從へば『藝術家の生命を引張つて行くものは藝術家自身の心の中に孕まれ宿つてゐる生命の光りや力ではなくして、藝術家の外に散在する「あるがまゝ」の自然であり現實である』から、その『あるがまゝ』の現實が移動し變化しない限り局面の違つた新しい文學が生れて來ないわけである。そこで一部の作家は經驗を豐富にし人生の樣々な方面を知るためと稱して柳暗の巷に出入しそこに『一味の淋しさと、哀れさと、ほろ〳〵しい物悲しさ』とを見出し、やがてそれが情話文學となり、心中小說となつて、この種の享樂的頹廢傾向が一時文壇を風靡するの慨があつた。

所が、かういふ輕佻浮薄な文壇に對して計らずも一つの爆彈が投じられた。それは當時帝大法科の一學生であつた赤木桁平が、大正五年八月に讀賣新聞に寄稿した「遊蕩文學の撲滅」と題する一論文である。この論文はトルストイの「モーパッサン論」の影響の下に書かれたもので、道學的口吻に滿ちた單純なものであつたけれど鋭く時代の病弊を衝いて文壇の大問題となつた。實際、明治大正を通じて無名の靑年の短い一論文がこんなに問題になつた事は珍しい。

今日我々が、この論文を中心にして捲き起つた當時の論爭を見渡して甚だ興味を覺えることは、その頃この問題について論じたり論じられたりした人達の思想なり傾向なりが著しく變つて來たことである。

先づ第一に、所謂『遊蕩文學』を辯護する側に立つて、態々此論文に對する反駁の勞をとつたのは今日築地小劇場でカイザー、トルラー、マルチネ等の人道主義的乃至社會主義的作品を續々と上演してプロレタリア文學運動の陣營に投じたと稱せられてゐる小山内薰である。氏が桁平の身許調べをして頭ごなしに、要するに君の議論は書生論ぢやないか、といつたやうな態度でものをいつてゐるのが氣に食はないとて桁平は同年十月の中央公論へ長い反駁文を出してゐる。

次に面白いのは、小山内薰が、藝者や私娼を書いた小說がすべて遊蕩文學だとすれば、田山、正宗、森田、鈴木、武者小路、里見氏等の作品だつて遊蕩文學ぢやないかといつたのを桁平が更に反駁し

て、問題は題材にあるのではなくて、作者の態度と題材の描き方にあるのであつて、彼等『遊蕩文學者』は『通と呼び粹と稱する人間生活の技巧化を洗錬されたる人間生活の藝術化と同視し、』氏の所謂『Saufen und Huren の生活に從屬する總ての生活情調に陶醉しようとする』態度がいけないのだと說明し、從つて『田山、正宗諸氏の作品を所謂放蕩文學中に包括し得ないことは明白ではないか。況んや武者小路、里見諸氏の作品に於てをやである』といつてゐることである。

七　『俺が』『俺は』『俺の』『俺に』の時代

この後數年を經ずして白樺から離れて『人間』の惡友に連れられ、新橋や赤坂の遊蕩學校に入學して而も拔群の成績で卒業したと稱せられる里見弴に、我々はもう一度これを見せたいものだ。最後に、長田幹彥等と共に所謂『遊蕩文學者』の隨一として槍玉にあげられた近松秋江が近頃すつかり堅氣になつて、初老にして妻子を設け『子の愛の爲めに』努めてゐる現狀を見ると、我々は一種いふべからざる感慨に打たれるのである。

大正三年歐洲大戰が勃發する前後から、オイッケン、ベルグソン、タゴール、トルストイ、ドストイエフスキイといつたやうな、理想主義的傾向を帶びた人々の思想乃至文藝が續々と紹介せられ、就中トルストイの如きは『トルストイ研究』といふ專門雜誌まで出てそれが又素晴らしい賣れ行き

を示した。

この傾向に乘じて、雜誌『白樺』に據る華胄界の若樣連を初め、多くの新しい作家や思想家が續々と現はれて、文壇及思想界は大變な壯觀を呈した。そして所謂『問題文藝』が『遊蕩文藝』に代つて文壇の合言葉となつた。大正四年夏の中央公論増刊は「大正新機運號」と題し、創作欄には十篇の「問題小說」及「問題劇」を掲げてゐる。

中でも秋田雨雀の「綠の野」は當時の代表的な理想主義青年の思想や生活を巧に描いたものである。この作の主人公は、東京から北海道に逃れて、そこで小學校の先生をしてゐる間に戰爭が勃發し、非戰論を唱へてくびになり、再び東京へ舞戻る話である。彼が自分は社會主義者ではなくて個人主義者であることを署長に極力辯解するあたりや、愈々北海道を去るに臨んで、「殆ど發作的に」『この綠の野をすてゝ行くのか?』とエスペラントで詠嘆すると、見送りの友人が同じくエスペラントで『然り、未來の綠の野のために！』と應ずるあたりは實に甘いものである。

この頃の流行語は、「生命の沈潜集中」であり、「人生そのものゝ根柢に觸れて」『よりよき生活への暗示」を與へることであり、「暗黑のどん底にあつても尚且人生の光を見失はない」ことであつた。そして「生命」乃至「生活」が彼等に共通したお題目であつた。而もその「生命」乃至「生活」たるや、個人主義的な、獨善的な、超越的な、逃避的なものであつた。當時の社會主義雜誌「新社會」

に於て山川菊榮（その頃はまだ青山姓を名乘つてゐた）が「近頃の文藝かぶれの青年を左の五種に大別」して皮肉な批評を加へてゐる。

第一種はベルグソン生噛ぢりの「創造屋」

第二種は「俺が」「俺は」「俺の」「俺に」「俺を」と年中「俺」盡しの獨り言をいつて感激し、「俺」の噂に日もこれ足らざる自已耽溺家自己崇拜家。

第三種は安價な人道主義の水同樣の手製の酒に陶然としてゐるセンチメンタルなトルストイアン

第四種は働き盛りの身でゐながら、年寄りの聲色を使つて、何一つ知りもせず經驗したこともない癖に、何もかも知り盡し經驗し盡して世の中に愛想をつかしたやうなことをいふのらくら者の「幻滅屋」

第五種は個人と社會とを別々に考へて「個人主義」の看板を掲げ、あやしげな草の庵に蟄伏してゐる世捨人の若隱居

こゝに掲げられた屬性を一人で兼ね具へ、勇敢にもその理想を實現するために、建國の地日向に赴いた當時の代表的「人道主義者」ティピカルな「トルストイアン」は、昭和二年正月號の「改造」に於て、曠野社の勞働爭議に關するあやしげな辯解を「創作」の名に於て發表し、「人道主義」の假面を脱して、完全に「個人主義」の正體を暴露したドンキホーテ武者小路實篤である。

八　デモクラシーと民衆藝術

大正二年二月、第三次桂内閣が輿論及び議會を無視して政權を維持せんとするや日比谷に大暴動が起り、それが大阪、京都、神戸にまで蔓延して、遂に内閣は辭職せざるを得なくなつた。次で翌三年二月、海軍收賄問題でまたもや日比谷に暴動が起つた。今度は政府の準備が行屆いてゐたので、前年程の大騷動にはならなかつたが、こゝに初めて「輿論」とか「民衆」とかいつたものゝ力の大きいことが一般人の意識に上つた。大正三年四月の中央公論で、吉野作造、浮田和民、林毅陸、永井柳太郎の四氏が、「民衆の勢力によつて時局を解決せんとする風潮を論ず」と題し、それ〴〵樂觀的な、肯定的な立場から、この問題を取扱つてゐる。所謂「デモクラシー」が我が思想界の中心問題となつたのは之が最初で、その後引續き中央公論はデモクラシーの機關誌たるの觀を呈した。

勿論この傾向は文壇にも反映せずにはおかなかつた。ロマン・ローランやカアペンター等の「民衆藝術論」が紹介せられ、民衆小說や民衆劇の呼び聲が高くなり、ウヰルソン大統領の「平和思想」と共にホイットマンの民衆詩が輸入され、石川啄木が墓の中から甦り、福田正夫、白鳥省吾、富田碎花、西村陽吉等の所謂「民衆詩人」が續々と現れた。

併しながらこの抽象的な「民衆」に對する信仰はさう長くは續かなかつた。「民衆」とは一體何で

あるか。その中にどんな要素が含まれてゐるか。「民衆」の聲はすべて正しく、「民衆」の求むるものはすべて與へらるべきであるか。藝術の創作並に鑑賞を一部特權階級の獨占から引離して一般民衆に分與しただけでいゝのか。本當に虐げられた民衆の求めてゐるものは何であるか。民衆をかゝる境地に陷れた眞の原因並にその解放策は何であるか。

今日では既に一般人の常識となつてゐる之等の問題が、其頃はまだ極少數の人々を除いてはつきり意識に浮んで來なかつた。政治的デモクラシーの方面に於ても、當時民衆の勢力の現れと見做されてゐた暴動なり、暴動の原因となつた「輿論」なりが、實は歐州大戰の刺戟に逢つて急激な發達を遂げた日本の資本主義が、政治の實權をも完全に掌握するために、封建時代の遺物に過ぎない官僚や軍閥に挑戰しようとする潜在的運動が、資本家の手に經營される新聞雜誌の煽動にあつて、偶々さういふ形式をとつて現れたに過ぎないのである。

併しかういふことは、その運動の渦中にあつた人々にはわからなかつたと見えて、後に左翼無產政黨の黨首に推された大山郁夫の如きも、大正五年四月の中央公論に於て「政治を支配する精神力」と題し、一方で忠實に唯物史觀を紹介すると共に他方で之を否定し、「個人が環境に支配せられることは、慥に一面の眞理であるが、同時に個人は其意志の力に依りて絶えず自己の環境を改造若くは創造しつゝあるのである。若し個人が徹頭徹尾環境の奴隷たるを以て終始するものとせば、世に進

歩といふものゝあるべき筈はない」と、說いて大いに「國民精神」を皷吹してゐるのは、今から見ると甚だ滑稽に見えるが、實はこれは大山氏個人の進歩を物語るのみならず、我國無產大衆の自覺と成長を說明するものである。

九　文壇成金時代

大正文壇第一の「成金」はいふまでもなく島田淸次郞である。彼が大正八年「地上」第一卷を提げて彗星的に出現した時確に文字通りに天下を驚倒させた。その雄渾な構想と、キビ〳〵した文章と、覇氣滿々たる內容とは、當時の頹廢的、虛無的、些末的、逃避的、自慰的文壇に淸新な空氣を注入すると共に、歐洲大戰によつて大いに自我の價値感情を皷舞された日本民族、殊にそのヤング・ゼネレーションから、素晴らしい歡迎を受け、續いて出た「地上」二卷三卷も驚異的な賣行を示し、一時は「地上」ファンが天下に充滿するといふ騷ぎであつた。確に彼は、當時の靑年子女の「帝王」であつて、彼が「我れ世に勝てり」といつたやうな氣持になつたのは、決して無理からぬことであつた。

從來の日本の文壇に理想主義的文學がなかつたわけではない。だが、その「理論」は殆どすべて弱者の理想であつた。「地上」は日本の文壇が生んだ最初の若々しい、野心と抱負に滿ちた、力强い

英雄主義的作品であつた。

併しながら日本の民族が戰勝後の英雄的氣分に浸つてゐることが出來たのは、戰爭の利益で懷中の温かい僅な期間に過ぎなかつた。やがて戰後の不景氣の襲來に伴ふ勞働爭議の頻發、殊に隣國ロシヤに於けるボルセヴヰキ革命の勃發は、日本の前途に暗影を投じ始めた。彼が漸く行詰つて歐米漫遊の途に上つた留守の間に、國內の狀勢がすつかり變つて、日本の社會は既に彼の稚氣愛すべき英雄主義を卒業してしまつてゐることに氣がつかなかつたのは、彼の破綻のそも〳〵の原因であつた。

「地上」に次で素晴らしい賣行を示したのは、大正十年に出た賀川豐彥の「死線を越えて」である。元來これは、その內容からいつても表現からいつても、そんなに賣れるべき性質のものでなかつたが、當時の社會の狀勢と著者自身の生きた廣告とが大いに與つて力があつたのである。といふのは、その頃關西では未曾有の大勞働爭議が頻發し、その指導者賀川豐彥は、劇的、歷史的人物として、日々の新聞にその一擧一動が誇大に報道されたのである。そして初めて勞働爭議なるものとその重大なる社會的意義とを知つた一般民衆は、彼の書物を通じて未知の世界を覗はうとしたのである。勿論彼の作品に盛られた、普通の日本人にピッタリ來さうな適度の宗教的感激と通俗的甘さも、その賣行を助ける一助となつたことはいふまでもない。

その外倉田百三の「出家とその弟子」、江原小彌太の「新約」、西田天香の「懺悔の生活」、大泉黒石の「老子」、石丸梧平の「親鸞」等々が續け樣に出て、何でも宗教味のかゝつたものを書いて、一躍何十版式の誇大な廣告をしさへすれば賣れるといつたやうな風潮が生じた。これらの宗教的作品に共通した特色は、昔の聖人や高僧を、我々と同じやうな煩惱色慾を有する者に人間化することであつて、それが好景氣時代に味つた遊蕩の追憶と不景氣時代の淋しい懷中以外に理想も感激も持たない人達の歡迎するところとなり、若干の著者と出版業者の成金を作つたゞけで、社會にも文壇にも、何等深刻な影響を與ふるに到らなかつた。

一〇　文藝家の生活問題

大正五年七月の「太陽」を見ると、内田魯庵翁は文藝家の生活の悲慘なことを述べ、これに同情を寄せると同時に彼等の無氣力を責め、『書肆の支拂ふ報酬の少きを壁訴訟する者はあるが、いざ連衡して出版人に權利を要求するに方つて、資本家に對してストライキする勞働者だけの意氣あるや否や』と危み、最後に、『戰ひ乎、墮落乎、文人藝術家は今や此窮途に立つてゐる、文人藝術家は社會を啓導し支配し號令する天職の爲に社會の無知不明を覺醒して文學美術の權威を認めしむべく戰ふ乎、或は屈從して社會の佞幸皂奴となつて黷ばるゝ乎、此二つの道の何れかを行かねばならない、

苟も戰ふの意氣あらん乎、經濟的壓迫何かあらん、社會的薄遇少しも恐るゝに足りない。孤獨も貧寒も名譽ある生活である、然らざれば墮落のみ、滅亡のみ。』と叫んでゐる。

これに對して生田長江は同年八月の「新小説」で文藝家が其勞力に相當する收入を得ない理由を説明して次の二項に歸してゐる。

一、書肆出版業者と著者との間に資本家勞働者といふやうな近代的關係を生じて來てゐるからである。しかも書肆出版業者にあつては既に資本家としての辛辣なる自覺を生じてゐるに係はらず、著作家にあつては未だ勞働者としての切要なる自覺を生じないこと。

二、著作家となるの容易と出版業者の激増とより來る著作の過多

この二人の所説に對して山川均は「新社會」九月號に於て「魯庵翁の意氣を壯とする」と共に、「翁が『凡ての人間の「天職」を職業化し、一切の物と人を商品化した此の大なる社會的經濟的過程に對して盲目』であることを責め、これに反して生田氏が「全く商品化されたる文藝的作品の市價を説明するに當つて、純粹なる經濟的原則を應用せられた事は、混沌と不透明とを特徴とする現今の文壇に於ては驚く可き徹底と謂はなければならぬ」と大いに賞揚し、「更に一歩を進めて斯くの如くに徹底した立脚地から出發して、當然に到達すべき眞の徹底した結論を聞かんことを熱望する』と結んでゐる。

私は今こゝでこの三つの論文を批評しようとするのではない。かういふことはもはやわかりきつた常識である。唯我々が甚だ興味を覺えるのは、先月の「新潮」(大正十五年十一月)に出た佐藤春夫の長論文「文藝家の生活を論ず」と比較した場合に於てゞある。春夫の論點は確か今日の一部の作家の受ける報酬が多過ぎることにあつたと思ふ。

——これが最近十年間に於ける文壇の經濟的決算である。「文藝春秋」は十八萬刷り「婦女界」は三十萬刷り、「キング」は文字通りに百萬刷つたといふ。そして或通俗作家は十二月一杯に四千圓の原稿料を稼いで六十五圓のステツキを買つたところ、餘すところ僅かであつたさうだ。確にこれは文壇の偉大なる成長であり發展である。今日の文學はもはや文人墨客の風流藝ではなくて、電球やマツチと等しく、偉大なる資本主義的生産品である。從つて「文士は食はねど高揚子」といつたやうな作家が追々影を沒して『社會の傭辛皂奴』ばかりになつて行くのは當然の現狀である。魯庵翁の所謂『社會を啓導し』云々といつたやうな文句の常はまりさうな氣慨を具へた文學者を、今の文壇に強いて求めれば、プロレタリア文學者のみではなからうか。

昭和元年十二月

明治大正文學の社會的考察

"Although revolutions in esthetics are due to revolutions in ideas, every revolution in ideas is a consequence of a revolution in the social structure that the prevailing material conditions have produced."

——V. F. Calverton

一　明治史即ブルジョア擡頭史

從來ある明治文學史も、文學に影響する社會的勢力に全然盲目であつた譯ではない。若干の關心を以てその變動を附說してはある。併し文學を規定する社會生活又は經濟的環境の重要性を意識して明白に把捉して來たのは、何と言つてもプロレタリア文學の進出以來の事で、殊に明治文學史の研究解釋にその方法論の適用の必要の痛切に感ぜられ初めたのは、この兩三年來のこと、卽ち、無產階級的立場から明治史を見直す要求が起つたのが、自然に文學に反映して來てからのことゝ言へるであらう。

然らば明治とは一體どんな時代であつたか？　此の稿の基本的視點として先づ私はそれを究めて

おく責務を感ずるのである。

顧みれば明治維新の際、德川幕府の領地は八百萬石と稱せられ、京都朝廷の御料は僅か三萬石に過ぎなかつた。然るにあの革命でどうして朝廷は幕府に勝を制し得たらうか。

もし土地が唯一の剩餘價値製產機關であつたなら、この明白な、客觀的、經濟的相違は必らず軍扇を幕府に擧げしめたに違ひない。その、さうならなかつた所以は實に、土地生產物ならぬ都市商品が國民生活を左右する地位を占めて、當時旣に謂はゆる町人が社會生活の咽喉を扼する重要な役割を演じ初めかけてゐたためである。

明治元年官軍は錦旗を飜して勇ましく東征の途に就きはしたものゝ、新政府が財政窮乏のため、逢坂山一つ越えると、もう軍は動かなくなつた。あの時もし三井、小野、島田等の豪商が獻金して之を助けなかつたら、東征軍は空しく近江路に立往生したに違ひない。

だから極言すれば德川幕府に引導を渡したのは、彼等豪商の金力であつたと言へる。實際明治史の第一頁には、事實に於て彼等富豪の『獻金奇特の事』(三井家奉公履歷)の記錄が一大光彩を放つて殘つてゐるのである。

かうしてほぐれた金の力、言ひ換へれば町人の支配力の緖は次第にその蜘蛛手を明治の全歷史の上に擴げた。明治史の中心をなすものはこの町人の發展史である。ブルジョアが徐々に社會支配の實

權を獲得して行つた過程である。(元來 bourg とは町の意味だから、ブルジョアの語は原義から言つてもピッタリと日本の町人に合致する) 隨つて必然に資本主義完成の歷史である。かゝる社會的機構の上に主流をなす文化が資本主義的文化であり、その一部門をなす文藝が資本主義的文藝でありブルジョア文藝であるのは云ふまでもあるまい。

併し一つの傾向には、その尖端に先驅する急進的なのと、その臀尾に附隨する、回歸的なのと、兩樣の反動が現はれる。元來、維新は前述の如く、町人の金力が封建制度に引導を渡して成就したのだが、爭鬪の口火となつたのは各藩の上級士族と下級士族との軋轢であつた。で、逆に結果から言ふならば、明治維新の革命は蓄積されて來てゐた町人の勢力が、併し未だ獨り立ちで爆發する程には成熟してゐないので、盲目的に無意識的に西鄕吉之助、伊藤俊介その他薩長土肥の下士階級をお先棒に使つて成就せしめたものである。

所が維新の紛亂も次第に秩序が付いて來ると、同じ功臣の中でも武斷派は次第に用が無くなり、文治派が次第に廟堂に勢力を占めて來る事になつた。前者はその憤懣に堪えないで、とう〱征韓論などを擔ぎ出し、遂に議が容れられないで、西鄕、板垣、江藤などの連袂退職を見るに到つた。この時泰平に髀肉を嘆ずる者は獨り廟堂の武斷派の巨頭のみではなかつた。討幕の戰爭にはこき使はれたが、世が鎭まると情け容赦もなくお拂ひ箱になり、その上に廢藩置縣の斷行で祿扶持から全

く離れた不平士族は全國に充滿してゐた。そこで彼等武斷派の首領の多くはその不平士族の要望に載せられて、佐賀の亂を起し、萩の亂を起し、最後に西南戰爭を勃發せしめた。そして士族階級は玆で完全に崩壞沒落し、資本主義發展のための一大障害が除かれた。

所が彼等の中にその不平を兵亂の形式で爆發させないで、別の途に出でた者があつた。卽ち板垣退助等で、彼等は民選議院設立の訴願を提出したのである。それは方々の不平士族の騷亂よりも前だつたが、西南役が終結すると共に、愈々明白に、到底兵力では新政府に敵對出來ない事が分つて來たので、一層此の方面の運動が白熱して來たのである。謂ふ所の自由民權運動の源泉は此れである。後の社會主義も此れから派生したので、そして資本主義と對立するに到つた。

以上は主として維新の機運に乘じ得た勤王諸藩の事だが、別に、その新興勢力に敵對した幕府、その親藩、及び立ちおくれてその機運に乘りそくねた諸藩のある事を見落してはならない。彼等の地位たるや誠にみじめを極めたもので、勢ひ成上り者の薩長武士の時を得顏の跋扈が癪で堪らない。併し政治方面へ驥足を伸ばして彼等と勢力を角逐し得る餘地は到底無いので、政府に頭を壓えられない文化的方面に志を立てて、陰然、政府に抗爭しやうとした者が少くない。島原の亂以來、反逆に聯想の深い基督教徒となつて名を擧げた者が、如何に舊幕臣に多いかを見よ。——そして玆からも社會主義は芽生えた。

此等は凡て急進分子となつたのだが、その潑溂たる彈力を缺いだ者は凡て、昔を戀しがる復古偏執狂となつた。神風連がその代表で、國粹保存もその埒内のものである。

何を言ふにも生きた歷史だから、一々公式通りに展開してゐるとは限らないが、明治文學の大體の流れは、資本主義を表とし、自由民權論、基督敎、それらの中から派生して來た社會主義、及びそれ等とは全然質を異にして見える國粹主義を裏として、ほゞ解釋は出來る筈である。

二　福澤諭吉とブルジョア・リベラリズム

德川時代には士農工商の順序で階級別があつた。所が次第に勢力を得て來ると商人なるブルジョアはその身分別のドン尻に列する事に甘んずる者ではない。この階級別の打破を要望する。

又封建時代には武士は食はねど高揚子などと言つて、兎角金を侮蔑した。併し金が生命の町人にはこんな命題は喜ばれない。金の尊貴を主張する代辯者が必要だ。

又、封建時代には商人が富を蓄積すると大名や士は勝手にそれを召上げたり、押領したり、借りて結局踏み倒したりした。島津家對浪華商人の話などその代表的一例である。そんな事があつては商人は張合がたいし、第一、安心して商賣が出來ない。商賣は支配者の小うるさい制限や束縛や干涉や容喙があつては思ふやうに行かない。そこで彼等は自由を必要とする。

だからもし當時、これらの要求に叶ふ叫びを擧げるものがあつたら、それが天下の熱狂的歡迎を受ける事は請合ひであつた。明治文學史の頭初を飾る福澤諭吉は實に斯くして世に出でた。

彼は『士農工商、貴賤上下の別なき』を叫んだ。人は後天的教養で尊くも賤しくもなるので、生れつきには貴賤の差はない。『天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず』と云つた。封建武士のやうに大名に寄生するのは恥しい事だ。そして人生をして獨立的生活を營ましめる本源は金だから、金を尊ばなければいけないと言つた。武士は刀が生命だと言つたが、あれは馬鹿メートルに外ならぬとも言つた。道德などと言つたとて不易なものでない、封建時代には切腹も仇討も長上への奴隷的屈從も、美德だつたが今は世が變つた。今の世には今の道德を確立すべきが新市民の任務で、徒らに過去の道德に盲從すべきではないとも言つた。

これは實に新興階級の思ふ壺を、的確に代辯したので、非常な歡迎を受け、明治元年二年といふ早い頃彼の著作は二十萬、三十萬といふ賣行を見せた。福澤を喝采したのはひとり町人のみでなく百姓も大工も、平民といふ平民がみんなそれに唱和した。と言ふのは自由、獨立の主張は彼等にも利益をもたらす言葉であつたからだ。

福澤の主張のやうなのをリベラリズム（自由主義）と言ふ。又プロレタリアの要求する自由と區別するために、今日ではブルジョア•リベラリズムとも言ふ。

英佛で貴族專權主義を打破した思想もこのリベラリズムで、ルッソオや、ヴォルテイルや、アグム・スミスがその主張者だが、福澤は相似る傾向のある所から日本のヴォルテイルであると言はれる。概して言へば明治の新思想家は多くこのリベラリストで、初期に於ては『明六雜誌』などがその淵叢であつた。明治末期に起つた自然主義は偶像打破を主張し、個人の權威を宣揚した點で、第二階段のリベラリズムである。つまり明治はブルジョアの思想的武器であるリベラリズムに初まり、リベラリズムに終つたのである。

三　自由民權論と政治小說

明治十年以後は政治小說の時代に入る。これは勿論自由民權論の影響で、そして自由民權論は明治七年正月に提出された『民選議院設立の建白』に淵源する。この署名者は板垣退助、後藤象次郎などであつたが、實際の起草者は英國から歸り立ての古澤滋が英文で起草したのを邦譯したのであつた。

この民選議院設立建白の動機は、西南の役や、萩、佐賀の亂などゝ同じ原因が、戰爭となつて外發せずに、內訌して文治的な形式を取つて現はれたものである事は既に述べたが、これは實に意外の反響を全國の津々浦々にまで呼び起し、土佐の立志社を初め、多くの政社の設立を見るに至つた。

自由民權論を最初に支持した指導原理は、中江兆民が譯出したルッソオの『民約譯解』である。（雜誌、政理叢談連載）つまりフランス流の自由思想である。自由黨はこの思想の中から孵化して出た。

所が明治十四年大隈重信が他の諸參議と意見が合はずして野に下るや、今度は福澤などに系統を曳く英國の自由主義を指導原理とする改進黨が生れた。

同じく議會運動の促進には當つても、自由黨には靑年客氣の士が多くて言行も矯激であり、改進黨には知名の士や都市富豪が多くて穩健着實であり、漸進的であつた。今日の言葉で言へば自由黨は最左翼で、改進黨は右翼である。

この政治的情勢が文藝にも反映して政治小說の頻發となつたのである。試みに新舊時代八月號（大正十五年）の『自由民權號』に載つた政治小說年表を見よ。それが如何に數多く出てゐることか。而もあの表に洩れてゐるのが、まだあの位の數には上る程ある。この中に代表作を求むればやはり東海散史の『佳人の奇遇』であらう。そしてあの慷慨激越の主人公が、新政府に散々痛めつけられた德川の親藩會津の出身であることを忘れてはならない。

四 『小說神髓』と勸善懲惡思想

政治小說が隆盛を極めてゐる眞最中に坪内春のや（逍遙博士）の『小說神髓』と『書生氣質』が世に出て、純文藝壇開拓の第一の鋤を入れた。わが國に於ては、眞の意味の近代小說は、理論實際ともにこれに初まる。

十八世紀の英國に於て徐々に社會的地步を占めて來たブルジョアは二つの大きな文化的寄與をなした。第一は文藝上に於て小說といふ新形式を創造した事で、第二は學問の上で經濟學を獨立させた事である。

明治に於て擡頭した日本のブルジョアは、之を逆に行つて、福澤や田口鼎軒が先づ經濟學の基礎を据えた。それに少しくおくれて坪内春のやが小說の開拓に當つた。

劇や詩と違つて形式の自由を尊び、又敍事詩題材の集團的なると反對に、個人心理をテーマとしてゐる小說の特徵は、個人主義、自由主義を標榜した英國の經濟學と、同じ時代乃至階級のイデオロギイの所產であることは誰れにもうなづかれるが、日本でも同じ事が言へる。

日本のブルジョア擡頭の思想的武器となつたものは、やつぱり英佛と同じく自由主義、個人主義であつたには違ひないが、この自由主義を活潑に展開さすには、どうしても封建の殘滓を徹底的に打破しなければならない。それは福澤を立たしめて、或は黃金尊重論、或は天は人を同等に作れるとの論、或は楠公權助論、或は片輪娘の寓意譚、その他さまぐの論文を起草させたのだが、「小說神

髓』も仔細に點檢すれば同じイデオロギイの所產なる事が分る。

『小說神髓』の中心思想は何かと言へば勸善懲惡の打破である。

元來、世界の大文藝の十の七八までは何等かの意味で勸善懲惡ならぬはない。勸善懲惡でないまでも道德的效用と無關係なのはない。殊に逍遙博士はその人柄から言つても藝術を道德的效用と引離しては決して考へ得ぬ人である。それは後の劇に關する論文を見ても分るし、第一『小說神髓』その中にも、小說の道德的效用を力說してある。その逍遙が勸善懲惡打破の急先鋒となつたのは一見をかしな話ではあるが、實はその勸懲思想は封建道德の培養した固定觀念に外ならぬから、世間學に於て福澤を代辯者とした新興ブルジョアの汪然たる氣勢が、今度は坪內春のやを代辯者として、文藝上に顯現したのである。換言すれば勸善懲惡主義の打破とは、固定した封建觀念の打破に外ならぬのである。この意味から明治の新しい小說も即ちブルジョアの創始になるものだと言へるのである。

五　交錯せる諸相

『小說神髓』は前述の如く、實に明治文學史上に於けるブルジョアが勝利を博した最初の記念標である。明治文壇の千波萬波は、これを基點としてブルジョアの正逆いろ〳〵に糸をひいたものに外

ならぬ。併し今は詳說のひまがないからその後の明治文學の諸相を個條書きにして見よう。

一、歐化文藝――森鷗外、二葉亭四迷、森田思軒などの提供した所である。これは明治初年の、封建的桎梏を脫して常識を世界化せんとした運動の必然の歸結が文藝に現はれたものである。

一、國粹保存――落合直文、池邊義象が功績者で、文藝の上では桂月、雨江、羽衣などの擬古的美文となつて現はれ、紅葉露伴の元祿復歸となつて現はれ、和歌俳句の上にも及んだ。これは鹿鳴館の舞踏などを中心的象徵とする亂暴な、極端な歐化ぶりが、谷干城やボアソナードの眉をひそめさせて、國粹保存の上奏となつたりした。その實際社會の趨向が文藝に反映した一個の反動文學である。

一、日本主義――三宅雪嶺、高山樗牛、井上哲次郞、木村鷹太郞の唱ふる所、國粹保存の當然の歸結であると共に、資本主義發展の必至的段階でもある。日本も日淸戰爭に勝つたので、殖產工業が一時に發達し、今迄危い足取りで辿つて來た資本主義の根が完全に確立せられた。それと共に國粹保存論が國家主義にまで進化したので、この論の特に喧しく叫ばれたのは日淸戰爭の二三年後なるを忘れてはならない。

一、自我主張――北村透谷、及び再び高山樗牛などを代表者とする。資本主義を援護する思想の一面なる自由平等思想、乃至個人主義は、最後に洗煉せられて、近代的な自我探求に潛入して行つ

た。國家や社會は第二だ、先づ自我の本然の姿態を究めて後の事である——此れが彼等の考へである。藤村操が華嚴瀑下に投死したのは、この傾向の痛ましい犧牲だ。

さう言へば、國家主義と個人主義とは丸で對蹠的な主張ではないか、それが同じ資本主義から芽生え出でたのは變ではないかと訝る人があらうが、實は資本主義の内面にはこの矛盾が包藏せられてゐるのである。と言ふのは貴族の專權と戰ふためには自由主義、個人主義を武器とする彼等も、今度或はプロレタリアを壓迫して自分達の特權を擁護したり、或は生產品の販路擴張のため植民地を掠奪する時には、先の自由主義を曖にも出さず、堅固な武裝をする必要がある。これが國家主義軍國主義の正體である。前者は資本主義の進取的上向段階の思想であり、後者はその守勢的停滯段階の思想である。

所で高山樗牛は一時日本主義を唱へ、後にニイチェや日蓮に心醉して白熱的に自我を主張したが、この兩思想の轉換の經路に何の連絡もないとは、從來の批評家から放たれた言葉で、而も樗牛の缺陷の灸所をついたものと考へられてゐたが、背後に磅礴したブルジョア思想を究めれば、この謎はすぐ解ける事なのである。時代の動きに敏感だつた樗牛は、或る時は資本主義思想の右端に觸れ、或る時は左端を叩いて、昨是今非の一見無連絡な主張を擧げたのであつた。これは一つは明治の文化が海外移入の文化で、一時に春分も秋分も押し寄せると言ふ有樣だから、その混雜の生んだ特殊現象

でもある。

一、謂はゆる青春の文學――何度も樗牛や透谷のことを述べるやうであるが、正宗白鳥は中央公論で、彼等の感傷的な議論や、一葉の小說、藤村の詩、柳村の美文などを一括して論じて、青春の文學と言つてゐた。この青春の文學は言ひ合はせたやうに日清戰役の前後から一時に輩出し初め、多くは明治三十四五年までに終熄してゐる。だから私は白鳥がその點を考慮に入れて、何故にあのやうな青春の文學が時を同じうして輩出したかに就いて、廣い社會的考察を加へなかつたのを不滿とした。私をして言はしむれば、これもやはり當時の產業狀態の反映が主因であると思ふ。卽ち明治維新の後で蒔かれた資本主義は徐々に成長を遂げつゝあつたが、日清戰爭と共に急激に飛躍的發展して、若々しい希望に富んだ產業上の青春期に日本をして入らしめた。これが上部構造への反映が、あの青春の文學を產みもすれば、歡迎もさせたのではあるまいか。創新性の逞ましいバルザック、ディッケンズ等の作の如きを、勞農ロシヤの批評家は、資本主義勃興期の作品と呼んでゐるのと同じ意味で、日本の青春の文學にも斯る考察を加へることは必ずしも無稽であるまい。

一、回避的傾向――大體、ブルジョア支配の世の潮勢に漂はされながらも、自分ではそれを意識しないで、却つてブルジョアの成り上り者的卑俗さを憎惡する者が小ブルジョアの間に生ずる。併し彼一人では天下の大勢を如何ともし難いので世を回避する隱遁者的文學が生れる。フランスでは

フロオベルの如きはブルジョアジイの俗ツぽさを何より憎惡し、侮蔑した作家であるが、日本でも此の期の文人に殊に此の傾向が強かつた。又後藤宙外は三十年代の初期に於て、文士田園退去論を高唱した。これ、文學者と云へば風流隱逸の風あるものと自負もし、世からもさう思はれてゐた彼等が、東京の謂はゆる封建的風趣が崩れて、漸次に近代的都市を形成し初めたのに、畏怖と壓迫を感じて、最初に擧げた反抗の叫びである。

自我探求の文學、青春の文學、回避的傾向の文學――これ等を概稱してロマンチック文學と言ふを妨げないであらう。彼等はブルジョアが「五法の金貨のみ體拜し、自身の毛皮を保存することの外に、他の理想を有せず、造形美術では石版畫を愛好してゐる」のを侮蔑した。併し彼等は根本のブルジョア的社會構成には何等の否定も加へないで、只ブルジョア的趣味と習慣とにのみ叛逆したのである。

六　社會主義文學の發生

明治十五年肥前島原で、樽井藤吉、赤松泰助などが同志を糾合し、東洋社會黨を作つて即時に解散を命ぜられた。これが日本に於ける最初の社會黨の出現だが、併し嚴密に言ふ近代社會主義の精神を把捉してゐたものではない。勿論、後の運動の上には何の痕跡も殘さなかつた。

前述の通り、搖籃期の社會主義の二つの焦點は基督教の中でも京都の同志社と北海道の札幌農學

校（安部磯雄、高畠素之、山川均、遠藤無水、西川光二郎等はこの兩校いづれかの出身者である）で、今一つは自由黨系の一派である。（幸德秋水など。）

自由黨から社會主義の派出して來た經路は甚だ興味が深い。民選議院設立で白熱的に藩閥と戰つた彼等黨員は、明治二十三年を期して帝國議會の開設が約束されると共に、第一段の運動の目的を達成したわけである。

そして議會が開かれると共に、自由黨は剃刀大臣と言はれた陸奥宗光を通じて長閥の伊藤博文と握手し、昔日の意氣を失ふて軟化して了つた。今の政友會は卽ち此の長閥と自由黨の野合の仲に生れた私生兒である。が、自由黨中の硬骨の士は之にあきたりないで脫退し、大井憲太郎、大道和一佐藤勇作などは別に東洋自由黨を作つた。彼等は明かに近世の社會主義に關する知識を吸收してゐた。又、自由黨を理論的に支持してきた中江兆民は、第一期の代議士として當選したが、議會が到底民意を代表するものでないのを悟ると共に、多くの議員の愚かなのに愛想をつかしてすぐ辭職して了つた。――それはさうであらう、當時の日本の全人口三千九百三十八萬二千百人中、選擧權を有するもの四十五萬三百五十人、卽ち人口百人につき一人一分一厘の割合だから、數の上から見ても、それが少數地主と資本家の傀儡であつた事が分る。幸德秋水は中江兆民の最晩年の門下生である。

かくして社會主義に留意し初めた基督敎派と、自由黨の一派とは後に相合して社會主義硏究會を



— 東洋社會黨結黨の場所肥前島原江東寺 —

作り（明治三十一年）、それが社會主義協會となり、遂に社會民主黨を生んで（明治卅四年）、卽日解散せられた。社會民主黨設立の幹部は片山潜、安部磯雄、幸德秋水、木下尙江、西川光二郞、河上淸の六人であつた。

この氣勢が文藝に反映して、評論の上にも、創作の上にもその意識をもつものが出現した。內田不知庵（今の魯庵）は早くから紅葉一派の戲作氣質、藝術のための藝術的傾向にあき足らず、社會小說論を唱へてゐたが、片山潜の乞ひに應じ、『勞働世界』に『革命會議』なる小說を連載し初めた。ただ惜しい事に魯庵はディレッタントであり過ぎて、執拗に此の傾向を支持しては行かなかつた。が、彼の社會小說論と、十分に成功はしなかつたが社會小說の試作とは、文壇に社會意識を注入した第一針としてその功を特筆大書すべきである。

社會主義的小說の作家としては先づ德富蘆花が擡頭して『黑潮』の作がある。ついで木下尙江が『良人の自白』『火の柱』『靈乎肉乎』『火宅』『乞食』等の名作を矢繼早やに投げ出して、天下の讀書青年を魅惑して了つた。

社會主義の機關誌としては前記片山潜編輯の『勞働世界』、幸德秋水、堺枯川など編輯の『平民新聞』、『直言』、『新紀元』、『光』などが、主義の宣傳には勿論、文藝にも大いに力を貸したものである。

後に『黄昏』なる社會主義小説を書いてツルゲェネフの俤を傳へ、更に社會講談を創始して大衆文藝の先驅とも中心ともなつた白柳秀湖は、當時平民社の運動に投じてゐた最少年者であり、名作『大菩薩峠』の作者中里介山は、當時小學校教師をしながら、毎號のやうに平民新聞を賑はしてゐる投書家の一人であつた。尤も平民新聞は投書だからと言つて別扱ひをせず、本欄に優遇したのは勿論である。大衆文藝を論ずる者が、秀湖、介山兩氏を生んだ平民新聞を淵源の一つとして認めないのは不都合な話である。中央公論の大衆文藝の特輯號の如きも、秀湖を執筆者として加へた以外、この點の考察に全然觸れた所がなかつたのは、私の聊か意外とした所であつた。

大逆事件後、社會主義は極端なる彈壓を受け、その文藝も同じく屏息したが、堺枯川編輯の『へちまのはな』『新社會』大杉榮、荒畑寒村共輯の『近代思想』などが、細々とその種子を護りつゞけて來た苦心と功績とは偉としなければならない。近代思想社からは宮島資夫の出世作『坑夫』が出版せられた。

その中に大正三年の夏、一セルビヤ青年の放つたピストルの彈丸が墺國皇太子フェルディナンドの命を奪ふと共に、歐洲大戰が勃發し、日本は空前の産業界の發展をなして、資本主義は圓熟の極に達した。それと共に勞働運動、社會主義運動の氣運も汪然と再興して、或は社會主義同盟への文學者の參加となり、或は文學は時勢に後れてゐるとの論になり、或はプロレタリア文學の提唱となり、

或は『種蒔く人』の創刊となり、或はフェビアン協會の設立となり、或は『文藝戰線』の創刊となつて今日に及んだことは讀者の目のあたり知る通りである。なほ大正文學については別に論ずるであらう。

七　自然主義と自由思想

平民社の社會主義の活躍と前後して起つた文藝上のムーヴメントは自然主義であつた。卽ちこの二つは日露戰爭を中心に生ひ出でた運動上の兄弟であるが、社會主義の方は大逆事件と共に十分に成長せず、ひとり自然主義が世間の寵を專らにして育つた。

併し自然主義の事は、かなり詳密に考察されてゐるから、本稿では、それに多くの頁を割いてゐる餘裕がない。たゞ一事だけ言ふなら、——

自然主義とは科學の勃興を背景として、最初フランスに起つた文學で、吾が邦のそれも最初は主としてフランスからの移入であつた。隨つてこの文學の考察は科學を除外しては成立しない。科學がブルジョアの勃興に際して提供した二重の貢献は、一面には諸種の機械の發明によつて、生產を增大したことで、他面には「眞」と「剝僞」をスローガンとして、封建社會の保護色に役立つてゐた宗敎や、社會的習慣や、儀禮の無意味を曝露して了つた事であつた。

この眞と剝僞をスローガンとすることは、科學の反映した文藝上の新主義なる自然主義に於ても完全に遵奉せられた。卽ちわが文壇で頻りに用ひられた偶像破壞、幽靈の追放、現實暴露などの諸標語が、明白にこれを立證する。明治も末期に及んではさすがに、チョン髷を頂いたり、刀を帶びたりしてゐる者は、角力か、軍人、巡査以外には無くなつたが、併し思想的にまでチョン髷を切り捨て刀を廢してゐる者はまだ〳〵少なかつた。自然主義は徹底的にそれを斷滅したので、文藝史的に言へばロマンチシズムの「架空」に對するアンチテーゼだか、思想的に言へば維新に根を引くリベラリズムの完成であつた。

そこで玆に一つ注意しておきたい事が生ずる。政治方面に於ける自由黨は、前述の如く、大部は長閥と握手して政友會なる反動派に還元し、少數は進出して社會主義者となつた。

文藝上の自由思想なる自然主義も同じ運命にある。今の文壇の諸大家は大抵自然主義の洗禮を受けたリベラリストだが、此の中間思想は決して永久的に人をそこには安住させないのである。行く行くは分裂を生じて或る者は反動に還元し、或る者はプロレタリヤ文藝の陣營内に來り投ずる必至的運命にある。文壇の自由黨たりし自然主義以後の諸作家のうち、長閥と握手して政友會を作る者は誰と誰とで、社會主義に進出する者は誰と誰とであるか。

自然主義以後には、新浪曼主義、神祕主義など、さま〴〵な文藝が生じて、百花繚亂の形を呈し

たが、社會的考察に最も興味のあるのは人道主義以後の諸作家である。ことに此れは現文壇の情勢に接觸して來ることであるから、吾等をして幾分の詳密なる考察をなさしめよ。

八　人道主義の正體

プレハーノフは『文學と社會生活』に於て、或る作家の抱懷する理想と彼を包繞する現實社會との間に甚だしい不調和が生じた場合、若くはその不調和を除くことが不可能であると考へられた場合に、彼は藝術至上主義に逃避するといつてゐる。所で私は、それに附け加へてかういひたい。かかる不調和を根本的に除去しようとして本質的に惱んだこともなく、かゝる不調和を生んだ不合理な社會制度のために虐げられた體驗もなく、かゝる不調和の眞の原因が果して那邊に存するかといふことを見究めるだけの洞察眼を具へない者が、机の上で、空想的に、手つとり早く、この不調和を調和しやうとするところに、貴族的な、超越的な、慈善的な「人道主義」が發生するのであると。

デカダンが「享樂」に逃避し、藝術至上主義が「美」に逃避し、自然主義が些末的な「現實」に逃避してゐる間に、人道主義は都合のいゝやうに勝手に拵へ上げた「人生」に逃避してゐるのである。人道主義者の「人生」は、搾取する者とされる者とが血塗れになつて爭つてゐる生きた人生ではなくて、彼等の道德的手淫を滿足させるに相應しい玩具の人生である。彼等がこの玩具の「人生」

に正義と愛の衣を着せて打ち興じてゐる間に、時代はどんく進んで行つた。

從つて人道主義といふものを發生的に觀れば、我國に於てもロシヤに於けるが如く、新に現實社會となつた資本主義に對する封建貴族の最後の反抗に過ぎず、それは現に我國に於ける人道主義の主流をなした白樺派の人達が事實に於て證明してゐるところである。併しながら彼等が資本主義の缺陷に對して投げた道德的爆彈は、花火のやうに唯美しいだけで無力であつたとはいへ、次いで起つた民主々義乃至社會主義のために、一つの照明となつたことは事實である。

九　現實主義の勝利

民主々義若くは社會主義藝術に入る前に、菊池寛をその代表者とする新現實主義について一言しなければならぬ。何となれば彼の現實主義は、我國の資本主義の發展段階を忠實に反映するものであるからである。從つて彼の現實主義の勝利は、同時に日本の資本主義の完成を意味する。從來の上品な、餘韻に富んだ文學から眼を轉じて、思ひ切つて虛飾のない、直截簡明な、萬人わかりのする彼の作品に接する時、文藝といふものが、床の間の裝飾から臺所道具にも等しい實用品になつてゐることを發見するだらう。實際、朝夕電車で通勤する會社員にとつて、文學はもはや散步用のステッキではなくて、雨降りの日の傘と同じく缺くべからざるものとなつたのである。

又彼の作品の根幹をなしてゐる警拔なテーマ、若くは逆説法は、これを仔細に點檢すれば、封建的解釋に對するブルジョア的解釋の勝利である。而もブルジョア的人生觀の根柢をなすものは、いふまでもなく個人主義思想である。このことは彼の自傳的作品たる「啓吉物」を見れば、明瞭に看取することが出來る。

封建時代に於て人類の社會進化が停滯してゐた時、我々の社會生活を支配する最高の法則は、美はしい「義理」「人情」であつた。然るに如何なる親身の間をも「他人」にし、「仇」にする「金錢」が、完全に社會生活の根本動力となりきつてしまつた現實の資本主義社會に於て、人々は魂の底では舊き法則たる「義理」「人情」に縋りながら、自己保存の必要に迫られて、日常生活の實際が心ならずもそれを裏切つてゐる事實に、時々刻々面接しなければならないのである。併しながら、この事實を大膽に認識して、この封建時代の遺産である甘美な道德を足下に蹂躙して進んで行くだけの勇氣を具へたものは、主として意識的に搾取を行つてゐる資本家だけで、善良なる一般民衆は、この點で思ひ切つて露骨に、腐つた內臟を抉り出したやうに描き出された彼等の作品に於て、初めて日頃漠然と感じてゐた自己の醜惡な姿に面接して、今更ながら愕然として驚くのである。從つて彼は、近代の日本が生んだ最も偉大なる啓蒙家であり、偶像破壞者であり、ブルジョア・イデオロギイの闘士である。この方面に於ける彼の「功績」は、明治の初期に於ける福澤諭吉のブルジョア經濟學の

建設に對する貢獻に比すべきものがある。併し彼は又他面に於て民衆の要求をしつかり握んだ偉大なるヂャーナリストであるが故に、唯「現實暴露」だけを與へて讀者を突き放すやうなことはしない。執拗に、假借するところなく、思ひ切つてメスを揮つた後で、最後に甘露の一滴を與へることを忘れはしない。彼のかゝる「社會政策」的一面は『父歸る』其他の最後の一節によく現れてゐる。

一〇　民主々義と民衆藝術

資本主義の最近の段階である帝國主義の衝突に過ぎなかつた歐洲大戰が、一時英米の資本家の巧妙なる喧傳によつて、獨逸の軍國主義に對する英米の平和主義、專制主義に對する民主々義の戰ひであると考へられた。そこで民主々義は我國にも凄じい勢で侵入して來て、吉野作造、大山郁夫の諸氏が、雜誌『中央公論』に據つてデモクラシーを說くや、「民衆に依る民衆の爲めの政治」を要望する聲は、津々浦々にまで擴つて行つた。勿論それは文壇にも波及せずにおかなかつた。創作に、詩に、歌に、「民衆藝術」の呼び聲が勃然として起つて來た。併しながら、藝術の鑑賞を一部教養の高い有閑階級の特權から引離して、一般民衆にも了解出來るやうな平易なものにしなければならぬといふ議論は、社會の經濟關係を無視した抽象的「デモクラシー」共者と同じく、不徹底なものであつた。民衆の求めるものは決して平易に書き換へられたる貴族文學若くはブルジョア文學ではな

いのである。否、資本主義といふ吸血鬼に惱まされてゐる大部分の民衆は、「やさしい漱石」よりも、「安い帝劇」よりも、今夜のパンを望んでゐるのである。

宜なる哉、一度福田德三が黎明會の講演會に於て、英米のデモクラシーは決して眞のデモクラシーではない、生産機關を掌握してゐる人々にのみ都合のいゝやうに出來てゐる、いはゞ「半分(一)クラシー」である、と聲を嗄らして絶叫するや、世は忽然として民主々義の空念佛から目覺めた。そして御本人の福田が一時いつの間にか元の御用學者に返り掛つて、河上肇を相手にその御用振りを忠實に發揮してゐる間に、數世紀かゝつて築き上げられた歐米文化を僅々數十年の間に攝取するやうな驚嘆すべき胃腸を有する日本の民衆は、數年經たずして「民主々義」を卒業して更に先きへ進んだ。

二　プロレタリヤ文學運動

ロシヤ革命の勝利は世界の無産階級運動に生命を吹き込んだ。一億數千萬の人口を有するロシヤに於て、社會主義が少くとも原理としては、全國に實施せられた。無産階級の解放は、もはや一部空想家の夢でないことが明らかになつた。我國でも、戰後の好景氣續きで豚の如く肥えた資本家を向ふに廻して、到る所勞働者が堂々たる勝利を獲た。

かく社會主義的傾向は忽ち我國の思想界を風靡すると共に、思ひがけない原稿料の暴騰によつて榮華の夢に耽つてゐた文壇にも、凄じい旋風が捲き起つた。

大正十一年一月、平林初之輔は雜誌『解放』に於て、初めて確固たる社會思想の基礎に立つてプロレタリア文藝論を發表し、殆んど時を同じうして有島武郎は讀賣新聞紙上でこれを論じた。こゝに於て無產階級文學論は「民衆藝術論」に見受けられるやうな、天降り式道義的傾向を止揚し、一般民衆の文學的創作力並に鑑賞力を剝奪する社會組織を變革すると共に、又その變革のための運動卽ち階級鬪爭に於て、一つの役割を分擔しなければならぬことを說き、從來の文學とその創作のモテイヴを徹底的に解剖し、從來とは全然異つた立場から銳い批評を加へ、その大部分をブルジョア文學なりとして一蹴し去つた。

かくて理想もなければ感激もない、イージー・ゴーイングな「ブルジョア文學」のだらけた作品に食傷してゐる一般讀書界も、この生氣潑剌たる、自信と抱負に滿ちたプロレタリア文學論を大いに歡迎し、一時は文藝批評壇を完全に占領して、今や唯この堂々たる主張を裏づける立派な作品さへ出ればいゝところまで漕ぎつけた。

併しながら堂々たる理論から立ち所に堂々たる作品が生れて來るものではない。立派な無產階級文學を生むには、先づ眞に無產階級的な人格を作らなければならない。それには先づ無產階級的な

生活がなければならない。而も人間の趣味や感情は、理智に於ける如く容易に、本質的に變革され得るものではない。理論鬪爭に於ける華々しい勇士も、その實生活に於ては、彼の理論を裏切つてゐる場合が多い。後に藤森成吉が自ら工場生活に入つた如きは、當人の意識は兎もあれ、この間の苦惱と矛盾の誘導した現象で、生眞面目な彼は身を以てその解決に當らうとしたのである。從つて無産階級文藝論の鬪士が、その理論を裏づける作品を生むためには、尙幾年かの歲月と、苦しい内面的鬪爭とを要したのである。

然るにこの重大なる歷史的使命を有する運動が、何人も豫期しなかつた大事變のために一頓挫を來した。

一二 震災の影響

政治的經濟的並に文化的施設に於て、日本程完全に中央集權の行き屆いてゐる國は尠いと思はれる。この日本の腦髓と心臟と胃袋とを一個所に集めたやうな東京が、突如として襲ひ來つた一大天災のために忽ち壞滅し、數萬の生靈と數百億の財貨が烏有に歸したといふことは、一大戰爭の慘敗にも比すべき結果を日本の文化に與へたのである。實際、震災直後の日本は戰敗後の獨逸と相通ずる點が頗る多い。然らばそれは文壇にどんな影響を與へたらうか。

第一に「軍隊の有難さ」と自警團と同情と給配と復興が齎らした反動的傾向である。一部の者の間に行はるる何等新意義なき明治文化研究熱の勃興や劍劇の流行は、延いて、凄じい勢で擡頭して來た無産階級文藝運動を、一般社會運動と等しく、未だ實らざるうちに生木を裂くが如くに、一時凋落させてしまつたことはいふまでもない。

第二に、現世的享樂的風潮である。從來藝術至上主義のお題目であつた「人生は短かく藝術は長し」といふ言葉が、如何に空疎なものであるかといふことを目のあたり見せつけられて、藝術の偉大と永遠性に對する信仰を失ふと共に人生の理想を失つてしまつた。さういふ場合にもてはやされるものは、現實逃避の興味文學であり、ゴシップ文學である。菊池寛がこの風潮に乘じて、震災後東京の場末に續出した十錢均一の瀨戶物屋に似たゴシップ雜誌『文藝春秋』を創刊して、理想と財布を失つた人達の間に大いに歡迎されたことは、普く人の知るところである。

第三に、破壞的刺戟的傾向である。一瞬間に從來の生活を根柢から破壞するやうな大事變に遭遇した後には、人間は誰でも多少アブノーマルになるものである。戰敗後マークヌはルーブルが日毎に暴落して、富める者も貧しき者も一片のパンを得るために狂奔しなければならないやうな、不安な慌たゞしい生活から發生した表現派乃至未來派が、震災直後の日本に異常な歡迎を受けた所以は卽ちこゝに存するのである。獨逸でもロシヤでも、動搖が靜まると共に、新しい現實主義が擡頭し

て來てゐる。一時日本では、表現派乃至未來派でなければ、無產階級藝術若くは少くとも明日の藝術でないかの如くいはれたこともあるが、それはいはゞ、ルパシカを着なければ社會主義者ではないと主張するのと同樣である。

一三　新感覺派とコント

一時に天も地も引つくり返るやうな大事變に遭遇した一般民衆は、モヒ中毒患者のやうに「變化」を要求するやうになつた。「變化」の注射がなければ、單調な日常生活を支持することが出來ないのである。かくて次から次へと、より新しいものが、より珍らしい趣向を凝らして、文壇のショウ・ウキンドウに現はれた。實際最近の數年間程、「新」といふものが文藝の價値を決定する標準として暴威を揮つたことは珍らしい。一時「古い」といふ評語は、作家にとつては致命傷だつたのである。

この傾向に乘じて、世界の流行の根源地たるパリーから二つの珍種が輸入された。それはいふまでもなく、ポール・モウランといふ外交官が、任地で舞踏會に招かれる暇々に發明して新案特許を得た「新感覺主義」と、岡田三郎がフランスからもち歸つて來たトランクの中から發見されたコントである。併しこれはいふまでもなく、文壇が區劃整理にも着手されない前に影を消したバラック文學に過ぎなかつた。

かくてその生き〳〵とした生命を昭和にまで傳へたのは無産階級文學だけで、而もそれは大分裂の兆を孕んだまゝ、大正時代を見送つたのである。

昭和二年一月

卷末補遺

本書を印刷に渡した後で、不明とした事が分つて來たのもある。又、校正をしてゐる中に、書き落しがあつたのを思出したのもある。それ等を一括して茲に補遺を作るであらう。

◎『鬼啾々』解題――

私はこの著者夢柳居士については何の知る所もないと書いた。(本書四七頁) 併しその後高知縣の人寺石氏から左の如き示教を得た。

『夢柳居士は土佐の人、實名宮崎富要、父の名は東才左衞門にして維新の一人物、後に讃岐琴平宮司となる。富要氏は奇才を負ひ、少壯より江湖に放浪、最も漢詩に長じて芙蓉と號し、土佐詩人の一人也。佳作多し。明治十八九年東京繪入新聞、自由之燈等に執筆し、艶麗の筆を以て喝采を博す。鬼啾々はその時の作、之がため獄に投ぜらるる二三ケ月、爾後詩詞一變、人物も亦進境あり、明治二十五年、五十餘才にて沒す。外國語は英語に達したり。』

◎明治飜譯文學の概觀――

私は、ドイツからの譯書は明治十七年にならねば現はれて居らぬ。先頭を切るのはゲーテの『狐の裁判』であると書いた。（本書六五頁）然るに明治十五年既に山田郁治がシルレルの『ウイルヘルム・テル』の一部を譯した『哲爾自由譚』のある事を、柳田泉君から敎へられた。（日本文學講座第四卷及び明治文化全集飜譯文藝篇の卷末年表參照）隨つて私の論斷に多少の狂ひが生ずる事になる。とは言ふものの高市慶雄氏の左のやうな說に接したので全然改める必要もないやうな氣がする。

『明治十七年刊「狐の裁判」は獨逸文學最初の邦譯と倣されてゐるが事實はこれより先き明治十五年山田郁治譯「哲爾自由譚」が出てゐるから、最初の獨逸文學たるの美名はいさゝか當らない。然し「哲爾自由譚」は斷簡零墨とも謂ふべき些少なもので、且つ完結されてないのみならず、近頃柳田泉氏によつて紹介せらるる迄は、殆んど世に知られなかつた程で、さ迄流布せられた書物とも考へられない。それ故「狐の裁判」を以て我國獨逸文學の濫觴と倣す從來の考へ方は、實質上さして誤つてゐない。』（明治文化全集第十三卷「狐の裁判」解題）

私は又勝海舟の蘭詩の譯『思ひやつれし君』が『舊幕府』に紹介せられたと書いた。（本書六三頁）然るに此れも疾く明治十五年の昔に『東洋學藝雜誌』第十四號に『新體詩　勝海舟』なる目次をおき、外山正一の筆によつて紹介せられてゐる事を知つた。正一の書いた全文は左の通りである。

余頃日、勝海舟翁を訪ひ、余輩の頃日著せる新體詩抄を贈りしに、翁も嘗て新體詩に類するものを、ものせられしことある由にて、即ちふるびたる手帖樣のものを取出され、其作を余に示されたり。或は自作に係るものあり。余思はず妙と云へり。夫れ翁の佐久間象山吉田松蔭等と共に世人に先立ち、夙に開國の事に盡力せられたるは天下の普く知る處なり。然れども思はざりき、翁にして人に先立ち、數十年の昔既に新體詩を作らるるの擧あらんとは。英傑の人に先んずるとは實に斯くの如きことを言ふならんか。新體詩流にも翁の如きものあり、今の新體詩を作る者何ぞ勵まざるべけんや。左の詩は即ち翁の昔年蘭詩を譯されたるものなり。今翁の許を得て學藝雜誌に載す。

明治十五年十一月　　外山正一

なにすとて、やつれし君そ、哀れその、思たわみて、いたづらに、我が世を經めや、あまのはら、ふりさけ見つゝ、あらがねの、土ふみたてて、ますら雄の、心ふりおこし、淸き名を、天に響かし、かとはしき、道のいさをゝ、天つちの、いや遠なかく、聞く人の、鏡にせんと、我はもよ、思たはます、おほろかに、此の世を經しと、おもやつれとも。

是予壯歲の頃唱氣人のローフデンヘールといへる歌もて、試にみくに詞になせし也。（東洋學藝雜誌十四號一三〇——三一頁）

なほ西詩邦譯が『新體詩抄』となりて現はるるまでに、かなり樣々な努力が人知れず拂はれてゐる事も見落してはなるまいと思ふ。例へば『敬宇先生詩文偶抄』を繙くと、中に Longfellow の "The Village Blacksmith" を譯した『打鐵匠歌』と Gold Smith の "The Desarted Village" の一節を縮譯した『僻村牧師家』の二篇の漢詩あるを發見する。右の中前者を引いて掲げやう。

打鐵匠歌

譯ニロングフエルロー詩ー　中村敬宇

蔽芾栗樹如ニ張翼ー。下有ニ打鐵匠之宅ー。其人壯剛手腕大。鐵條隆起筋胳黑。正經之汗額常濕。正經之利食ニ其力ー。平生不レ借一文錢。對ニ天下人ー無ニ愧色ー。朝有ニ打鐵聲ー。釘鐺天未レ白。夕有ニ打鐵聲ー。遲速應レ節拍。日々月々年又年。揮レ鎚而擊揮レ鎚擊。村童群自ニ鄉塾ー還。店前佇看冶鐵赤。鑪鞴咆哮火星飛。逐而捕レ之寧呵責。安息之日鎖ニ店鋪ー。往ニ寺院ー而列ニ講席ー。其女倩レ衆唱ニ神詩ー。聞レ之中心獨悅懌。其聲彷彿亡妻聲。追憶不レ覺涕淚滴。苦哉鐵匠之生涯。勞苦之中樂自得。朝々夕々勉不レ已。贏得一夜酬ニ寢息ー。鐵匠鐵匠我謝レ汝。汝予レ我有ニ師友益ー。嗚乎人生之打鐵場。福運只須ニ以レ力獲ー。心思言行火焰裏。砧上鍛錬成ニ模式ー。

參考として原詩の第一齣と最終齣とを掲げ、以て對比に便しやう。

The Village Blacksmith

Longfellow

Under a spreading chestnut-tree
  The village smithy stands;
The smith, a mighty man is he,
  With large and sinewy hands;
And the muscles of his brawny arm
  Are strong as iron bands.

....
....

Thanks, thanks to thee, my worthy friend,
For the lesson thou hast taught!
Thus at the flaming forge of life
  Our fortunes must be wrought;
Thus on its sounding anvil shaped

Each burning deed and thought.

菊池大麓がチェンバァの百科全書から譯したといふ『修辭及華文』（明治十二年刊行）は一種の美辭學の本で、決して譯詩を主としたものではないが、內容の關係上必然に、文例として多くの詩の斷片を譯載してゐる。尤も卷頭の凡例に於て『書中詩文ノ例トシテ載セタルモノニ於テハ譯者甚タ惑ヘリ』と告白してゐるが、結局は左のやうな調子を取つた。その一例を掲げる。

錦繡光ハ宛モ春野赤白ノ花ノ如シ
終日笙ヲ弄シテ又曲ヲ唱フ
靚裝ハ五月ノ景ヨリモ鮮カナリ

これチョーサアが鄉士を形容した一句である。

卽ち漢詩の調子を採用したのだが、假名交りにしただけが、後の謂はゆる『新體詩』への一步の接近である。そしてその三年の後に『新體詩抄』が世に出たのだから、敬宇や大麓の試みはたとへ流產したとは言へ、詩の胎成時代の一過程として一顧の價値はある。

◎森田思軒とその飜譯——

ユーゴーの『死刑囚最後の日』が、よく引合ひに出される名篇だが、その例が一々思出せないと

書いたが、（本書一九〇頁）ペエタアの『ルネッサンス』の結末にあるのを一つ思出した。

——les hommes sont tous condamnés à mort avec des sursis indéfinis:（凡そ人は皆な死刑を申渡されをる者なり唯だ之を執行さるる日の早晩未だ定まらざるのみ——思軒譯）とあるのを引用して、ペエタアは

『全くユーゴーの言ふ通りに吾々にはみんな死刑の宣告を受けてゐるのである。たゞ吾々は執行猶豫の期間を持つてゐる。そしてこの期間が終つた時最早吾々も存在しなくなる……云々』と附言してゐる。

◎社會小説研究——

民友社が社會小説の創作を依囑した數氏の中、その任に堪え得るものは從來の傾向から推して、廣津柳浪一人であらうと、私は書いた。（本書一四四頁）なほ柳浪がこれについては次の如く語つてゐるのを發見した。

『社會小説をかくことにすれば、勞働者なら勞働者を寫すと共に、當時の時勢も見えるやうにかゝなくてはなるまいと思ふ。例へば人力挽きは憫れな境遇だとか、又時には幸運な地位に立つこともあるが、爾なるのには色々な周圍の事情があつてなるのだから、勿論その因縁を何も

議論するやうにかけといふのではないが、自然にその影の見えるやうに描きたいものです。約めて云へば、一個人を中心にして、勞働社會の大勢を窺ひ得るやうにかゝなくては面白くないと信じてゐるのです。』（唾玉集六三頁）

◎擬㆘森鷗外與㆓永井荷風㆒書㆖――

これは雜誌新潮が、故人に代りて現文壇諸家に與ふといふやうな標題で、『國木田獨歩に代りて現文壇に與ふ』『小栗風葉に代りて德田秋聲に與ふ』『岩野泡鳴に代りて久米正雄に與ふ』『有島武郎に代りて武者小路實篤に與ふ』などと云ふ諸篇を掲げた時、一緒に掲載されたものである。この雜誌の世に出でた時世評紛々、私もそのどれかの執筆者だとは目星を付けられてゐたが、それがこの篇であらうと言ひあてた者は、多くの知人中にも、たつた一人しか無かつた。そして武者小路實篤が私のペンになつたのであらうと言つてゐる人がかなり多かつたので、私は蔭でひそかに笑つてゐたものだ。

序に、鷗外は考證物に於ては『わたくし』と書いて『私』の字を用ひてゐない。私も原稿に於てはその例に倣つてゐたのだが、何故だか雜誌の編輯者が悉く『私』の字を宛てたのであつた。そんならそれで、一々訂正するまでもないから、その儘にしておいた。

◎キッス雜考――

この篇については白柳秀湖氏から左のやうな興味のある手紙を貰つた。今氏の諒解を得て、掲げる。

『(前略)親嘴が文字通り鳥の習性から來て居ることについては御存じないやうに見うけられました。鳥の接吻のことを根こそぎ研究したものは何であるか私もよくは知りませぬが、エリスの三卷だか、四卷だか、之は圖書館で見ただけで、手許にない故知りませんが、卷末にキスの歷史が附錄のやうにして載せてあるのを見ました。大兄の事故書架から出して御覽になればすぐ分りませう。その中に人間のキスと鳥のキスとの關係について言及して居るのを見たことをハツキリ覺えてゐます。エリスは又、その中で、ラフカデオ、ハーンの言を引き、日本のクラシツクスにキスに關する記述のないことを擧げてゐたやうに記憶する。千萬御承知でせうが、心付きましたまゝ申上げます。

インコを飼つて見ませぬか、盛にキスをやりますよ。母鳥が子鳥に哺めるのも面白いものです。私は流行のインコ類が大きらいで野鳥の簡素な色彩と、原始的の鳴聲が大好きです。私のウチには今ホウジロ、マシコ、大マシコ、アドリ、ノヂコ、小ガラの六種が居ます。』

所が青山學院の教授なる比屋根安定氏からは、日本の古文學の中に散見する接吻の記事について の興味ある書信を受取つた。

『(前略)正月號の「婦人公論」所載キス考を、拜見しました。御參考までに、材料三つお知せ申上げます。御參考になれば、至幸です。

第一。「宇治拾遺物語」に曰く、「參河入道いまだ俗にてありけるをり、もとの妻をば去りつつ、若く容貌よき女に思ひつきて、それを妻にて三河へ率て下りけるほどに、その女久しく煩ひて、善かりける容貌も衰へてうせにけるを、かなしさのあまりにともかくもせで、夜も晝も語らひ臥して、口を吸ひたりけるを、あさましき香の口よりいで來りけるにぞ、疎む心いできて、なくなく葬りてける。それより世はうき物にこそありけれと思ひなしけるを……」と。參河入道とは、藤原氏時代の大江定基で、無常を感じ、横川の源信僧都について學び、支那に佛教の先進を求め、長元七年唐土にて往生しました。

第二。八犬傳中の記事です。無傷の男の死體が、數多出る。犬田小文吾(?)、不思議に思ひ死人の口を開けると、舌が喰ひ切られてゐます。つまり毒婦船蟲が、男と接吻する時、相手の舌を嚙み切つて殺したのでした。斯うして、彼女は男を何人か殺したわけで、犬田氏(?)の探索で死因が判然するのです。八犬傳中の何處にあつたか記憶しませぬが、永井荷風氏も何かの

随筆に引用しました。

第三。一九の膝栗毛にあつたと記憶しますが、「口中の契り」といふのは、接吻の事でせう。』

比屋根氏は未知の人である。いや、全く未知ではない。今から十五年ばかり前、青山學院の神學部教室へ新約神學の講義の傍聽に行つて、歸る時校庭を横ぎらうとすると、井戸の傍で一人の學生がシャツを洗濯してゐた。すると伴れの友人が

『あれは比屋根と言つて琉球人だ。神學部第一の秀才だ』と敎へてくれた。

その後氏にお目にかかつた事はないが、譯書に、著書に、氏の名聲の隆々として顯はれるのを見る度に、私は、シャツを洗つてゐた少年の日の氏の姿を思ひ出した。即ち未だ全然無縁なりと言つて了へぬであらう。

—— 完 ——

昭和三年六月二十五日印刷
昭和三年六月二十八日發行

有

明治文學展望
定價金壹圓八拾錢

著者 木村毅
發行者 山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
印刷者 椎名昇
東京市芝區田村町十五番地

發兊

東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

改造社

振替東京八四〇二番
電話芝(43) 一一二一番 一一二二番 一一二三番 一一二四番

二葉印刷合資會社印刷

新選名作集

新選 谷崎潤一郎集

○神童○悪魔○続悪魔 ○あくび ○The affair of Two Watches ○前科者○異端者の悲しみ○人面疽○二人の稚児○玄奘三蔵 ○ハッサン・カンの妖術○柳湯の事件○富美子の足○ちひさな王国○独探○呪はれた戯曲○或る少年の怯れ○母を恋ふる記○兄弟○恐怖

四六判並製 八ポイント二段組 六〇二頁 定價壹圓 送料十八錢

新選 菊池寛集

小説○藤十郎の恋○船医の立場○笑ひ○乱世○俊寛○仇討三態○恩を返す話○三浦右衛門の最期○頸縊り上人○西南戦聞○ある抗議書○神の如く弱し○死者の顔へ○島原心中○晩年○たちあた顔○羽衣戯曲○敵討以上○茅の屋根○岩見重太郎○奇蹟○浦の苫屋○[illegible]宗の心持○世評○貞操○慢性病患者○兄の場合○舞台に立つ妻○ある兄弟○時の氏神○順番○温泉場小景
長篇小説○火華

四六判並製 八ポイント二段組 五八七頁 定價壹圓 送料十八錢

新選 前田河廣一郎集

○三等船客○脱船以後○赤い馬車○騒音地獄○裏切る者○ストライキ中○麺麭○發狂○十三段の段階○佐吉の父親○手○[illegible]○海の女○盗人○瓦斯タンク○エレナの話○ドウリスの話○メイの話○目撃者○「ダンプロ」○太陽の黒点○故郷○餓鬼○海の[illegible]葉○スキヤップ○ムッソリーニ

四六判並製 八ポイント二段組 五一二頁 定價壹圓 送料十八錢

新選 永井荷風集

○歓楽○夢の女○深川の唄○あの人達○新帰朝者日記○花瓶○監獄署の裏○小品集 春のおとづれ—花より雨に—夏の町—狐—伝通院 下谷の家—楽器—日本の庭○緑衣花笠森○ふらんす物語 舟と車—ローン河のほとり—秋のちまた—蛇つかひ—晩餐—祭の夜がたり—霧の衣—おもかげ—再會—ひとり旅—雲—巴里のわかれ—橡の落葉其他○押繪い(伝説的近世世界遊)ボオドレエル—外に二人○江戸藝術論 浮世絵の鑑賞 外九篇○に楽だより

四六判並製 八ポイント二段組 五三五頁 定價壹圓 送料十八錢

新選 武者小路實篤集

長篇小説 ○或る男 短篇小説○小さき世界○芳子○一休に聞いた話○Cの話○友の話○へんな原稿○ユダの弁解○ヨハネ・ユダの弁解を聞いて
戯曲 桃源にて○日本武尊○二十八才の耶蘇○仏陀と孫悟空○ある青年の夢○父と娘

四六判上製 八ポイント二段組 近刊 定價壹圓 送料十八錢

新選 藤森成吉集

短篇小説 ○雲雀○片隅二篇○娘○研究室で○山○子供○床蔭○鼠○故郷を去るまで○東京へ○雀の来る家○鳩を放つ○路上○地主○こほろぎ○北見○拍手しない男○鈴の戯話
戯曲 ○犠牲○磔茂左衛門○何が彼女をそうさせたか○親友○夫婦
長篇小説 ○新先生○妹の結婚

四六判上製 八ポイント二段組 [illegible]七[illegible]頁 定價壹圓 送料十八錢